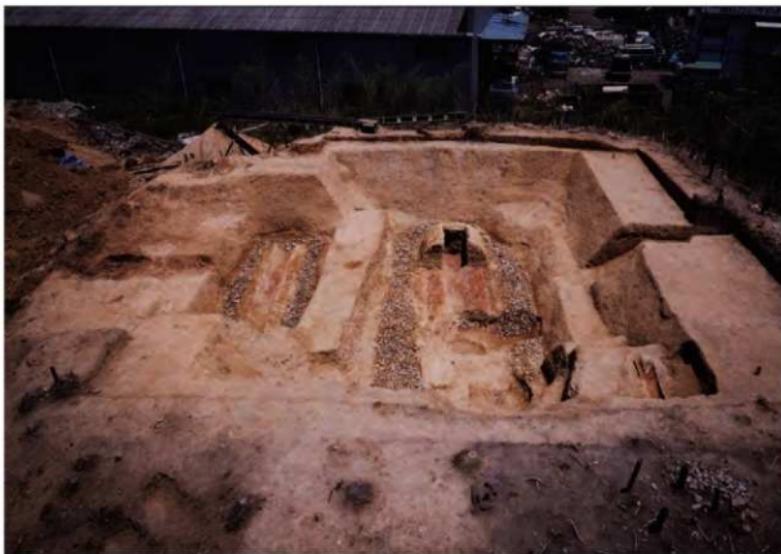


綴喜古墳群調査報告書

2022

京 都 府 教 育 委 員 会

巻頭図版第1



(1) ヒル塚古墳埋葬施設（南西から）



(2) 八幡西車塚古墳（西から）

巻頭図版第2



(1) 興戸1号墳（上が北）



(2) 大住南塚古墳・大住車塚古墳（北西から）

巻頭図版第3



(1) 蛤岡車塚古墳（南東から）



(2) 中ノ山古墳出土 腕輪形石製品・紡錘車形石製品・管玉（京都工芸繊維大学所蔵）

巻頭図版第4



(1) 八幡東車塚古墳出土 四獸形鏡（京都工芸織維大学所蔵）



(2) 八幡東車塚古墳出土 鉄鎧・甲冑（京都工芸織維大学所蔵）

序

綴喜古墳群は、4世紀から5世紀にかけて八幡市から京田辺市にわたって造られた古墳群です。古くからその存在は知られ、戦前には本府が設置した京都府史蹟勝地調査会による調査も行われました。各古墳からは、これまで銅鏡や鉄製の武器・武具類、腕輪形石製品等の副葬品が豊富に出土しており、国史跡乙訓古墳群及び久津川古墳群と並び京都府を代表する古墳群の一つであることが判明しています。

綴喜古墳群のある南山城地域は、巨大古墳が多く造られた奈良盆地と列島各地を結ぶ交通の要衝で、特に中央を流れる木津川は、行き来する物資の運搬に重要な役割を担いました。綴喜古墳群は、主に木津川水運によって、交易の一端を担った集団の墓域と考えられます。

これまで綴喜古墳群の調査研究は主に戦前の調査成果の検討から進められてきましたが、令和3年に京田辺市が実施した天理山古墳群の発掘調査で、同古墳群が綴喜古墳群における有力な首長墓であることが明らかになりました。

京都府教育委員会では天理山古墳群を含む綴喜古墳群全体の歴史的位置付けを明確にすることを目的として調査を進め、関係機関の御協力をいただき学識経験者の御指導を得て本書をまとめることとなりました。

御指導、御協力いただいた皆様に感謝申し上げるとともに、本書の内容が京都府の歴史や文化を御理解いただく上での一助となり文化財の保存・活用に寄与できれば幸いです。

令和4年3月

京都府教育委員会

教育長 橋本 幸三

凡　例

- 1 本書は京都府教育委員会が令和3年度に文化庁国庫補助事業として実施した首長墓群・綴喜古墳群の調査報告書である。
- 2 本書の構成は、綴喜古墳群の全体像を概観した本編と、新規資料を報告した付編から構成される。図表番号は、本編・付編で通し番号とした。
- 3 本書の執筆は京都府教育庁指導部文化財保護課担当職員の古川 匠、桐井理揮、北山大熙が担当し、さらに八幡市教育委員会文化財保護課の吉田芽依、京田辺市市民部文化・スポーツ振興課の上野あさひの両名に執筆を賜り、文末に文責を記した。編集は各担当者が行ったものを古川がまとめた。
- 4 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の地形図である。周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は京都府・市町村共同ポータルサイト (<http://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp/g-kyoto/top/index.asp>) に掲載する文化財 G I S データを基に作成した。国土座標・方位のないものは、上位が北である。
- 5 本書で使用した方位記号は、矢羽根記号は座標北を表し、線書き記号で磁北を表している。
- 6 卷頭図版及び図版に掲載の国立大学法人京都工芸繊維大学所蔵・東車塚古墳及び中ノ山古墳出土遺物の写真は、写房楠華堂 内田真紀子氏に撮影を委託したものである。
- 7 本書に掲載した図面、写真的うち、本教育委員会が撮影したもの以外は、八幡市教育委員会・京田辺市からの協力・提供を受けた。
- 8 本書には各文献に掲載されている図面を転載しているが、図幅に合わせて縮尺を適宜調整している。
- 9 本書の記述では、古墳時代の前・中・後期の区分について、前方後円墳集成編年（廣瀬 1991）の1期から4期前半を「前期」、4期後半から7期までを「中期」、8期から10期を「後期」とする。また、各期を3つに細分し、1・2期を「前期前葉」、3期を「前期中葉」、4期前半を「前期後葉」、4期後半・5期を「中期前葉」、6期を「中期中葉」、7期を「中期後葉」、8期を「後期前葉」、9期を「後期中葉」、10期を「後期後葉」と細分する。そして記述上で必要な場合は、上記の区分をさらに前半と後半に区分する。（例：「前期前葉前半」、「前期前葉後半」）
- 10 参考文献の記載では、「公益財團法人」とび「財團法人」等の法人の種別は省略し、法人名のみとする。
- 11 八幡市所在の首長墳で、「東車塚古墳」、「西車塚古墳」、「茶臼山古墳」、「王塚古墳」と称されてきた古墳については、大字名を冠して「八幡東車塚古墳」、「八幡西車塚古墳」、「八幡茶臼山古墳」、「美濃山王塚古墳」と表記する。ただし、引用文献で省略されている場合等は大字名を省略して表記する。
- 12 古墳の墳丘規模について、現段階で評価が定まっていないものについては『京都府遺跡地図』第3版の記載を採用した。

目 次

本編

1	はじめに	1
2	位置と環境	6
3	綴喜古墳群の地域的特性	16
4	調査研究史	27
5	綴喜古墳群を形成する古墳（八幡市域）	38
6	綴喜古墳群を形成する古墳（京田辺市域）	74
7	古墳編年における綴喜古墳群の位置づけと他地域との比較	101
8	総括	116

付編

1	はじめに	120
2	八幡東車塚古墳出土 副葬品・埴輪（京都工芸織維大学所蔵）	121
3	中ノ山古墳の「再発見」	127
4	八幡西車塚古墳出土埴輪の再整理と編年的位置づけ	135
5	石不動古墳隣接地出土埴輪	141
6	興戸2号墳周辺表採埴輪	143
7	棚倉孫神社遺跡出土円筒埴輪	145
8	隅田口遺跡表採円筒埴輪	146

CONTENTS

Main part

1	Introduction	1
2	Geographical and Historic environment	6
3	The character of Tsuzuki tombs	16
4	History of excavation and study of Tsuzuki tombs	27
5	Tombs of Tsuzuki tombs in Yawata city	38
6	Tombs of Tsuzuki tombs in Kyotanabe city	74
7	Chronology of Tsuzuki tombs and comparison with other regions	101
8	Appendix	116

Sub part

1	Introduction	120
2	Yawata higashikurumazuka tomb	121
3	Nakanoyama tomb	127
4	Yawata nishikurumazuka tomb	135
5	Ishifudi tomb	141
6	Kodo No.2 Tomb	143
7	Tanakurahikojinja site	145
8	Sumidaguchi site	146

挿図目次

第1 図 繁喜古墳群の位置（「国土地理院地図」を縮尺調整 S=1/100,000）	2
第2 図 天理山古墳群現地視察	5
第3 図 八幡西車塚古墳現地視察	5
第4 図 繁喜古墳群周辺の地質（S=1/60,000 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター『地質図 京都西南部・奈良』、国土地理院『陰影起伏図』を元に作図）	8
第5 図 繁喜古墳群周辺の遺跡（S=1/70,000 国土地理院地図 京都西南部・奈良』を元に作図）	11
第6 図 繁喜郡に所在する古墳埋葬施設の方位	17
第7 図 久世郡に所在する古墳埋葬施設の方位	18
第8 図 相楽郡に所在する古墳埋葬施設の方位	19
第9 図 古墳時代後期の埋葬施設（S=1/100,000）（明治22・23年測量仮説地図）	22
第10 図 繁喜古墳群と古墳時代集落の位置（S=1/60,000）（国土地理院地図）	23
第11 図 南山域城域の古代の郷と官道（S=1/100,000）（明治22・23年測量仮説地図）	25
第12 図 繁喜古墳群（八幡市域・地理院地図 S=1/30,000）	38
第13 図 墳丘測量図（梅原 1955）	40
第14 図 北・南埋葬施設実測図（S =1/150）（梅原 1955）	40
第15 図 南埋葬施設出土鉄製品実測図（S=1/4）（梅原 1955）	41
第16 図 北埋葬施設出土鉄製品実測図（S=1/4）（梅原 1955）	41
第17 図 石不動古墳出土鏡（車崎 2002）	41
第18 図 石不動古墳出土石鏡（梅原 1955）	41
第19 図 墳輪実測図（S=1/6）（本書付図）	41
第20 図 墳丘実測図（S =1/500）（京都府教育委員会 1969）	43
第21 図 埋葬施設実測図（梅原 1923）	44
第22 図 主体部実測図（S =1/200）（京都府教育委員会 1969）	44
第23 図 墳輪実測図（S =1/12）（宇野 2019）	44
第24 図 石劍写真（京都府教育委員会 1969）	44
第25 図 第3次調査で検出された葺石（八幡市教育委員会 1995）	46
第26 図 八幡西車塚古墳墳丘実測図（S=1/1,000）	47
第27 図 欧文鏡（車崎 2002）	48
第28 図 文画帶環状乳四神四獸鏡（車崎 2002）	48
第29 図 石製合子（江谷ほか 1986）	48
第30 図 銀形石（江谷ほか 1986）	48
第31 図 車輪石（江谷ほか 1986）	48
第32 図 車輪石（S=1/3）（個人蔵・本書付図）	48
第33 図 墳輪片①（S=1/8）（本書付図）	49
第34 図 墳輪片②（S=1/8）（本書付図）	49
第35 図 東車塚古墳地形測量図（S=1/500・八幡市教育委員会 2020）	51
第36 図 鉄鎌、大刀（本書付図）	51
第37 図 刀、刀子はか（本書付図）	51
第38 図 鉄製農工具等（本書付図）	52
第39 図 刀、劍、鐵鎌（本書付図）	52
第40 図 带金式甲冑（本書付図）	52
第41 図 刀、素理頭大刀（江谷ほか 1986）	52
第42 図 龍竜鏡（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987）	52
第43 図 四獸形鏡（本書付図）	52
第44 国 神像鏡（車崎 2002）	52
第45 国 遺構平面図（S=1/300）（八幡市教育委員会 1996）	54
第46 国 円筒埴輪・朝顔形埴輪（S=1/12）（八幡市教育委員会 1997）	54
第47 国 家形埴輪（S=1/12）（八幡市教育委員会 1997）	54
第48 国 須恵器・土師器（S=1/8）（八幡市教育委員会 1997）	54
第49 国 中ノ山古墳位置図（左：鳥田 1919）に加筆、右：堤・高橋 1969に加筆）	56
第50 国 墳輪実測図（S=1/6）（本書付図）	56
第51 国 石製品実測図（S=1/4）（本書付図）	56
第52 国 石劍	56
第53 国 管玉（本書付図）	56
第54 国 ガラス玉（京都大学文学部 1968）	57
第55 国 須恵器（横山 1959 掲載図を再トレース）	57
第56 国 墳丘実測図（S=1/600）（八幡市教育委員会 2010）	61
第57 国 華綴短甲押付板・帶金・銅板（京都大学総合博物館 1997）	62
第58 国 壓矧板革縫胄（京都大学総合博物館 1997）	62
第59 国 草摺（京都大学総合博物館 1997）	62
第60 国 鉄鎌（京都大学総合博物館 1997）	62
第61 国 伝・美濃山王塚古墳出土鏡（梅原 1920）	62
第62 国 美濃山王塚古墳出土埴輪（S=1/6・八幡市教育委員会 2010）	63
第63 国 墳丘実測図（1/500）八幡市教育委員会 1990	66
第64 国 墳輪実測図（S=1/10・北山 2017）	66
第65 国 鉄製品実測図（八幡市教育委員会 1990）	67
第66 国 満巻飾付鉄劍（千賀・村上 2003）	67
第67 国 鉄製品実測図（八幡市教育委員会 1990）	67
第68 国 方格規組八鳳鏡（車崎 2002）	67
第69 国 南山7号墳墳丘測量図（S=1/500）・遺物実測図（S=1/4）（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998）	68

第 70 図 女郎花遺跡埴輪出土地点 (S=1/300)	69
第 71 図 女郎花遺跡出土埴輪 (S=1/10)	69
第 72 図 道構平面図 (S=1/600) (京都府埋蔵文化財調査研究センター - 1994)	71
第 73 図 盖形埴輪 (S=1/10) (京都府埋蔵文化財調査研究センター - 1994)	71
第 74 図 増輪 (S=1/8) (京都府埋蔵文化財調査研究センター - 1994)	71
第 75 図 道構平面図 (S=1/500) (京都府埋蔵文化財調査研究センター 2019)	72
第 76 図 家形埴輪実測図 (S=1/6・1/30) (京都府埋蔵文化財調査研究センター - 2014)	73
第 77 国 家形埴輪 (S=1/10) (京都府埋蔵文化財調査研究センター - 2014)	73
第 78 国 家形埴輪実測図 (S=1/4) (京都府埋蔵文化財調査研究センター - 2014)	73
第 79 国 家形埴輪 (S=1/6) (京都府埋蔵文化財調査研究センター - 2014)	73
第 80 国 繁喜古墳群 (京田辺市域・地理院地図 S=1/40,000)	74
第 81 国 大住塚古墳測量図 (S=1/500) (万波 1972) 76	
第 82 国 大住塚古墳測量図 (S=1/500) (田辺町教育委員会 1987)	78
第 83 国 大住塚古墳埴輪実測図 (S=1/4) (田辺町教育委員会 1987)	79
第 84 国 天理山 1 号墳測量図 (S=1/500)	80
第 85 国 天理山 1 号墳出土埴輪 (S=1/4) (京田辺市 2022)	81
第 86 国 天理山 3 号墳測量図 (S=1/500)	82
第 87 国 天理山 3 号墳北側くびれ部 (S=1/80) (京田辺市 2022)	83
第 88 国 天理山 3 号墳出土埴輪 (S=1/8) (京田辺市 2022)	83
第 89 国 天理山 4 号墳測量図 (S=1/500)	84
第 90 国 田辺奥ノ城 1・2 号墳平面図 (S=1/500) (京都府埋蔵文化財調査研究センター - 1997)	85
第 91 国 田辺奥ノ城 1 号墳出土埴輪実測図 (S=1/10) (京都府埋蔵文化財調査研究センター - 1997)	86
第 92 国 田辺奥ノ城 2 号墳出土甲冑形埴輪実測図 (S=1/8) (京都府埋蔵文化財調査研究センター - 1997)	86
第 93 国 興戸 1・2 号墳測量図 (S=1/500) (田辺町 1982)	87
第 94 国 興戸 1 号墳測量図 (S=1/300) (田辺町教育委員会 1995)	88
第 95 国 興戸 2 号墳粘土郷 (S=1/50) (梅原 1955)	89
第 96 国 円筒埴輪 (S=1/10) (梅原 1955)	89
第 97 国 内行花文鏡 (S=1/2) (梅原 1955)	89
第 98 国 家形埴輪 (S=1/10) (梅原 1955)	90
第 99 国 脇輪形石製品 (S=1/4) (田辺町 1982)	90
第 100 国 興戸塚ノ本古墳平面図 (S=1/500) (京田辺市教育委員会 2015)	91
第 101 国 興戸塚ノ本古墳出土埴輪実測図 (S=1/10) (京田辺市教育委員会 2015)	91
第 102 国 飯岡車塚古墳測量図 (S=1/500) (田辺町 1976)	93
第 103 国 猿円筒埴輪 (S=1/8・京都府立大学 吉永健人氏提供)	94
第 104 国 精円筒埴輪 (S=1/8・京都府立大学 吉永健人氏提供)	94
第 105 国 石鏡 (S=1/6) (梅原 1938)	94
第 106 国 円筒・精円筒・朝顔形埴輪 (S=1/8・京都府立大学 吉永健人氏提供)	95
第 107 国 器種不明埴輪 (S=1/8・京都府立大学 吉永健人氏提供)	95
第 108 国 ゴロゴロ山古墳測量図 (S=1/500) (京田辺市提供)	96
第 109 国 薬師山古墳測量図 (S=1/500) (田辺町教育委員会 1994)	97
第 110 国 トヅカ古墳測量図 (S=1/500) (梅原 1938)	99
第 111 国 神人車馬画像鏡 (S=1/4) (諫早・馬渕 2021)	99
第 112 国 トヅカ古墳出土馬具実測図 (S=1/5) (諫早・馬渕 2021)	99
第 113 国 トヅカ古墳出土刀劍実測図 (S=1/5) (諫早・馬渕 2021)	99
第 114 国 墳丘実測図 (S=1/500) (京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008)	100
第 115 国 増輪実測図 (S=1/8) (京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008)	100
第 116 国 繁喜古墳群と近隣の古墳編年①	102
第 117 国 繁喜古墳群と近隣の古墳編年②	103
第 118 国 繁喜古墳群と近隣の古墳編年③	110
第 119 国 繁喜古墳群と近隣の古墳編年④	111
第 120 国 近畿地方の古墳時代前・中期首長墓分布	114
第 121 国 八幡東車塚古墳出土 増輪	122
第 122 国 八幡東車塚古墳出土 鉄鏡・鉄刀 (AN1746-2)	122
第 123 国 八幡東車塚古墳出土 鉄鏡・鉄刀・鉄劍 (AN1746-3)	122
第 124 国 八幡東車塚古墳出土 鉄刀・鉄劍 (AN1746-5)	122
第 125 国 八幡東車塚古墳出土 各種鐵製品 (AN1746-6)	122
第 126 国 八幡東車塚古墳出土 帯式甲冑 (AN1746-7)	122
第 127 国 八幡東車塚古墳出土 四獸形鏡 (S=1/1)	123
第 128 国 烏田 1919 に示された古墳の分布	127

第129図 中ノ山遺跡と中ノ山古墳・太古山古墳の推定位置	129	(学所蔵)
第130図 中ノ山遺跡（中ノ山古墳）出土埴輪実測図 (S=1/4)（山城郷土資料館保管）	130	
第131図 中ノ山古墳出土石製品実測図 (S=1/2) 京都工芸繊維大学所蔵	131	
第132図 八幡東車塚古墳出土鏡、埴輪・中ノ山古墳出土石製品、管玉、朱 (AN1746-1)	132	
第133図 中ノ山古墳出土刀・鉄鎌 (AN1746-4)	132	
第134図 八幡西車塚古墳出土埴輪実測図 1 (S=1/4)	137	
第135図 八幡西車塚古墳出土埴輪実測図 2 (S=1/4)	138	
第136図 八幡西車塚古墳の埴丘と埋葬施設	139	
第137図 八幡西車塚古墳出土車輪石（個人蔵）	140	
第138図 石不動古墳隣接地・1981年の調査位置	141	
第139図 石不動古墳出土埴輪 (S=1/4)	142	
第140図 興戸2号墳周辺表探埴輪実測図 (S=1/4)	144	
第141図 墓輪出土位置 (S=1/10,000)	145	
第142図 稲倉孫神社遺跡出土埴輪 (S=1/4)	145	
第143図 表探地点位置図 (S=1/50,000)	146	
第144図 円筒棺 (S=1/4)	146	

挿図目次

表1 京都工芸繊維大学所蔵 八幡東車塚古墳出土品一覧表	125
表2 中ノ山古墳副葬品内訳	133
表3 京都工芸繊維大学所蔵資料 (AN1746) 遺物一覧表	134

卷頭図版

第1	
(1) ヒル塚古墳埋葬施設（南西から）	
(2) 八幡西車塚古墳（西から）	
第2	
(1) 興戸1号墳（上が北）	
(2) 大住南塚古墳・大住車塚古墳（北西から）	
第3	
(1) 飯岡車塚古墳（南東から）	
(2) 中ノ山古墳出土・腕輪形石製品・紡錘車形石製品・管玉（京都工芸繊維大学所蔵）	
第4	
(1) 八幡東車塚古墳出土・四獸形鏡（京都工芸繊維大学所蔵）	
(2) 八幡東車塚古墳出土・鉄鎌・甲冑（京都工芸繊維大学所蔵）	

卷末図版

第1	
(1) 八幡東車塚古墳出土 鉄鎌・大刀 (AN1746-2)	
(2) 八幡東車塚古墳出土 剣・刀子はか (AN1746-3)	
第2	
(1) 八幡東車塚古墳出土 刀・劍・鉄鎌 (AN1746-5)	
(2) 八幡東車塚古墳出土 鉄製農工具等 (AN1746-6)	
第3	
(1) 八幡東車塚古墳出土 带金式甲冑 (AN1746-7)	
(2) 八幡東車塚古墳出土 四獸形鏡 (AN1746-1)	
第4	
(1) 中ノ山古墳出土 鉄鎌・農工具類・ヤリ等 (AN1746-4)	
(2) 中ノ山古墳出土 石製品・管玉 (AN1746-1)	

I 本編

1 はじめに

(1) 調査の目的

「綴喜古墳群」は、京都府南部の山城盆地南半部を南北に貫流する木津川左岸に展開する古墳時代前・中期の首長墓群で、現在の行政区画では八幡市と京田辺市に所在する（第1図）。綴喜古墳群の立地する南山城地域は、古墳時代の政治、文化、経済の中心地であった奈良盆地に近接し、古代以降、「畿内」と呼称される範囲に該当する。さらに、「畿内」の二大水系である淀川流域の南部に位置し、奈良盆地及び河内平野に近いことから、交通の結節点として、古墳時代を通じて重要な地域であったと考えられる。奈良時代には、綴喜古墳群の立地した木津川左岸では山陰・山陽道、木津川右岸では東山・北陸道、さらに近江への脇道である田原越えが整備されたことも、その証左となる。

綴喜古墳群では、古墳時代前期中葉に前方後円墳、前方後方墳の造墓活動が開始されるが、中期前葉を最後に大型古墳の造墓が終了し、その後は中・小型古墳だけが造られる。短期間にだけ大型古墳が展開する古墳群で、古墳時代前期から中期までの「畿内」中枢部の政権移行期の様相を反映するものと考えられる。

今回の調査目的は、綴喜古墳群を適正に評価することによって、今後の一体的な保存、活用を図るための基礎資料とするものである。

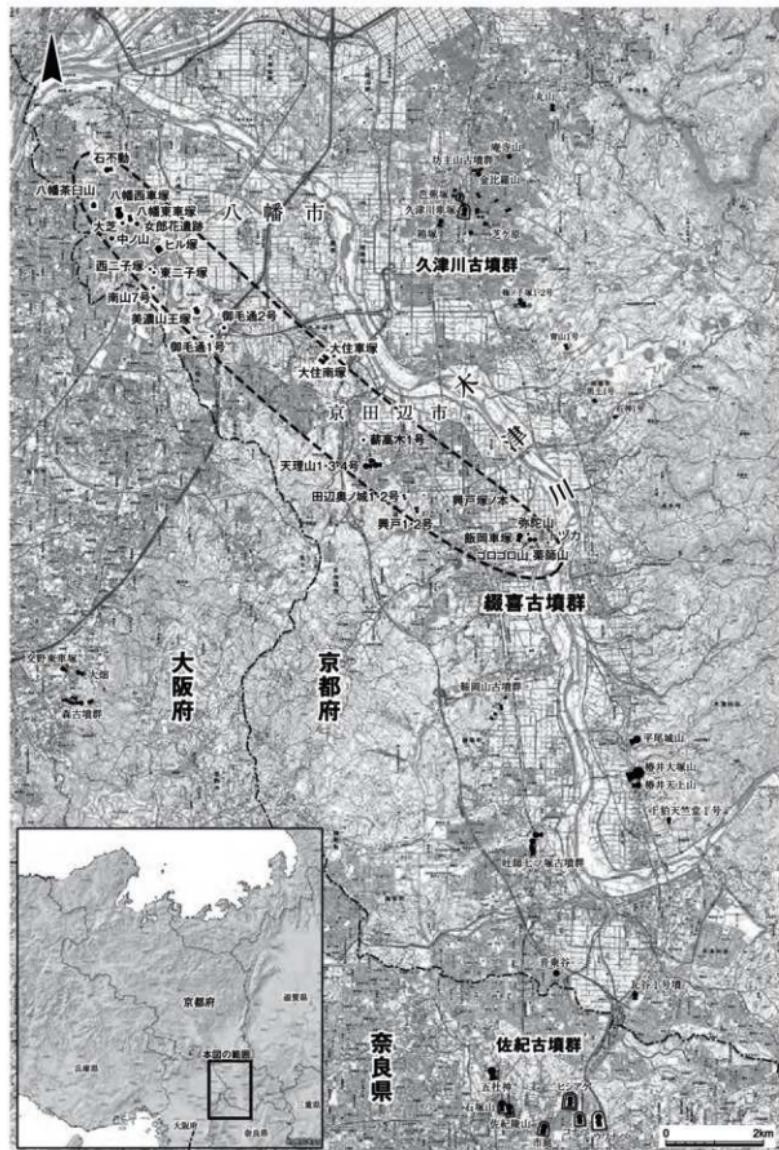
(2) 調査に至る経緯

綴喜古墳群では、明治・大正期から副葬品の出土が知られるようになり、貴重な基礎資料として古墳時代研究に用いられてきた。京都府史跡勝地調査會が設立されて以降は、同会によって大正期から戦前にかけて調査が実施され、学術的に価値の高い成果が得られている。

戦になると、高度経成長期の開発に伴って京都府教育委員会による八幡茶臼山古墳の発掘調査が実施され、大住車塚古墳の測量調査が実施されるなど一定の成果はあがっているものの、全般的には、桂川右岸の乙訓古墳群、木津川右岸の久津川古墳群で盛んに実施されてきた学術調査や大掛かりな行政発掘は、行われてこなかった。

そのため、戦後から現在にいたる古墳研究は、従来から重視されてきた副葬品と埋葬施設だけでなく、墳丘形態及び構造や、墳丘に樹立される埴輪の研究も含めて総合的に進展してきたが、綴喜古墳群の首長墓に関する情報量は戦前の調査成果にほぼ限定してきた。全国的にも著名で、出土資料の豊富な首長墓群であるとはいえ、実態解明はこれまであまり進んでこなかったのが実情である。

しかし、令和3年、京田辺市が同市中部に所在する天理山古墳群で実施した試掘調査で、これまで後期の古墳群とされてきた同古墳群が、前期の前方後円墳2基、前方後方墳1基から構成される首長墓群であることが新たに判明した。綴喜古墳群は、八幡市の男山・美濃山丘陵および京田辺市北部の大住に展開する首長墓群と、京田辺市南部の興戸・飯岡周辺に展開する首長墓群との間に若干の空白



第1図 繼喜古墳群の位置（「国土地理院地図」を縮尺調整 S=1/100,000）

地帯があったが、天理山古墳群が首長墓として「再発見」されたことでこの地理的な空白が埋まり、綾喜古墳群の一体性がより明確化したと言える。

天理山古墳群の試掘調査で得られた成果は重要なもので、同古墳群では宅地開発が予定されていたため、緊急に保護の方策が必要となった。また、綾喜古墳群を構成する首長墓のうち、国指定史跡大住車塚古墳、京田辺市指定史跡ゴロゴロ山古墳、薬師山古墳をのぞく多くの首長墓については、令和3年の時点で史跡として未指定の状態であった。これらの古墳は、文化財として未指定であっても、これまで各所有者のご理解とご協力によって現状が維持されてきた。しかし、今後予想される土地所有者の世代交代や開発行為を見越すと、一体的な保護の施策が必要な局面となってきている。

こうした状況に鑑みて、当教育委員会では文化庁と協議を行い、関係機関である八幡市、京田辺市、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの協力を得て、令和3年10月に「木津川左岸首長墓群調査専門家会議^(注)」を設置することとした。会議では、有識者の指導を受けながら、現状の把握と首長墓の一体性、そして遺跡として有する本質的価値の確認について、検討に着手した。

(3) 調査体制

調査は、文化庁の令和3年度国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金事業として採択され、実施した。調査体制は下記のとおりである。

調査主体 京都府教育委員会

木津川左岸首長墓群調査専門家会議

委 員 和田晴吾（立命館大学名誉教授）

委 員 杉原和雄（大阪国際大学元教授）

委 員 菊田哲郎（京都府立大学教授）

調査指導 文化庁

調査責任者 京都府教育庁指導部文化財保護課長 森 正

調査担当者 同課記念物係 課長補佐兼係長 藤井 整・主査 古川 匠

主任 桐井理揮・技師 北山大熙

調査事務局 京都府教育庁指導部文化財保護課

関係機関 八幡市教育委員会、京田辺市、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査協力 京都工芸繊維大学、京都府立大学

調査を進めるにあたっては、関係諸機関及び関係の方々に多大なご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

(4) 専門家会議

令和3年10月に設置した木津川左岸首長墓群調査専門家会議では、下記の日程で2回にわけて検討会議を実施した。また、会議以外にも調査事業の進展に伴って、逐次、各委員に助言を仰いだ。

第1回専門家会議 令和3年10月26日（会場：京田辺市立社会福祉センター2階会議室）

①縦喜古墳群の概要について

首長墓群の位置と構成、地形・地質の特徴について説明した。古墳編年における位置付けを行い、造墓活動は古墳時代前期後葉から中期前葉前半をピークとし、中期前葉後半を最後に大型古墳の造営が終了することを確認した。現存し、今後の保護対象となる古墳のリストを作成した。

②各古墳の内容及び現況について

八幡市教育委員会と京田辺市が、管内に所在する各古墳の個票を作成し、個票にもとづいて各古墳の内容と現況について説明した。個票は、その後、情報を追加した上で本報告書にも掲載している。

③範囲の設定について

縦喜古墳群の範囲設定が妥当であるか、古墳時代の集落分布、首長墓埋葬施設の主軸方位、首長墓群造営終了後の古墳時代後期の墓制、古代の交通路・郡・駅、といった多面的な側面から検討し、縦喜古墳群の範囲が、他の側面からも完結したひとつのまとまりであることを確認した。

また古墳群の名称については、旧縦喜郡の大部分を占めることと、京都府内で既に群として指定されている古墳群の名称が「乙訓古墳群」、「宇治古墳群」で、旧郡の名称がついていることとの整合性を考慮し、「縦喜古墳群」と称するのが妥当との見解が出された。

④本質的価値について

全国的な視野から縦喜古墳群の特徴を抽出し、同古墳群の有する史跡としての本質的な価値について議論を交わした。この会議で示した本質的価値については、下記のとおりである。

- i . 前期中葉に首長墳の造営が開始され、特に前期後葉から中期前葉前半にかけて同時多発的に大型前方後円墳が複数基造られる。造墓活動は短期間で終了する。
- ii . 古墳時代前期から中期の移行期に勃発した列島規模の政治的変動を反映している。
- iii . 搬入品、舶載品の出土から、他地域、さらには朝鮮半島と交流していると考えられる。

なお、会議には文化庁文化財第二課の川畑調査官に出席いただいた。また、川畑調査官には、前後の日程で天理山古墳群ほか縦喜古墳群を構成する古墳の現地を視察いただいた。

第2回専門家会議 令和3年12月10日（会場：天理山古墳群・八幡西車塚古墳、八幡市ふるさと学習館）

①天理山古墳群の視察

天理山古墳群の現地を視察し、京田辺市による発掘調査の検討及び保護の必要な範囲について指導を受けた。

②八幡西車塚古墳の視察

八幡市教育委員会が実施した八幡西車塚古墳の発掘調査現場を視察し、調査の途中経過について検討し、今後の調査について指導を受けた。

③調査報告書の構成・内容確認

第一回専門家会議の指導を受けて、縦喜古墳群の特徴と本質的価値の抽出について報告書の文案を示し、指導を受けた。

(5) 未報告資料の調査

綾喜古墳群を構成する大型古墳は戦前の不時発見や、調査が実施されていても古い年次のものが多く、未報告資料が散見される。本調査事業では、各古墳の内容や帰属時期の検討に必要な未報告資料の調査を実施した。この成果は巻末の『付編』に掲載する。

①京都府教育委員会・八幡市教育委員会・京田辺市所蔵資料

本教育委員会が昭和40年12月から昭和41年3月にかけて実施した八幡丘陵遺跡分布調査では、中ノ山遺跡の範囲内で前期古墳の埴輪が採集されている。採集地点については本教育委員会が発行した『埋蔵文化財調査概報』1969に記載されているが、出土品は未報告であった。本資料は綾喜古墳群では最古級の資料で、後述する京都工芸織維大学所蔵の副葬品と出土地点が近接し、遺物の帰属時期も合致することから、同一の古墳から出土した可能性が高い。詳細は付編を参照願う。

このほか、当教育委員会、八幡市教育委員会及び京田辺市には、過去の分布調査の表採品や立会調査の出土品のなかに、石不動古墳と八幡西車塚古墳、興戸2号墳等、綾喜古墳群を構成する古墳から出土した埴輪がある。これらの資料も併せて報告する。

②京都工芸織維大学所蔵資料

京都工芸織維大学美術工芸資料館には、大正年間に購入された八幡東車塚古墳出土品及び中ノ山遺跡（中ノ山古墳）出土品が収蔵されている。八幡東車塚古墳出土品は四獸形鏡、埴輪片のほかは、甲冑、素環頭大刀、鉄鎌などの武器武具類が中心である。中ノ山遺跡（中ノ山古墳）出土品は、紡錘車形石製品、車輪石等の腕輪形石製品が中心で、鉄劍、鉄ヤリ、鉄鎌といった武器も含まれる。これまで広く知られていなかった資料であるが、両古墳の内容を示すきわめて重要な資料であるため、概要を報告する。

（注）古墳群の名称と専門家会議の名称が異なるが、当初の名称は、仮に「木津川左岸首長墓群」としていた。「綾喜古墳群」の名称は、同会議での議論を受けて定まったものである。



第2図 天理山古墳群現地視察



第3図 八幡西車塚古墳現地視察

2 位置と環境

（1）自然環境（第4図）

京都府南部の山城地域の中央部には、南北約20km、東西5～6kmの、ほぼ長方形を呈する山城（京都）盆地が所在する。北部を北から南に流れるのが桂川及び鴨川、中央部を東から西に流れるのが宇治川、南部を南から北に貫流するのが木津川で、淀川の三支線を形成する。

木津川は、錦鹿山脈や布引山地に源を発する、流路延長99km、流域面積1,596km²の河川で、木津川流域最大の湖盆である山城盆地では、約100～120万年前に井手断層と田辺断層が動いて木津川が南北に流れる谷ができたとされる（吉岡1987）。

木津川流域は風化花崗岩でできた山域が多いために真砂土が流出し、砂の多い河床環境が形成されている。木津川の古名は「いづみがわ」で、流砂が多く伏流水が豊富に湧出する木津川の特徴を捉えた呼称である（竹門2019）。

山城盆地南部を南から北に貫流する木津川は、古来、主要な交通路であった。金田章裕は、南北に通る古代官道とともに木津川が流下する地理的特性を、「回廊地帯」と表現している（金田2019）。

『万葉集』の「藤原宮の役民の作る歌」（巻1～50）には、藤原宮造営用の檜材が、信楽山地北西部の近江田上山から「氏川」（宇治川）、「泉乃河」（木津川）を経て運搬されたことが詠まれている。

また、現在の木津川市木津町に設けられた泉津は、平城京の唯一の外港として重要な役割を担っていた。高橋美久二（高橋1995）はこの泉津の中に、奈良の大寺院や官司の「木屋」が並んでいたと推定している。

そして、奈良時代中期には恭仁京が現在の木津川市域に遷都された。恭仁京は木津川の両岸にまたがる特殊な構造（足利1985ほか）で、特に、泉津の所在する右京城は当時の水陸交通の結節点であった。恭仁京は、副都の難波宮及び紫香楽宮と木津川及び淀川を介して結びつく位置関係にあった。奈良時代の首都は、木津川に近い平城京及び恭仁京に置かれており、国家経営と木津川水運は密接な関係にあった。

木津川流域は、奈良・平安時代までは豊かな森林地帯だったが、その後の開発によって大量の真砂土が流出した。南山城地域の沖積地では、古代以前の遺構が、現代に至るまでに木津川が度重なる洪水によって供給した厚い土砂堆積の下にあり、これまで実態の解明が困難であった。しかし、近年の新名神高速道路建設工事に伴う大規模な発掘調査で、縄文時代から近世にかけて沖積地に形成された遺構の検出が相次ぎ、沖積地における土地利用の実態が次第に明らかになってきている。

山城盆地を北流する木津川は、宇治川、桂川と合流し、巨椋池が形成された。山城地域は、巨椋池を境に、現在の京都市域と旧乙訓郡に該当する北山城地域と、旧宇治郡、旧綏喜郡、旧久世郡、旧相楽郡から構成される南山城地域に分かれる。南山城地域の地質は、三疊紀～ジュラ紀付加体の丹波帯、白亜紀末の山陽帯に属する深成岩類とそれらを貫く岩脈類が基盤岩類を形成し、それらを覆う鮮新～更新統の、海成粘土層、砂層、砂礫層から構成される大阪層群、更新統中部～上部の段丘堆積物、及び沖積層から構成される。

南山城地域西部から大阪平野東部にかけて、生駒山（標高 642.3 m）を最高点とする、幅約 4 km で南北方向に延びる生駒山地及びその延長で北北東 - 南南西方向に延びる交野山地が連なり、京都府と大阪府の府境ともなっている。生駒山地は西縁を生駒断層で限られており、西側は急斜面であるが、山城地域側の東側斜面はゆるやかとなる傾動地塊をなし、丘陵地に移行している。丘陵地北端の八幡市域の丘陵は、「男山丘陵」または「八幡丘陵」と呼称される（以下、「八幡丘陵」）。八幡丘陵の標高は約 20-90 m 程度で山地から盆地や平野に向けて標高を減ずる。この周辺は、かつては良質の筍を産出する孟宗竹の竹林や畑地として利用されていたが、現在では開発が進み、住宅団地となっている。また、八幡丘陵北端部の鳩ヶ峰（標高 42 m）周辺には、丹波帯の付加コンプレックスが堆積しており、この丘陵部に石不動古墳が立地する。

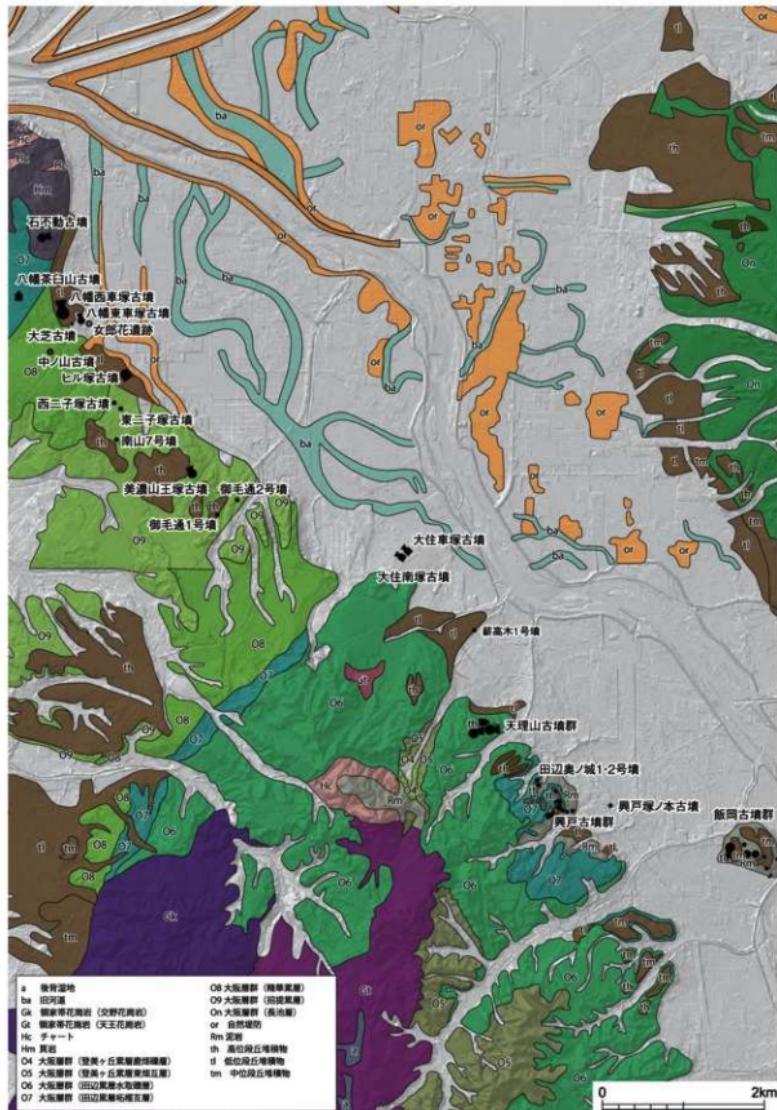
その周辺には大阪層群が分布し、厚く堆積する。大阪層群は、河湖成層を主とし、12 枚の海成粘土層を挟む。最大層厚は 1,500-2,000 m とされる。山地に近いところでは層状地、崖錐堆積物、大阪層群の砂礫層、そして盆地に近いところでは段丘堆積物となる。高位段丘堆積物は八幡市美濃山周辺に分布し、標高 50-60 m で定高性を持ち、赤褐色に風化した砂礫よりなる。美濃山王塚古墳は高位段丘と大阪層群の境界付近に立地する。

京田辺市から精華町にかけて広く発達する丘陵地形が田辺丘陵である。八幡丘陵と同様に大阪層群から構成され、そのうち田辺累層水取疊層、柘榴互層が大部分を占める。また、東方の井手町地域の丹波帯の延長とみなされる丹波帯が散点的に分布しており、田辺丘陵の沖積地との境界付近及び飯岡丘陵の全域で丹波帯堆積岩コンプレックスの主体をなす泥岩が分布する。

轟喜古墳群を構成する首長墓の分布と地質の関係をみると、現存する古墳の多くは丘陵頂部や丘陵端部の段丘面や丹波帯の泥岩分布域に築造されており、その構成には大型前方後円墳が含まれる。一方、全壊あるいは消滅した八幡茶臼山古墳、西二子塚古墳、東二子塚古墳、田辺奥ノ城 1・2 号墳などは丘陵の大部分を占める大阪層群の分布範囲と重複し、規模は中型以下である。堅固な地盤の場所で築造された古墳は地質的要件から長く保存され、地形変更の容易な場所で築造された古墳は後世の開発行為による破壊も容易であったとみなしうる。

昭和 30 年代以降の京都・大阪都市圏の急速な拡大によって両市で活発に行われた宅地開発によつて地形は大きく改変され、八幡茶臼山古墳が記録保存されているが、中ノ山古墳など、それ以前にすでに消滅、全壊していたと考えられる古墳も複数ある。その要因として、八幡・京田辺の両丘陵で広く実施されてきたタケノコ栽培に伴う開発行為が想定される。竹林の地質については、これまで桂川右岸の乙訓地域を対象とした研究が実施されている（清水 2002・小林 2010）が、海成粘土を主体とし、保水力に富んだ大阪層群は竹林に適しているという。そして、小林勇介（小林 2010）によると、近代の交通手段の発達による販路の大幅な拡大からタケノコ栽培が活性化したことによって、大阪層群の分布する丘陵では竹林面積が大幅に増加したという。乙訓と同様にタケノコ栽培が広く行われるようになった八幡・田辺丘陵でもこうした現象が生じ、地形変更によって大阪層群に立地した中規模以下の古墳が姿を消したと考えられる。

ただし、乙訓古墳群の立地する桂川右岸域では、丘陵のほぼ全体が大阪層群に覆われるのに対し、



第4図 総合古墳群周辺の地質 (S=1/60,000 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター「地質図 京都西南部・奈良、国土地理院「陰影起伏図」を元に作図)

この地域では丘陵頂部に河岸段丘堆積物が堆積する。前期首長墓の立地として選ばれやすい丘陵頂部が堅固な地盤であったことから、この地域の首長墓は、後世の大規模開発の影響を受けにくかったとも考えられる。実際に乙訓古墳群では大阪層群に立地する大型古墳が何基か消滅しているが、綾喜古墳群の大型古墳は概して残りが良い。

古墳築造にも、綾喜古墳群の地質的特徴は影響を与えた。当地域の地形及び地質の特徴は、大阪層群から構成される丘陵地形が発達し、平野や河川に面して花崗岩やチャート等の岩体が露出していないことである。したがって、堅穴式石槨や横穴式石室に用いる石材を近隣で調達することが困難で、搬入石材に頼らざるを得ない。ちなみに、この地質的特徴は対岸の木津川右岸北部の旧久世郡や、生駒丘陵を西に越えた旧交野郡北部とも共通している。

綾喜古墳群は、対岸の旧久世郡に展開する古墳と比較すると堅穴式石槨を採用する古墳が多いという特徴がある（和田 1988）が、上述のとおり石材に乏しいため、堅穴式石槨の石材は猪名川流域で採取される石英斑岩が用いられた（奈良 2010）。また、大住南塚古墳ではくびれ部の葺石に板状石材を使用する（田辺町 1986）ことが判明している。石材の詳細は不明だが、板状石材は付近では産出されないため、これも搬入石材の可能性が高い。後期古墳では、石材の搬入が必要な横穴式石室墳は南部には認められ、花崗岩を用いる石室が多いが、北部では横穴式石室墳は確認されておらず、横穴墓が卓越する^(注)。後期末から終末期の下司古墳群では、この地域では唯一大型石材を使用した横穴式石室が築造されるが、斑欄岩が最も多く、花崗岩が次に多い。斑欄岩は、生駒山に露出するものが有名であるが、下司古墳群に使用されたものは明らかに生駒山の斑欄岩とされる（横山・竹村 1985）。地域内部では大型石材の入手が困難であったことを示す実例である。

(古川)

【参考文献】

- 足利健亮 1985 「日本古代地理研究－畿内とその周辺における土地計画の復元と考察－」 大明堂
- 金田章裕 2019 「南山城の南北交通－「南山城回廊」」「京都を学ぶ【南山城編】」 京都学研究会編 ナカニシヤ出版
- 小林勇介 2010 「GIS を用いた竹林の分布変化の研究－京都府西南部における事例－」『地理学論集』 No.85 北海道地理学会
- 清水大吉郎 2002 「筍の地質学」「地学教育と科学運動」 地学団体研究会
- 高橋美久二 1995 「古代交通の考古地理」 大明堂
- 竹門康弘 2019 「木津川の自然と利用」「京都を学ぶ【南山城編】」 京都学研究会編 ナカニシヤ出版
- 田辺町教育委員会 1986 「大住南塚古墳発掘調査概報」 田辺町埋蔵文化財調査報告書第 6 集
- 奈良拓弥 2010 「堅穴式石槨の構造と使用石材からみた地域間関係」『日本考古学』 第 29 号 日本考古学協会
- 横山卓雄・竹村恵二 1985 「横穴式石室を構成する岩石材」「同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No.19 下司古墳群」 同志社大学校地学術調査委員会
- 吉岡敏和 1987 「京都盆地周縁部における第四紀の断層活動および盆地形成過程」「第四紀研究」 第二十九卷
- 和田晴吾 1988 「南山城の古墳－その概要と現状－」「京都地域研究」 4 立命館大学人文科学研究所
- (注) ただし、石材入手の問題だけで墓制が定まるわけではない。綾喜古墳群の築造された綾喜西部に南接し、同様に石材入手の困難な相楽郡西部では、横穴式石室墳は築造されるが、横穴墓は確認されていないためである。

（2）歴史的環境（第5図）

本項では、緑喜古墳群の所在する八幡市及び京田辺市域で、実施されてきた発掘調査等をもとに考古学的观点から歴史的環境を概観する。

①旧石器時代・縄文時代

数カ所の遺跡で旧石器の出土が確認されている。八幡市金右衛門塙内遺跡では、二上山産サスカイト製のナイフ形石器や翼状剥片石核、黒曜石の翼状剥片石器が採取され、このほか、縄文時代草創期の有舌尖頭器も確認されている（鈴木1979、八幡市教育委員会2002）。そのほか八幡市域では、美濃山遺跡・宮ノ背遺跡・西ノ口遺跡でナイフ形石器が採集されている（京都府埋蔵文化財調査研究センター1998・2021）。京田辺市域では高ヶ峯遺跡で、サスカイト製石核が出土している（鈴木1979）。

縄文時代の遺構としては、京田辺市薪遺跡で、中期末の堅穴建物跡が検出された。この遺構では平面形態が方形で主柱穴4基を四隅に配し、中央付近に炉跡が1基みつかっており、さらに早期～中期の土器、石錐や石匙が出土している（京都府埋蔵文化財調査研究センター2006）。また、晩期の土器が京田辺市三山木遺跡で確認できる（京都府埋蔵文化財調査研究センター2002）。隣接する京田辺市山崎神社では、石棒や石冠が伝わっている。

②弥生時代

縄文時代に比べて、弥生時代の遺跡は多く認められる。前期には、京田辺市稻葉遺跡で、北隅が隣接する方形周溝墓1基がみつかっている（京田辺市教育委員会1998）。三山木遺跡では前期後半から中期前半を中心に多くの土器が出土しており（京都府埋蔵文化財調査研究センター2002）、隣接する京田辺市宮ノ下遺跡でも同時期の土坑が検出されている（田辺町教育委員会1990）。八幡市幸水遺跡では、中期の方形周溝墓、後期の木棺墓がみつかっている（八幡市教育委員会1998）。建物跡としては京田辺市南山遺跡で、16基の堅穴建物跡が確認されている（京田辺市教育委員会2010a）。京田辺市田辺天神山遺跡では、段丘上で後期の集落の展開が確認され、計20数基の円形・方形・五角形を呈する堅穴建物跡がみつかっている（同志社大学1976）。京田辺市大切遺跡では、溝から多量の庄内期の土器のほか、生駒山西麓産の土器や東海系の土器が出土しており、他地域との交流を伺わせる（京都府埋蔵文化財調査研究センター1993）。八幡市美濃山遺跡では、後期の円形・方形・多角形堅穴建物跡及びそれに伴う屋外排水路などが検出され、多くの土器が出土している（京都府埋蔵文化財調査研究センター2021）。隣の丘陵に位置する八幡市美濃山廃寺下層遺跡にて同規模・同時期の建物跡が40基確認できる（八幡市教育委員会2003・2004・2006ほか）。八幡市式部谷遺跡では後期の突線紐式六区画袈裟櫛文銅鐸がみつかっている（宇佐1962）。

③古墳時代

古墳時代前期中葉より古墳の築造が開始される。八幡市域では男山丘陵を中心に前期後葉から中期前葉にかけて石不動古墳（前方後円墳、墳丘長88m）や八幡茶臼山古墳（前方後方墳、墳丘長50m）、八幡西車塚古墳（前方後円墳、墳丘長120m）、八幡東車塚古墳（前方後円墳、墳丘長94m）、ヒル塚古墳（造出付方墳、辺長52m）、美濃山王塚古墳（帆立貝形墳、墳丘長75m）、御毛通1・2号墳が築造される。ヒル塚古墳では、副葬品として方格規矩鳥文鏡や渦巻飾付鉄劍等が出土している。美



- 1: 木津川河床遺跡 2: 橋本陣屋跡 3: 石清水八幡宮遺跡 4: 西山廃寺 5: 式部谷遺跡 6: 女郎花遺跡 7: 畠戸津遺跡 8: 志水廃寺 9: 今里遺跡
 10: 上茶臼遺跡 11: 南毛通 (八幡市) 12: 南原遺跡 13: 伏見路跡 14: 串水道跡 15: 西口道跡 16: 宮ノ背遺跡 17: 金右衛門塚内 (舟ノ元) 遺跡
 18: 美濃山遺跡 19: 新田遺跡 20: 内里八丁塚跡 21: 上津屋遺跡 22: 美濃山廃寺 23: 美濃山廃寺下原遺跡 24: 丹門遺跡 25: 新道跡 26: 稲葉遺跡
 27: 田辺城跡 28: 向戸廃寺 29: 大切道跡 30: 大切道跡 31: 田辺天神山遺跡 32: 鶴岡道跡 33: 善賢寺跡 34: 小田堀内遺跡 35: マムシ谷遺跡
 36: 南山道跡 (京田辺市) 37: 二又道跡 38: 三山木道跡 39: 宮ノ下道跡 40: 三山木道跡 41: 高ヶ茶道跡 42: 松井窯跡群

第5図 緩喜古墳群周辺の遺跡 (S=1/70,000 国土地理院地図 京都西南部・奈良) を元に作図)

濃山王塚古墳では、多数の鏡類が副葬されていたと伝わる。京田辺市域では、前期中葉より中期後葉にかけて飯岡車塚古墳（前方後円墳、墳丘長90 m）や大住車塚古墳（前方後方墳、墳丘長66 m）、大住南塚古墳（前方後方墳、墳丘長71 m）、天理山1・3・4号墳、興戸1・2号墳、薬師山古墳（円墳、径38 m）、ゴロゴロ山古墳（円墳、径60 m）、トヅカ古墳（円墳、径25 m）などが築造される。飯岡車塚古墳では楕円筒埴輪が樹立し、玉類・腕輪形石製品等が出土している。当該地域では、中期に入ると一齊に前方後円墳・後方墳の築造を停止し、円墳や方墳が築造される。そして、前方後円墳の築造は、山城地域最大の前方後円墳・久津川車塚古墳に代表される城陽市の久津川古墳群に集約されていく。後期になると八幡市南部から京田辺市にかけて横穴群が造営される。北から八幡市孤谷横穴群、八幡市美濃山横穴群、八幡市女谷・荒坂横穴群、京田辺市松井横穴群、京田辺市堀切谷横穴群、京田辺市飯岡横穴群がみつかっている。女谷・荒坂横穴群は、これまでの調査で80基以上の横穴の存在が確認され、総数300基以上の存在が想定されており、京都府内最大級の横穴群となっている（京都府埋蔵文化財調査研究センター2004）。また、京田辺市域では下司古墳群、畠山1・3号墳など横穴式石室をもつ小型の円墳が築造され、下司2号墳からは、棺の装飾として利用したとみられる六花形座金具をもつ銀座金具が出土している（同志社大学校地学術調査委員会1985）。

古墳時代の集落遺跡については、古墳時代以前に丘陵上に形成された集落が廃絶するか、規模を縮小し、低地に大型の集落が出現する。八幡市内里八丁遺跡では、弥生時代後期末から古墳時代初頭の堅穴建物跡や掘立柱建物跡が検出されている。同遺跡では、中期から後期にも堅穴建物跡が認められる（京都府埋蔵文化財調査研究センター1999b）。京田辺市興戸遺跡では古墳時代前期の堅穴建物跡や溝、貯蔵穴状の土坑が検出されている（京都府教育委員会1980）。京田辺市門田遺跡では後期の堅穴建物跡が4基（京田辺市教育委員会2005、京都府埋蔵文化財調査研究センター2015）、八幡市から京田辺市をまたがる新田遺跡では、後期の堅穴建物跡が10数基みつかっている（京都府教育委員会1984）。

④古代

八幡市域では古代寺院として美濃山廃寺、志水廃寺、西山廃寺が知られている。美濃山廃寺は飛鳥時代に創建され、平安時代前期に廃絶した。金堂や塔などは、すでに失われていたものの、講堂とみられる建物跡は礎石建物跡と掘立柱建物跡の折衷様式であることが判明しており、瓦類のほか、覆鉢形土製品やひさご形土製品などが出土している（京都府埋蔵文化財調査研究センター2013a・2013b）。志水廃寺では瓦積基壇を検出し、鬼面文軒丸瓦がみつかっている（八幡市教育委員会1978）。西山廃寺では、奈良三彩や金箔が残る埴仏が出土している（八幡町教育委員会1971）。

京田辺市域では普賢寺跡や興戸廃寺、三山木廃寺の存在が明らかになっている。普賢寺跡では白鳳期から奈良時代の塔心礎と考えられる礎石が現存しており、周囲には多量の平瓦が散布することから、瓦積み基壇の可能性が指摘されている（若林邦彦2007、網伸也2005）。興戸廃寺と三山木廃寺は伽藍配置等が不明なもの、多くの古代の瓦が出土しており、ともに瓦類から奈良時代から鎌倉時代まで存続したものと想定される（田辺郷土史会1959、田辺町教育委員会1982）。

集落遺跡としては、美濃山遺跡で、堅穴建物跡や掘立柱建物跡、焼土坑が検出されている。近年の

発掘調査によって土器焼成土坑や木炭窯が検出され、鉄滓をはじめ数多くの鉄器や砥石など生産にかかわる遺物が出土していることから、隣接する美濃山廃寺の造営に関わった工人達の集落の可能性が指摘されている（京都府埋蔵文化財調査研究センター 2021）。内里八丁遺跡では、古山陰道と考えられる道路状遺構や大型掘立柱建物跡が数基検出されている。墨書き土器、石帯、陶枕などが出土しており、役所的な性格を有する遺跡と想定できる（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999b）。興戸遺跡では掘立柱建物跡や縦柱建物跡が検出されている（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991）。また、生産遺跡としては、京田辺市マムシ谷窯跡で奈良時代の須恵器窯がみつかっている（同志社大学校地学術調査委員会 1983）。そのほか、京田辺市松井窯跡群では3基以上の窯跡が認められ、灰原からは奈良時代から平安時代初期の須恵器や瓦などが出土している（田辺町教育委員会 1982）。石清水八幡宮境内の本殿南西等の調査では、平安時代の土師器が多量に出土しており、貞觀元年（859）に宇佐八幡宮から八幡神が平安京の裏鬼門にあたる男山に勧請されたことを裏付けるものとされている（八幡市教育委員会 2011）。平安時代にはより一層、平野部で集落跡が増加していく。京田辺市二又遺跡や三山木遺跡では、平安時代に主軸を正方位に揃えた掘立柱建物跡がみつかっている（京田辺市教育委員会 1999、京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999a）。

⑤中世

鎌倉時代には、京田辺市薪遺跡で、鎌倉時代の掘立柱建物跡や池が検出されている。池の汀部分に、多量の土器類が折り重なるように出土し、儀式的な利用が想定される（京田辺市教育委員会 2000）。京田辺市小田垣内遺跡では、瓦質の羽釜を藏骨器に転用し、火葬骨を納め、地上に石仏を立てた墓地がみつかっている（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990a）。八幡市上津屋遺跡では、平安時代中期以降の集落が認められ、平安時代後期から鎌倉時代の土師皿や瓦類碗、輸入陶磁器が出土している。室町時代には、大溝が形成されている（八幡市教育委員会 2003）。八幡市今里遺跡は中世の藏骨器や石造物がみつかっており、土坑墓や木棺墓が検出され、中・近世の集団墓として機能していた（八幡市教育委員会 2021）。八幡市上奈良遺跡では、唐時代に使用された割天文字が書かれた土器がみつかっており、さらに中世の土器が多量に出土している（八幡市教育委員会 2003）。

また、これまでの調査によって中世城館は八幡市・京田辺市で計26遺跡が確認されている。京田辺市田辺城跡は南北に連ねる尾根の頂部に郭を展開しており、発掘調査によって堀切や石組遺構、排水遺構が検出している。出土遺物から15世紀から16世紀にかけて機能していたと推定される（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997）。

⑥近世

江戸時代には石清水八幡宮境内の護国寺跡で、土坑内に輪宝と独鉛杵を組み合わせた鎮壇具が出土しており、瀧本坊跡では、18世紀後半に焼失し、その後、再建された懸造の建物跡が検出されている（八幡市教育委員会 2011）。

（北山）

【参考文献】

- 網 伸也 2005「日本における瓦積基壇の成立と展開－畿内を中心として」『日本考古学』20号
- 宇佐晋一 1962「京都府八幡町出土の銅鐸」『古代文化』第9巻第3号 古代學協會
- 京田辺市教育委員会 1998「稲葉遺跡第4次発掘調査概報」「京田辺市埋蔵文化財調査報告書」第24集
- 京田辺市教育委員会 1999「二又遺跡・三山木遺跡発掘調査概報－三山木地区特定土地区画整理事業地内の調査－」「京田辺市埋蔵文化財調査報告書」第28集
- 京田辺市教育委員会 2000「薪遺跡発掘調査概報」「京田辺市埋蔵文化財調査報告書」第30集
- 京田辺市教育委員会 2005「門田遺跡発掘調査概報」「京田辺市埋蔵文化財調査報告書」第35集
- 京田辺市教育委員会 2010a「南山遺跡発掘調査報告書」「京田辺市埋蔵文化財調査報告書」第38集
- 京田辺市教育委員会 2010b「堀切古墳群発掘調査報告書Ⅲ 一薪切谷、里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ－」「京田辺市埋蔵文化財調査報告書」第37集
- 京都府教育委員会 1969「堀切横穴群発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報（1969）」
- 京都府教育委員会 1980「興戸遺跡発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報（1980-1）」
- 京都府教育委員会 1984「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報（1984）」
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982「狐谷横穴群発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報」第5冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983「狐谷横穴群発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報」第8冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990a「小田垣内遺跡」「京都府遺跡調査概報」第37冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990b「新田遺跡」「京都府遺跡調査概報」第38冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991「興戸遺跡第6・8次発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報」第42冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993「大切遺跡発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報」第53冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997「府道八幡木津バイパス関係遺跡発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報」第77冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998「一般地方道富野莊八幡線関係遺跡（西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡）発掘調査概報」「京都府遺跡調査概報」第81冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999a「三山木遺跡第3次発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報」第98冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999b「内里八丁遺跡I」「京都府遺跡調査報告書」第26冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2002「三山木遺跡第4次発掘調査概報」「京都府遺跡調査概報」第103冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004「女谷・荒坂横穴群」「京都府遺跡調査報告書」第34冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2006「薪遺跡第6次発掘調査概報」「京都府遺跡調査概報」第117冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2013a「美濃山廐寺第6次・美濃山廐寺下層遺跡第9次」「京都府遺跡調査報告集」第154冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2013b「美濃山廐寺第7次・美濃山廐寺下層遺跡第10次」「京都府遺跡調査報告集」第154冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2015「門田遺跡第3～5次」「京都府遺跡調査報告集」第161冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018「（1）松井横穴群第1～4次」「京都府遺跡調査報告集」第171冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2021「美濃山遺跡第5～9次」「京都府遺跡調査報告集」第183冊
- 佐藤虎雄 1929「美濃山の横穴」「京都府史蹟名勝天然紀念物報告書」第10冊 京都府
- 鈴木重治 1979「山城出土の旧石器」「考古学ジャーナル」No.167 ニューサイエンス社
- 田辺郷土史会 1959「田辺町郷土史－古代篇」
- 田辺町教育委員会 1980「京都府報喜古都田辺町 古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書」「田辺町埋蔵文化財調査報告書 第1集
- 田辺町教育委員会 1982「田辺町遺跡分布調査概報」「田辺町埋蔵文化財調査報告書」第3集

- 田辺町教育委員会 1989 「京都府田辺町堀切古墳群調査報告書」「田辺町埋蔵文化財調査報告書」第 11 集
- 田辺町教育委員会 1990 「宮の下遺跡発掘調査概報」「田辺町埋蔵文化財調査報告書」第 12 集
- 同志社大学 1976 「同志社田辺校地田辺天神山弥生遺跡」
- 同志社大学校地学術調査委員会 1983 「マムシ谷窯址発掘調査報告書」「同志社大学校地学術調査資料」14
- 同志社大学校地学術調査委員会 1985 「下司古墳群」「同志社大学校地学術調査資料」19
- 八幡町教育委員会 1971 「西山庵寺（足立寺）発掘調査概報」
- 八幡市教育委員会 1978 「志水庵寺発掘調査報告」「八幡市文化財調査報告」第 2 集
- 八幡市教育委員会 1998 「幸水遺跡発掘調査概報」「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」第 25 集
- 八幡市教育委員会 2002 「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報 33 上津屋遺跡発掘調査概報（第 2 次・第 6 次）（付載金右衛門坦内遺跡採集遺物整理報告）」
- 八幡市教育委員会 2003 「美濃山庵寺・美濃山庵寺下層遺跡範囲確認調査（第 4 次）」「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」第 34 集
- 八幡市教育委員会 2003 「上奈良遺跡発掘調査概報（第 4 次）」「八幡市埋蔵文化財調査報告」第 35 集
- 八幡市教育委員会 2003 「上津屋遺跡発掘調査（第 5・7・8 次）概報」「八幡市埋蔵文化財調査報告」第 36 集
- 八幡市教育委員会 2004 「美濃山庵寺・美濃山庵寺下層遺跡範囲確認調査（第 5 次）」「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」第 37 集
- 八幡市教育委員会 2006 「美濃山庵寺・美濃山庵寺下層遺跡範囲確認調査（第 1～5 次）」「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」第 39 集
- 八幡市教育委員会 2011 「石清水八幡宮境内調査報告書」「八幡市埋蔵文化財調査報告」第 56 集
- 八幡市教育委員会 2021 「今里遺跡発掘調査報告書」「八幡市埋蔵文化財調査報告」第 68 集
- 若林邦彦 2007 「古代寺院普賢寺の建物・基壇跡について－2006 年度測量調査中間報告－」「同志社大学歴史資料館館報」第 10 号
- ※なお、本報告の個票（第 5・6 章）に記載する古墳については参考文献を省いた。

3 綴喜古墳群の地域的特性

本書で「綴喜古墳群」と呼称する古墳群の名称は、これまで一定しておらず、旧綴喜郡（八幡市、京田辺市、井手町、宇治田原町）のうち西部の八幡市と京田辺市に位置するため「綴喜西部」、あるいは木津川との位置関係から「木津川左岸」などとされてきた。また、首長墓群の範囲の把握も一定していない。南山城の古墳時代を対象とした研究論文や著作を概観すると、八幡市域と京田辺市域を單一とみなしたり、両市域で分かれるものとしたり、または八幡市域から京田辺市域北部の大住地区までを同一の古墳群とするような見解などが並立している。

一方、木津川両岸の古墳の様相差は既に指摘されている。南山城の古墳時代を概観した和田晴吾は、綴喜古墳群が造営された時期に、木津川左岸では古墳の埋葬施設に竪穴式石槨を積極的に採用したのに対し、木津川右岸では粘土槨や木棺直葬だけで埋葬施設自体の規模も小さく、両岸で格差が生じることを示した（和田 1988）。

本書における「綴喜古墳群」という名称は、令制下の「綴喜郡」に由来するもので、京都府南部において国指定史跡となっている首長墓群である「乙訓古墳群」「宇治古墳群」が郡名に由来することに鑑みて命名したものである。ただし、古代に設定された郡の境界がそれ以前の古墳時代の地域区分に遡及しうるかは、改めて検討する必要がある。

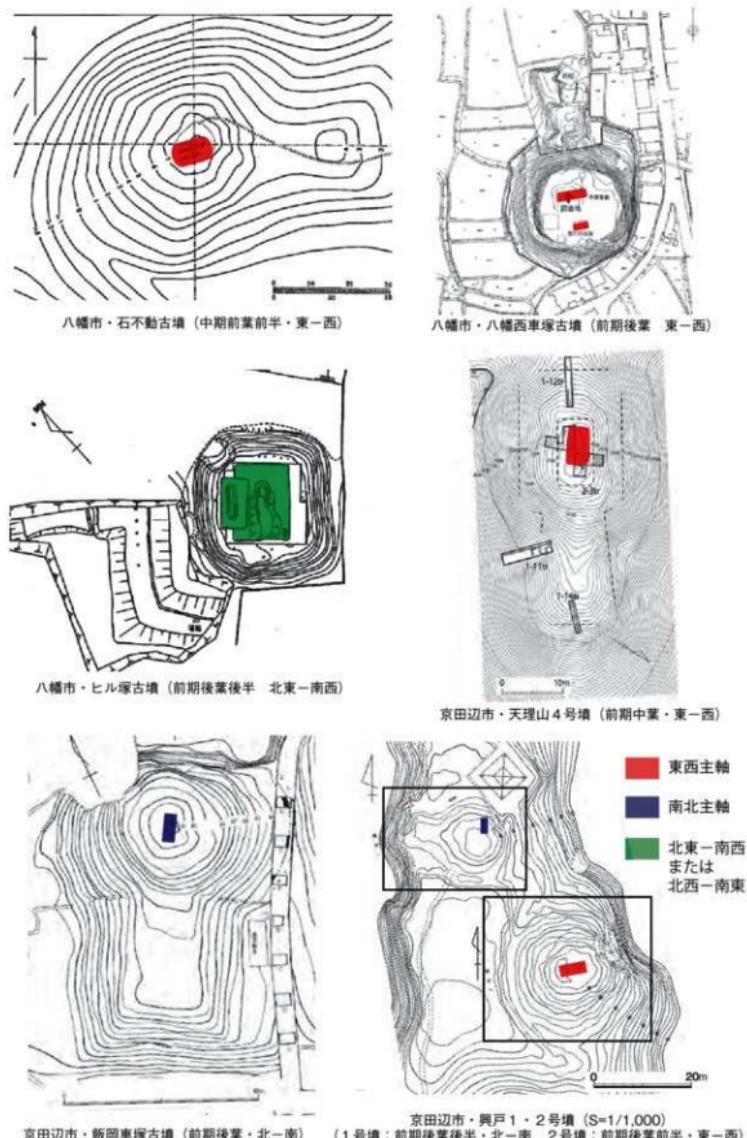
地理的な区分でみると、綴喜古墳群の範囲は、北は桂川、木津川、宇治川の三川合流地帯と巨椋池、東は木津川本流、西は生駒山地といった明確な地形的な区切りによって隣接地域と隔てられる。一方、南は特に地形的障壁ではなく、相楽郡西部に位置する現在の精華町域とは地続きでつながっている。地形的区分では綴喜郡と相楽郡の郡境設定の説明が難しく、郡境が古代にはじめて設定されたのか、それ以前の古墳時代から存在したのか、さらに、古墳時代の地域区分が途切れずに継承されているのか、これまで十分な検証はされてこなかった。

こうした問題意識から、本章では綴喜古墳群の地域的な一体性を検討するため、第一に、古墳埋葬施設の主軸方位という視点から綴喜古墳群を構成する古墳と、隣接する地域で同時期に造営された古墳を比較する。第二に、綴喜古墳群の造営が終了した後の古墳時代後期の南山城地域一帯で造営された横穴墓、木棺直葬、横穴式石室の分布を検討する。第三に、綴喜古墳群と同時期に南山城地域一帯で形成された集落遺跡と古墳との関係を検討する。そして最後に、綴喜古墳群の時期に存在した綴喜郡西部の一体性がその後も存続し、古代の郡の設定に継承されたかを確認する。

（1）古墳埋葬施設の主軸

古墳時代前期の古墳埋葬施設の主軸方位は南北方向を選好することが以前から注目され、弥生時代の墓制と古墳時代の墓制を区別する指標として注目されてきた。こうした南北方位重視の傾向が強い中で、下垣仁志（下垣 2021）は綴喜古墳群のうち特に八幡市域の首長墓は、埋葬施設の主軸が東西方位を取ることを指摘している。

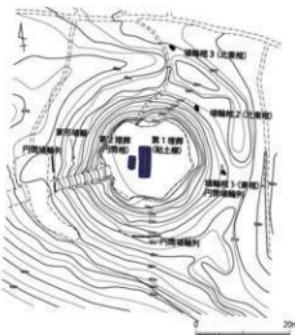
ここで改めて、綴喜郡と、南山城の久世郡、相楽郡の古墳埋葬施設の主軸方位を比較してみる。対



第6図 総合古墳群に所在する古墳埋葬施設の方位



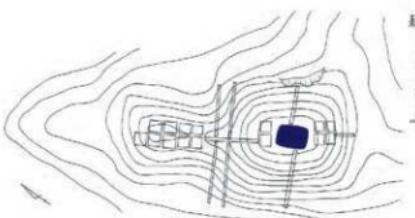
宇治市・庵寺山古墳（前期後葉後半・北一南）



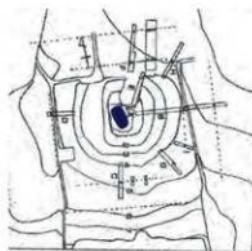
宇治市・金比羅山古墳（中期前葉・北一南）



城陽市・尼塚4号墳（前期後葉）
（後円部：北一南）
（前方部：東一西）



城陽市・西山1号墳（前期前葉・北一南）



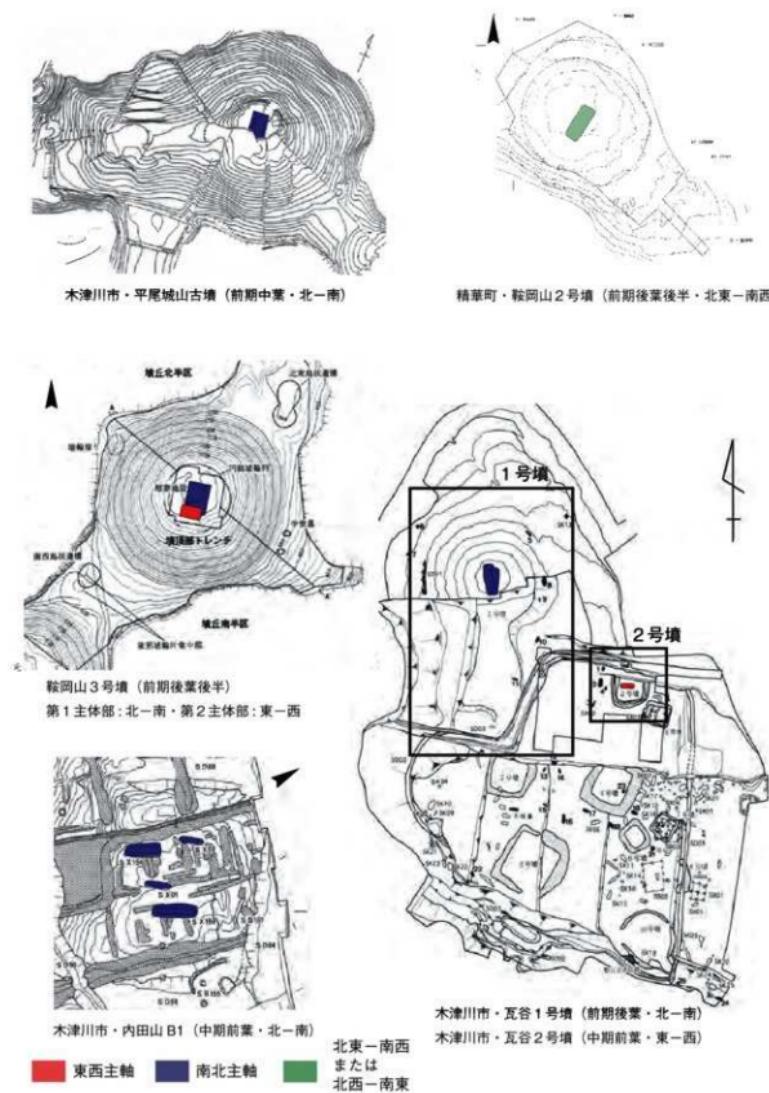
城陽市・尼塚古墳（前期後葉後半・北一南）



城陽市・梅の子塚1号墳（前期後葉後半・北一南）

- 東西主軸
- 南北主軸
- 北東一南西
または
北西一南東

第7図 久世郡に所在する古墳埋葬施設の方位



第8図 相楽郡に所在する古墳埋葬施設の方位

象とする主な時期は、前期前葉から中期前葉までとする。

①緑喜郡西部（八幡市・京田辺市）（第6図）

緑喜古墳群のある緑喜郡西部のうち、北部の八幡市域では、前方後円墳の埋葬施設は東西主軸が優勢である。最大の前方後円墳である八幡西車塚古墳（墳丘長120m）は、後円部の二基の埋葬施設が東西主軸である。石不動古墳（墳丘長88m）も、後円部の二基の埋葬施設が東西主軸である。また、八幡東車塚古墳（墳丘長90m）の後円部埋葬施設粘土櫛中に東西方向の木棺の痕跡と考えられる凹みが確認されていることから、これも東西主軸であろう。美濃山王塚古墳（墳丘長75m）も、東西に長く配置された副葬品の出土状況から東西主軸と考えられる。一方、造出付方墳のヒル塚古墳（一辺52m）は北東－南西主軸である。また、前方後方墳の八幡茶臼山古墳（墳丘長50m）は南北主軸である。

上記の傾向の違いは、墳形によって埋葬施設の方位が異なる可能性があるが、時期を見ると、唯一南北主軸を採用する八幡茶臼山古墳は前期中葉に位置づけられ、八幡西車塚古墳をはじめとする前方後円墳は前期後葉から中期前葉に中心がある。したがって、埋葬施設の主軸の違いは、時期差とも推定しうる。いずれにせよ、八幡市域の前期後葉から中期前葉の前方後円墳、帆立貝形墳で東西主軸が主流であることは事実である。

南部の京田辺市域では、東西主軸と南北主軸が混在する。前方後方墳の天理山4号墳（墳丘長42m）は後方部の埋葬施設が東西主軸である。前方後円墳の飯岡車塚古墳（墳丘長90m）は南北主軸である。前方後円墳の興戸1号墳（墳丘長24m）は、後円部北側で南北主軸の埋葬施設が確認された。ただし、後円部墳丘中心からずれるため、副次的な埋葬施設の可能性がある。近接する円墳の興戸2号墳（径32m）は東西主軸である。京田辺市域で最大の前方後円墳である飯岡車塚古墳は南北主軸を探るが、他の古墳には東西主軸も認められる。

②久世郡（宇治市・久御山町・城陽市）（第7図）

緑喜郡西部からみて対岸の木津川右岸に位置する久世郡の首長墓では、埋葬施設主軸方位は南北が主体で、様相が大きく異なる。

円墳の庵寺山古墳（墳丘長56m）（宇治市教育委員会1990）と金比羅山古墳（径40m）（京都府教育委員会2021）では墳丘中央部に埋葬施設が検出されているが、いずれも南北主軸である。前方後円墳の尼塚4号墳（墳丘長40m）（京都府教育委員会1969）、前方後方墳の西山1号墳（墳丘長82m）（桐井はか2020）は、後円（方）部の埋葬施設が南北主軸である。尼塚4号墳の前方部埋葬施設だけが東西主軸であるが、位置と規模から副次的な埋葬施設と位置づけられる。方墳の尼塚古墳（墳丘長37～40m）（京都府教育委員会1969）も同様に南北主軸である。

久世郡では、このほか、宇治市一本松古墳（28m方墳または35m円墳）、城陽市・西山4号墳（25m円墳）、尼塚1号墳～6号墳の埋葬施設が調査されており、尼塚3号墳（18m円墳）だけが東西主軸であるが、ほかはすべて南北主軸が採用されている。

③相楽郡（精華町・木津川市）（第8図）

大部分を占める木津川市域では、前方後円墳の平尾城山古墳（墳丘長110m）がまず挙げられる（古

代学協会 1990)。後円部で埋葬施設が 3 基確認されているが、全て南北主軸である。この他に瓦谷古墳群、内田山古墳群の埋葬施設が判明しており、前方後円墳の瓦谷 1 号墳後円部の埋葬施設 2 基はいずれも南北主軸である(京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997)。近接する方墳の瓦谷 2 号墳(一辺 10 m)は東西主軸を採る。内田山 B 1 号墳(一辺 17.5 m)は南北主軸である。

④小結

綾喜西部の綾喜古墳群では、八幡市域の古墳で東西主軸が主流を占めるが、京田辺市域では南北主軸も含まれる。特に京田辺市域最大の前方後円墳である飯岡車塚古墳で南北主軸を探ることは、南北主軸がやや優勢ともみられる。ただし、中規模の古墳であっても中心的な埋葬施設に東西主軸が採用されるのは八幡市域の影響があるとみられる。

久世郡、相楽郡では、南北主軸の古墳が主体で、東西主軸の埋葬施設は副次的な埋葬施設または小型墳の埋葬主体部に限定される点で共通する。

したがって、東西主軸の埋葬施設は、首長墓では綾喜郡西部の八幡市域、京田辺市域にまたがる綾喜古墳群に限定して採用されていることが分かる。綾喜古墳群に独自の特徴であることから、綾喜古墳群を造営した勢力で共有された決まりであったと捉えられる。

(2) 古墳時代後期の墓制(第 9 図)

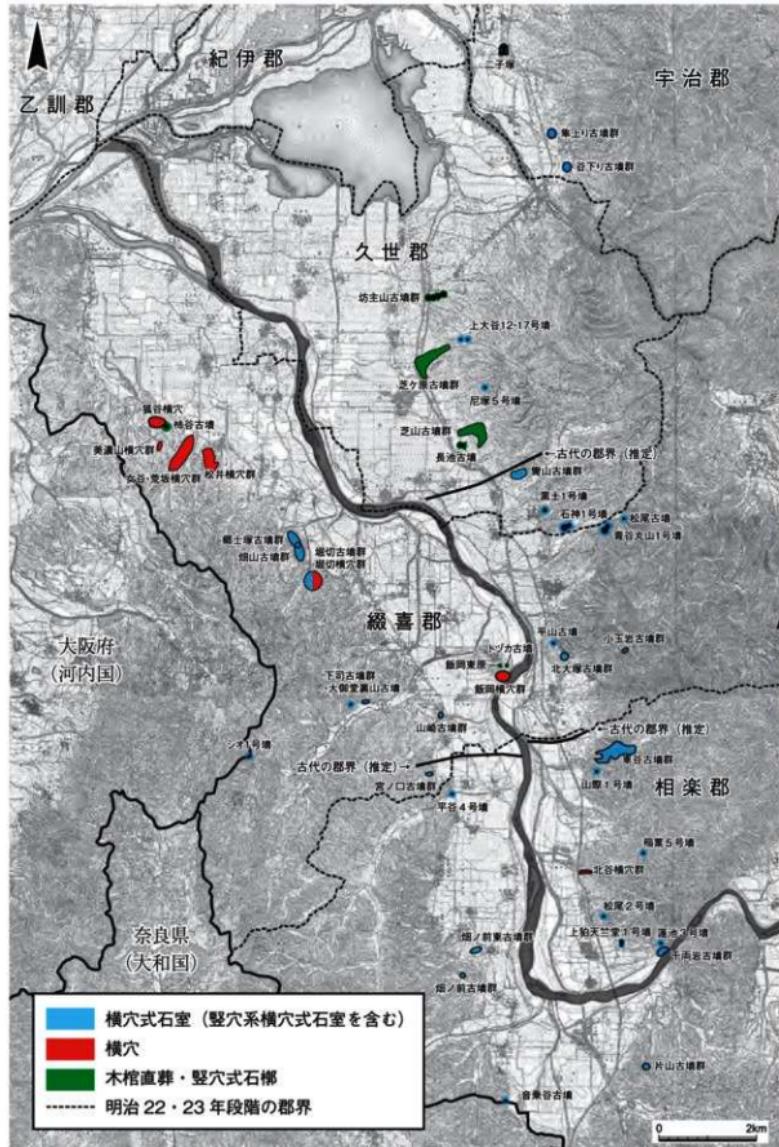
本節では、当教育委員会が把握している遺跡情報(京都府教育委員会 2003 ほか)を主に参考にしながら古墳時代後期の墓制の分布について検討する。

綾喜古墳群の造営は後期前葉に終焉を迎えるが、それに次ぐ後期中葉になると、この地域に特徴的な墓制である横穴墓が南山城地域に展開しはじめ、後期後葉から著しく増加する。近畿地方中央部では、横穴墓が奈良盆地東南部と北部、大阪平野東部、そして南山城地域に展開することが知られるが、南山城地域では綾喜郡西部に集中する。

これまでの発掘調査の蓄積から、八幡市の女谷・荒坂横穴群で推計約 300 基、隣接する松井横穴群で推計約 300 ~ 400 基の横穴(京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018)が想定されており、少なくとも京都府内では最大級の横穴群である。綾喜郡では、このほか、八幡市の狐谷横穴群、美濃山横穴群、京田辺市の堀切横穴群、飯岡横穴群、相楽郡の木津川市の北谷横穴群が知られている。

南山城地域に点在する横穴の分布状況をみると、木津川右岸にも北谷横穴群があるとはいえ、基本的には左岸の八幡市、京田辺市を中心とした綾喜郡西部に限定されるという傾向を示す。また、横穴群の規模も、女谷・荒坂横穴群、松井横穴群が圧倒的に大きい。後期の横穴の分布範囲は、前・中期の綾喜古墳群の分布範囲と一致すると見える。

隣接する地域の様相を見ると、木津川対岸の久世郡では、後期の墓制として木棺直葬墳が卓越する。小規模な古墳では、芝ヶ原古墳群、芝山古墳群で木棺直葬墳が群を構成し、首長墓級の古墳でも、前方後円墳を含む坊主山古墳群、長池古墳の埋葬施設は、木棺直葬が採用されている。上大谷 12・17 号墳などの横穴式石室墳も後期末になると少数存在するが、木棺直葬墳が主体を占める。木棺直葬墳の分布状況は、古代の久世郡の範囲とほぼ一致する。



第9図 古墳時代後期の埋葬施設 (S=1/100,000) (明治22・23年測量仮製地図)



第10図 繰喜古墳群と古墳時代集落の位置 (S=1/60,000) (国土地理院地図)

久世郡の南に隣接する綾喜郡東部は、横穴式石室墳が卓越する。首長墓級の古墳が多く点在し、青山古墳群、黒土1号墳、石神古墳といった古墳の埋葬施設は、いずれも横穴式石室である。北端に位置する青山古墳群は、古代以降の地域区分では久世郡に位置するが、古代の区分では綾喜郡に位置する（和田1988）。したがって、ここでも旧郡によって後期の墓制が異なることがわかる。さらに、綾喜郡西部と東部は木津川をはさんで墓制が異なる。すなわち、古墳時代の綾喜郡は綾喜古墳群の営まれた西部と対岸の東部に分かれるのである。

南山城地域南端に位置する相楽郡は、畠ノ前東古墳群、音兼谷古墳、車谷古墳群等、横穴式石室墳が主体となる。木津川左岸では、北側の綾喜郡と南側の相楽郡の間に地形的な障壁はないが、横穴と横穴式石室で墓制が異なっていることが特筆される。すなわち、地形的には一体とも見られるにも関わらず、両地域の居住集団は別と考えられるのである。

（3）集落と古墳の関係（第10図）

綾喜古墳群が営まれた綾喜郡を含む南山城地域では、弥生時代から古墳時代を経て、古代までの集落の消長がこれまで分析されてきた（柏田・古川・浅井2016、古川・柏田・大坪2021、山本2021ほか）。

概観すると、弥生時代後期中葉頃から、低地部である沖積地への居住が進行し、庄内式期には八幡市木津川河床遺跡、内里八丁遺跡などが拡大する。逆に、弥生時代後期後半に丘陵部に存在した集落は、庄内式期に廃絶する集落が多い。低地部の集落で外来系土器が大量に出土することから、木津川を介した水系交通の活発化が当地域の集落の消長に大きく影響していると考えられる。

なお、内里八丁遺跡は古墳時代前期まで継続する。また、八幡西車塚古墳、八幡東車塚古墳に隣接する女郎花遺跡でも、古墳時代前期の居住の痕跡が確認されている。

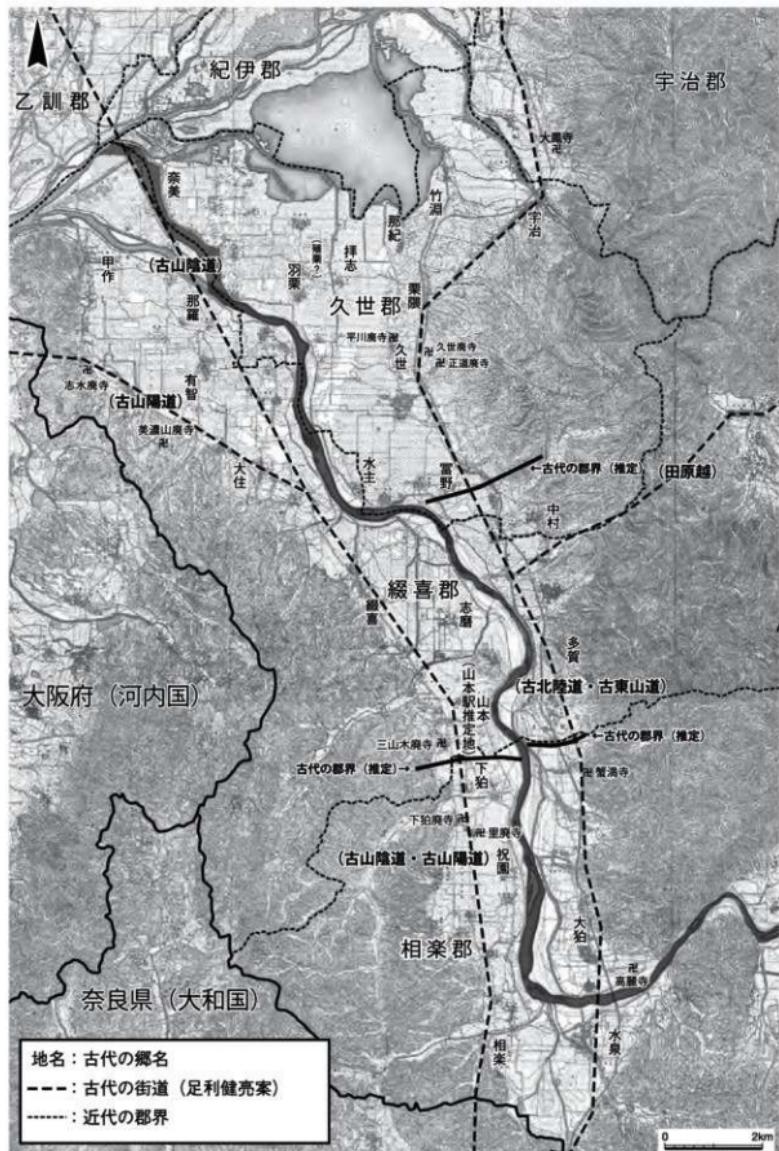
京田辺市域では、古墳時代の顕著な居住造構はまだ確認されていないが、稻葉遺跡、大切遺跡、三山木遺跡で古墳時代前期の遺物が出土している。これらの遺跡は綾喜古墳群の首長墓が形成された時期と概ね重なっている。

以上、まだ調査件数は少ないが、庄内式期の集落の消長が水系交通との関連から推察できることは、綾喜古墳群の形成の前段階として注目すべきであろう。

近年、対岸の木津川右岸では弥生時代から古墳時代前期まで機能したと考えられる人工的な水路が検出され、東海系を中心とする多数の外来系土器が出土した。水運に関わる遺構と評価されている（京都府埋蔵文化財調査研究センター2018）。綾喜郡の属する木津川左岸でも、こうした遺構が将来検出される可能性がある。

（4）古代の郡・交通路（第11図）

古代の綾喜郡には、木津川左岸の西部に、甲作、有智、大住、志磨、綾喜、山本の6郷、対岸の東部に、中村、多賀の2郷が存在した（酒井2018）。古代の郷については複数の見解があるが、西部の比重が大きいことは確実視され、耕作地となる沖積平野の面積も西部が広い。さらに、郡名と同じ綾喜郷が含まれており、繼体天皇が設置した筒城宮と同音であることから、綾喜郡の中心はこのあたり



第 11 図 南山城地域の古代の郷と官道 (S=1/100,000) (明治 22・23 年測量仮製地図)

と考えられる。綴喜郡を通った交通路をみると、南北に古山陰道・古山陽道が通過し、木津川左岸で唯一の駅である山本駅が山本郷のあたりに置かれた。

このように、綴喜郡は古代においても交通の要衝としての位置を占め、その中心は西部にあったと考えられる。

（5）小結

以上の検討から、綴喜古墳群が形成された綴喜郡西部は、同古墳群での首長墓造営が終了した古墳時代後期にも地域的な一体性を保持し、古代までその地域性を継続していたと考えられる。

そして、庄内式期から古墳時代までの集落分布と外来系土器の出土は木津川水運との関連を想起させる。また、古代の郷の分布が西部に固まること、そして西部を山陰・山陽道が通過し駅も設置されたことから、西部が郡の中心地であったことが判明した。

以上の分析から、綴喜古墳群の範囲は、綴喜古墳群が主に造営された古墳時代前期から中期までの間に一時的なまとまりとして存在したのではなく、その後もこの地域性は継続し、少なくとも古代に至るまで、完結したひとつのまとまりとして存在していたことが分かる。

（古川）

【参考文献】

- 宇治市教育委員会 1990『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 15 集
柏田有香・古川 匠・浅井猛宏 2016『山城地域』『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会編、六一書房
京都府教育委員会 1969『尼塚古墳発掘調査概要』『埋蔵文化財発掘調査概報』1969
京都府教育委員会 2003『京都府遺跡地図』（第3版）第3分冊
京都府教育委員会 2021『金比羅山古墳発掘調査報告書』
京都府埋蔵文化財センター 1997『瓦谷古墳群』京都府遺跡調査報告書第 23 冊
京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018『京都府遺跡調査報告集』第 173 冊
桐井理揮・北山大熙・菊池望・操納民之 2020『西山 1・2 号墳出土遺物の再検討』『同志社大学歴史資料館館報』第 23 号 同志社大学歴史資料館
古代学協会 1990『京都府平尾城山古墳』
酒井健治 2018『古墳時代後期から律令期の南山城の状況』『京都府遺跡調査報告集』第 171 冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
下垣仁志 2021『男山古墳群の動向』『椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権』季刊考古学・別冊 34 雄山閣
古川 匠・柏田有香・大坪州一郎 2021『山城地域における集落構造の地域差および古代寺院との関係』『古墳時代から飛鳥時代へ：集落の分析からみた社会変化』古代学研究会編、六一書房
山本 寛 2021『山城地域からみた前期前方後方墳の性格』『椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権』季刊考古学・別冊 34 雄山閣
和田晴吾 1988『南山城の古墳—その概要と現状—』『京都地域史研究』4、立命館大学人文科学研究所

4 調査研究史

(1) 調査研究略史

①古墳群の認識と京都府史跡勝地調査會による調査

轟喜古墳群の一部の古墳は、八幡西車塚・東車塚古墳について記した『山城志』や、美濃山王塚古墳を雑体天皇陵と推測した『山州名跡志』など、江戸時代の地誌に記載が認められる。『山城名勝志』に引用する寛永 16 (1640) 年の「飯岡ノ鐘銘」には「山頭ニハ墳家脣。其中二大ナル者二三。」と記されている。また、文化年間には八幡東車塚古墳の樹木を伐採した際に、崇りがあったとして、小祠を古墳の上に立てたと伝えられるなど（男山中学校 1951）、地元では「上代の墳墓」としては認識されていたようだ。

明治・大正年間には、開墾や開発の増加に伴い、当地域の大型古墳の多くが私掘あるいは盗掘されることとなる。明治 7 (1874) 年に樹木伐採に伴ってトヅカ古墳が発掘されたのをはじめ、大住南塚古墳（明治 27 (1894) 年）、ヒル塚古墳（明治 28 (1895) 年）、八幡西車塚古墳（明治 35 (1902) 年）、飯岡車塚古墳（明治 35 (1902) 年）が相次いで私掘され、埋蔵施設から多くの遺物が出土したことが報告されている。大正 4 (1915) 年には京都府南部から奈良県北部にかけての古墳が次々と盗掘され、関係者 19 人が逮捕されるとともに、新聞等でも大きく報じられた（岩戸・中川ほか編 2018）。これらの盗掘資料は、「北和城南古墳出土品」として奈良帝室博物館に一括して引き渡されたが、梅原は、この中に石不動古墳・興戸 2 号墳出土品が含まれられていることを指摘している（梅原 1955）。

これらの明治から大正時代にかけての出土遺物は散逸してしまったものも多いが、国立博物館や大学に保管されているものもあり、その出土資料は基礎資料として活用されることとなった。鏡研究では八幡西車塚古墳出土の三角縁唐草文帶二神二獸鏡と画文帶環状乳四神四獸鏡、八幡東車塚古墳の三角縁二神二獸鏡が当時の鏡分類の指標として用いられた（富岡 1916）。後藤守一は八幡西車塚古墳の三角縁唐草文二神二獸鏡が奈良県佐味田宝塚古墳、兵庫県ヘボソ塚古墳鏡と「同鑄型」とみて注目している（後藤 1927、1935）。また、末永雅雄は美濃山王塚古墳出土草摺を、短甲に付属する草摺として確認した最初の事例と位置づけている（末永 1944）。

このような状況のなか、大正 8 (1919) 年には、京都府史跡勝地調査會による調査がはじまり、これらの古墳の現状の確認が行われるとともに、保護のための調査が行われることとなった（梅原 1920 ほか）。委員であった京都帝国大学の梅原未治は大正 9 (1920) 年から大正 11 (1922) 年の間に当地域の古墳を 15 基以上踏査・調査している。梅原が実際に発掘調査を行ったのは、いずれも大正 4 (1915) 年に盗掘を受けた石不動古墳と興戸 2 号墳の 2 基のみ（いずれも昭和 18 (1943) 年）であるが、古墳の現状を確認するとともに、発掘当時の状況の聞き取り出土遺物の調査を緻密に行って報告しており、当時の状況を正確に知ることができる基礎資料としての価値は極めて大きい。

②郷土史家・大学による調査

戦後、当地域の古墳に関する調査研究は一段落し、暫くの間、発掘調査は行われていない。この時期、地域の古墳の研究をリードしたのは地元の郷土史家であり、戦前の中村直勝らの『八幡史蹟』

(1936) をはじめ、西田直二郎の『洛南大庄村史』(1951) や維新館中学校の校長であった森本米一の『緑喜郡史話』(1954)、田辺郷土史会の村田太平による『郷土田辺の歴史と傳説』(1955) などによつて、大規模開発以前の当地域の古墳の様子をうかがい知ることができる。昭和 34 (1959) 年には田辺郷土史会によって『田辺郷土史会』古代篇が刊行され、田辺町域の古墳の動向がまとめられた。町史作成の一環で行われた当事業では悉皆的な分布調査が行われ、小欠古墳群や天理山古墳群等が新たに古墳であることが判明した。また、それ以前の私掘で散逸していた個人蔵の遺物の照合や出土状況の調査、実測図の公開も行われたほか、卷末には古墳の編年表も付されており、研究史的意義は大きい(田辺郷土史会 1959)。大学による調査もこの時期行われており、京都大学が八幡西車塚古墳の測量調査を(京都大学考古学研究会 1964)、昭和 45 (1970) 年には龍谷大学が南山城の古墳の悉皆的な調査を行い(龍谷大学文学部考古学資料室 1972)、ゴロゴロ山古墳など、状況が不明瞭であった古墳の測量図の作成等が行われた。これらの大規模開発以前に行われた 悉皆調査と各古墳の位置づけは、現在に至るまで当地域の古墳研究の基礎資料となっている。

この時期、南山城地域では、いち早く開発が進んだ城陽市域を中心に、古墳の保存が研究者だけでなく新聞社や市民も巻き込んだ問題となっていた(同志社大学考古学研究会 1962 など)。当地域における市民による古墳の保存運動は、昭和 45 (1970) 年に薬師山古墳・ゴロゴロ山古墳が町指定史跡として保存されたことや(鈴木 1994b)、昭和 49 (1974) 年の大住車塚古墳の国史跡指定として結実している。

③遺跡目録と京都府教育委員会による保護・調査

増加し続ける開発に対応するため、昭和 36 (1961) 年に京都府で最初の埋蔵文化財技師が採用され、同年、府内で初めての埋蔵文化財包蔵地の一覧表が刊行された(京都府教育委員会 1961)。この一覧には現在知られる緑喜古墳群の古墳のうち、埋没古墳以外の多くの古墳が掲載されている。

当地域では、昭和 40 (1965) 年に八幡丘陵一帯で持ち上がった開発計画を契機として分布調査が行われ、それにもとづき、昭和 42 (1967)・昭和 43 (1968) 年に、事前の記録保存のための発掘調査が行われた。八幡茶臼山古墳は梅原末治の報告では一辺 18 m の方墳と考えられていたが、再調査の結果、墳丘長 50 m の前方後方墳であることが明らかとなった。さらに、埋葬施設の周囲は円筒埴輪で開堀され、竪穴式石室に伴う排水溝等の付属施設の存在も明らかとなった(京都府教育委員会 1969)。なお、この時の調査で八幡西車塚古墳の南西でも前期の埴輪が検出されており、現在知られているよりも多くの未確認古墳が存在する可能性は極めて高いといえる(京都府教育委員会 1969、本書付編)。

昭和 45 (1970)・46 (1971) 年には、緑喜・相楽両郡の悉皆的な踏査が行われ、遺跡保護範囲の拡充がはかられた(京都府教育委員会 1970・1971)。翌年には、これらの成果を踏まえて府内で最初の遺跡地図が発行された(京都府教育委員会 1972)。なお、この際、大住車塚古墳の測量調査が行われ、墳丘長 66 m の前方後方墳であること、周溝が明瞭に残っていることが明らかとなった。この成果を受け、大住車塚古墳は昭和 49 (1974) 年に国史跡に指定されている。

これまで、工事中に発見された遺跡の緊急調査が中心であったのに対し、分布調査によって事前に埋蔵文化財包蔵地の範囲を把握し、埋蔵文化財の保護措置が図られることになった。これ以降は、古

墳を含めて自治体による調査が中心をなしていくこととなる。

④ 八幡市・京田辺市（旧・田辺町）による調査

以下では、当地域における古墳の調査を、それぞれの古墳毎に整理する。

石不動古墳では、昭和 56（1981）年に電波反射板建設工事に伴う試掘確認調査が八幡市教育委員会によって実施され、後円部南側裾が検出され、円筒埴輪片数十点が出土した。

八幡西車塚古墳では、平成 6（1994）年に個人住宅建設に伴う調査（第 1～3 次）、平成 28（2016）年に八角堂修理に伴う調査が実施された（第 5 次）。また、八幡西車塚古墳は女郎花遺跡の範囲内に位置しており、近辺では女郎花遺跡として発掘調査が実施されているもの（女郎花遺跡第 9 次、13 次、19 次調査）がある。また、令和 3（2021）年には前方部の範囲確認を目的とした第 6 次調査を実施した。このうち、八幡西車塚古墳第 3 次調査では葺石を、第 5 次調査では後円部より粘土梆が検出されている。

大芝古墳は古い段階に墳丘が削平され、存在が知られていなかったが、平成 5（1993）年の試掘調査で新たにみつかり、翌年の発掘調査では周溝と埴輪列が検出され、中期後葉の埴輪、土師器、須恵器が出土した。美濃山王塚古墳では平成 17（2005）年から平成 20（2008）年にかけて発掘調査が実施され、墳丘の形状が墳丘長 76 m の帆立貝形墳であることが判明し、外表施設が検出された。

ヒル塚古墳では平成元（1989）年に発掘調査が実施され、墳丘の形態や埋葬施設などの詳細が明らかとなった。その後、平成 15（2003）年に墳形や周溝の詳細をより明確にするための範囲確認調査が行われ、埴輪列などの外表施設が検出されている。

大住南塚古墳では、昭和 61・62（1986・1987）年に田辺町教育委員会が範囲確認調査を実施し、前方後方墳であることが判明した。

天理山古墳群では、令和 3（2021）年に宅地造成の事前の試掘調査が実施され、前期中葉から前期後葉後半の前方後円墳 2 基と前方後方墳 1 基が検出された。

興戸 1 号墳では昭和 56（1981）年に田辺町教育委員会による測量調査が行われ、平成 6（1994）年には後円部に接する鉄塔建設工事に伴う発掘調査が実施され、粘土梆の一部が確認された。

興戸塚ノ本古墳は地中に埋没し古墳として知られていなかったが、平成 26（2014）年の試掘調査と平成 27（2015）年の発掘調査で、中期後葉の一辺 31 m の方墳であることが判明した。

飯岡車塚古墳では、昭和 51（1976）年に後円部東裾部の発掘調査が行われた。墳丘東側の農道拡幅に伴う小規模な調査ではあったが、墳丘裾で梢円筒埴輪が原位置を保ったまま出土するなどの成果があった。

⑤ 京都府埋蔵文化財調査研究センターによる調査

上記のほか、大規模公共事業に伴う発掘調査が京都府埋蔵文化財調査研究センターによって実施され、平成 4（1992）年に御毛通 1 号墳、平成 24・25・30（2012・2013・2018）年に御毛通 2 号墳の発掘調査が行われた。また、八幡市女谷・荒坂横穴群、京田辺市松井横穴群で実施された発掘調査は、綾喜古墳群の造営終了後に近畿地方でも有数の規模の横穴群が造営されたことを明らかにした。

（2）古墳時代研究中の綴喜古墳群

古墳時代研究における綴喜古墳群の研究は、奈良盆地及び河内平野に隣接する重要な地域である南山城地域の古墳研究と切り離せない関係にあり、この観点から重要な研究が蓄積されてきた。また、北山城の乙訓古墳群と並んで古くから古墳編年の指標ともされてきた古墳が点在する。こうした条件下で、綴喜古墳群そのものを対象とはせずとも、言及する研究が散見される。

①地域研究

綴喜古墳群を含む、南山城地域の首長墓の消長とその歴史的背景については、和田晴吾の研究がこれまで知られてきた（和田 1988・1994a）。和田は南山城地域の前期から後期の古墳の消長を分析し、綴喜古墳群は、埋葬施設に堅穴式石槨が採用され副葬品も豊富であることから、古墳時代前期後葉に優位に立つ勢力の墓域と位置づける。そして全国的に前方後円（方）墳が急増する画期に該当し、この画期と同時に、大王墳は奈良盆地南東部から北部へと墓域を移すことを明らかにした。和田の研究は第7章で改めて紹介する。

ところで、南山城地域全体の古墳を主眼にすえた研究書が本書刊行の前年に刊行されている（広瀬・梅本 2021）。同書では下垣仁志が綴喜古墳群のうち、八幡市域に営まれた八幡東車塚、八幡西車塚、石不動古墳等を「男山古墳群」として紹介している（下垣 2021）。下垣はこれらの古墳に副葬される銅鏡を地元の集団が入手後に伝世したものと解釈し、古墳出現前後から畿内中枢勢力と関係を結んでいた諸集団が前期後葉から有力墳を築きはじめ、交通面での利点を追い風に古市古墳群の造営勢力と深い関係を持ちつつ、前期末には京都盆地で最有力化するが、久津川古墳群の擡頭のもとで急速に凋落した古墳と位置づけた。そして、前期末葉前後の社会変動を鋭敏に反映した古墳として、意義付けている。また、同書では広瀬和雄も南山城地域の総論の中で綴喜古墳群について触れているが、有力墳が築かれ豊富な副葬品があるにも関わらず、1～2代しか続かず数代に及ぶ安定した首長墓系譜が存在しない古墳群と位置づける。そして、奈良盆地の大和・柳本古墳群のような凝集性、巨大性、階層性を備えた古墳群はないので、首長層の結束度や首長同士の較差もさほど強くはない、とする（広瀬 2021）。

②銅鏡研究

綴喜古墳群を形成する首長墓では、八幡市域の八幡西車塚古墳、八幡東車塚古墳、石不動古墳、美濃山王塚古墳でまとまって銅鏡が出土している。銅鏡が豊富であるにも関わらず三角縁神獣鏡が少ないのが特徴的で、出土数の多い鏡式は漢鏡7期の画文帶神獸鏡である。一方、三角縁神獸鏡は八幡東車塚古墳の前方部埋葬施設から1枚出土しただけである。こうした銅鏡の組成は特徴的で、当地域の首長層と「畿内」中枢との関係を検討する上で示唆的である。また、中・大型鏡が集中することから、この時期の山城地域および淀川流域のなかで、八幡市域の首長墓が主要な位置を占めていたことが推測される。

古墳時代前期の銅鏡研究では、漢鏡7期の銅鏡が、製作時期よりも大きく降る時期に築造された古墳に副葬される点が注目されてきた。この事象について、漢鏡7期以降に登場する三角縁神獸鏡が分配される以前に、倭王權による分配がなされたことを想定する研究がある。福永伸哉（福永 2001・

2005)は、徳島県萩原1号墓や奈良県ホケノ山古墳、兵庫県綾部山38号墓といった庄内式期の出土例から、画文帶神獸鏡は基本的には三角縁神獸鏡の流入が始まる240年以前に列島にもたらされた中國鏡と位置づけた。そして、こうした視点から画文帶神獸鏡が集中し、三角縁神獸鏡と同数が出土するという高い比率を示す綾喜古墳群北部の八幡丘陵の古墳について、画文帶神獸鏡の入手以降、銅鏡入手が低調化する「停滞型」の地域と位置づけた。福永は画文帶神獸鏡の分布状況を分析し、同様の特徴を持つのが瀬戸内南岸の讃岐地域で、三角縁神獸鏡の総数よりも画文帶神獸鏡の方が多い例外的な地域として注目している。対岸の瀬戸内北部、さらに綾喜古墳群の北に位置する乙訓古墳群では逆に三角縁神獸鏡が多いことから、三角縁神獸鏡の配布段階に発展した「発展型」とした。福永の視点のもう一つの特徴は、流入ルートと副葬古墳との関係をみたことで、瀬戸内南岸ルートをとおってもたらされたのが画文帶神獸鏡、瀬戸内北岸ルートを通ってもたらされたのが三角縁神獸鏡と位置づけたことである。この視点は綾喜古墳群を考える上でも示唆的で、綾喜古墳群が画文帶神獸鏡の流入・配布ルートとの関係を持っていた可能性が想定できる。

主に倭鏡と中国鏡から当地域を分析した下垣仁志は、八幡市域の首長墓群を「男山古墳群」と呼称し、前期後葉の八幡茶臼山古墳を皮切りに、末葉頃には八幡東車塚、八幡西車塚、石不動古墳が短期間に造営され、大型・中型鏡の流入状況からも向日市域の首長墓と交代するかのように最有力地域となることを指摘した。また、八幡東車塚古墳の前方部埋葬施設に三角縁神獸鏡が副葬されることに注目する。こうした前方部への副葬は、環巨椋池及び「畿内」の他地域に類例が限定され、これらの事例となる古墳の墳丘規模も90～110mでまとまることから、上記地域の有力集団の間で副葬鏡の選択方式に共通性があったことを想定している。そして、「男山古墳群」には、漢鏡、後漢末期～魏晋代の各種銅鏡、「舶載」三角縁神獸鏡、翡翠製丁字頭勾玉、素環頭大刀など、古墳出現前期から古墳時代前半期の多様な器物が副葬されることから、古くから貴重品を入手した有力集団の墓域で、この集団が長期にわたって保有した器物が、前期後葉になって築造が可能となった前方後円墳に副葬されたものと評価した(下垣2013・2021)。

一方、三角縁神獸鏡を中心當地域を含む淀川左岸地域における銅鏡にアプローチした岩本崇(岩本2020)は、地域社会における「伝世・長期保有」に否定的な立場をとる。画文帶神獸鏡が副葬される古い時期の古墳が綾喜古墳群で確認されていないことを主な理由として、八幡西車塚古墳、八幡東車塚古墳、石不動古墳の築造順序が想定しうる点に着目し、鏡の入手はそれぞれの古墳の築造時期に近い段階でなされた可能性が高いと評価している。そして、銅鏡の一元的な流通システムは三角縁神獸鏡の授受に伴って発生したと説く。

上述のとおり、鏡の伝世の主体が「畿内」の政権なのか、あるいは地域勢力なのか、研究者によって評価が異なる。画文帶神獸鏡の出土例が奈良盆地から京都盆地、瀬戸内沿岸地域に多いことに鑑みると、いずれの立場を取るにせよ、綾喜古墳群は画文帶神獸鏡の移動経路上に目される木津川流域に位置することに注目しておきたい。綾喜古墳群の地域的特性を示す遺物の一つと評価できるだろう。

③埋葬施設

綾喜古墳群は非常に早い段階で埋葬施設の発掘調査が実施され、乱掘もなされた。したがって、現

在の研究水準からみると、埋葬施設の詳細な構造に関わる情報は不足している。しかし、埋葬施設に用いられる特徴的な石材や石棺については、研究対象として注目されてきた。

八幡茶臼山古墳の阿蘇溶結凝灰岩製舟形石棺は、抉抜式石棺では初期の事例であることから、石棺研究の対象として注目を集めてきた。

肥後の舟形石棺を検討した高木恭二は、本資料の石材と形状を分析し、突帯に施される矩形の穿孔から肥後南部の氷川下流域で製作されたものと捉えた（高木 1980・1987）。

古墳時代の石棺研究を体系的に進めた和田晴吾（和田 1994b）は、前期から中期の石棺の主体は組合式石棺であるとして展開過程を以下のように整理する。和田によると、前期中葉に少数の花崗岩製や香川県鷲ノ山石製の組合式石棺が出現し、中期になると、組合式の竜山石製長持形石棺が巨大前方後円墳を中心に用いられ発達するという。一方で、八幡茶臼山古墳の舟形石棺を含む前・中期の抉抜式石棺は、石材や製作技法から遠方から運ばれる製品と位置づけられ、そして、「畿内」やその周辺の少数の首長墳だけで点在的に採用されることから、主流である組合式石棺と比べるときわめて限られた特殊なものと評価した。そして、抉抜式石棺が近畿地方で出現する時期には、古墳の埋葬施設が多様化し、「畿内」やその周辺で、大王墳に匹敵する規模の前方後円墳が築かれることから、政権中枢が一時的に弱体化している可能性も指摘する。

近畿地方中央部の前期古墳の堅穴式石槨で使用される石材を検討した奈良拓弥（奈良 2010）は、該当地域の石材の大部分が、玄武岩、安山岩、石英斑岩、結晶片岩、チャート類のいずれかで、玄武岩と安山岩は奈良県二上山周辺、石英斑岩は大阪府と兵庫県の県境付近にあたる猪名川流域、結晶片岩は現在の徳島県にあたる東四国の阿波、チャート類は京都市南部から長岡京市にかけての丹波帯で採取されたものと位置づけた。そして各古墳での石材の分布状況を比較し、二上山火山岩は奈良盆地など「畿内」中枢部の古墳、石英斑岩は猪名川流域の古墳、というように地域ごとにまとまりがあることを明らかにした。奈良が検討したうち、綴喜古墳群の周辺をみると、京都市西京区から大山崎町にかけて展開する桂川右岸の乙訓古墳群ではチャートが優勢で、大阪府吹田市、茨木市、高槻市にかけて展開する淀川右岸地域では結晶片岩が主体を占める。綴喜古墳群の所在する南山城地域では、木津川右岸の椿井大塚山古墳では、二上山火山岩と河原石、平尾城山古墳では石英斑岩のみが用いられる。宇治市宇治一本松古墳では二上山火山岩の可能性が高い安山岩が用いられる。一方、木津川左岸の綴喜古墳群に属する八幡西車塚古墳と大住南塚古墳では石英斑岩が用いられる。綴喜古墳群の埋葬施設で用いられた石材が瀬戸内沿岸の猪名川流域に限定され、政権中枢部に近い二上山火山岩でなかったことは、地域間関係を検討する上で注目される事象である。

④ 武具

鉄製甲冑の研究史上、美濃山王塚古墳出土品は初期段階の資料として重要視されてきた。同古墳埋葬施設からは、2セッタ分の武具が出土している。出土状況が不明であることは惜しまれるが、三角板革縫合角付冑、堅矧板革縫冑、三角板革縫短甲、長方板革縫短甲、鉄草摺、脛当、頭甲、肩甲が含まれる充実したセットである。このうち堅矧板革縫冑は、同型式の最初期の出土事例である。同時期の日本列島では類例が存在せず孤立した資料で、この型式が安定して出土するようになるのは中期前

葉以降であることから、朝鮮半島からの舶載品と位置づけられている（山中ほか 1997・阪口 2019）。

⑤ 武器

鈴木一有は、ヒル塚古墳出土渦巻飾付鉄剣をはじめ、日本で出土する渦文を施す鉄器について、類例が朝鮮半島東南部では幣をはじめ、鉢や板甲、有棘利器など、同様に渦文を施す鉄器が数多く出土することから、朝鮮半島系の遺物と評価した。さらに、同様に朝鮮半島との関係が指摘できる振じりを施す鉄製品が日本出土鉄製品でも多くみられるのに対して、渦巻飾が日本ではほとんど出土しないことから、朝鮮半島とのより直接的な関係を示す遺物と評価している（鈴木 2005）。

一方、日本列島製とみる立場もある。池淵俊一は、当資料について、柄頭の形状が弥生時代の銅劍系装具を踏襲するものとみなし、渦巻飾については鹿角装具の変異形と評価した（池淵 2002）。また豊島直博は、元来、弥生時代の東日本に存在した把縁の片側に突起を有する鉄剣が古墳時代前期後葉にあらたに創出され、その事例の一つが当資料であると評価した（豊島 2008）。

なお、ライアンジョセフは舶載か国産か詳述は避けているものの、朝鮮半島の工人との強い技術的関わりのもとで製作されたものと評価している（ライアン 2018）。

⑥ 墳輪

埴輪と副葬品の相互検討から古墳の年代を検討した川西宏幸は、山城地域における円筒埴輪の編年を構築するにあたって、5期区分のうち八幡茶臼山古墳と飯岡車塚古墳の埴輪を第2期の標識資料に位置づけた（川西 1978）。また、廣瀬覚（廣瀬 2015）は、男山丘陵の古墳について継続的に「王権中枢」と同様の埴輪を受容していたことを明らかにした。

個別資料では、八幡茶臼山古墳出土埴輪については宇野隆志が資料紹介をしている（宇野 2019）。ヒル塚古墳の埴輪を検討した北山大熙は、円筒棺の初源期であるヒル塚古墳出土円筒棺について触れ、円筒棺と埴輪に樹立する円筒埴輪の技法が同一であることから、同一集団が製作していると推定している（北山 2017）。このほかの重要古墳の未報告資料、再報告については本書付録を参照いただきたい。

（3）小結

綏喜古墳群の調査は戦前に多く実施され、また、調査箇所は埋葬施設に比重が置かれた。そのため、近年の古墳研究で大きな比重を占める埴輪の研究は未だ低調である。今後の取り組みが期待される。

一方、南山城地域という地形的に完結した地域のなかで、多くの首長墓が造営され古くからの調査の蓄積によって各古墳の内容が判明している綏喜古墳群は、地域における首長墓群の消長とその意義を検討する上で重要な役割を果たしてきた。また、奈良盆地、大阪平野に分布する巨大古墳群の造営地と近い綏喜古墳群は、政権と地域勢力の関係を読み解く上でのケーススタディーとしても学史的な意義を有する。

（桐井・古川）

【参考文献】

池淵俊一 2002 「刀剣・矛・戈・ヤリ・素環頭刀」『考古資料大観』7 弥生・古墳時代 鉄・金属製品、小学館

- 諫早直人・馬渕一輝 2021「京田辺市トヅカ古墳出土遺物の再検討」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』7、京都府立大学文学部歴史学科岩井武俊 1905「山城国相楽緑喜両郡の古墳」『考古界』第5篇1号、考古学会
- 岩戸晶子・中川あやはか編 2018「北和城南古墳出土品調査報告書」奈良国立博物館
- 岩本 崇 2020「三角縁神獸鏡と淀川左岸地域における首長墓の展開」「三角縁神獸鏡と古墳時代の社会」六一書房
- 宇野隆志 2017「京都盆地における古墳と集落の動態」「木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究」同志社大学歴史資料館調査研究報告第14集、同志社大学歴史資料館
- 宇野隆志 2019「八幡茶臼山古墳出土の埴輪について」「山城郷土資料館報」第26号、山城郷土資料館
- 梅原来治 1916「山城緑喜郡茶臼山古墳と其発見遺物」『考古学雑誌』第6卷第6号、日本考古学会
- 梅原来治 1919「八幡町西車塚」「京都府史跡勝地調査會報告」第一冊、京都府
- 梅原来治 1920 a「美濃山ノ古墳」「京都府史跡勝地調査會報告」第二冊、京都府
- 梅原来治 1920 b「飯ノ岡ノ古墳」「京都府史跡勝地調査會報告」第二冊、京都府
- 梅原来治 1920 c「山城国八幡町の東車塚古墳」「久津川古墳研究」、名著出版
- 梅原来治 1921「大住村車塚古墳」「京都府史跡勝地調査會報告」第三冊、京都府
- 梅原来治 1923「八幡町茶臼山古墳」「京都府史跡勝地調査會報告」第四冊、京都府
- 梅原来治 1925「桃陰蘆と漢古鐵圖錄」
- 梅原来治 1938 a「山城飯岡トヅカ古墳」「日本古文化研究所報告」九、日本古文化研究所
- 梅原来治 1938 b「山城飯岡車塚古墳」「日本古文化研究所報告」九、日本古文化研究所
- 梅原来治 1938 c「山城飯岡車塚古墳出土品」「奈良帝室博物館歴史図録」5、奈良帝室博物館
- 梅原来治 1955「山城における古式古墳の調査」「京都府文化財調査報告」第廿一冊、京都府教育委員会
- 梅本康広 2003「山城の円筒埴輪編年概観」「埴輪論叢」第5号、埴輪検討会
- 梅本康広 2012「摂津・山城」「古墳時代の考古学」2古墳出現と展開の地域相、同成社
- 梅本康広 2021「南山城の古墳時代研究の最新動向と課題」「椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代」とヤマト王権—季刊考古学、別冊34、雄山閣
- 江谷 寛はか 1986「八幡市誌」第1巻、八幡市
- 男山中学校 1951「男山考古録」壱
- 小野山節編 1968「京都大学文学部考古学資料目録」第2部日本歴史時代、京都大学文学部
- 柏田有香・古川 匠・浅井猛宏 2016「山城地域」「集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化」古代学研究会編、六一書房
- 片岡 雄 1991「京都府田辺町十塚古墳の発見と保存の経緯について」「朱雀」京都文化博物館調査研究紀要第4集、京都文化博物館
- 川西安幸 1978「円筒埴輪論」「考古学雑誌」第64卷第2号、日本考古学会
- 北山大熙 2017「埴輪からみた八幡市ヒル塚古墳」「畿内の首長墳」立命館大学文学部考古学文化遺産専攻
- 北山峰生 2011「古墳時代前期における石棺の移動」「石材の移動とその背景 弥生～古墳時代を中心に」第60回埋蔵文化財研究集会発表要旨集、埋蔵文化財研究会
- 京都国立博物館 1953「山城考古展目録」
- 京都国立博物館 1966「京都国立博物館藏品目録」京都国立博物館（トヅカ・西車塚）
- 京都大学考古学研究会 1964「八幡町西車塚古墳の実測」「第11とれんち」

- 京都府 1881『山城国綴喜郡村誌』
- 京都府教育委員会 1961『京都府遺跡目録』
- 京都府教育委員会 1969『八幡丘陵』『埋蔵文化財発掘調査概報（1969）』
- 京都府教育委員会 1970『相楽・綴喜両郡内遺跡分布調査概要』『埋蔵文化財発掘調査概報（1970）』
- 京都府教育委員会 1971『相楽・綴喜両郡内第二次遺跡分布調査概要』『埋蔵文化財発掘調査概報（1971）』
- 京都府教育委員会 1972『京都府遺跡地図』
- 桐井理揮・北山大熙・菊池望・操納民之 2020「西山1・2号墳出土遺物の再検討」『同志社大学歴史資料館報』第 23 号 同志社大学歴史資料館
- 後藤守一 1927『漢式鏡』『日本考古学体系』第 1 卷、雄山閣
- 後藤守一 1935『古鏡聚英』大塚工藝社
- 阪口英毅 2019『古墳時代甲冑の技術と生産』同成社
- 佐藤虎雄 1932『東車塚庭園』『京都府史跡勝地調査會報告』第十三冊、京都府
- 島田貞彦 1919『山城綴喜郡二子塚古墳』『考古学雑誌』第九卷第五號、日本考古学会
- 下垣仁志 1996『本船所藏の八幡東車塚古墳出土鏡』『泉屋博古館紀要』第 21 号、泉屋博古館
- 下垣仁志 2013『鏡の保有と「首長墓系譜」』『立命館大学考古学論集』VI、立命館大学考古学研究室
- 下垣仁志 2021『男山古墳群の動向』『椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト王権—』季刊考古学・別冊 34、雄山閣
- 末永雅雄 1944『日本上代の甲冑』創元社
- 杉本 宏 1991『宇治二子山古墳とその周辺』『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告書第 2 冊
- 鈴木一有 2005『蕨手刀子の盛衰』『侍兼山考古学論集—都出比呂志先生退官記念—』大阪大学大学院文学研究科
- 鈴木重治 1994a『飯岡トヅカ古墳出土神人車馬画像鏡抄考』『田辺文化』創刊号、田辺の文化財を学ぶ会
- 鈴木重治 1994b『飯岡遺跡群の発掘調査などのあゆみ』『田辺文化』創刊号、田辺の文化財を学ぶ会
- 閔祖衡 1734『山城志』
- 高木恭二 1980『環状縄掛突起を有する石棺について』『熊本史学』第 53・54 号、熊本史学会
- 高木恭二 1987『九州の舟形石棺』『東アジアの考古と歴史：岡崎敬先生退官記念論集』下巻、岡崎敬先生退官記念事業会
- 田中勝弘 1968『京都府綴喜郡八幡町茶臼山古墳の主体部構造について』『史想』第 14 号、京都教育大学考古学研究会
- 田中勝弘 1970『古墳時代前期における山城盆地』『史想』第 15 号、京都教育大学考古学研究会西田直二郎 1951『洛南大住村史』
- 田辺郷土史会編 1959『田辺郷土史』古代篇
- 田辺郷土史会編 1969『飯岡古代風土の丘』田辺郷土史叢書 1
- 田辺町 1968『京都府田辺町史』
- 田辺町教育委員会 1995『興戸遺跡第 12 次・興戸古墳群発掘調査概報—関西電力高島線鉄塔建替地の調査—』田辺町埋蔵文化財調査報告書第 19 集
- 田辺町教育委員会 1986『大住南塚古墳発掘調査概報』田辺町埋蔵文化財調査報告書第 6 集
- 田辺町教育委員会 1987『大住南塚古墳発掘調査概報』Ⅱ、田辺町埋蔵文化財調査報告書第 7 集
- 東京国立博物館 1988a『綴喜郡田辺町大字草内小字飯岡出土品』『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（近畿 1）、

東京国立博物館

東京国立博物館 1988b 「八幡市大字八幡字大芝出土品」『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（近畿Ⅰ）、東京国立博物館、（西車塚）

東京国立博物館 1988c 「八幡市美濃山西ノ口出土品」『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（近畿Ⅰ）、東京国立博物館

同志社大学考古学研究会 1962 「山城久津川古墳群の研究」『同志社考古』第2号、同志社大学考古学研究室

富岡謙蔵 1916 「日本出土の支那古鏡」『史林』1-4、史学研究会

豊島直博 2008 「古墳時代前期の劍装具」『王権と武器と信仰』同成社

中原光義 1901 「古銅鏡圖考」『考古界』第1篇5号、考古学会

中村直勝 かかみ 1936 「八幡史蹟」京滋探遊会

奈良拓弥 2010 「堅穴式石槨の構造と使用石材からみた地域間関係」『日本考古学』第29号 日本考古学協会

西田直二郎 1951 「洛南大住村史」天平時代の戸籍の遺る村の歴史、田辺町役場大住出張所

肥後弘幸 2021 「弥生墳墓と初期前方後円墳」「椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト王権—」季刊考古学・別冊34、雄山閣

広瀬和雄 2021 「南山城の古墳と王権—木津川流域の前方後円墳をめぐって—」「椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト王権—」季刊考古学・別冊34、雄山閣

広瀬和雄・梅本康広編 2021 「椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト王権—」季刊考古学・別冊34、雄山閣

廣瀬　覚・若杉智宏 2005 「將軍山古墳群Ⅰ－考古学資料調査報告集1－」新修茨木市史史料集8

廣瀬　覚 2015 「王権周縁部における埴輪の受容と展開」「古代王権の形成と埴輪生産」同成社

福永伸哉 2001 「画文帶神獸鏡と邪馬台国政權」「東アジアの古代文化」108 古代学研究所

福永伸哉 2005 「三角綠神獸鏡と画文帶神獸鏡のはざまで」「待兼山考古学論集—都出比呂志先生退官記念—」大阪大学大学院文学研究科

福永伸哉 2008 「古墳出現期の大和川と淀川」—古市古墳群成立前史をめぐって—「近畿地方における大型古墳群の基礎的研究」平成17~19年度科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、奈良大学文学部文化財学科

古川　匠 2017 「山城地域の古墳時代集落の動態」「木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究」同志社大学歴史資料館調査研究報告第14集、同志社大学歴史資料館

松村洋介 1954 「八幡東車塚古墳出土三角綠畫竜鏡」『國學院大學考古學資料館紀要』第19輯、國學院大學考古學資料館

村田太平 1955 「郷土田辺の歴史と傳説」私家版

森　浩一 1975 「近畿地方の隼人—とくに考古学の視点から—」「日本古代文化の探求」隼人、社会思想社（美濃山王塚）

森本米一 1954 「総合古墳群調査報告書」私家版

森本六爾 1925 「二・三の埴輪と古墳に関する新資料に就て」『考古学雑誌』第15卷2號、考古学会（東車塚）

桃山中学校地歴教室編 1936 「山城皇陵巡拝枝折」私家版

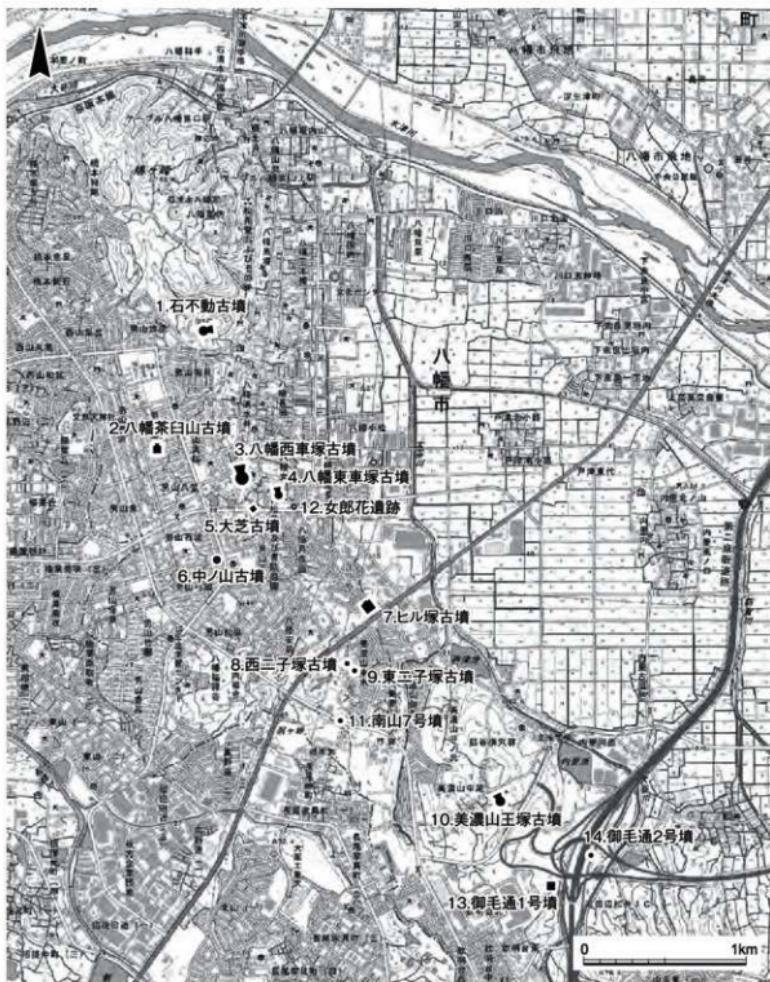
山中一郎・上原真人・村上　隆・塙本敏夫・高橋克壽・森下章司 1997 「八幡大塚古墳」「王者の武装—5世紀の金工技術—」京都大学総合博物館

- 山本一亮 2021 「山城地域からみた前期前方後方墳の性格」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト王権—』季刊考古学・別冊 34、雄山閣
- 八幡市教育委員会 1990 「ヒル坂古墳発掘調査概報」
- 八幡市教育委員会 1991 「石不動古墳発掘調査概報」『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第 9 集
- 八幡市教育委員会 1995 「西車塚古墳」『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第 18 集
- 八幡市教育委員会 2004 「ヒル坂古墳範囲確認調査（第 3 次）」『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第 37 集
- 八幡市教育委員会 2006 「美濃山王塚古墳丘測量調査概要報告」『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第 40 集
- 八幡市教育委員会 2007 「美濃山王塚古墳発掘調査報告」『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第 46 集
- 八幡市教育委員会 2009 「平成 20 年度国庫補助事業発掘調査概要報告」『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第 52 集
- 八幡市教育委員会 2010 「王塚古墳範囲確認発掘調査（第 1 ~ 3 次）報告書」『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 54 集』
- 八幡町役場 1938 「八幡町誌」八幡町
- 吉村正親 1994 「飯岡古墳群ノート」「田辺文化」創刊号、田辺の文化財を学ぶ会
- 吉村正親編 1976 「飯岡車塚古墳発掘調査報告（周溝部調査）」極喜古文化研究会
- ライアンジョセフ 2018 「麻手状装飾付鉄劍の広域分布とその意義」『待兼山考古学論集Ⅲ－大阪大学考古学研究室 30 周年論集－』大阪大学考古学研究室
- 龍谷大学文学部考古学資料室 1972 「南山城の前方後円墳」
- 和田晴吾 1987 「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第 34 卷第 2 号、考古学研究会
- 和田晴吾 1988 「南山城の古墳—その概要と現状—」『京都地域史研究』4、立命館大学人文科学研究所
- 和田晴吾 1992 「山城」「前方後円墳集成」近畿篇、山川出版社
- 和田晴吾 1994a 「近畿の抉抜式石棺—4・5 世紀における首長連合体制と石棺—」『古代文化』第 46 卷第 6 号、財團法人古代学協会
- 和田晴吾 1994b 「古墳築造の諸段階と政治的階層構成—5 世紀代の首長制的体制に触れつつ—」『古代王権と交流』

5 大和王権と交流の諸相、名著出版

5 緑喜古墳群を形成する古墳（八幡市域）

本章では、八幡市域に所在する首長墓の概要を個票形式で報告する。個票作成は八幡市教育委員会文化財保護課が主に担当し、今回の調査事業で判明した情報については、適宜事務局が補足した。



第12図 緑喜古墳群（八幡市域・地理院地図 S=1/30,000）

1. 石不動古墳 八幡市八幡石不動

立地 丘陵上 標高 約 90 m 現況 半壊（前方部のみ残存）

墳形 前方後円墳 周溝 なし 後円部段築 不明 前方部段築 不明

墳長 約 88 m 後円部径 60 m 後円部高 8.0 m 前方部幅 35 m 前方部高 5.0 m

外表施設 莢石（想定）埴輪列（想定）

埋葬施設 後円部：北埋葬施設・粘土櫛 南埋葬施設・粘土櫛

主な副葬品 北埋葬施設：銅鏡、玉類、石製腕飾類、短甲、鉄刀、鐵劍、鐵鎌、

南埋葬施設：銅鏡、石劍、玉類、短甲、短刀、劍、農工具類

概要 八幡市八幡石不動に所在する。男山丘陵頂部の標高 90 m に位置する石不動古墳は、南西南約 700 m のところに茶臼山古墳、北方に石清水八幡宮がある眺望のよい位置を占める。東西方向に主軸を向けた前方後円墳である。盜掘時に鏡 1 枚、勾玉 2 個、管玉および小玉数十個が出土した記録が残されており、鏡は奈良国立博物館所蔵の画文帶環状乳神獸鏡と考えられている。

現在は、後円部に男山無線中継所が建設されているため、後円部の形状は完全に失われている。

調査経過 昭和 18（1943）年に偶然遺物が発見された際に、調査が行われた。調査の結果、墳丘長約 88 m、後円部径 60 m の主軸を東西にもつ前方後円墳であることが判明した。また、その際に斜面に拳大の礫が散見されることや、円筒埴輪片の遺存状況から、葺石や埴輪列などの外表施設があったことが想定される。その後、昭和 56（1981）年に電波反射板建設に伴う試掘確認調査が八幡市教育委員会により実施され、後円部南側裾で円筒埴輪片数十点が出土している。

墳丘の形態・外表施設 墳丘長約 88 m、後円部径 60 m、後円部高 8.0 m、前方部幅 35 m、前方部高 5.0 m の規模の前方後円墳である。前方部および後円部の段築は不明である。

外表施設は、葺石と埴輪列である。埴輪列は、元位置をとどめた状態で検出はされていないが、多数の円筒埴輪片が調査で出土していることから、その存在が想定されるものである。また、葺石は拳大の礫が散見されるとの報告がされており、埴輪列同様その存在が想定できる。

埋葬施設 後円部で東西を主軸にする粘土櫛が南北に並列して検出されているが、いずれも上部が大きく削平されている。北埋葬施設は長さ 7.5 m、幅約 0.66 m、深さ約 0.3 m の粘土櫛であった。また、南埋葬施設は、長さ約 7.0 m、幅 0.48 m の規模の粘土櫛で、深さは北埋葬施設よりも浅いものとなっている。

副葬品 北埋葬施設から、鏡 1 面（画文帶環状乳神獸鏡）の出土が伝えられているほか、碧玉管玉 1 点、ガラス小玉 81 点が出土している。武器類は、刀 5～6 点、劍 1 点、鐵鎌 30 点以上が出土している。このほかには、刀子 10 数本、斧 4 点といった農工具類が出土した。南埋葬施設からは、鏡 1 面（画文帶同向式神獸鏡）が出土した。石製品は、石劍 3 点、碧玉管玉 40 点、滑石素玉 29 点が出土している。武器は劍 1 点、武具は短甲 1 点が出土した。農工具類は、鍬先 1 点、刀子 19 点以上が出土している。

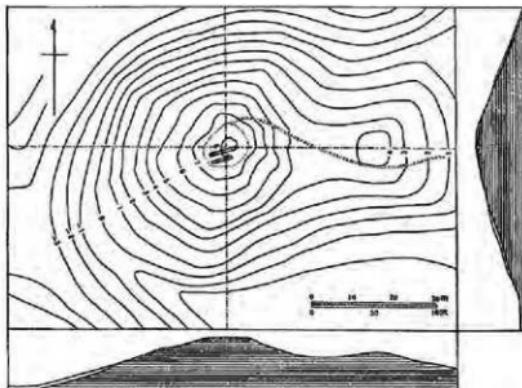
歴史的価値 詳細な調査を経る前に削平を受けてしまったため、外表施設など詳細が不明な点がある。しかし、墳丘の形態や規模、長大な埋葬施設を有することや豊富な副葬品をもつことから、古墳時代

前期における地域の支配体制を検討するうえで貴重な資料である。

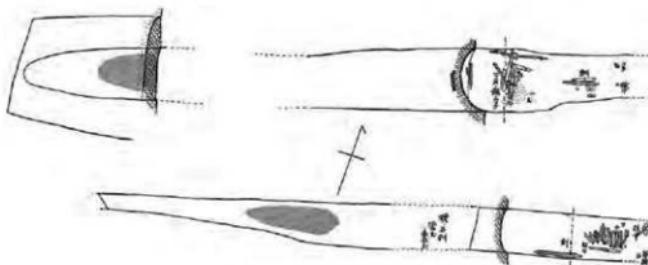
（吉田）

【参考文献】

- 梅原末治 1955 「八幡石不動古墳」『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会
江谷寛 1991 「石不動古墳発掘調査概報」『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第9集 八幡市教育委員会
京都大学文学部 1968 『京都大学文学部考古学資料目録 第2部 日本歴史時代』
京都府埋蔵文化財研究会 2000 「石不動古墳」「京都の首長墳」
京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都府立山城郷土資料館 1987 「鏡と古墳－景初四年鏡と芝ヶ原古墳－」
車崎正彦編 2002 「考古資料大観 弥生、古墳時代 鏡」第5巻 小学館
下垣仁志 2021 「男山古墳群の動向」『季刊考古学・別冊34 椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代
とヤマト王権－』 雄山閣
龍谷大学文学部考古学資料室 1972 「石不動古墳」「南山城の前方後円墳」

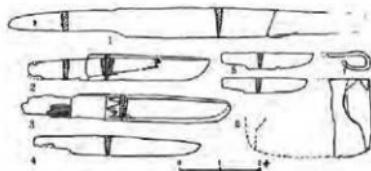


第13図 墳丘測量図（梅原 1955）



第14図 北・南埋葬施設実測図（S=1/150）（梅原 1955）

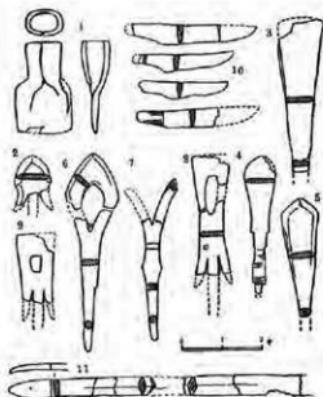
5 繼喜古墳群を形成する古墳（八幡市域）



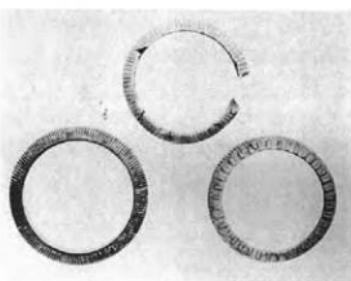
第15図 南埋葬施設出土鉄製品実測図 (S=1/4)
(梅原 1955)



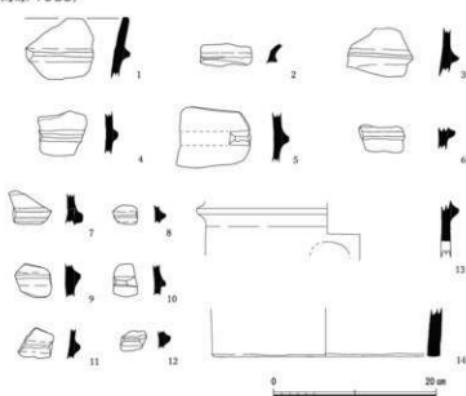
第17図 石不動古墳出土鏡 (車崎 2002)



第16図 北埋葬施設出土鉄製品実測図 (S=1/4)
(梅原 1955)



第18図 石不動古墳出土石鉈 (梅原 1955)



第19図 墓輪実測図 (S=1/6) (本書付編)

2. 八幡茶臼山古墳 八幡市男山笹谷

立地 丘陵頂 標高 89 m 現況 消滅

墳形 前方後方墳

墳長 50 m 後方部辺約 33 m 後方部高 5 m 前方部幅 10 m 前方部高 3 m

外表施設 舟石（前方部前面）埴輪列

埋葬施設 堅穴式石槨（舟形石棺）

主な副葬品 石鏡、鉄鏡、刀身

概要 八幡市男山笹谷に所在した。男山丘陵の標高約 89 m 地点に築かれた八幡茶臼山古墳は、墳丘長 50 m、後方部一辺 33 m の規模をもつ前方後方墳である。大正 4 年に行われた聞き取り調査の時点で、後方部に位置する埋葬施設はすでに盗掘をうけており、石室内からは僅かな石製品、鉄製品が認められる程度である。

現在は、男山団地の造成のため、完全に消滅しており、現地には墳丘などの痕跡を残さない。

調査経過 大正 4（1915）年に梅原末治氏による報告では、直径 18 m 以上、高さ 4.5 m の円墳とされており、埴輪等の外表施設や主体部、出土遺物について報告がされている。その後、昭和 43（1968）年に京都府教育委員会によっておこなわれた調査では、主体部の精査とともに墳丘の調査もおこなわれた結果、当初は円墳と考えられていた八幡茶臼山古墳が、墳丘長約 50 m、後方部一辺約 33 m の前方後方墳であることが判明した。

墳丘の形態・外表施設 墳丘長約 50 m、後方部一辺約 33 m、後方部高 5 m、前方部幅 10 m、前方部高 3 m の規模の前方後方墳である。

外表施設は、舟石と埴輪列である。舟石は、後方部斜面では検出されていないが、前方部前面にあたる部分で径 10 ~ 30 cm の河原石・割石が確認されており、墳丘の一部では舟石が施されていた可能性がある。埴輪列は、後方部墳頂で円筒埴輪列が方形にめぐっていたことが確認されており、中に形象埴輪も用いられていたようである。

埋葬施設 後方部に堅穴式石槨が一基確認されている。施設内は水成岩の板石を小口積みにし、蓋石には 4 枚の凝灰岩が用いられる。規模は、内法の長さ 4.3 m、高さ 1.2 m、幅 1.45 ~ 1.95 m を測る。棺は身・蓋共に凝灰岩をくりぬいて造られた舟形石棺であり、身の周囲には突帯がとりつく。石棺の規模は身長約 3.0 m、高さ約 1.0 m、幅 0.7 ~ 1.0 m、蓋長 3.1 m、高さ約 0.9 m、幅 0.7 ~ 1.0 m を測る。石材には阿蘇熔結凝灰岩が使用されている。

副葬品等 大正 4（1915）年の調査が行われた時点ですでに盗掘を受けており、副葬品のほとんどが失われたものと考えられる。出土品は碧玉製石鏡が 4 点、鉄刀 2 点、鉄鏡数点が認められる。また、盗掘のため、いずれも元位置を留めないものと考えられる。

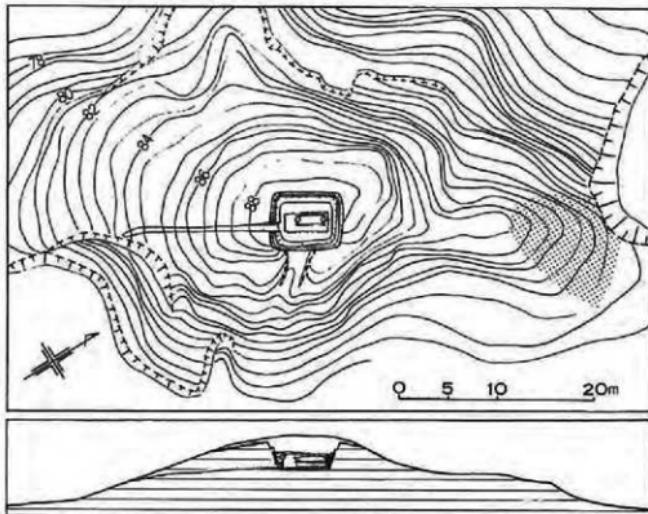
歴史的価値 八幡茶臼山古墳は、最初の調査が行われる以前に盗掘されており副葬品の残存状況は良くないが、棺に阿蘇熔結凝灰岩を用いた舟形石棺を使用しており、当地域でも異彩を放つ。現在は、男山団地の開発に伴い既に消滅してしまっているが、当地域の支配体制を考えるうえで重要な資料で

あるといえる。

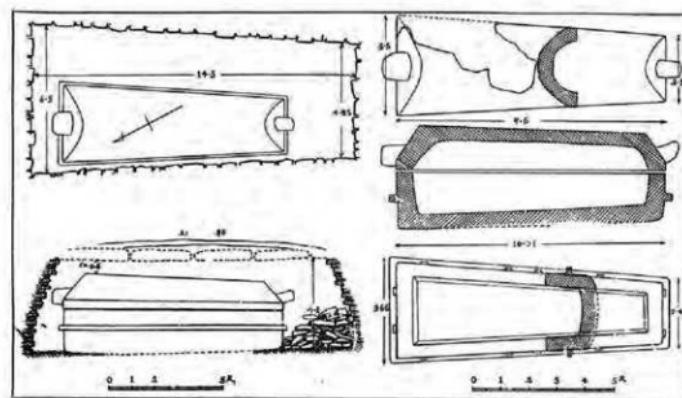
(吉田)

【参考文献】

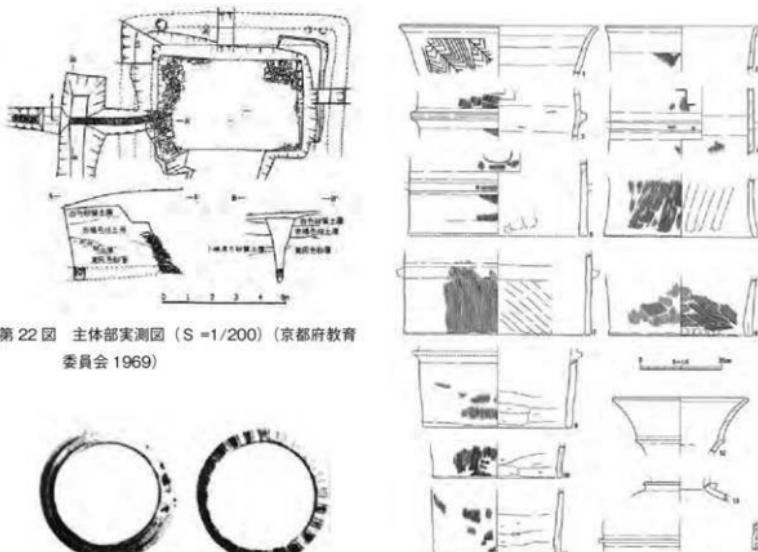
- 梅原末治 1916 「山城綿喜郡茶臼山古墳と其発掘物」『考古学雑誌』第6卷第9号 考古学会
 梅原末治 1923 「綿喜郡八幡町茶臼山古墳」『京都府史蹟勝跡調査会報告』第4冊
 京都府教育委員会 1969 「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報」
 京都大学文学部 1968 「京都大学文学部考古学資料目録 第2部 日本歴史時代」
 京都府埋蔵文化財研究会 2000 「茶臼山古墳」「京都の首長墳」
 下垣仁志 2021 「男山古墳群の動向」「季刊考古学・別冊34 椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代
 とヤマト王権－」 雄山閣
 宇野隆志 2019 「八幡茶臼山古墳出土の埴輪資料について」「山城郷土資料館報」第26号 山城郷土資料館
 龍谷大学文学部考古資料室 1972 「南山城の前方後円墳」
 和田晴吾 1988 「南山城の古墳－その概要と現状－」「京都地域研究」4 立命館大学人文科学研究所



第20図 墳丘実測図 ($S = 1/500$) (京都府教育委員会 1969)



第21図 埋葬施設実測図（梅原 1923）



第22図 主体部実測図（S=1/200）（京都府教育委員会 1969）



第23図 石鉈写真（京都府教育委員会 1969）

第24図 塗輪実測図（S=1/12）（宇野 2019）

3. 八幡西車塚古墳 八幡市八幡大芝

立地 丘陵端 標高 19 m 現況 完存

墳形 前方後円墳 周溝 有り（推定）段築 3段（推定）

墳長 約 120 m 後円部径 約 70 m 後円部高 約 8 m 前方部幅 約 60 m 前方部高 5 m

外表施設 莢石 墓輪列 埋葬施設 壓穴式石槨

主な副葬品 銅鏡、鍬形石、車輪石、石鉗、碧玉合子、勾玉、管玉、ガラス小玉、水晶丸玉、刀劍

概要 八幡市八幡大芝に所在する。八幡西車塚古墳は、八幡東車塚古墳とともに古くから知られている古墳である。本墳は、男山丘陵端部を切断するかたちで築かれた前方後円墳である。明治 35（1902）年に境内の土木工事を行った際、後円部に位置する埋葬施設が破壊されてしまったため、詳細は不明な点が多い。副葬品などの多くの出土品は、東京国立博物館が所蔵している。

明治 3（1870）年に、石清水八幡宮境内西部にあった八角堂が後円部墳頂部に移築され現在に至る。前方部は東側先端に鉄塔が建設され、それによって若干の損壊を受けている状態である。令和 3 年度に行なった第 6 次調査にて、前方部前面は大きく削平を受けていることが判明した。また、後円部規模に対して前方部長が短いことからも墳裾は削平を受けている可能性がある。

調査経過 大正 8（1919）年の梅原末治氏による報告が最初であり、墳丘の形態や外表施設の有無、埋葬施設について報告がされている。それ以降は、1960 年代に京都大学考古学研究会による測量調査が行われている。また、発掘調査については、平成 6（1994）年に個人住宅建築に伴う調査が 3 回（西車塚古墳第 1～3 次調査）、平成 28（2016）年に八角堂修理に伴う調査（西車塚古墳第 5 次調査）の計 5 回の調査が行われている。また、八幡西車塚古墳は女郎花遺跡の包蔵地内に位置しており、近辺では女郎花遺跡として発掘調査が実施されているもの（女郎花遺跡第 9 次、13 次、19 次調査）がある。八幡西車塚古墳第 3 次調査では葺石を、第 5 次調査では後円部より墓壙が検出されている。

墳丘の形態・外表施設 墳丘長約 120 m、後円部径約 70 m、後円部高約 8 m、前方部幅約 60 m、前方部高 5 m の規模をもつ前方後円墳である。墳丘周辺の微地形の様相から、盾形周濠の存在が想定される。

外表施設としては、葺石と埴輪列がある。葺石が斜面の隨所に散乱していることから、その存在が想定される。また、埴輪列については、後円部墳頂平坦面の北端で元位置を保った状態の円筒埴輪が 2 個体認められており、埴輪列が墳頂の端部をめぐっていたことが考えられる。

埋葬施設 後円部中央に壓穴式石槨が一基確認されている。明治 35（1902）年に境内の土木工事を行った際に偶然に石室を掘り当て、破壊されてしまったためその詳細は不明である。石室規模としては、長さ約 2.7 m、幅約 0.6 m、高さ約 0.9 m であったとされている。石材には扁平な水成岩を使用しており、板石を小口積みで積み上げていた。棺は木棺であったことが想定される。また、平成 28（2016）年に実施された八角堂の保存修理工事に伴う発掘調査では、墓壙と木棺の一部が検出された。

副葬品 出土品は鏡 5 面（三角縁唐草文帶二神二獸鏡、盤龍鏡、画文帶環状乳四神四獸鏡、仿製六獸形鏡、仿製變形方格四神鏡）、車輪石 10 点、石鉗 3 点、鍬形石 2 点、石製合子 1 点、碧玉及び紅瑪瑙

勾玉 11 点、管玉 120 点、ガラス小玉 71 点、水晶丸玉 1 点、刀残片 27 点である。

歴史的価値 八幡市域で最大規模を誇る前方後円墳である。八幡市域の中でも墳丘への損壊が比較的少なく、残存状況は良好な資料である。調査が少ないので、未だ詳細が明らかになっていないことが多いが、墳丘の規模や形態、埋葬施設からは豊かな副葬品の出土がみられることから地域における古墳時代前期の地域支配体制を考える上で貴重な資料である。

（吉田）

【参考文献】

梅原来治 1919 「八幡町西車塚」『京都府史蹟勝跡調査会報告』第 1 冊 京都府

奥村清一郎 2020 「京都府西車塚古墳の墳丘に関する復元研究」『龍谷大学考古学論集Ⅲ－岡崎晋明先生喜寿記念論文集－』龍谷大学考古学論集刊行会

京都大学文学部 1968 「京都大学文学部考古学資料目録 第 2 部 日本歴史時代」

京都府埋蔵文化財研究会 2000 「西車塚古墳」「京都の首長墳」

京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都府立山城郷土資料館 1987 「鏡と古墳－景初四年鏡と芝原古墳－」

車崎正彦 編 2002 「考古資料大観 弥生・古墳時代 鏡」第 5 卷 小学館

下垣仁志 2021 「男山古墳群の動向」『季刊考古学・別冊 34 椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権－』雄山閣

東京国立博物館 1988 「東京国立博物館図版目録・古墳遺物篇（近畿 I）」

橋口隆康 1979 「古鏡」 新潮社

江谷 寛ほか 1986 「八幡市誌」第 1 卷

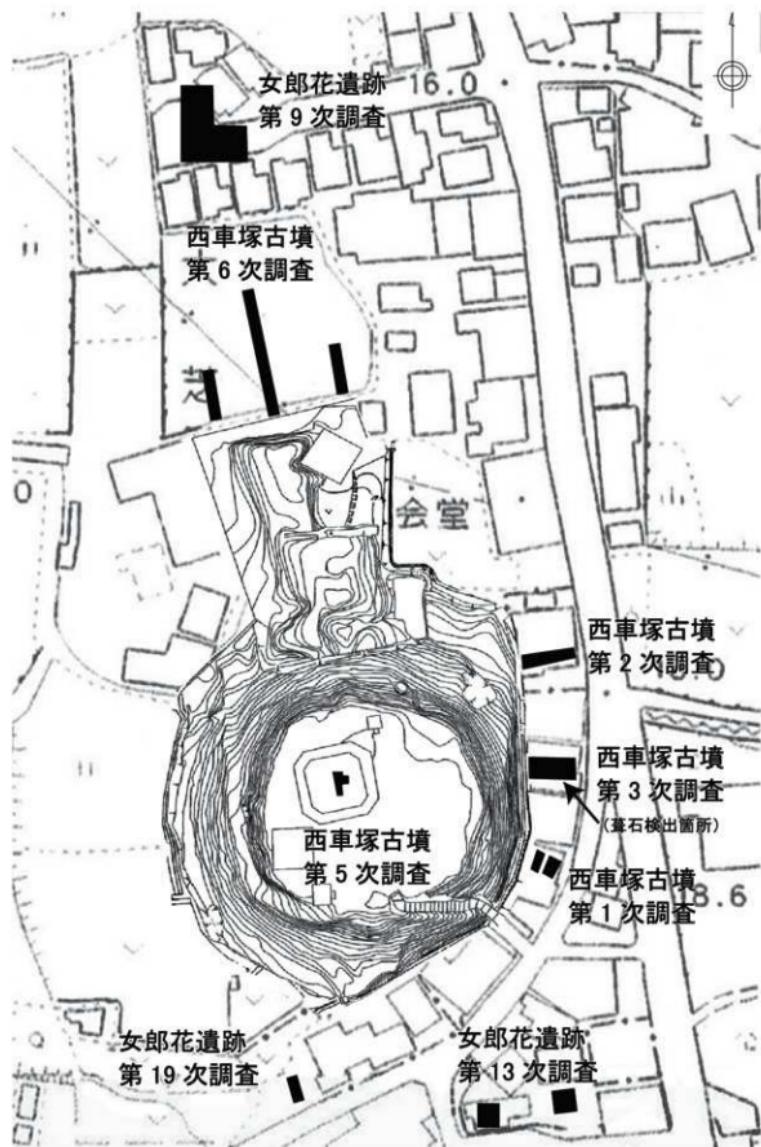
八幡市教育委員会 1995 「西車塚古墳（第 3 次）発掘調査概報」「八幡市文化財発掘調査概報」第 18 集

八幡市教育委員会 2019 「史跡 石清水八幡宮境内（八角堂） 歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業保存修理工事報告書」

和田晴吾 1988 「南山城の古墳－その概要と現状－」『京都地域研究』4 立命館大学人文科学研究所



第 25 図 第 3 次調査で検出された葺石（八幡市教育委員会 1995）



第26図 八幡西車塚古墳群実測図 (S=1/1,000)



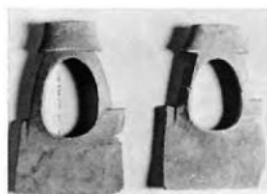
第27図 獣文鏡（車崎 2002）



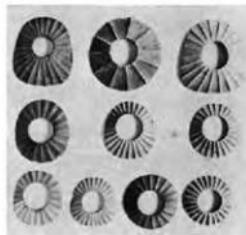
第28図 画文帶環状乳四神四獸鏡（車崎 2002）



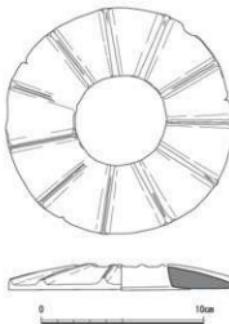
第29図 石製合子（江谷ほか 1986）



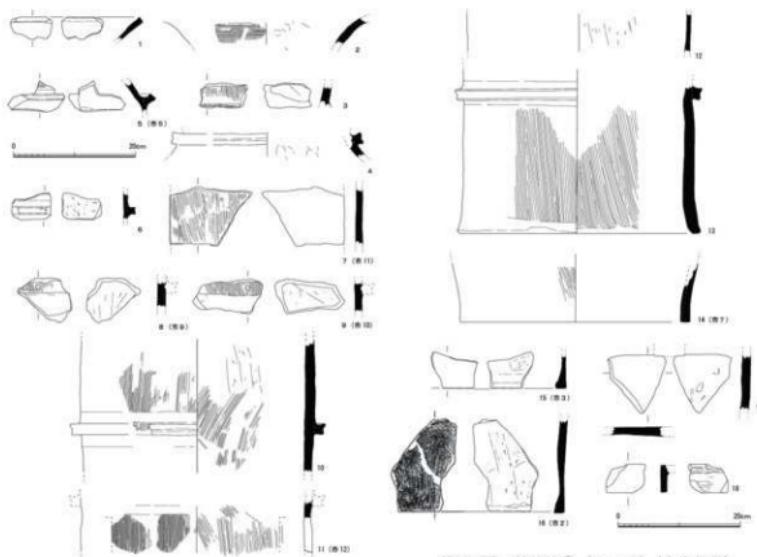
第30図 鉛形石（江谷ほか 1986）



第31図 車輪石（江谷ほか 1986）



第32図 車輪石（S=1/3）（個人蔵・本書付編）



第33図 墓輪片① (S=1/8) (本書付編)

第34図 墓輪片② (S=1/8) (本書付編)

4. 八幡東車塚古墳 八幡市八幡女郎花

立地 丘陵端 標高 18 m 現況 半壟（後円部のみ残存）

墳形 前方後円墳 周溝 不明 段築 不明

墳長 推定 90 m 後円部径 推定 50 m 前方部幅 推定 30 m

外表施設 葦石 墓輪列

埋葬施設 後円部 粘土櫛 前方部 木棺直葬

主な副葬品 後円部：銅鏡、硬玉製勾玉、素環頭大刀、直刀、劍、鉄斧、鐵鎌、甲冑

前方部：銅鏡

概要 八幡市八幡女郎花に所在する。八幡東車塚古墳は標高 18 m の丘陵端部に位置しており、市道土井南山 2 号線を挟んで北西 150 m にある八幡西車塚古墳とともに古くから知られる。

現在は国指定名勝松花堂及び書院庭園内に所在しており、前方部は削平を受けて消失し、後円部の一部は築山に利用されたため、原形が大きく損なわれている。

調査経過 大正 9 (1920) 年、梅原末治氏により八幡東車塚古墳の出土品や外表施設、埋葬施設についての聞き取り調査の報告がなされているが、それ以降詳細な調査は行われていない。

墳丘の形態・外表施設 地籍図から推定される墳丘規模としては、墳丘長約90m、後円部径約50mの前方後円墳である。外表施設としては、墳丘表面には礫石が葺かれ、円筒埴輪が墳丘裾部にめぐらされていたようである。

埋葬施設 八幡東車塚古墳の埋葬施設や埋葬状態については、庭園を造る際に破壊されたため、不明な点が多いが、前方部と後円部にそれぞれ一基埋葬施設が存在していたようである。前方部埋葬施設は、副葬品が保護施設等に覆われることなく地表下約0.6mの深さで土砂の間に埋もれる形で出土したことから、木棺直葬であったと考えられる。後円部の埋葬施設は粘土棺に木棺を収めたものであり、粘土棺は墳丘頂部より下に約1.5～1.8mの地点にあり、長さ約3.6m、幅約1.8mの楕円形を呈すものである。また、粘土棺の構造については、底に栗石を敷き並べ、その上部に約0.3mの粘土層が敷かれていた。粘土層には、東西に木棺の痕跡と考えられる凹みがあり、凹みの中には朱層があった。

副葬品等 前方部埋葬施設からは、鏡1面（三角縁鉢帯二神二獸鏡）、剣身1口が出土している。

後円部埋葬施設からは、京都工芸織維大学出土資料を含め、鏡4面（内行花文鏡、鼈龍鏡、六神像鏡、四獸形鏡）、硬玉製勾玉2点、素環頭大刀4点、直刀身数点、剣身、鉄斧、鉄鎌、甲冑、その他鉄製品が出土している。

また、八幡東車塚古墳出土資料として、鉄製品などが京都工芸織維大学資料館に所蔵されている。

歴史的価値 墳丘の形態や規模など不明な点が多いが、埋葬施設からは豊かな副葬品の出土がみられ、八幡市域における古墳時代前期の地域支配体制を考える上で、重要な資料であるといえる。

（吉田）

【参考文献】

- 梅原来治 1920「山城国八幡町の東車塚古墳」「久津川古墳研究」名著出版
京都大学文学部 1968「京都大学文学部考古学資料目録 第2部 日本歴史時代」
京都府埋蔵文化財研究会 2000「東車塚古墳」「京都の首長墳」
京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都府立山城郷土資料館 1987「鏡と古墳－景初四年鏡と芝ヶ原古墳－」
車崎正彦 編 2002「考古資料大観 弥生・古墳時代 鏡」第5巻 小学館
下垣仁志 2021「男山古墳群の動向」「季刊考古学・別冊34 椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権－」雄山閣
樋口隆康 1979「古鏡」新潮社
江谷 寛ほか 1986「八幡市誌」第1巻
龍谷大学文学部考古資料室 1972「南山城の前方後円墳」
和田晴吾 1988「南山城の古墳－その概要と現状－」「京都地域研究」Vol.4 立命館大学人文科学研究所
八幡市教育委員会 2020「名勝松花堂及び書院庭園保存活用計画書」

5 繁喜古墳群を形成する古墳（八幡市域）



第35図 東車塚古墳地形測量図 (S=1/500) (八幡市教育委員会 2020)



第36図 鉄鎌、大刀 (本書付録)



第37図 剣、刀子ほか (本書付録)



第38図 鉄製農工具等（本書付編）



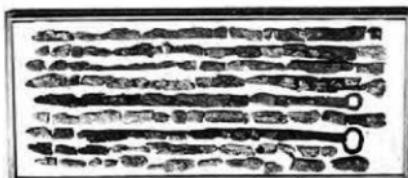
第39図 刀、剣、鐵鎌（本書付編）



第40図 帯金式甲冑（本書付編）



第42図 龍竜鏡（京都府埋蔵文化財調査
研究センター 1987）



第41図 刀・素環頭大刀（江谷ほか 1986）



第43図 四獸形鏡（本書付編）



第44図 神像鏡（車崎 2002）

5. 大芝古墳 八幡市八幡大芝

立地 丘陵裾 標高 21 m 現況 全壟

墳形 方墳 周溝 有り 段築 不明

墳長 南北約 13 m、東西約 15 m

外表施設 墓輪列

埋葬施設 不明

主な副葬品 不明

概要 大芝古墳は、男山丘陵東麓で見つかった埋没古墳である。以前から土師器や須恵器などの遺物の散布が認められていた場所であったが、本墳は平成 6（1994）年に行われた調査によってその存在が明らかとなった。調査の結果、周溝と埴輪列が検出され、出土埴輪から古墳時代中期の方墳であることが明らかとなった。

調査経過 平成 5（1993）年に当地で共同住宅建築の計画がなされ、それに先立って試掘確認調査を行うこととなった。調査の結果、溝が検出され、また埴輪片も複数出土したため、事業者との協力を得て平成 6（1994）年にかけて発掘調査を行った。本調査の結果、周溝と埴輪列が検出され、周溝からは埴輪の他、土師器壺、甕、須恵器などの土器類が出土した。

墳丘の形態・外表施設 南北約 13 m、東西約 15 m の方墳である。検出した墳丘斜面、テラス面は地山削り出しで形成されている。

外表施設としては、埴輪列がある。埴輪列はテラスで検出されており、埴輪は円筒・朝顔形埴輪が樹立している。それぞれの埴輪間の距離は 3.6 ~ 3.7 m である。また、葺石は確認されなかった。

埋葬施設 不明。副葬品等 不明。

歴史的価値 周辺には八幡西車塚古墳、八幡東車塚古墳などの古墳が位置しており、大芝古墳は男山丘陵における数少ない古墳時代中期の古墳となる。埋葬施設や副葬品の詳細など不明な点も多いが、同時期の古墳が男山丘陵では他に見られず、当地域における古墳時代中期の古墳造営の背景を考えるために貴重な資料であるといえる。

（吉田）

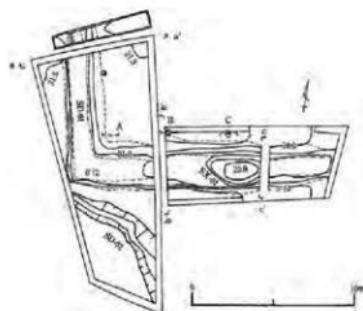
【参考文献】

下垣仁志 2021「男山古墳群の動向」『季刊考古学・別冊 34 椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権－』 雄山閣

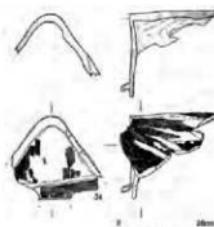
八幡市教育委員会 1995「女郎花遺跡」『八幡市文化財発掘調査概報』第 17 集

八幡市教育委員会 1996「女郎花遺跡第 2 次発掘調査概報」『八幡市文化財発掘調査概報』第 21 集

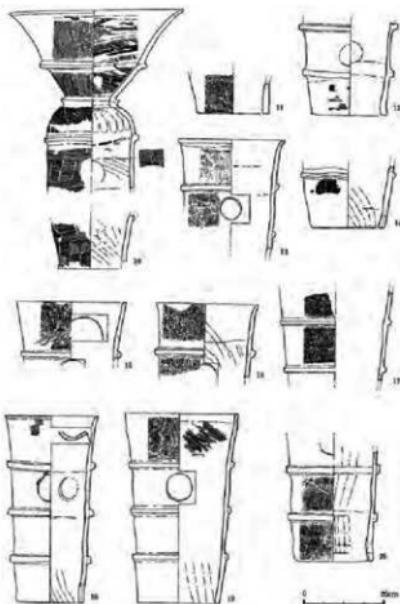
八幡市教育委員会 1997「女郎花遺跡（第 2 次）発掘調査概報（遺物編）」『八幡市文化財発掘調査概報』第 23 集



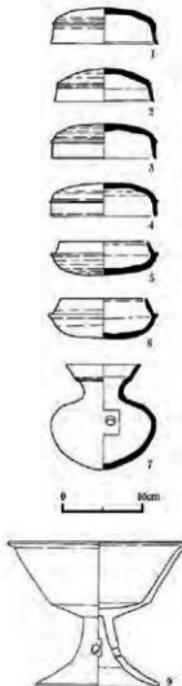
第45図 遺構平面図 (S=1/300)
(八幡市教育委員会 1996)



第47図 家形埴輪 (S=1/12) (八幡市教育委員会 1997)



第46図 円筒埴輪・朝顔形埴輪 (S=1/12)
(八幡市教育委員会 1997)



第48図 須恵器・土師器 (S=1/8)
(八幡市教育委員会 1997)

6. 中ノ山古墳 八幡市八幡中ノ山

立地 丘陵上 標高 不明

墳形 円墳か？ 周溝 不明 段築 不明

墳長（径） 不明 外表施設 不明 埋葬施設 不明

主な副葬品 腕輪形石製品（車輪石2、石鉄3）、紡錘車形石製品1、管玉17、
鉄劍（ヤリ）5、鉄鍔3、鉄斧2、方形鍔先1、鉄製刀子7

概要・調査経過 中ノ山古墳の記録として最も古いのは、島田貞彦の「山城継喜郡二子塚古墳」である。ここでは八幡周辺の古墳分布図が付されており、「中ノ山」「太鼓山」の記載が認められる（島田 1919）。また、郷土史家の西村芳次郎の記録では、「大正初年開拓セシニ、中央ヨリ管玉・振石・紡績石・古鏡・古鏡・矢尻等ヲ発掘ス」と記されている（西村 1928）。これらの遺物の所在はわざく不明であったが、本事業に伴う調査で、西村氏が発見した資料が京都工芸繊維大学に所蔵されていることが明らかとなった。その遺物には「太古山古墳」と記されているが、鏡を欠く以外は西村氏の記録に記載がある中ノ山古墳出土遺物の記録と一致していることから、中ノ山古墳出土遺物と判断した。

昭和43（1968）年の当教育委員会による調査では、中ノ山付近で円筒埴輪がまとまって出土した。調査では古墳の痕跡は認められなかっただため、周辺からの流入と判断された（京都市教育委員会 1969）。令和3（2021）年に京都工芸繊維大学所蔵資料を当教育委員会、八幡市教育委員会が合同で調査した。

墳丘の形態・概表施設 墳丘形状の記録は一切残されていないが、島田氏の古墳分布図では円墳として記録されていることから（島田 1919）、円墳である可能性が高い。外表施設の記録も残されていないが、周辺から埴輪が出土していることから、本来は埴輪が樹立されていたものと考えられる。

埋葬施設 不明。

副葬品等 京都工芸繊維大学に保管されているのは、腕輪形石製品、紡錘車形石製品、管玉、鉄製武器類、鉄製農工具類等がある。また、西村氏寄贈の太古山古墳出土石鉄が京都大学文学部博物館に寄贈されており、同様に中ノ山古墳出土遺物である可能性が高い（小野山編 1968）。

歴史的価値 墓輪・副葬品とも詳細な出土状況は不明だが、前期中葉の古墳と考えられる。当地域の古墳としては最古級の内容を有しており、継喜古墳群の成立を考える上では極めて重要な古墳である。

（桐井）

【参考文献】

小野山節編 1968 「京都大学文学部考古学資料目録」第2部日本歴史時代、京都大学文学部

京都市教育委員会 1969 「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報（1969）」京都市教育委員会

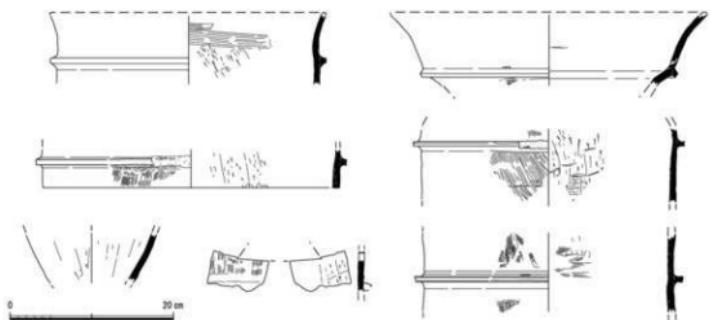
島田貞彦 1919 「山城継喜郡二子塚古墳」「考古学雑誌」第九卷第五號、日本考古学会

西村芳次郎 1928 「八幡史蹟名勝誌」私家版

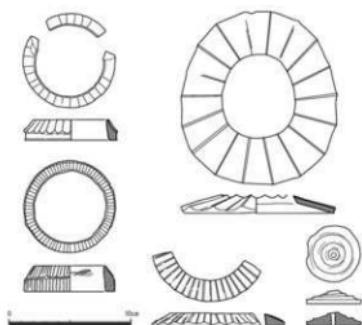
*中ノ山古墳出土品の詳細は、本書付録を参照。



第49図 中ノ山古墳位置図（左：島田 1919に加筆、右：京都府教育委員会 1969に加筆）



第50図 墓輪実測図（S=1/6）（本書付録）



第51図 石製品実測図（S=1/4）（本書付録）



第52図 石鋤
（小野山編 1968）



第53図 管玉（本書付録）

※鉄製品は本書付録を参照

7. 西二子塚古墳 八幡市美濃山西ノ口

立地 丘陵後 標高 不明 現況 消滅 墳形 円墳 周溝 不明 段築 不明

墳長 不明 外表施設 不明 埋葬施設 不明

主な副葬品 ガラス小玉、土玉、刀、鉄斧、砥石、土師器、須恵器

概要 八幡市美濃山西ノ口に所在する円墳である。現在は宅地となっており、地表面に墳丘等の痕跡は残されていない。

調査経過 大正8（1919）年に島田貞彦氏により報告が行われて以降、発掘調査は行われていない。

墳丘の形態・外表施設 島田氏の報告によれば、円墳である。葺石、埴輪列などの外表施設は不明である。

埋葬施設 不明。

副葬品等 ガラス小玉16点、土玉16点、刀2点、鉄斧4点、砥石2点、土師器8点、須恵器5点の出土が報告されている。

歴史的価値 須恵器編年の最古段階として設定された「二子塚式」の標識資料として、学史にその名をとどめている。

詳細な調査を経ずに消滅してしまったため、情報量は総じて少ないが、今後の調査の進展によってその重要性は増していくものと考えられる。

（吉田）

【参考文献】

京都大学文学部 1968『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第2部 日本歴史時代』

島田貞彦 1919「山城緩喜郡二子塚古墳」「考古学雑誌」第9卷第5号

下垣仁志 2021「男山古墳群の動向」「季刊考古学・別冊34 椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権－」雄山閣

横山浩一 1959「手工業生産の発展－須恵器と土師器－」「世界考古学大系」3 平凡社



第54図 ガラス玉(京都大学
文学部1968)



第55図 須恵器(横山1959掲載図を再トレース)

8. 東二子塚古墳 八幡市美濃山幸水

立地 丘陵棲 標高 不明 現況 消滅

墳形 円墳 周溝 不明 段築 不明

墳長（径） 12～13 m（推定）

外表施設 不明

埋葬施設 不明

主な副葬品 銅鏡、鉄鎌、直刀、須恵器（いずれも伝世品）

概要 八幡市美濃山幸水に所在する円墳である。現在は公園となっており、地表面に墳丘等の痕跡は残されていない。

調査経過 大正8（1919）年に島田貞彦氏により報告されて以降、昭和55（1980）年、平成2（1990）年に八幡市教育委員会による発掘調査が実施されたが、その痕跡を認めることはできなかった。

墳丘の形態・外表施設 推定墳丘径12～13 m規模の円墳である。葺石、埴輪列などの外表施設は不明である。

埋葬施設 不明。

副葬品等 鏡1面（四獸形鏡）、刀3点、鉄鎌数点、須恵器3点の出土が伝えられている。出土品は東京国立博物館が「西ノ口出土品」として保管されている。

歴史的価値 十分な調査を経ずに削平されたため、詳細は不明である。鏡や刀など豊富な副葬品の出土が伝えられている。周辺地域における古墳群を評価するうえでも重要な資料であるといえる。

（吉田）

【参考文献】

京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都府立山城郷土資料館 1987『鏡と古墳－景初四年鏡と芝ヶ原古墳－』

島田貞彦 1919「山城緑喜郡二子塚古墳」『考古学雑誌』第9巻第5号

下垣仁志 2021「男山古墳群の動向」『季刊考古学・別冊34 椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権－』雄山閣

八幡市教育委員会 1991「東二子塚古墳（第2・3次）発掘調査概報」「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」第9番

和田晴吾 1988「南山城の古墳－その概要と現状－」『京都地域研究』Vol. 4 立命館大学人文科学研究所

9. 美濃山王塚古墳 八幡市美濃山大塚

立地 丘陵上 標高 48 m 現況 半壊

墳形 帆立貝形墳 周溝 あり 後円部段築 不明（2段以上） 前方部段築 不明（2段以上）

墳長 76 m（推定） 後円部径 62 m（推定） 高さ 9 m

外表施設 葦石 墳輪列

埋葬施設 粘土桶

主な副葬品 銅鏡、冑、鎧、草摺、三尾鉄、刀剣、鐵鎌、玉類（いずれも伝世品）

概要 八幡市美濃山大塚に所在する。王塚古墳は、道沿いの丘陵端の高台に築かれた前方後円墳である。

現在、後円部は私有地として竹林に、前方部には明治期に建立された仏教寺院が位置している。後円部は苟栽培のために数度にわたる改変が行われており、前方部は仏教寺院建立の際に大きな削平をうけたことが想定され、墳丘の形状は大きく損なわれているものと考えられる。

調査経過 大正 9（1920）年に梅原末治氏による調査報告が行われたのが最初である。この報告によれば、大正 4（1915）年に墳丘頂部北西端に近く地下 0.6 m 程の深さで粘土桶が検出された。また、以前の盗掘の際に出土した遺物と合わせて王塚古墳出土遺物の紹介を行っている。その後、昭和 46（1971）年に龍谷大学による測量調査が実施され、当古墳に造り出しが取り付く可能性が指摘されている。また、平成 17（2005）～平成 20（2008）年にかけて八幡市教育委員会による発掘調査が実施され、墳丘の形状や外表施設の有無などの詳細が判明した。

墳丘の形態・外表施設 推定墳丘長 76 m、後円部径 62 m、高さ 9.0 m の規模の前方後円墳である。

外表施設としては、葦石、埴輪列が確認されている。葦石は長径 15 ~ 25 cm の基底石があり、また後円部と前方部の境にあたるくびれ部に石列が施されていたことが判明した。また、埴輪列については、一段目テラスに 5 個体検出されている。埴輪の直径は 21 ~ 26 cm で、埴輪間の距離は 11 ~ 12 cm の等間隔で並べられている。埴輪列周辺で出土した破片のなかには、円筒埴輪と朝顔形埴輪のものがあり、埴輪列は円筒・朝顔形埴輪の 2 種で構成されていたものと想定される。埴輪の設置方法としては、掘方が検出されていないことから、地山削り出して形成されたテラス面に埴輪を設置した後に、小穂混じりの埋土で底部を埋めて固定していたことが想定される。

埋葬施設 全長 7.3 m、幅 1.8 m 規模の粘土桶があったことが報告されている。また、これとは別に盗掘坑らしき凹みが墳丘頂部に認められることから、もう一つ埋葬施設が存在していた可能性が想定される。

副葬品等 大正 4（1915）年の盗掘で、墳頂北西端から多量の武器・武具類などが出土した。これらの出土遺物は京都帝国大学に寄贈され、「山城八幡大塚発見」品とされている。しかし、経緯は不明であるが、現況では八幡東車塚古墳出土品などと混淆してしまい判別できない状態である。

美濃山王塚古墳出土と伝えられている遺物としては、鏡 12 面（内行花文鏡 2 面、雙鳳鏡、二神二獸鏡、仿製方格規距八鳥文鏡、仿製半円方形帶神獸鏡、仿製半円方形帶獸像鏡 2 面、仿製半円方形帶鼈龍鏡、

仿製平縁盤籠鏡、仿製方格規距四獸鏡、変形神獸鏡)、銜角付冑、短甲、刀、劍、鎌、斧、ガラス小玉、筒形銅器・銅鏡・石製模造品など多種類のものが出土している。これら出土遺物は、天保6（1835）年に「八幡みの山」で掘りだされたもの（鏡12面）、「美濃山出土」筒形銅製品、「城州八幡美濃山案出」石製模造品、「美濃山出土」銅鏡として知られているが、これらが本墳出土品である確証はない。しかし、本墳が美濃山でもひときわ目を惹く古墳であることや墳頂中央部に盗掘坑とおぼしき広い凹所があったこと、これら出土品は本墳の時期と齟齬しないことなどから美濃山王塚古墳の出土品として扱うことに大きな問題はないものと考えられている。

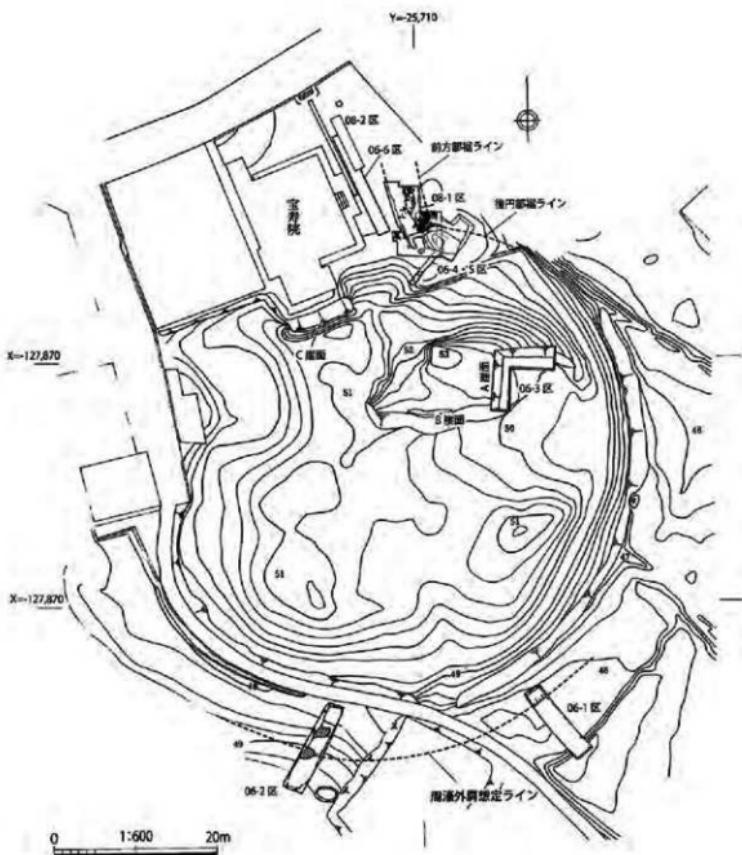
歴史的価値 八幡市域において、古墳時代中期の造営が想定される唯一の前方後円墳である。調査により、墳丘の形態や外表施設など詳細が明らかになっている貴重な資料といえる。また、保管段階で出土遺物の混淆はみられるものの、豊富な副葬品がみられるのも事実である。墳丘の形態や規模、豊富な副葬品を有することから、地域における支配体制を考えるうえで重要な資料であることは確かである。

（吉田）

【参考文献】

- 梅原末治 1920 「美濃山ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊 京都府
京都大学総合博物館 1997 『京都大学総合博物館春季企画展展示図録 王者の武装－5世紀の金工技術－』
京都府埋蔵文化財研究会 2000 「王塚古墳」「京都の首長墳」
京都府立山城郷土資料館 1987 「鏡と古墳－景初四年鏡と芝ヶ原古墳－」
下垣仁志 2021 「男山古墳群の動向」『季刊考古学・別冊34 椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権－』 雄山閣
八幡市教育委員会 2010 「王塚古墳範囲確認発掘調査（第1～3次）報告書」「八幡市埋蔵文化財発掘調査報告」第54集
龍谷大学文学部考古資料室 1972 「南山城の前方後円墳」
和田晴吾 1988 「南山城の古墳－その概要と現状－」『京都地域研究』4 立命館大学人文科学研究所

5 繁喜古墳群を形成する古墳（八幡市域）



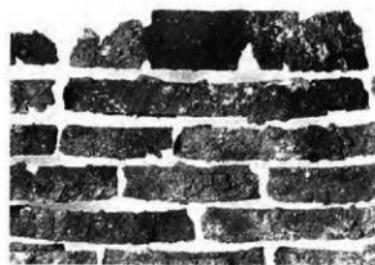
第56図 墳丘実測図 (S=1/600) (八幡市教育委員会 2010)



第 57 図 革綴矩甲押付板・帶金・板（京都大学
総合博物館 1997）



第 58 図 堅矧板革綴胄（京都大学総合博物館 1997）



第 59 図 草摺（京都大学総合博物館 1997）

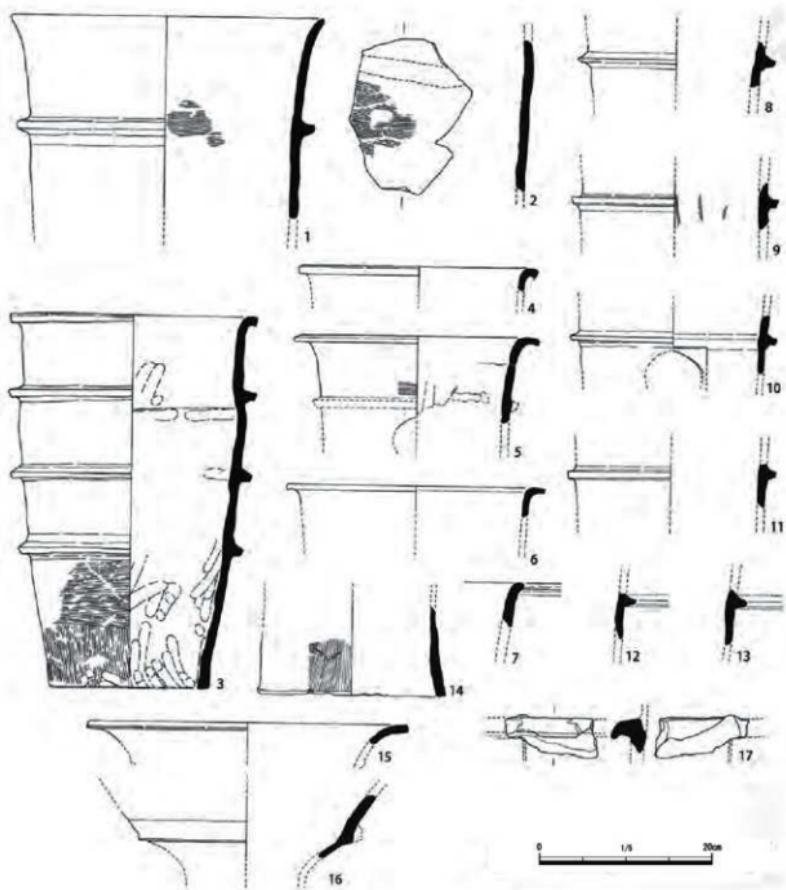


第 60 図 鉄鋤（京都大学総合博物館 1997）



第 61 図 伝・美濃山王塚古墳出土鏡（梅原 1920）

5 繁喜古墳群を形成する古墳（八幡市域）



第62図 美濃山王塚古墳出土埴輪 (S=1/6・八幡市教育委員会 2010)

10. ヒル塚古墳 八幡市美濃山ヒル塚

立地 台地上 標高 19 m 現況 半壊 墳形 造出付方墳 周溝 あり 段築 3段

墳長 一辺約 52 m (推定)・造出し長 5 m 高さ 約 7.5 m 外表施設 莢石 増輪列 陸橋

埋葬施設 粘土棺 2基 増輪棺 1基

主な副葬品 第1主体部：渦巻飾付鉄劍、鉄槍、鉄刀、鉄劍、鐵鎌、

第2主体部：鉄鎌、長剣、短剣、鉄刀、鉄斧、鉄鎌、藤手刀子、鉄盤、鏡

概要 八幡市美濃山ヒル塚に所在する。ヒル塚古墳は、男山丘陵南端の突出した標高 19 m の台地に位置する造出付き方墳である。発掘調査により、3基の埋葬施設が存在していたことが判明しており、副葬品には渦巻飾付鉄劍をはじめとした豊富な種類の出土品が知られている。現在は第1主体部の一部を八幡市立ふるさと学習館で展示しており、第1主体部の一部と第2主体部は地中に保存されている。

調査経過 大正 8 (1919) 年に島田貞彦により前方後円墳として報告されて以降、円墳、前方後円墳などその墳丘の形態は様々な推測がなされてきた。

平成元 (1989) 年に開発に伴う発掘調査が八幡市教育委員会により実施され、墳丘の形態や埋葬施設などの詳細が明らかとなった。その後、同教育委員会により、平成 15 (2003) 年に墳形や周溝の詳細をより明確にするための範囲確認調査が行われ、増輪列などの外表施設が検出されている。

墳丘の形態・外表施設 一辺約 52 m 、高さ 7.5 m の規模をもつ、3段築成の造り出し付き方墳であり、周囲には周溝がめぐる。外表施設としては、葺石と増輪列、陸橋が確認されている。葺石は、墳丘二段目より上部に施されていたものと考えられ、石材には直径 5 cm ~ 拳大の円礫が主として用いられており、割石が少し混じるようである。増輪列は、一段目テラスと墳頂部で検出されており、増輪間の距離は 1.6 m 間隔で並べられている。また、第2主体部直上の増輪列は、主体部構築に伴い立て替えがなされたことが確認された。陸橋は一段目テラスにとりつき、地山を削り出して成形されている。

埋葬施設 粘土棺 2基、増輪棺 1基を墳頂部から検出した。粘土棺は全長 12 m 、幅 9 m 、深さ 3.5 m の規模の第1主体部と、全長 8 m 、幅 4.5 m 、深さ 2.5 m 以上の規模の第2主体部があり、第2主体部は第1主体部より後に造られたものとなる。

第1主体部は、中世以降数度の盗掘を受け、南半分の粘土施設は破壊されていた。その構造は、拳大の円礫を最大 80 cm 、粘土床下に 30 cm の厚さで敷設した礫床の上に粘土に覆われた棺が設置されていたものである。棺は、粘土に残る圧痕から長さ 7 m 、外径 0.8 m の割竹形木棺であったと考えられる。粘土床にはベンガラと思われる赤色顔料が厚く塗布されており、一方で棺部分には水銀朱と考えられる赤色顔料が残されており、顔料の塗分けがなされていたことを示している。

第2主体部は、第1主体部の西辺と重複して造営されたものである。礫床の厚さは 30 cm 以上が想定され、第1主体部同様、その上部に粘土に被覆された棺を配置している。棺は長さ 5.0 m 、外径 0.6 m の割竹形木棺であることが想定される。また、遺体周辺と推定される場所周辺には水銀朱と思われる赤色顔料が塗布されていた。第2主体部には北と南側の両小口に副葬品を埋納していた副室が

あり、北側副室には鏡と長剣、短剣、南側副室には短剣、農工具が納められていた。

埴輪棺は第1主体部と同方向に主軸をもち、口縁部を北にして第1主体部の東南部に位置していた。埴輪棺は1.0m、口径0.4m、底径0.3mで、透孔を穿たないものである。埴輪棺の設置方法は、棺が半分埋もれるほど深い楕円形の土壌を掘り設置し、棺の小口を板で塞ぎ、土壌と棺との間に粘土を充填させて棺を安定させる。次に棺全体を粘土で覆い、砂礫を被せてから土を入れて埋置するものであった。また、この埴輪棺は設置された土壌の東壁と南壁のラインが第1主体部のそれと一致すること、埋土の堆積状況が北西から南東隅に向かって上がるラインを描くことを確認している。土壌の西壁が盗掘により不明瞭ではあるが、前記のことからこの埴輪棺は第1主体部を埋め戻すと同時に埋められたものである可能性が高いと考えられる。

また、1段目テラス上から方形と想定される透孔をもつ鱗付円筒埴輪棺が検出された。口径は36.6cmを測り、基底部が失われていたため全長は不明である。テラス面と棺の間に流土が堆積していることから、墳丘上部からの転落であると思われる。

副葬品 第1主体部からは、渦巻飾付鉄劍1口、鉄槍49点、鉄刀、鉄劍、鉄鎌3点、針状鉄製品、不明青銅器が出土した。渦巻飾付鉄劍は、断面四角の錐状の鉄を捩じり、ゼンマイ状に巻き上げた飾りが取り付く特殊なものである。飾りの装着は刃と平行に、鐔部から斜め下方にでたあと上方に巻き上げるものとなる。鉄劍全体に水銀朱が塗布されていた可能性がある。

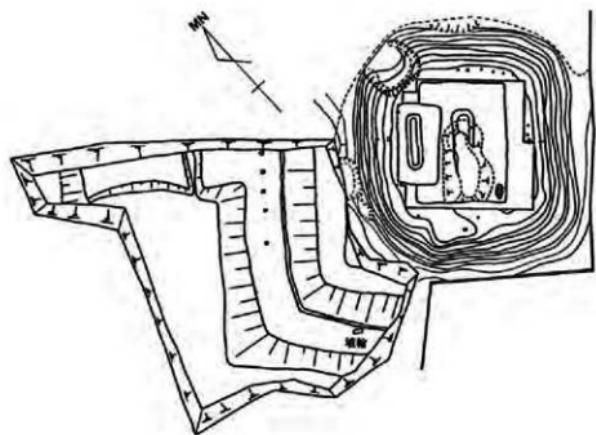
第2主体部からは、長剣1口、短剣39口、鉄刀1口、鉄斧4点、鉄鎌2点、鉄鏃2点、薙手刀子1点、鉄鎧1点、鉄製農具先1点、鉄鎌、方格規矩鳥文鏡1点、鏡片1点が出土した。北側の副室で出土した長剣と短剣は方格規矩鳥文鏡の上に重ねられたかたちで出土しており、また出土品の表面には布が付着していたことから、埋葬時には布で包まれた状態で埋納されていた可能性が考えられる。

歴史的価値 八幡市域で最大規模の方墳である。八幡市の中でも、本格的な発掘調査により主体部や外表施設などの詳細が明らかになった貴重な古墳である。本墳からは全国でも珍しい渦巻飾付鉄劍が出土するなど、異彩を放つ古墳である。この他にも、豊富な副葬品が出土している点や、朱が塗布され副室が設けられた埋葬施設を有するなど、地域の古墳を考えるうえで貴重な資料といえる。

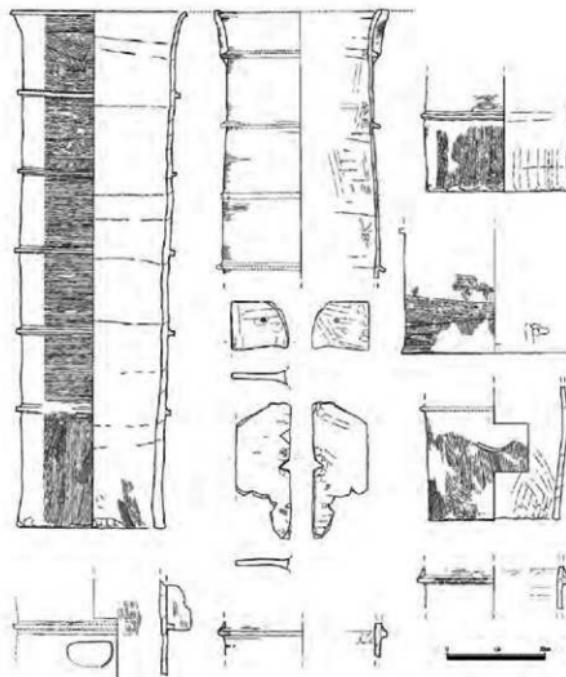
(吉田)

【参考文献】

- 梅原末治 1920「美濃山ノ古墳」『京都府史蹟勝跡調査会報告』第2冊 京都府
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988「八幡市ヒル塚古墳の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第33号
- 北山大熙 2017「埴輪からみた八幡市ヒル塚古墳」『畿内の首長墳』立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻
- 車崎正彦 編 2002「考古資料大観 弥生・古墳時代 鏡」第5巻 小学館
- 島田貞彦 1919「山城継喜郡二子塚古墳」『考古学雑誌』第9巻第5号
- 下垣仁志 2021「男山古墳群の動向」『季刊考古学・別冊34 椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王權－』雄山閣
- 千賀久・村上恭通 編 2003「考古資料大観 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品」第7巻 小学館
- 八幡市教育委員会 1990「ヒル塚古墳発掘調査概要」
- 八幡市教育委員会 2003「ヒル塚古墳範囲確認調査(第3次)」「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」第34集
- 八幡市教育委員会 2004「ヒル塚古墳範囲確認調査(第3次)」「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」第37集
- 和晴吾 1988「南山城の古墳－その概要と現状－」『京都地域研究』Vol.4 立命館大学人文科学研究所

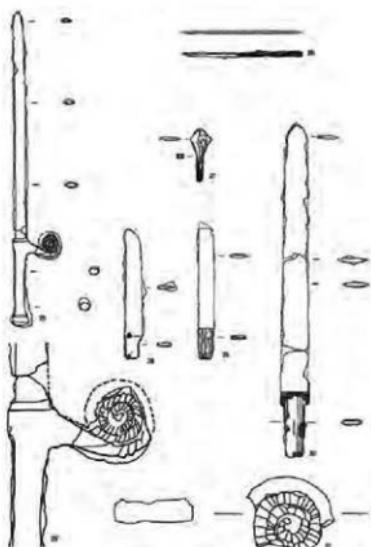


第63図 墳丘実測図(1/500)八幡市教育委員会1990)



第64図 墳輪実測図(S=1/10・北山2017)

5 繼喜古墳群を形成する古墳（八幡市域）

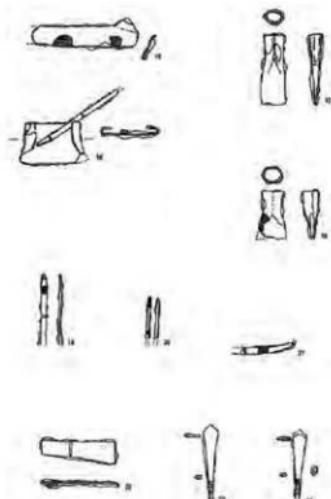


第65図 鉄製品実測図（八幡市教育委員会 1990）



(X線)

第66図 湧巻飾付鉄剣（千賀・村上 2003）



第67図 鉄製品実測図（八幡市教育委員会 1990）



第68図 方格規矩八鳳鏡（車崎 2002）

11. 南山7号墳 八幡市南山

立地 丘陵上 標高 52 m 現況 全壙 墳形 方墳 周溝 あり 墓長 1辺 15.5 m

外表施設 なし 埋葬施設 削平により不明 主な副葬品 なし

概要・調査経過 南山古墳群は八幡市南山に所在したとされる古墳群であるが、その多くは宅地造成等により消滅した。地元での聞き取りによると中には箱式石棺を持つなど、前期古墳的な様相が認められたという（八幡市 1986）。

平成9（1997）年には京都府埋蔵文化財調査研究センターによって西ノ口遺跡の発掘調査が行われ、7号墳の周溝が検出された。周溝からは土師器高杯と初期須恵器の壺が出土しており、中期前葉の古墳と考えられる（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998）。

歴史的価値 多くは調査前に消滅し詳細は不明だが、初期須恵器が出土していることから、初期群集墳の範疇で捉えられる。八幡丘陵上には当古墳以外にも御毛通古墳群などの埋没古墳があり、本来は前期後葉後半から中期前葉に多くの古墳が存在したものと考えられる。



第69図 南山7号墳墳丘測量図

（桐井）(S=1/500)・遺物実測図 (S=1/4) (京都府
埋蔵文化財調査研究センター 1998)

江谷 寛ほか 1986『八幡市史』八幡市

京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998「一般地方道富野莊八幡線関係遺跡（西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡）

発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第81冊、財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

12. 女郎花遺跡 八幡市八幡女郎花

立地 丘陵裾 標高 13 m 墳形 不明 段築 不明 墓長 不明 外表施設 不明 埋葬施設 不明 主な副葬品 不明

概要 女郎花遺跡は、八幡市八幡女郎花に所在し、埴輪が集中して出土した。

調査経過 平成9・10（1997・1998）年度に八幡市文化交流施設建設に伴って、発掘調査が実施された。

遺構内容 SX-03より4×3mの範囲に埴輪片が集中して出土している。残存率の高い円筒埴輪4個体、朝顔形埴輪1個体が出土地で出土している。

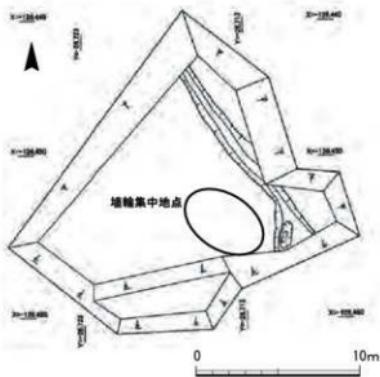
歴史的価値 遺構の性格が不明であるが、出土した埴輪はⅡ群古相に該当し、全体を復元できる重要な資料となる。

（北山）

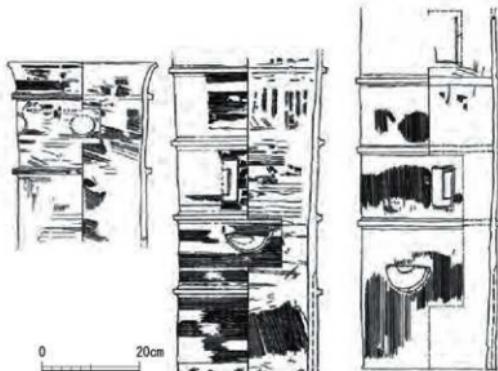
5 繁喜古墳群を形成する古墳（八幡市域）

【参考文献】

八幡市教育委員会 1999 「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」 第 28 集



第 70 図 女郎花遺跡埴輪出土地点 (S=1/300)



第 71 図 女郎花遺跡出土埴輪 (S=1/10)

13. 御毛通 1 号墳 八幡市美濃山荒坂・御毛通

立地 丘陵上 標高 52 m 現況 全壊 墳形 方墳 周溝 有り 段築 不明

墳長 21.5 m (推定)

外表施設 墳輪列 (推定)

埋葬施設 不明

主な副葬品 不明

概要 御毛通 1 号墳は八幡市美濃山荒坂・御毛通に所在していた。当古墳は男山丘陵から甘備南丘陵へ移行する中間地点に位置する荒坂遺跡に内包されており、丘陵から形成される開析谷のなかでも比較的大規模の大谷川河谷の西側に接する尾根状地形の頂部に位置する。

御毛通 1 号墳は、現地表上にその痕跡を残さないわゆる「埋没古墳」であり、平成 4 年度調査以前には周知されていなかった。当地は大正期に始まる竹藪による地形の改作が著しく、墳丘の南東側は竹藪の盛土を供出するために土取りが行われたため、周溝の痕跡すら残らない状態である。また、竹藪盛土に被覆された北西側においても、掘立柱建物などにより削平されている様子がみられ、古墳自体の残存状況は悪い。

調査経過 平成 4 年度に行われた京都南道路建設に伴う発掘調査により、本墳の存在が判明した。

墳丘の形態・外表施設 墳丘の形態は方墳であり、段築は不明である。規模は 21.5 m と推定される。

外表施設は、元位置をとどめた埴輪が検出されていないが、周溝から埴輪片がいくつか出土していることから、埴輪列をめぐらせていたことが想定される。また、円筒埴輪の他に、家形埴輪、蓋形埴輪が出土している。葺石については、転落石すら全く認められないことから、敷設されていなかったものとみられる。

埋葬施設 不明。

副葬品等 不明。

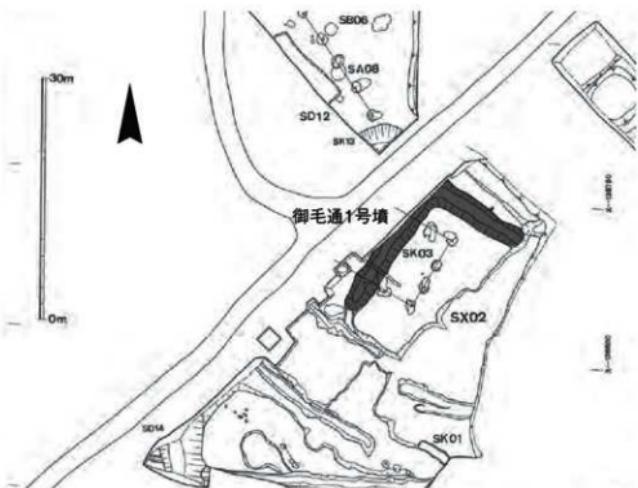
歴史的価値 ヒル塚古墳に次ぐ規模の方墳である。調査時点で削平を大きく受けている古墳であったため、埋葬施設などの詳細は不明であるが、良好な残存状態の蓋形埴輪が出土しており、当該期の蓋形埴輪を検討するうえで貴重な資料と言える。また、近隣には同じ規模の円墳である御毛通 2 号墳も所在しており、地域の古墳群を評価するうえで重要な資料であるといえる。

(吉田)

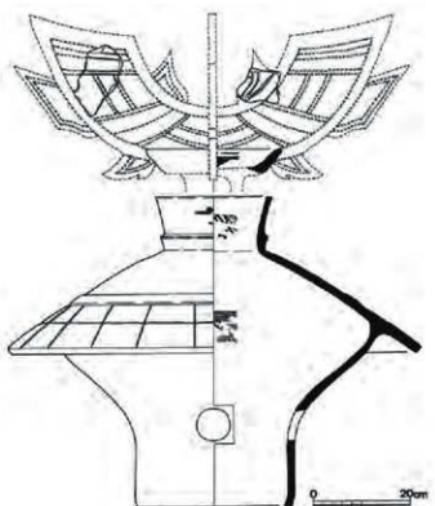
【参考文献】

- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994 「京都南道路関係遺跡平成 4 年度発掘調査概要 (2) 荒坂遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 56 冊
下垣仁志 2021 「男山古墳群の動向」『季刊考古学・別冊 34 植井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権－』 雄山閣

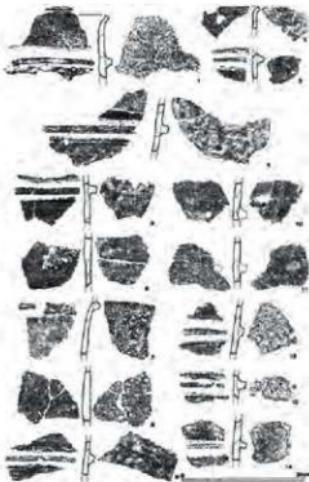
5 繼喜古墳群を形成する古墳（八幡市域）



第72図 遺構平面図 ($S=1/600$) (京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994)



第73図 蓋形埴輪 ($S=1/10$) (京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994)



第74図 墳輪 ($S=1/8$) (京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994)

14. 御毛通 2 号墳 八幡市美濃山御毛通

立地 丘陵上 標高 46 m 現況 全壊 墳形 円墳 周溝 有り 段築 不明 墳長 推定 22 m
外表施設 墓輪列（推定）埋葬施設 不明 主な副葬品 不明

概要 御毛通 2 号墳は、八幡市美濃山御毛通に所在していた。当古墳は、美濃山丘陵頂部の平坦面に位置する、推定径 22 m の円墳である。

現地表上に痕跡を残さないわゆる「埋没古墳」であり、平成 24・25（2012・2013）年に行われた調査により、その存在が明らかとなった。墳丘は削平されており、埋葬施設があったと想定される場所には里道が通っていることから、その詳細については不明である。

調査経過 新名神高速道路の橋脚建設が予定され、それに伴う発掘調査が平成 24 年～25 年にかけて実施された。

墳丘の形態・外表施設 墳丘の形態は円墳であり、段築は不明である。外表施設については、周溝から多数の埴輪片が出土したことから、埴輪列がめぐっていたことが想定される。また、円筒埴輪の他にも、家形埴輪や鶴形埴輪の出土もみられる。

歴史的価値 調査当時すでに大きな削平を受けていたことから埋葬施設や副葬品などの詳細は不明な点が多い。しかし出土遺物には家形埴輪や鶴形埴輪があり、特に家形埴輪は残存状態が良好であり、当該期の家形埴輪を検討するうえで貴重な資料と言える。また、付近に御毛通 1 号墳が所在していることからも、地域の古墳群について検討するうえで重要な資料であるといえる。

（吉田）

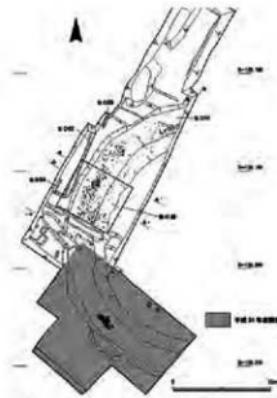
【参考文献】

京都府埋蔵文化財調査研究センター 2014 「新名神高速道路整備事業関係遺跡（1）女谷・荒坂横穴群第 13 次」「京

都府遺跡調査報告集」第 157 冊

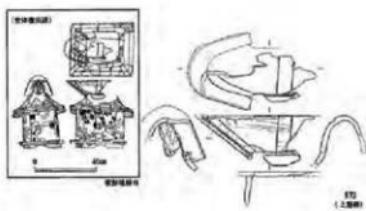
京都府埋蔵文化財調査研究センター 2017 「御毛通古墳群第 3

次」「京都府遺跡調査報告集」第 168 冊

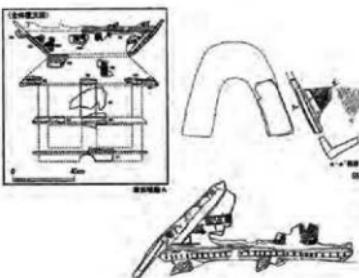


第 75 図 遺構平面図 (S = 1/500) (京都府埋蔵文化財調査研究センター - 2019)

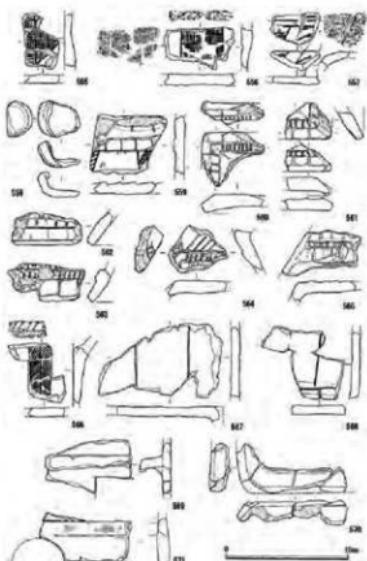
5 繁喜古墳群を形成する古墳（八幡市域）



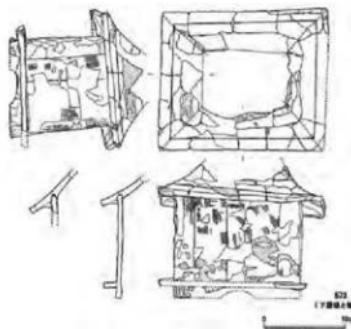
第76図 家形埴輪実測図（S =1/6・1/30）（京都府埋蔵文化財調査研究センター 2014）



第77図 家形埴輪（S =1/10）（京都府埋蔵文化財調査研究センター 2014）



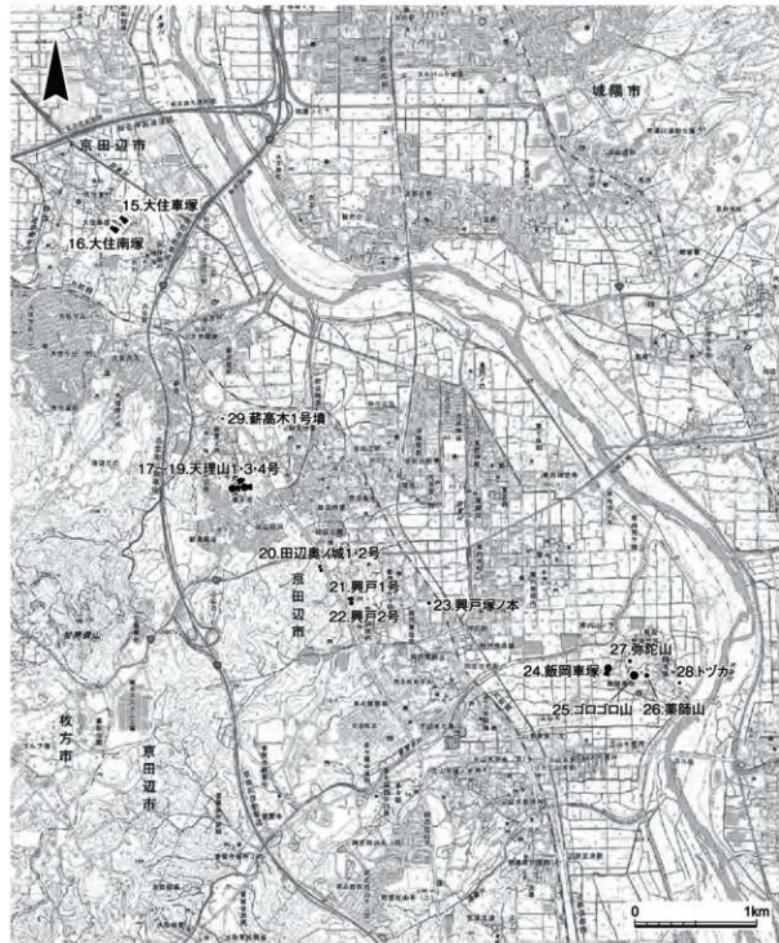
第78図 家形埴輪実測図（S =1/4）（京都府埋蔵文化財調査研究センター 2014）



第79図 家形埴輪（S =1/6）（京都府埋蔵文化財調査研究センター 2014）

6 綴喜古墳群を形成する古墳（京田辺市域）

本章では、京田辺市域に所在する首長墓の概要を個票形式で報告する。個票作成は京田辺市文化スポーツ振興課が主に担当し、今回の調査事業で判明した情報については、適宜事務局が補足した。



第 80 図 綴喜古墳群（京田辺市域・地理院地図 S=1/40,000）

15. 大住車塚古墳 京田辺市大住八王寺

立地 緩傾斜地 標高 28 m 現況 完存

墳形 前方後方墳 周溝 あり 後方部段築 不明 前方部段築 不明

墳長 66 m

外表施設 莢石 墳輪

埋葬施設 不明

主な副葬品 不明

概要 大住車塚古墳は標高 28 m の緩傾斜地に立地する前方後方墳である。昭和 49 (1974) 年 6 月 11 に国史跡として指定（文部省告示第 107 号）され、現在は市有地である。別名チコンジ山（智光寺山）古墳とも呼ばれる。大住車塚古墳から南西約 65 m の地点に、大住南塚古墳が位置している。また大住車塚古墳の南東側には姫塚古墳（円墳）があり、陪塚とみられている。

調査経過 大正 11 (1922) 年、京都府史蹟勝地調査会が現地踏査を行った。その報告では葺石を有する前方後円墳であると認識されていたが、昭和 45 (1970) 年に改めて京都府教育委員会によって測量調査が実施された。測量図を基に龍谷大学が昭和 47 (1972) 年に報告を行い、墳丘長 66 m の前方後方墳と位置付けた。その後調査は行われていないが、平成 18 (2006) 年に前方部墳頂で埴輪片が採集されている。

墳丘の形態・外表施設 大住車塚古墳は墳丘長 66 m 、前方部幅 18 m 、後方部一辺 30 m 、前方部の高さ 1.5 m 、後方部の高さ 4.5 m を測る。

埋葬施設 未調査のため詳細は不明であるが、堅穴式石棺または粘土棺と想定される。

歴史的価値 南東に位置する大住南塚古墳と同規模の前方後方墳であり、2 基が並列する前方後方墳として非常に貴重である。

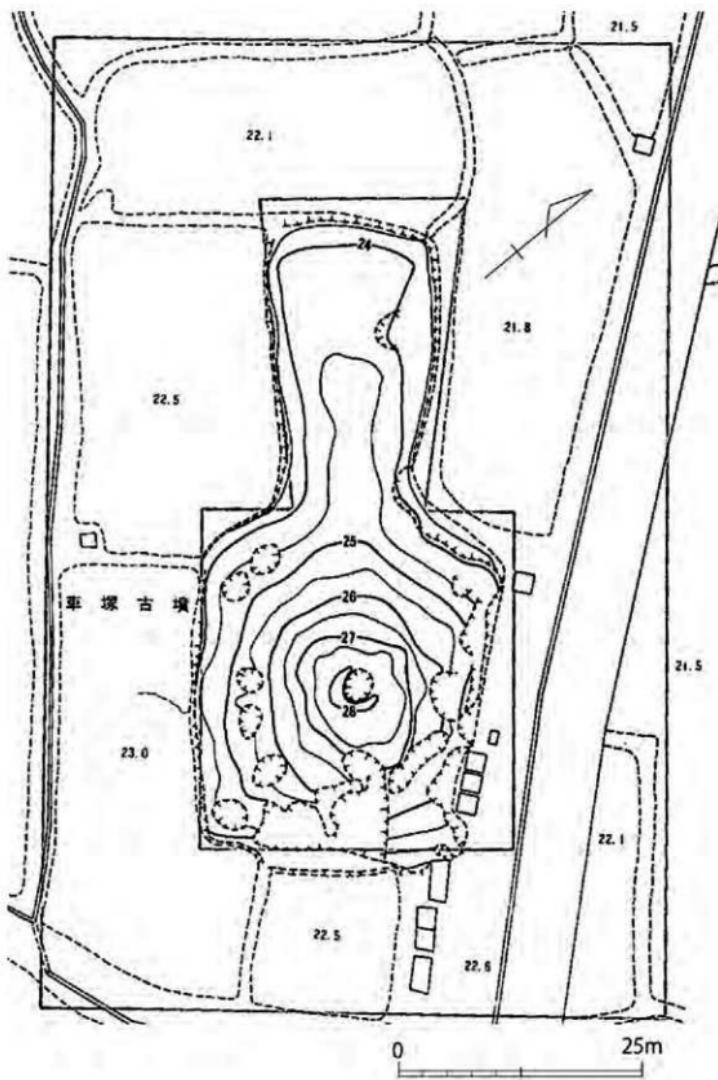
(上野)

【参考文献】

梅原末治 1922 「大住村車塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第 3 冊 京都府

万波俊介 1972 「II 級喜郡 7. 大住車塚古墳」『南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室研究報告 I

龍谷大学文学部考古学資料室



第 81 図 大住車塚古墳測量図 ($S=1/500$) (万波 1972)

16. 大住南塚古墳 京田辺市大住八王寺

立地 緩傾斜地 標高 27 m 現況 完存

墳形 前方後方墳 周溝 あり 後方部段築 不明 前方部段築 不明

墳長 71 m

外表施設 葦石 墳輪

埋葬施設 壓穴式石槨

主な副葬品 伝 石製品 刀剣

概要 大住南塚古墳は標高 27 m の緩傾斜地に位置する墳丘長 71 m の前方後方墳である。墳丘南西側（前方部）は削平を受け、大半が消滅している。また北東約 65 m の地点に国史跡大住車塚古墳（前方後方墳）が位置している。

調査経過 大正 11（1922）年、京都府史蹟勝地調査会によって行われた現地踏査では、墳長約 33 間、後円部の直径約 18 間、高さ約 8 尺の規模を有する前方後円墳とされた。南塚古墳は当時調査した際には既に大きく形を損なっており、埋葬施設は盗掘されていた。埋葬施設は壓穴式石槨であり、石製品と刀剣が出土したと伝わる。

昭和 47（1972）年龍谷大学が測量調査を実施した。茶畠・柿畠として開墾されていたために、墳丘は一部削平されていたが、周溝は良好に遺存しており、外堤を含めた古墳の墳丘長は約 115 m、後方部付近の幅は約 70 m を測る。

昭和 61（1986）年、田辺町教育委員会によって初めての発掘調査が実施された。その結果、墳丘には葦石が施され、埴輪を有する古墳であることが明らかになった。また、南側くびれ部から検出した葦石が後方部にかけて直線的に延びていることから、従来考えられていた前方後円墳ではなく、前方後方墳の可能性が浮上した。昭和 62（1987）年、田辺町教育委員会は墳形の確定を目的に調査を行い、後方部の隅が直角に屈曲する状況を確認し、前方後方墳であることが明らかになった。

墳丘の形態・外表施設 墳丘長 71 m、前方部幅 30 m、後方部一辺最大 37 m を測る。古墳の周りには長方形周溝がめぐり、その規模は長辺 103 m、短辺 73 m を測る。古墳は南西側の丘陵を削り外堤を成形している。昭和 62（1987）年に田辺町教育委員会が実施した前方部墳丘の調査区では、墳丘裾部で基底石と葦石を検出している。葦石は地山を削り出して施されている部分と、地山を削り出したのち若干の盛土をおこない葦石を施す部分がみられる。埴輪は円筒埴輪・朝顔形埴輪・楕円筒埴輪・家形埴輪が出土している。おもに南側くびれ部（第 5 トレンチ）と南側外堤付近（第 6-2 トレンチ）から出土しており、それ以外の調査区からの出土は少ないとされる。元々の数量が少なかったと推測される。

歴史的価値 北東側に位置する大住車塚古墳と並列する前方後方墳であり、2 基並ぶ前方後方墳として非常に貴重である。

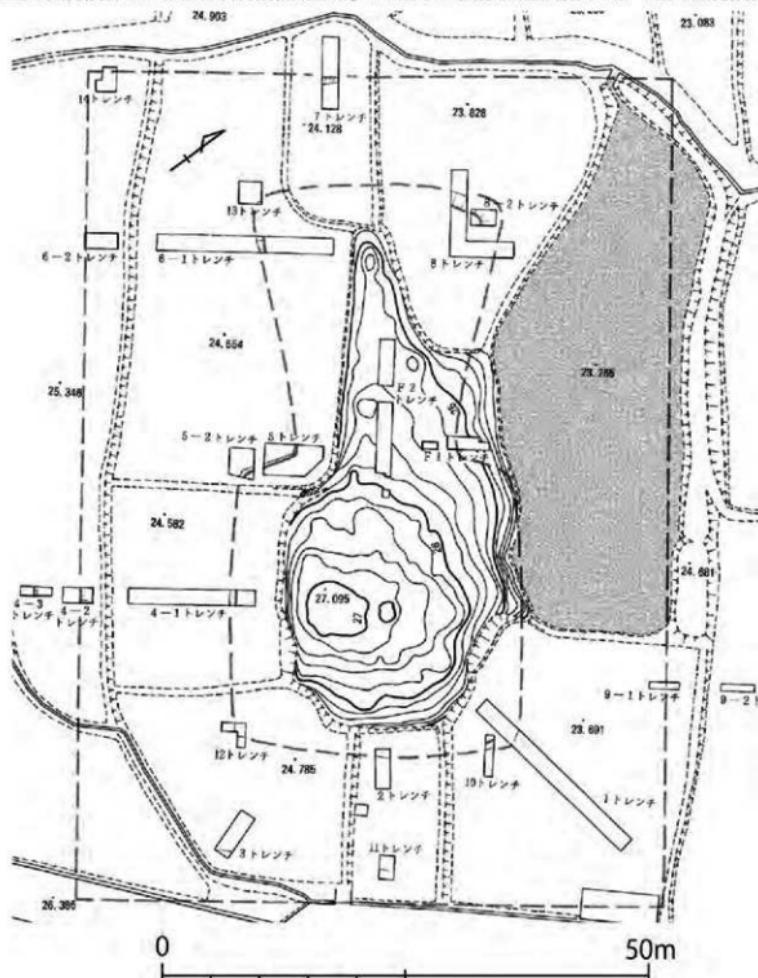
（上野）

【参考文献】

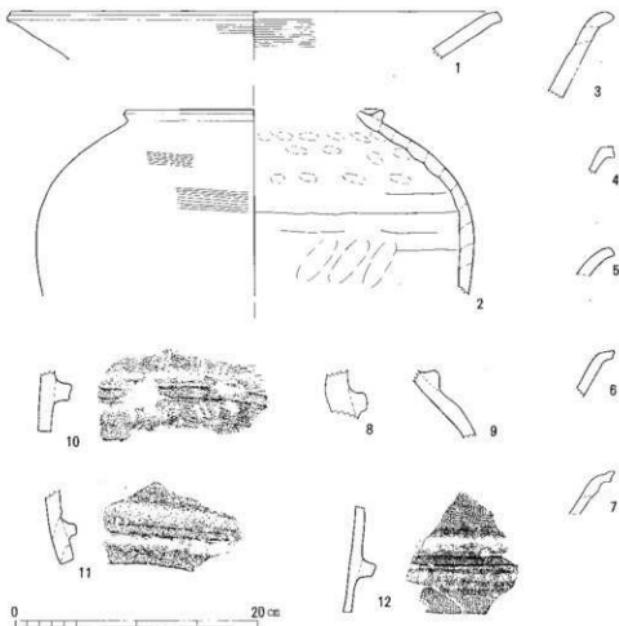
梅原来治 1922 「大住村車塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第3冊 京都府

奥村清一郎 1972 「Ⅱ 緋喜郡 8. 大住南塚古墳」『南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室研究報告
I 龍谷大学文学部考古学資料室

田辺町教育委員会 1986 「大住南塚古墳発掘調査概報」田辺町埋蔵文化財調査報告書第6集 田辺町教育委員会
田辺町教育委員会 1987 「大住南塚古墳発掘調査概報」II 田辺町埋蔵文化財調査報告書第7集 田辺町教育委員会



第82図 大住南塚古墳測量図 (S=1/500) (田辺町教育委員会 1987)



第 83 図 大住南塚古墳埴輪実測図 (S=1/4) (田辺町教育委員会 1987)

17. 天理山 1 号墳 京田辺市薪山塙外

立地 丘陵 標高 92 m 現況 完存 墳形 前方後円墳 周溝 なし 段築 あり 墓長 57 m
外表施設 墓輪 埋葬施設 伝 粘土櫛 主な副葬品 不明

概要 天理山古墳群は国指定名勝禰恩庵庭園を有する禰恩庵一休寺の裏山に所在する古墳群である。古墳群は 3 基の古墳で構成されており、そのうち天理山 1 号墳は標高 92 m に位置する前方後円墳である。敷地内は山林や竹林で覆われている。丘陵の周辺は近年の宅地造成により開発が進んでいる。天理山 1 号墳は、天理山 3 号墳と同一丘陵に位置しており、天理山古墳群の中でもっとも高い場所に位置している。後円部西側は擾乱を受けており、土砂掘削によるものと推測される。

調査経過 天理山 3 号墳は、昭和 31 (1956) ~ 34 (1959) 年に田辺郷土史会によって行われた分布調査により確認された。その際「3 型式の須恵器高杯の破片と円筒埴輪の一部分」が採取されたとの記述がみられる。その後京都府教育委員会によって昭和 36 (1961) 年に行われた分布調査で、墳頂には浅い窪みがみられ、後円部の削平を受けている断面には粘土櫛が露出しているとの記述がある。令和 3 (2021) 年、宅地造成計画により京田辺市が試掘調査を実施し、前方後円墳であることが明らか

かになった。

墳丘の形態・外表施設 天理山1号墳は墳丘長57m、後円部直径38.6m、最大高5mを測り、地山を削り出して造られた古墳である。葺石や転落石を検出していないことから、もとより葺石は施していなかったと考えられる。墳丘からは円筒埴輪と形象埴輪（家形埴輪）の破片が出土しているが数量は少なく、墳頂にのみ埴輪を樹立していた可能性が高い。

埋葬施設 粘土櫛か

副葬品等 不明

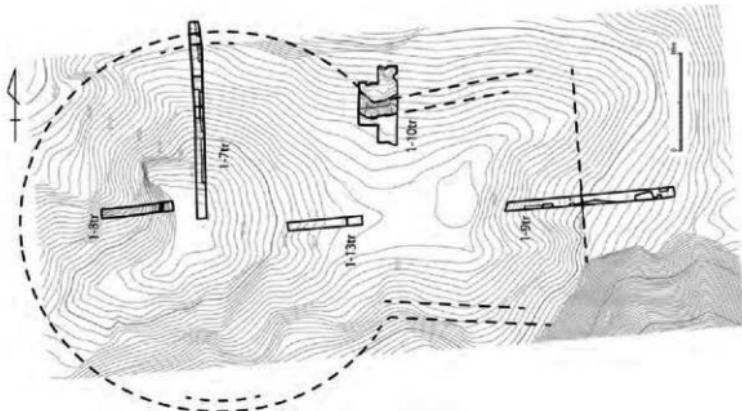
歴史的価値 天理山1号墳は京都盆地や木津川を一望できる丘陵の最高所に築造されており、天理山古墳群の中でももっとも標高の高い位置に築造されている。東側には葺石と埴輪列を有する天理山3号墳が位置しており、その立地から双方は深い関係にあると考えられる。

（上野）

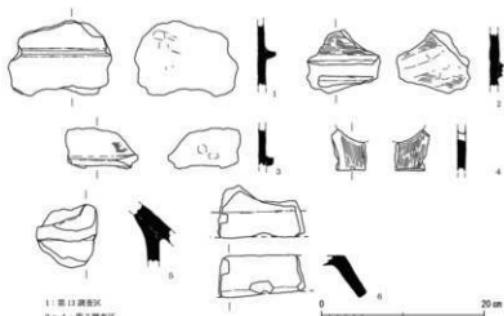
【参考文献】

田辺郷土史会 1959『田辺町郷土史古代篇』田辺郷土史会

京田辺市 2022『天理山古墳群発掘調査報告書』京田辺市埋蔵文化財発掘調査報告書第44集



第84図 天理山1号墳測量図 (S=1/500)



第 85 図 天理山 1 号墳出土埴輪 (S=1/4) (京田辺市 2022)

18. 天理山 3 号墳 京田辺市薪山塙外

立地 丘陵 標高 86 m **現況** 完存 **墳形** 前方後円墳 **周溝** なし **段築** あり **墳長** 81 m
外表施設 葦石 墓輪 埋葬施設 不明 **主な副葬品** 不明

概要 天理山古墳群は国指定名勝酬恩庵庭園を有する酬恩庵一休寺の裏山に位置する古墳群である。3基の古墳で構成される古墳群であり、そのうち天理山 3 号墳は標高 86 m に位置する前方後円墳である。天理山 3 号墳は天理山 1 号墳の東隣に位置している。墳丘は一部形が崩れているが、比較的良好に遺存している。

調査経過 天理山古墳群が初めて認識されたのは、昭和 31 (1956) ~ 34 (1959) 年に実施された田辺郷土史会の分布調査である。その後令和 3 (2021) 年、宅地造成計画により京田辺市が試掘確認調査を実施し、前方後円墳であることが明らかになった。

墳丘の形態・外表施設 天理山 3 号墳は墳丘長 81 m、後円部直径 42 m、最大高 7.6 m の規模を有する前方後円墳である。丘陵の地山を削り出して造られており、外表施設として葦石および埴輪列を有している。基底石は長辺約 30 cm で、長軸を横向きに配置している。葦石は約 15 cm であり、古墳の斜面と平坦面に施されている。埴輪列は墳丘北側のくびれ部平坦面で検出した。令和 3 年度の調査では、後円部側に 4 本、くびれ部に 1 本、前方部に 1 本の円筒埴輪列を検出している。埴輪は直径が約 40 cm を測り、0.8 ~ 1 m の間隔で樹立されている。くびれ部付近には朝顔形埴輪の破片が出土していることから、くびれ部には朝顔形埴輪を樹立していたと考えられる。また前方部北側裾付近から埴輪棺を 1 基検出している。

埋葬施設 不明

副葬品等 不明

歴史的価値 外表施設や時期が判明している事例として貴重である。天理山古墳群の周辺では以前から後期古墳が多く知られていたが、今回新たに前方後円墳が存在することが判明した。飯岡車塚古墳を除き、墳丘長 70 m を超える古墳は確認されていなかったが、天理山 3 号墳が新たに発見され、木

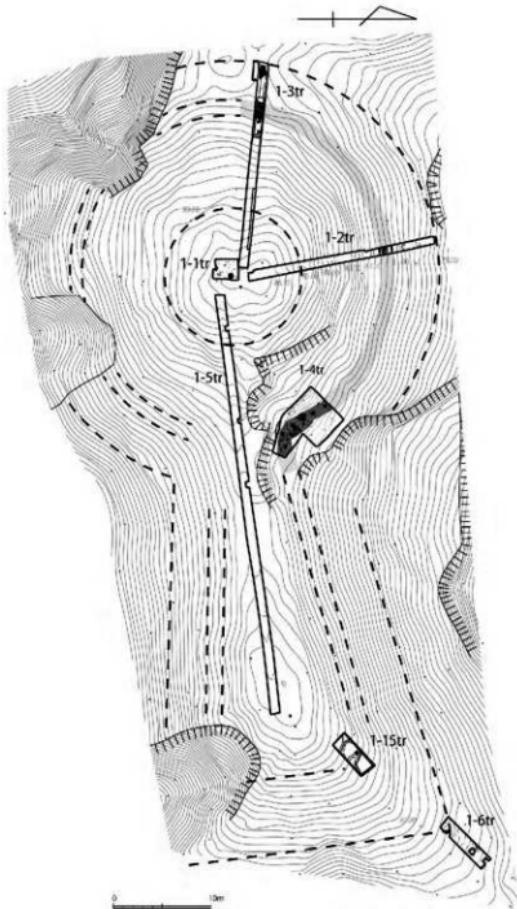
津川左岸の有力首長墓系譜をたどるにあたり非常に重要である。また後円部墳頂には盜掘や陥没とみられる痕跡がなく、主体部が遺存している可能性がある。

(上野)

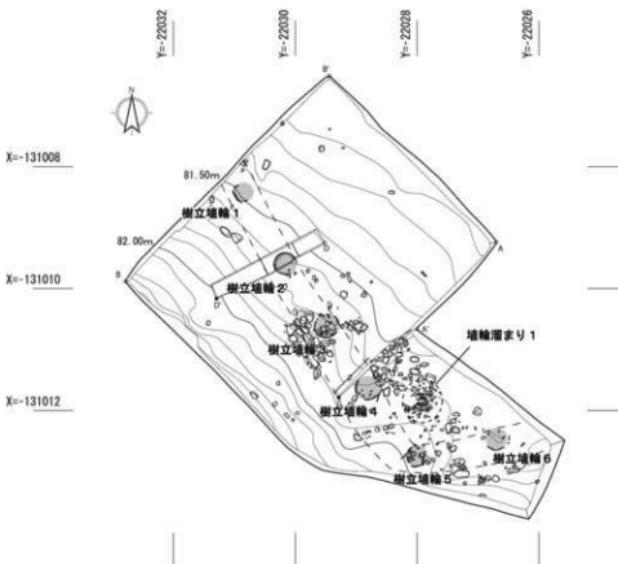
【参考文献】

田辺郷土史会 1959 『田辺町郷土史古代篇』 田辺郷土史会

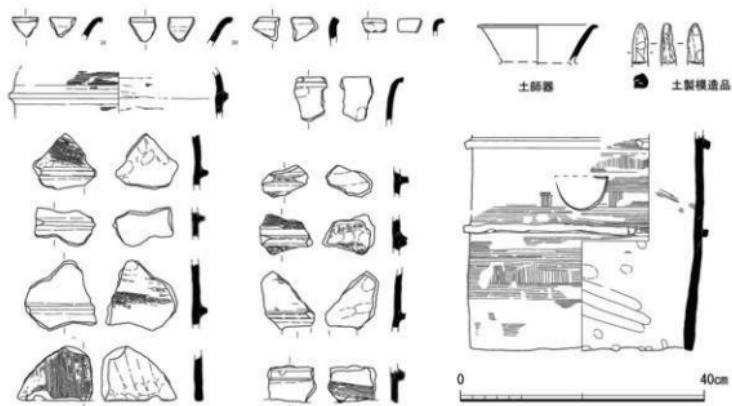
京田辺市 2022 『天理山古墳群発掘調査報告書』 京田辺市埋蔵文化財発掘調査報告書第44集



第 86 図 天理山 3 号墳測量図 (S=1/500)



第 87 図 天理山 3 号墳北側くびれ部 (S=1/80) (京田辺市 2022)



第 88 図 天理山 3 号墳出土埴輪・土師器・土製模造品 (S=1/8) (京田辺市 2022)

19. 天理山 4 号墳 京田辺市薪山塙外

立地 丘陵 標高 76 m 現況 完存 墳形 前方後方墳 周溝 なし 段築 なし 墳長 42 m
外表施設 なし 埋葬施設 粘土櫛または木棺直葬 主な副葬品 不明

概要 天理山古墳群は国指定名勝酬恩庵庭園を有する酬恩庵一体寺の裏山に位置する古墳群である。天理山古墳群は3基の古墳で構成される古墳群であり、そのうち天理山4号墳は標高76mに位置する前方後方墳である。1号墳と3号墳が位置する丘陵から北側に谷を挟んで独立して位置する。墳丘は良好に遺存しており、現状は竹林である。

調査経過 昭和57（1982）年、田辺町教育委員会の分布調査により確認された。その後調査は行わなかったが、令和3（2021）年宅地造成計画により京田辺市が試掘調査を実施した。

墳丘の形態、外表施設 天理山4号墳は墳丘長42m、後方部一辺23m、前方部幅14m、最大高6mを測り、地山を削り出して造られた古墳である。葺石や転落石、埴輪の検出はなく、最初から葺石と埴輪を施していなかったと考えられる。墳頂からは土師器が出土している。

埋葬施設 粘土櫛または木棺直葬である。墓坑は墳丘の主軸にはば沿っており、その規模は長辺6.3m、短辺3.7mである。

副葬品等 不明

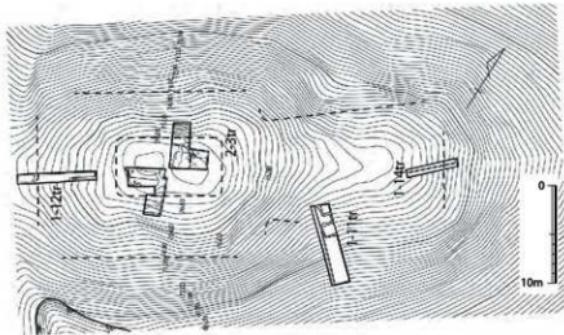
歴史的価値 墓輪を有しておらず、段築もないこと、土師器に古い様相が認められることから、群中最古の古墳である可能性が高い。

（上野）

【参考文献】

田辺郷土史会 1959『田辺町郷土史古代篇』田辺郷土史会

京田辺市 2022『天理山古墳群発掘調査報告書』京田辺市埋蔵文化財発掘調査報告書第44集



第89図 天理山4号墳測量図 (S=1/500)

20. 田辺奥ノ城 1・2号墳 京田辺市田辺奥ノ城

立地 丘陵上 標高 82 m 現況 全墳 墳形 方墳 周溝 あり 段築 不明 墳長 36 m

外表施設 墓輪 埋葬施設 不明 主な副葬品 不明

概要 田辺奥ノ城 1号墳は田辺城跡から発見された一辺 36 m の方墳である。田辺奥ノ城 2号墳は規模が明らかでない。現在は 2基ともに山林になっており、墳丘の上部は削平を受けている。

調査経過 平成 8(1996)年、田辺城跡の東側で道路建設が計画されたことから発掘調査が行なわれた。

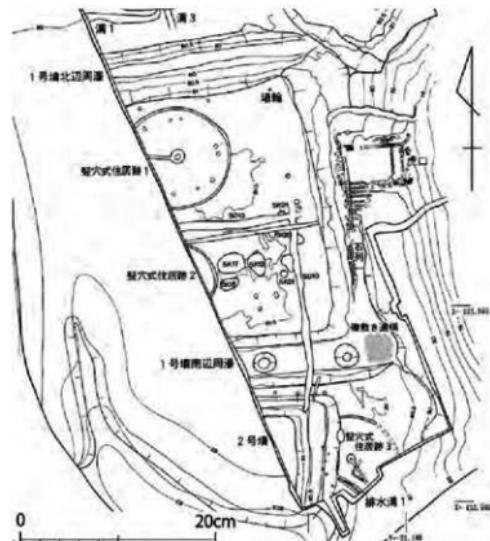
墳丘の形態・外表施設 田辺奥ノ城 1号墳は一辺 36 m 前後と推定される方墳である。主体部は削平されている。周濠からは埴輪（円筒埴輪・朝顔形埴輪）や須恵器（壺・堤瓶）が出土している。2号墳は周濠から朝顔形埴輪と形象埴輪（家形・鶴形・馬形・甲冑形埴輪）が出土している。また、1号墳北東部の包含層からは緑色凝灰岩製管玉が出土している。

歴史的価値 2基の古墳が並列しており、また多様な形象埴輪を含む埴輪が出土していることは注目される。興戸塚ノ本古墳と同様に興戸古墳群に続く人物の墓と推測されるが、奥ノ城 1・2号墳は興戸古墳群と一帯の丘陵に位置しており、その関係の深さがうかがえる。

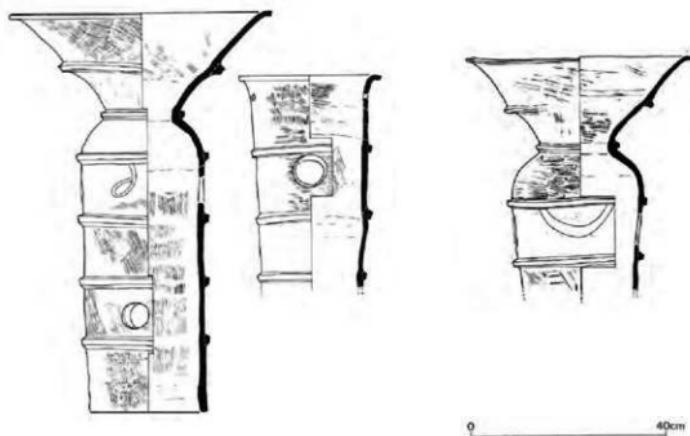
(上野)

【参考文献】

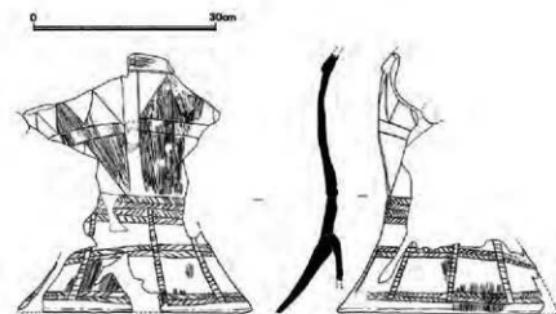
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997 「6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡発掘調査概要」
『京都府遺跡調査概報』第 77 集



第 90 図 田辺奥ノ城 1・2 号墳平面図 (S=1/500) (京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997)



第91図 田辺奥ノ城1号墳出土埴輪実測図 (S=1/10) (京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997)



第92図 田辺奥ノ城2号墳出土甲冑形埴輪実測図 (S=1/8) (京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997)

21. 興戸1号墳 京田辺市興戸山添

立地 丘陵上 標高 88m 現況 完存 墳形 前方後円墳 周溝 あり 後円部段築 不明 前方部段築 不明 墓長 24m 外表施設 なし 埋葬施設 粘土櫛
主な副葬品 鉄刀片

概要 興戸1号墳は南北に延びる丘陵上に造られた墳丘長24mの前方後円墳である。現在は後円部北側および周溝の一部に鉄塔が建てられている。

調査経過 昭和 18（1943）年、興戸 2 号墳の現地調査に京都府史蹟調査会が赴いた際に、「同一丘陵に古墳が数基あり」と報告され、興戸 2 号墳以外にも古墳が存在することが認識されている。昭和 56（1981）年に田辺町教育委員会が測量調査を実施し、墳丘長約 24 m の前方後円墳であることが確認された。平成 6（1994）年に鉄塔建て替え工事に伴い発掘調査を行った。

墳丘の形態・外表施設 墳丘長 24 m、後円部径 17 m、前方部幅 7 m、後円部高さ 1.5 m の前方後円墳である。墳丘盛土には弥生時代の土器が含まれており、周辺には弥生時代の遺跡が存在する可能性がある。埴輪や葺石を持たず、墳丘の北側には幅約 3 m、深さ約 1 m の周溝を有している。

埋葬施設 ほぼ南西方向に軸をもつ粘土櫛が確認されている。平成 7（1995）年の調査によると、明確な粘土床ではなく、使用している粘土も精良な白色粘土ではなく、粘土櫛としてはもっとも簡略化したものと考えられる。

副葬品等 鉄刀片が出土したと伝わる。

歴史的価値 興戸 1 号墳は前方部の開かない前方後円墳であり、墳丘長 24 m と小規模ではあるが南西に隣接する興戸 2 号墳と深い関係が想像される。

（上野）

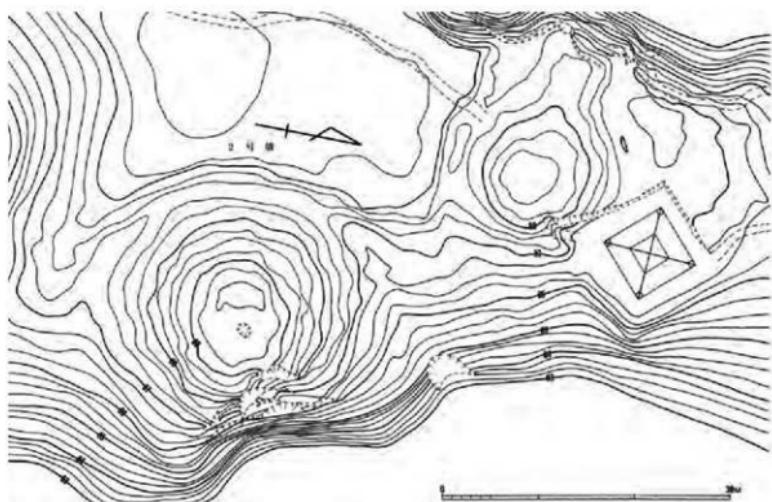
【参考文献】

梅原末治 1955 「第三 田邊町興戸の古墳」『京都府文化財調査報告』21

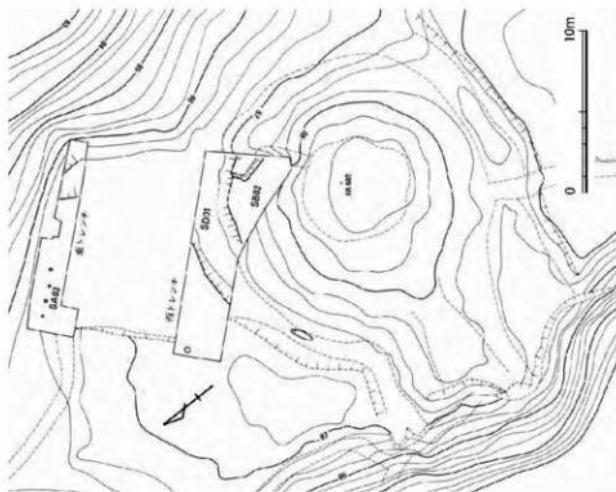
田辺町教育委員会 1981 「1. 興戸古墳群発掘調査概報」「田辺町埋蔵文化財調査報告」第 2 集

田辺町教育委員会 1982 「8. 興戸古墳群」「田辺町埋蔵文化財調査報告」第 3 集

田辺町教育委員会 1995 「興戸遺跡第 12 次・興戸古墳群発掘調査概報－関西電力高島線鉄塔建替地の調査－」田辺町埋蔵文化財調査報告書第 19 集



第 93 図 興戸 1・2 号墳測量図 (S=1/500) (田辺町 1982)



第94図 興戸1号墳測量図 (S=1/300) 田辺町教育委員会 1995

22. 興戸2号墳 京田辺市興戸山添／寿命寺

立地 丘陵上 標高 90 m 現況 完存 墳形 円墳 周溝 あり 段築 不明 墓長 28 m

外表施設 芝石 増輪 埋葬施設 粘土櫛（割竹形木棺）

主な副葬品 内行花文鏡 石製品 管玉 鉄劍

概要 興戸1号墳の南東に存在する円墳である。別名寿命寺古墳とも呼ばれる。直径28m、高さ約2.5m、西側には幅7mの周溝が半周する。現在は山林に覆われている。

調査経過 興戸2号墳は大正3（1914）年8月に盗掘された。盗掘された出土品は、大正5（1916）年に発生したいわゆる皇陵盗掘事件の際、他の古墳の副葬品とともに奈良地方裁判所に押収された。その後昭和12（1937）年、裁判所から奈良帝室博物館（当時）に「北和城南古墳」出土遺物として引き渡された。昭和18（1943）年、京都府史蹟調査会が現地に赴き、測量や遺物の採取を行った。当時古墳の表面には増輪の他に副葬品の破片も散在していたようである。その際の採集品や一部の博物館所蔵資料が報告された。その後平成29（2017）年、奈良国立博物館が北和城南古墳出土遺物として所蔵している遺物の報告を行った。

埴丘の形態・外表施設 直径28mの円墳であり、円筒埴輪、家形埴輪が出土している。昭和30（1955）年の京都府史蹟調査会が行った調査で採取された埴輪は、赤褐色で器壁が薄く、方形透孔の一部と見られる破片がある。口縁部はやや外反している。また墳頂北側からは家形埴輪の破片が採取された。家形埴輪は間口3間、奥行2間の入母屋造りと考えられる。家形埴輪の壇部には線刻が入る。

埋葬施設 円墳の中央に、東北東に主軸をもつ粘土櫛が構築される。昭和18（1943）年には埋葬施

設の一部はすでに腐朽や盗掘の際に破壊された影響を受けていたようであるが、現地には直径1尺5、6寸の円筒形の空洞が残存していた。空洞は内側がすべて粘土で固められており、中心部分には本来削竹形木棺が存在していたとみられる。

副葬品等 現在判明している興戸2号墳の副葬品は、内行花文鏡、鍬形石、車輪石、石鉗、管玉、紡錘車、鉄劍である。多くの遺物は大正3年に盗掘されており、北和城南古墳として報告されている。

その中で鍬形石と石鉗は、栗野謙氏によって採集され、現在京都大学総合博物館と京都府立山城郷土資料館に収蔵されている興戸2号墳採集遺物と接合関係にあるものもみられる。

歴史的価値 小規模な円墳であるが豊富な副葬品を有しており、その様相が明らかになっている事例として貴重である。

(上野)

【参考文献】

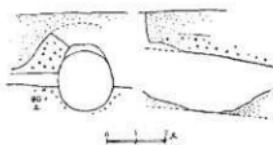
梅原末治 1955 「第三 田邊町興戸の古墳」『京都府文化財調査報告』21

京都大学文学部 1968 「京都大学文学部考古学資料目録」2

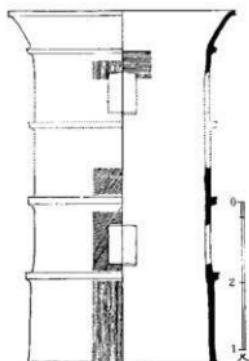
田辺町教育委員会 1981「1. 興戸古墳群発掘調査概報」「田辺町埋蔵文化財調査報告」第2集

田辺町教育委員会 1982「8. 興戸古墳群」「田辺町埋蔵文化財調査報告」第3集

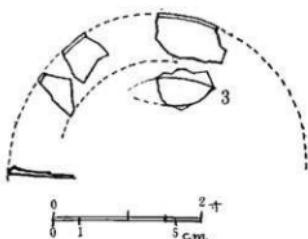
奈良国立博物館 2017 「北和城南古墳出土品調査報告書」



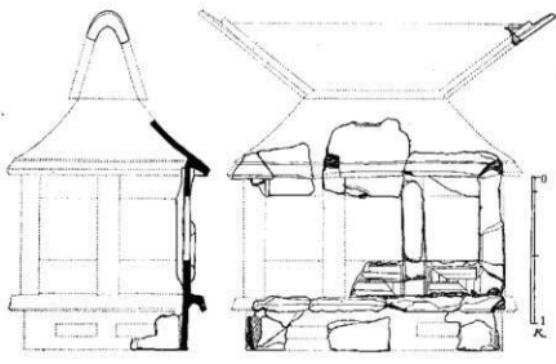
第95図 興戸2号墳粘土椁 (S=1/50) (梅原 1955)



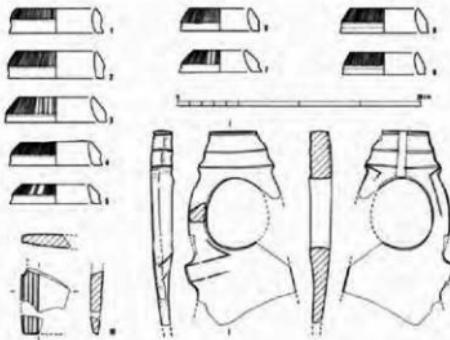
第96図 円筒埴輪 (S = 1/10) (梅原 1955)



第97図 内行花文鏡 (S=1/2) (梅原 1955)



第98図 家形埴輪 (S=1/10) (梅原 1955)



第99図 輪形石製品 (S=1/4) (田辺町 1982)

23. 興戸塚ノ本古墳 京田辺市興戸塚ノ本

立地 緩傾斜地 標高 33m 現況 全壊 墳形 方墳 周溝 あり 段築 不明 墓長 31m
外表施設 葦石 墳輪 埋葬施設 不明 主な副葬品 不明

概要 興戸塚ノ本古墳は興戸遺跡の南東側に位置している墳丘長31mの埋没古墳である。現在は住宅地として開発されている。

調査経過 平成26(2014)年、宅地造成計画に基づき試掘調査が行われ、多数の埴輪片が出土したため、平成27(2015)年2月から4月にかけて発掘調査が実施された。

墳丘の形態・外表施設 興戸塚ノ本古墳は一辺31mの方墳である。墳丘は上半部が削平されていたが、裾部分は遺存しており、基底石・葦石および埴輪を有する。墳丘は地山を削り出して成形され、部分的に盛土が検出されている。埴輪は円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（家形埴輪・蓋形埴輪）のほか、

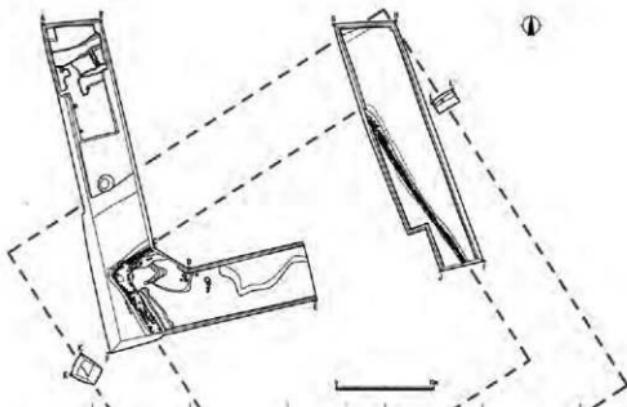
器種が不明な埴輪が出土している。また周濠からは櫛形木製品と板状木製品が出土している。

歴史的価値 興戸塚ノ本古墳は興戸古墳群に継ぐ立場の人物の墓として推測できる。造られる古墳の数が前期と比較して減少する綾喜古墳群内において、中期中葉以降にも継続する古墳の存在を示す資料として貴重である。

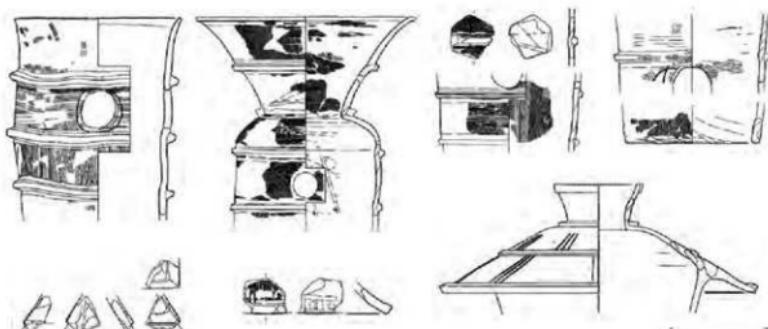
(上野)

【参考文献】

京田辺市教育委員会 2015『興戸遺跡発掘調査報告書－興戸塚ノ本地内宅地造成に伴う発掘調査－』
京田辺市埋蔵文化財調査報告書第42集



第100図 興戸塚ノ本古墳平面図 (S=1/500) (京田辺市教育委員会 2015)



第101図 興戸塚ノ本古墳出土埴輪実測図 (S=1/10) (京田辺市教育委員会 2015)

24. 飯岡車塚古墳 京田辺市飯岡西原

立地 独立丘陵 標高 27 m 現況 完存 墳形 前方後円墳 周溝 あり 段築 三段か 墳長 90 m 外表施設 莢石 墓輪 埋葬施設 壱穴式石槨

主な副葬品 腕輪形石製品 石製容器類 玉類 刀剣破片

概要 飯岡車塚古墳は墳丘長 90 m の飯岡古墳群中で最大かつ唯一の前方後円墳である。現在前方部は茶畠、後円部は竹林の荒地となっている。

調査経過 大正 8 (1920) 年に京都府史跡勝地調査会によって報告された。明治 35 (1902) 年に後円部が発掘された際には、「塚ノ全面ハ今開墾サレテ密柑畑トナリ」とあり、当時から開墾されていた様子が伺える。また当時より後円部の中心付近に石碑が建っており、壹穴式石槨の割石が散在していたようである。石製品などの多様な副葬品が出土している。その後、昭和 13 (1938) 年、日本古文化研究所報告では、墳丘長約 81 m、後円部径約 61 m、前方部幅約 45 ~ 48 m、後円部高さ約 9 m の前方部が開かない前方後円墳と位置付けている。その後、昭和 51 (1976) 年に田辺町教育委員会が道路拡張工事のための発掘調査を実施した。後円部東側墳丘裾部分で基底石、葺石および楕円筒埴輪を検出している。

墳丘の形態・外表施設 飯岡車塚古墳は墳丘長 90 m、後円部径 59 m、前方部幅 48 m、最大高 12 m の前方後円墳である。前方部があまり開かない形態をしている。

外表施設は東側墳丘裾で葺石および楕円筒埴輪を検出している。基底石は直径約 25cm、葺石は直径約 15cm である。楕円筒埴輪は基底石の 1.5 ~ 1.8 m 外側に樹立している。楕円筒埴輪は 4 条 5 段であり、2 段目と 4 段目に逆三角形の透孔を穿つ。また器壁には赤彩が施されている。周溝は堀削程度のものが存在していたと考えられる。

埋葬施設 主軸に沿って割石を小口積みした壹穴式石槨である。石室の規模は長さ約 2.4 m、幅約 1.2 m、高さ約 1.2 m である。石室の底は「砂利と粘土とで固めてあった」とあり、木棺を置く粘土床であったと思われる（堀 1972）。

副葬品等 錫形石 1、車輪石 4、石劍 24、菅玉 26、勾玉 4、小玉 1、脚付小形埴輪 1、合子 1、刀剣破片 1 が出土した。

歴史的価値 飯岡車塚古墳は京田辺市内最大の前方後円墳である。墳丘の遺存状態が比較的良好で、副葬品が判明している古墳として非常に高い価値を有している。

(上野)

【参考文献】

岩井武俊 1905 「山城國相樂緑喜両郡の古墳」『考古界』5 - 1

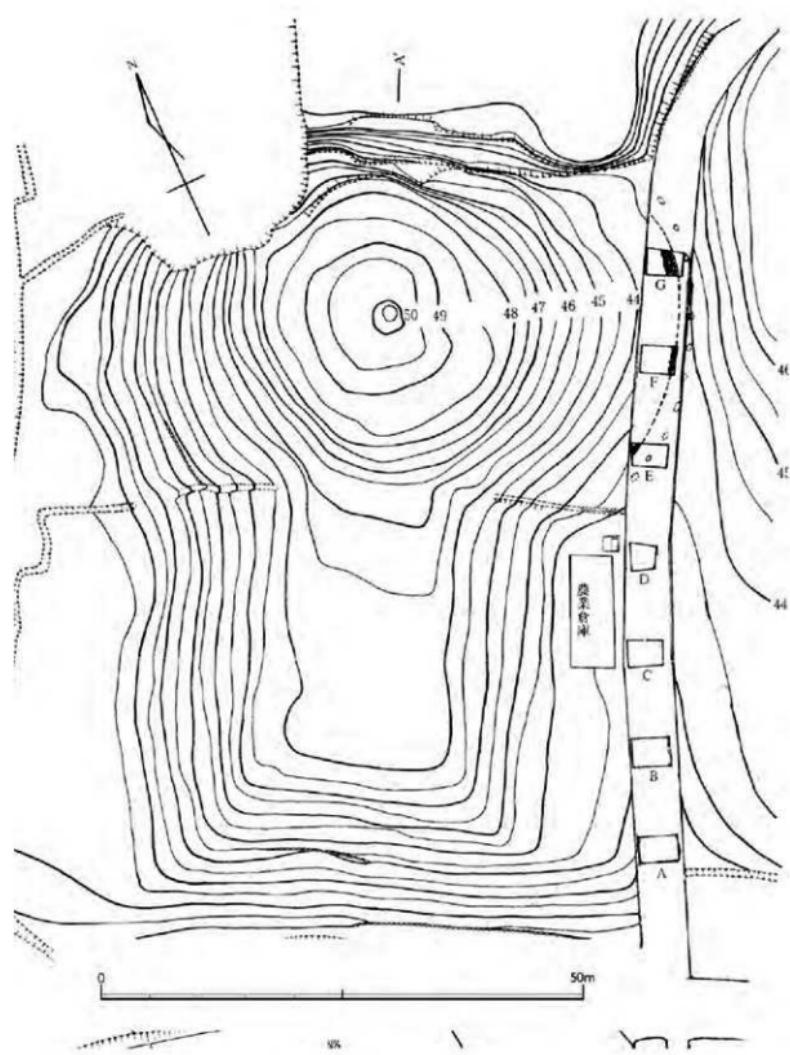
梅原末治 1920 「飯ノ岡ノ古墳」『京都府史跡勝地調査会報告』第二冊 京都府

梅原末治 1938 「山城飯岡車塚古墳」『日本古文化研究所報告』9 日本古文化研究所

堀 守 1972 「飯岡車塚古墳」「南山城の前方後円墳」龍谷大学文学部考古学研究室

田辺町教育委員会 1977 「飯岡車塚古墳発掘調査報告」

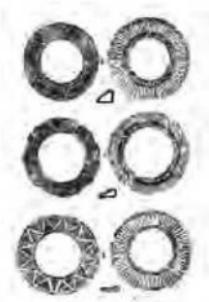
※京都府立大学考古学研究室の吉永健人氏から、飯岡車塚古墳出土埴輪図面の提供を受けた。



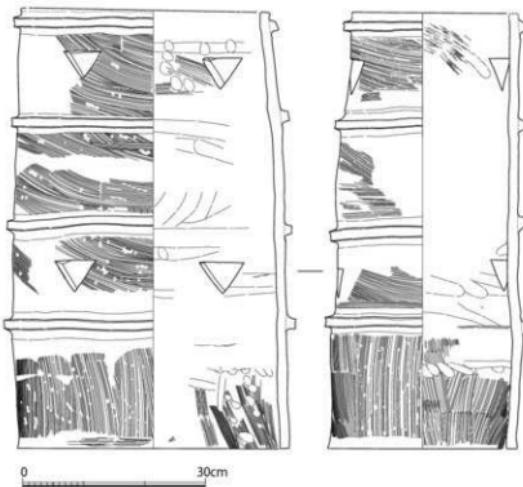
第102図 飯岡車塚古墳測量図 (S=1/500) (田辺町 1976)



第103図 後内部東側掘葺石検出状況

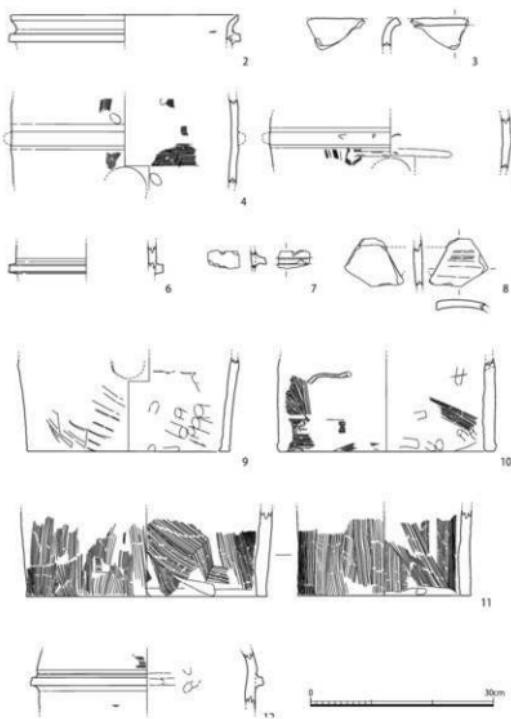


第104図 石鉗 (S=1/6)
(梅原 1938)

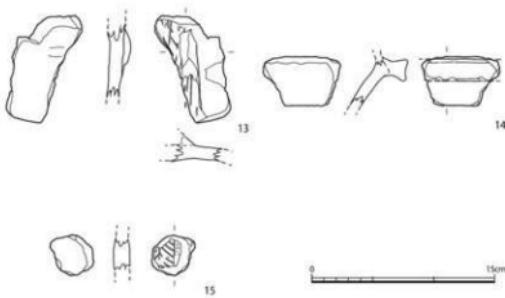


第105図 橋円筒埴輪 (S=1/8・京都府立大学 吉永健人氏提供)

6 級喜古墳群を形成する古墳（京田辺市域）



第 106 図 円筒・楕円筒・朝顔形埴輪 (S=1/8・京都府立大学 吉永健人氏提供)



第 107 図 器種不明埴輪 (S=1/8・京都府立大学 吉永健人氏提供)

25. ゴロゴロ山古墳 京田辺市飯岡中峯

立地 独立丘陵 標高 66 m 現況 完存 墳形 円墳 周溝 不明 墳長 60 m 外表施設 葦石
埋葬施設 不明 主な副葬品 不明

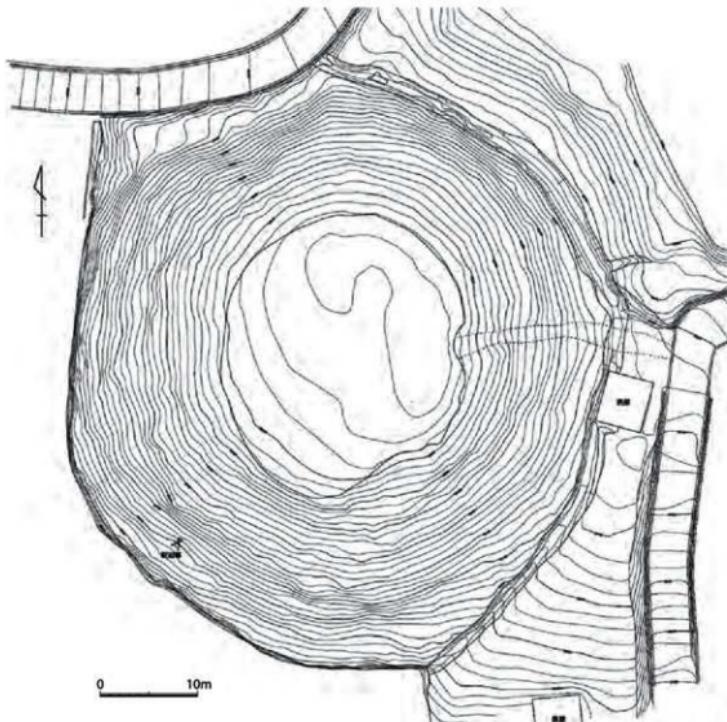
概要 ゴロゴロ山古墳は飯岡丘陵の中心に位置する円墳である。平成5（1993）年に京田辺市史跡として指定され、現在は市有地であり良好な遺存状態を保っている。別名、茶臼塚古墳や积迦山古墳とも呼ばれる。未調査のため埋葬施設や副葬品は明らかになっていない。

墳丘の形態・外表施設 墳頂の平坦面が広く、その規模は約35mにおよぶ。また墳丘の表面には葦石状の石材を確認している。

（上野）

【参考文献】

龍谷大学文学部考古学資料室 1972『南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室研究報告Ⅰ



第108図 ゴロゴロ山古墳測量図 (S=1/500) (京田辺市提供)

26. 薬師山古墳 京田辺市飯岡中峯

立地 独立丘陵 標高 67 m 現況 完存 墳形 円墳 周溝 可能性あり 墳長 38 m 外表施設
不明 埋葬施設 不明 主な副葬品 不明

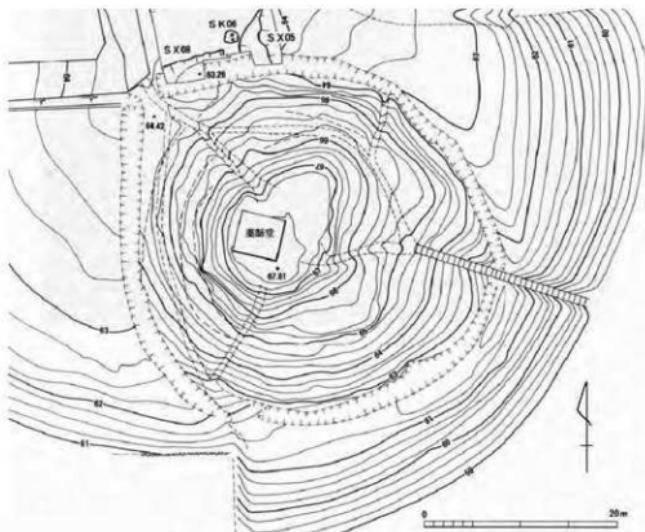
概要 薬師山古墳は径 38 m の円墳である。平成 5 (1993) 年に京田辺市の史跡として指定された。現在は市有地であり良好な遺存状態を保っている。墳頂に薬師堂を置き、現在も信仰の対象とされている。

墳丘の形態・外表施設 墳丘は未調査だが、古墳の北側で調査を行った際に掘割りの可能性がある溝を検出した。

(上野)

【参考文献】

田辺町教育委員会 1994「飯岡遺跡第5次発掘調査概報－無線基地局建設地の調査－」田辺町埋蔵文化財調査報告書第17集



第109図 薬師山古墳測量図 (S=1/500) (田辺町教育委員会 1994)

27. 弥陀山古墳 京田辺市飯岡中峯

立地 独立丘陵 標高 57 m 現況 完存 墳形 円墳 周溝 不明 墳長 28 m 外表施設 不明
埋葬施設 不明 主な副葬品 不明

概要 弥陀山古墳はゴロゴロ山古墳の北西に位置する墳長28m、高さ4mの円墳である。別名、石塚古墳とも称される。現在は竹林である。明治初期に盗掘を受け、鏡が出土したとも伝わるが、同じ丘陵のトヅカ古墳から出土した鏡と混同しての記述と思われる。未発掘であるため埋葬施設や副葬品、概評施設は明らかになっていない。

墳丘の形態・外表施設 未調査のため詳細は不明である。

(上野)

【参考文献】

田辺郷土史会 1959『田辺町郷土史 古代篇』

田辺町教育委員会 1982「10. 飯岡古墳群」『田辺町埋蔵文化調査報告』第3集

28. トヅカ古墳 京田辺市飯岡小山

立地 独立丘陵 標高28m 現況 完存 墳形 円墳 周溝 不明

墳長 25m **外表施設** 舟石、埴輪 **埋葬施設** 竪穴式石槨

主な副葬品 銅鏡、馬具、刀剣、玉類

概要 トヅカ（十塚とも・以下「トヅカ」）古墳は飯岡丘陵の東側に位置する墳丘長25mの円墳である。過去には墳頂に稻荷を祀っており、俗にチンリンサンと呼称されていたようである。現在は国有地であり竹林として管理されている。

調査経過 明治9（1876）年に売却され、樹木を伐採した際に遺物が出土し、発掘が行われた。その際出土遺物の一部は現在の京都国立博物館に所蔵された。梅原は昭和13（1938）年に再度報告を行い、古墳の底径は約六十五尺、高さ一二尺の円形であり、平坦面が狭く、北から南の裾には小溝が巡っていると報告している。墳頂には少し埋もれながら大石が8個散在している様子が確認でき、石室の天井石であるといわれている。その後現在に至るまで発掘調査は行われていないが、令和2（2020）年、京都国立博物館が所蔵しているトヅカ古墳の副葬品調査が行われ（諫早・馬渕2021）、その価値が再認識されている。

墳丘の形態・外表施設 トヅカ古墳は直径25mの円墳であり、舟石と埴輪を有することが確認されている。また昭和13（1938）年当時、墳頂には石室の天井石と見られる大石が露出していたと報告されている。また墳丘の西側と東南隅からは円筒埴輪の破片が採集されている。

埋葬施設 昭和13（1938）年の報告によると、南北に主軸をもつ竪穴式石槨とみられる。石室の長さは約十尺に近く、幅約二尺五六寸と報告されている。側壁には七八寸の丸石を積んで、深さは約3尺である。古墳の表面に露出している大石は並列して天井部を覆っている。石室の底には朱が塗られており、副葬品が多数確認できたそうである。

副葬品等 トヅカ古墳からは、銅鏡（神人車馬画像鏡・神人歌舞画像鏡・旋回式獸像鏡）、馬具（轡・杏葉）、刀剣が出土している。また勾玉2個、管玉、小玉20数点が出土したと伝わる。

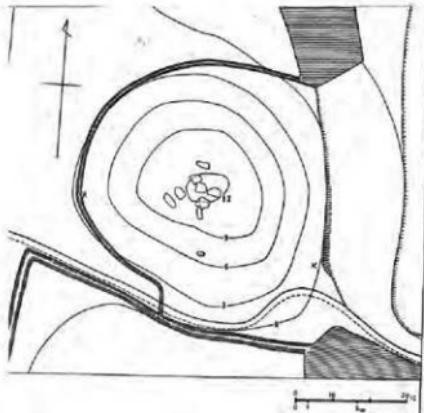
歴史的価値 副葬品が豊富であり、時期がある程度判明している事例として貴重である。久津川古墳群が強大な勢力をもつ南山城の古墳時代中期において、トヅカ古墳は規模が小さいながらも豊富な副

葬品をもつ点で貴重である。

(上野)

【参考文献】

- 梅原末治 1920 「板ノ岡ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊 京都府
 梅原末治 1938 「山城板岡トヅカ古墳」『日本古文化研究所報告』9 日本古文化研究所
 宮川直一 2014 「南山城の歴史と文化」「南山城の古寺巡礼」京都国立博物館
 謙早直人・馬渕一輝 2021 「京田辺市トヅカ古墳出土遺物の再検討」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド集報』
 第7号 京都府立大学文学部歴史学科



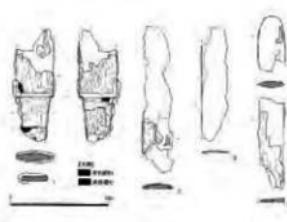
第110図 トヅカ古墳測量図 (S=1/500) (梅原 1938)



第111図 神人車馬画像鏡 (S=1/4)
 (諫早・馬渕 2021)



第112図 トヅカ古墳出土馬具実測図 (S=1/5) (諫早・馬渕 2021)



第113図 トヅカ古墳出土刀剣実測図
 (S=1/5) (諫早・馬渕 2021)

29. 薪高木1号墳 京田辺市薪高木

立地 丘陵裾 標高 34 m 現況 全壇 墳形 円墳 周溝 あり 段築 不明 墳長約 20 m 外表施設 墳輪 埋葬施設 不明 主な副葬品 不明

概要 薪高木1号墳は、京田辺市大字薪小字高木に所在する埋没古墳である。墳丘部は後世に削平を受けている。

調査経過 平成18（2006）年に道路整備に伴って、発掘調査が実施された。

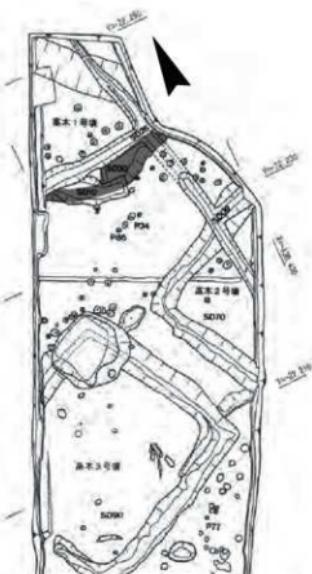
墳丘の形態・外表施設 墳丘の形態は径約20mの円墳である。墳丘部は削平をうけている。幅3.2～4.6mの周溝をもち、周溝内から円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・甲冑形埴輪が出土している。

埋葬施設・副葬品等 不明

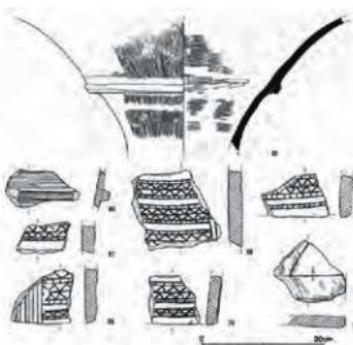
歴史的価値 薪高木1号墳は、小規模な円墳であるが、形象埴輪を有している。また、南側の丘陵上には大型前方後円墳を含む天理山古墳群が所在し、なんらかの関連性が想定される。

【参考文献】

京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008「薪遺跡第8次発掘調査報告」「京都府遺跡調査報告書」128冊



第114図 墳丘実測図 (S=1/500) (京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008)



第115図 墳輪実測図 (S=1/8) (京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008)

7 古墳編年における綴喜古墳群の位置づけと他地域との比較

(1) 綴喜古墳群の編年的位置づけ

①古墳時代前期中葉から中期前葉の編年観

これまで概観した綴喜古墳群の歴史的位置づけ等を検討するため、各古墳の編年的位置づけを行う。なお、綴喜古墳群は、前期後葉に大型古墳が相次いで築造されることが大きな特徴となっているが、当該期の古墳編年については近年再検討が進み、これまでの編年の枠組みの再検討も進んでいる。福永伸哉は三角縁神獸鏡の型式分類を基準に、和田編年、広瀬編年で示された副葬品の組み合わせを加味し、舶載鏡段階、仿製鏡段階をいずれも2区分した4区分とした(福永1994・1996)。福永以降、各副葬品を等価的にとらえて古墳を配列するのではなく、三角縁神獸鏡編年を基軸として、副葬品の組み合わせから古墳を編年する研究が深められてきた(大賀2002・2013、岸本1995、中四国前方後円墳研究会2018)。

前期前葉に関しては、埴輪編年の精緻化に対し(廣瀬2015)、副葬品の内容がわかる古墳が少ないこともあります。未だ課題が多い。しかし、前期前葉、中葉に対応すると考えられてきたⅠ期の埴輪が、前期後葉にも認められるということは共通理解となっており、結果的に前期前葉の時間軸の再検討が必要となっている。

前期中葉は、大阪府紫金山古墳で、仿製三角縁神獸鏡を含む豊富な副葬品と埴輪が報告されたことで、定点的資料が得られた(阪口2005)。前期と中期の画期は研究者により意見が分かれるが、近年の研究では、三角縁神獸鏡の舶載段階を、波文帶鏡群を含め3段階、後半を3段階区分の計6期区分とする案が提示されている(岩本2020)。このなかで、仿製三角縁神獸鏡の最終段階は帶金式甲冑の成立期とされ、広瀬編年4期新相、和田編年五期には対応するため、実際には前期古墳は5期に分けて考えられているといえる。

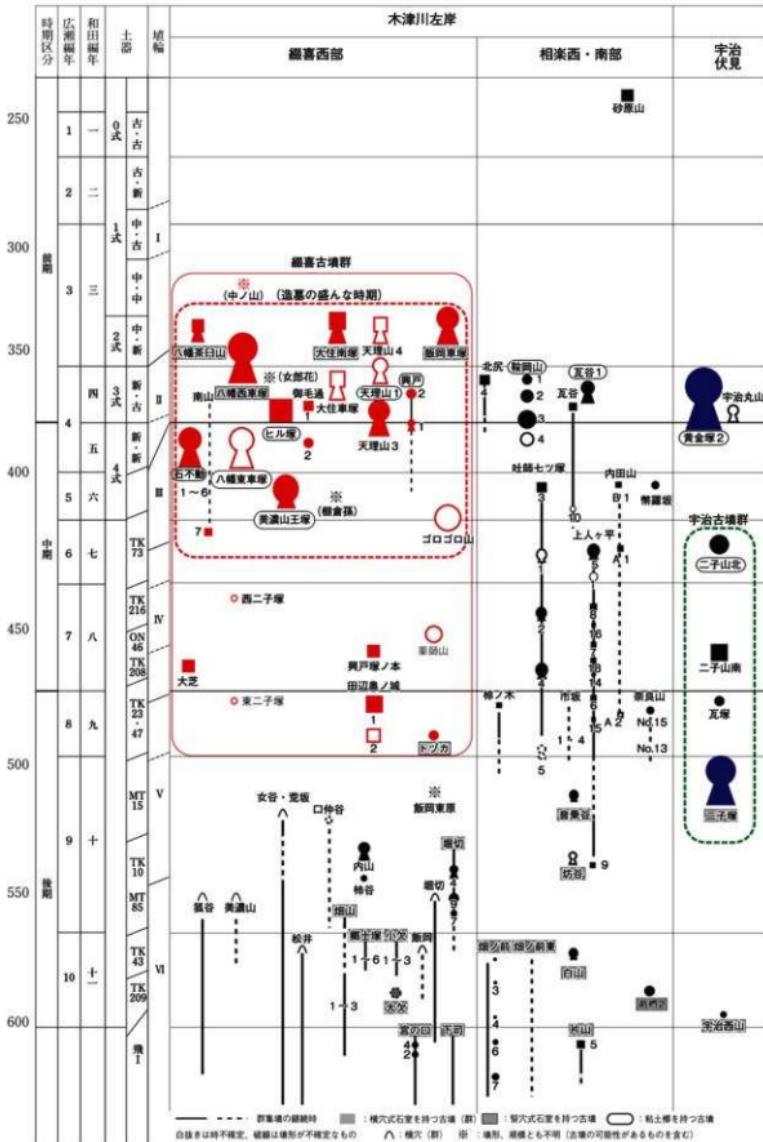
本章では、古墳編年に際して、図上ではこれまで全国の古墳編年として用いられてきた広瀬和雄「前方後円墳の畿内編年」(広瀬1991。以下、広瀬編年)の10期区分、和田晴吾の十一期区分(和田1987)を併記する。

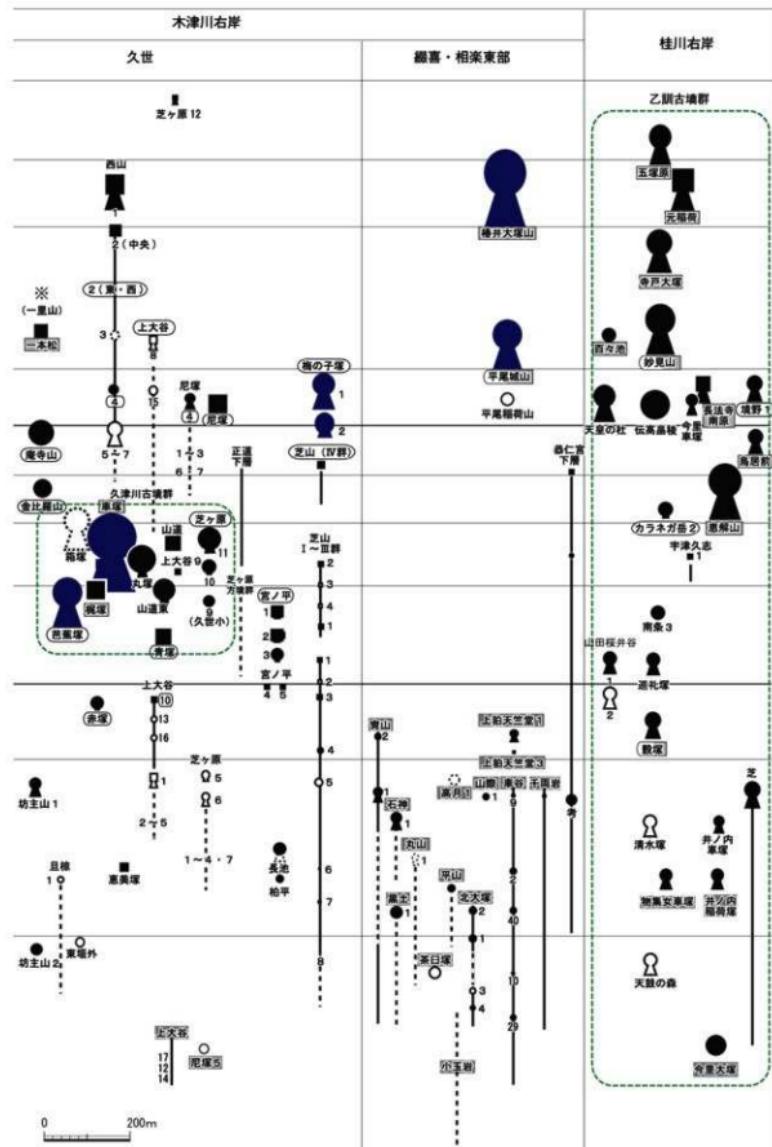
全体の枠組みとしては広瀬・和田編年に依拠しつつ、逐次近年の研究成果も含めながら記述を進めていくこととする。なお、本文中に記した埴輪編年は廣瀬覚の編年観(廣瀬2015)に従うこととする。
②広瀬編年1・2期(和田編年一・二期)(前期前葉)

綴喜古墳群の造営された木津川左岸地域では、興戸5号墳下層墓や田辺城下層墓など畿内第V様式期の台状墓が検出されているが、それに続く庄内期の墓域は不明であり、前期前葉(1、2期)にさかのほる古墳もこれまで確認されていない。

③広瀬編年3期(和田編年三期)(前期中葉)

広瀬編年3期は当地域で古墳築造が開始される時期である。天理山4号墳は、墳長42mの前方後方墳で、段築・埴輪列を有しない定型化以前の古墳である。副葬品は明らかではないが、墓壙上面から小形X字形器台とみられる土師器の小片が出土しており、布留2式、広瀬編年3期後半が下限とな





る。今後の検討が進めば、総合古墳群で最古級となる可能性がある。

八幡西車塚古墳のすぐ南西に位置する中ノ山遺跡では、1968年の分布調査（京都府教育委員会 1969）で円筒埴輪が出土している。採集された埴輪はこれまで未報告であるが、本書の付録で報告する。埴輪の特徴を概観すると、底部高が低く、内面にケズリを有するなど、明らかにⅠ群埴輪の特徴を備えている。同様の特徴を持つ埴輪は大阪府茨木市将軍山古墳（廣瀬・若杉 2005）で確認されており、Ⅰ群新相とみておきたい。また、「八幡史蹟名勝誌」（西村 1928）には「中ノ山古墳」の記述があり、中ノ山付近に3期に属する古墳が存在した公算は高い。さらに、京都工芸繊維大学所蔵資料（資料番号 AN.1746）に同古墳副葬品である蓋然性の高い腕輪形石製品、管玉、鉄製武器が含まれることが判明した。詳細については付録で報告するが、現段階では、少なくとも八幡市域で最古級に位置づけられる古墳である。

八幡山臼山古墳は、出土遺物の詳細は不明な点が多いが、阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺がよく知られており、前期中葉との評価を受けている。近年の埴輪の再整理によると、Ⅰ群新相からⅡ群古相とされ、従来の評価よりも若干時期がさかのぼる可能性が指摘されている（宇野 2019）。ただし、中ノ山古墳の埴輪と比較すると、底部が高いものが含まれ、ケズリも底部の一部分にのみ認められるなど、後出する要素があるため、中ノ山古墳に後出すると考える。

飯岡車塚古墳では、原位置を保った状態で、楕円筒埴輪や口縁部高が突帯間隔より極端に狭い「極狭口縁」の円筒埴輪が出土している。同様の円筒埴輪を含むセットは大住南塚古墳でも出土しており、Ⅰ群新相からⅡ群古相にかけて認められる組成であることから、これらの古墳もほぼ同時期の築造とみて間違なかろう。

3期に属するこれら5基の古墳は、それぞれの小地域で最初に築造される古墳である。内容が不明な中ノ山古墳と天理山4号墳以外は埋葬施設に竪穴式石槨を有し、段築、葺石、埴輪という外表施設を備える等、出現当初から畿内中枢部の影響下で築造された古墳であるといえよう。

④広瀬編年4・5期（和田編年四～六期）（前期後葉～中期前葉）

4期には、八幡市北部の男山丘陵で八幡西車塚古墳（120m）、石不動古墳（88m）、八幡東車塚古墳（90m）の3基の大型前方後円墳が相次いで築造される。

八幡西車塚古墳は大正年間に梅原末治によって調査が行われ、明治35（1902）年の土木工事による舶載鏡、倭製鏡、玉類等の出土が報告されている。副葬品の詳細な型式が必ずしも明らかとなっていないが、最も新相を示す遺物は倭製鏡群（方格規矩神獸鏡、盤龍鏡、六獸鏡）であり、前期新段階新相と評価されている。須恵器や帶金式甲冑は不在であることから、埋葬施設の時期は前期後葉後半（広瀬編年4期前半）に位置づけられてきたが、八幡市教育委員会所蔵の埴輪を検討したところ、円筒埴輪編年Ⅰ期新相の特徴を有することが判明した。埴丘築造は前期中葉から前期後葉前半（広瀬編年3期新相～4期初頭）に遡る可能性が生じている。

石不動古墳は2基の粘土槨が確認されており、南側の埋葬施設からは長方板革綴短甲とみられる破片が出土している。他方、北側の埋葬施設では鉄鏡群が前期的組成であり（方頭A2、腸抉方頭、大型定角B3、短頭長三角）、古墳の築造は4期までさかのぼる可能性がある。埴丘で採取された埴

輪は有黒斑の野焼き焼成であることから、いずれにしても広瀬編年5期までには収まるとみられる。

八幡西車塚古墳に近接する八幡東車塚古墳は、鏡群からみると前期新段階新相に下るものは含まれないが、今回の京都工芸織維大学収蔵資料の調査で、三角板革綴短甲を含む帶金式甲冑、倭製鏡が含まれることが判明した。梅原報告では墳丘上から「祝部式土器」が出土したという記述があるが、実態は不明である。出現期の帶金式甲冑の存在から、広瀬編年4期後半（和田編年五期）に位置づけられる。

八幡西車塚古墳、石不動古墳、八幡東車塚古墳の前後関係については、実態が不明な点が多く研究者によって意見は分かれるが、八幡東車塚古墳の副葬品に帶金式甲冑が含まれることが確実になったことから、4期後半に位置づけられ、埴輪の様相からは3期まで上がる可能性もある八幡西車塚古墳が最も古く、4期後半の石不動古墳及び八幡東車塚古墳がそれに次ぐと考えられる。

八幡市南部では、前方後円墳は認められないものの、造出付方墳のヒル塚古墳、帆立貝形墳の美濃山王塚古墳をあげることができる。

ヒル塚古墳は一辺52mの造出付方墳である。3次にわたって発掘調査が行われており、2基の粘土櫛が調査された。2基の埋葬施設は切り合い関係があるが、副葬品に大きな年代差は認められず、いずれも4期前半の築造と考えられる。ヒル塚古墳出土遺物で注目されるのは、渦巻飾付鉄劍である。国内の出土例としては弥生時代後期の箱清水式並行とされる長野県根塚遺跡があげられるのみであり、古墳時代では例がない。ヒル塚古墳の鉄劍については列島製か朝鮮半島製かで見解がわかれますが、朝鮮半島製であるとするならば、美濃山王塚古墳の堅矧板革綴冑も朝鮮半島製とされており、近接する2基の古墳の出土品に朝鮮半島系遺物が認められることは注目される。

美濃山王塚古墳は、長らく出土品以外の情報が不詳であったが、近年の範囲確認調査によって墳丘長76m以上の造出付円墳（帆立貝形墳）であることが明らかとなった。出土遺物には三尾鉄や帶金式甲冑が含まれることから、5期の築造と考える。埴輪は有黒斑でヨコハケのものが中心だが、6期の久津川車塚古墳にも有黒斑の埴輪が残存することが指摘されており（原田2015）、下限は6期前半とみておきたい。

八幡市域では、この時期は大型古墳だけでなく、中・小規模の埋没古墳も多く確認されている。八幡東車塚古墳を包蔵地内に含む女郎花遺跡では、遺物溜りからII群古相の円筒埴輪が出土している。古墳本体は見つかっていないが、4期の埋没古墳が周辺に存在する可能性は高い。南山古墳群は7基からなる古墳群で、1～6号墳は調査前に姿を消した。しかし、箱式石棺を持つ古墳があるなど、前期的な古墳も含まれていたらしい。7号墳のみ記録保存調査が行われており、TG232～TK73型式期の初期須恵器が周溝から出土している（本書第5章）。南山古墳群と同じ丘陵上にある御毛通古墳群は、方墳と円墳それぞれ1基の埋没古墳が検出されている。1号墳出土の蓋形埴輪は津堂城山古墳出土例に先行するものとして、前期末に位置づけられている。2号墳は有黒斑の形象埴輪類が出土しており、5期の古墳と考えられる。これら以外にも詳細が分かっていない古墳があったことは確実であり（島田1919）男山丘陵には多くの小中規模の古墳が本来存在したと考えられる。

このように、八幡西車塚古墳、石不動古墳、八幡東車塚古墳と3基の大型前方後円墳と重なる期間

に周辺に中・小型古墳が相次いで築造される事例は興味深い。

京田辺市域では天理山1・3号墳、大住車塚古墳、興戸1・2号墳、ゴロゴロ山古墳を挙げることができる。

大住車塚古墳は、大住南塚古墳に東接する前方後方墳で、立地から、大住南塚古墳に後続するものと考えられる。墳丘上には石材が散布しており、埋葬施設は堅穴式石槨が想定されている。

天理山3号墳は墳丘長81mの前方後円墳で、外表施設として段築、葺石、埴輪列を備える。全形がわかる埴輪はないが、底部高が19.3cmの埴輪が出土している。埴輪は表面に黒斑を有し、外面調整タテハケの後ヨコハケを施すが、静止痕を持つ個体は認められない。突堤形状は断面台形または一部M字状で、透穴の形態は円形、半円形の少なくとも2種類が存在する。II群新相でも古い段階に位置づけられよう。ただし、埴輪列の間隔が広いことや古相の土製供物が出土していることなど前期的様相を各所に残しており、前期と中期の過渡期の古墳として位置づけられる。天理山1号墳と3号墳の前後関係は、出土品だけで判断することは難しい。ただし、墳丘構造や遺物の出土量に注目すると、1号墳は、墳丘の段築が不明瞭で埴輪の出土量が少ないことが特徴である。墳丘形状は定型的ではなく、さらに墳頂部にだけ埴輪が樹立されていた可能性が高い。一方、3号墳は段築が明瞭で埴輪列が墳丘テラスに一定の間隔を空けて樹立されるという定型的な古墳である。したがって、1号墳、3号墳の順に築造されたと推定される。

天理山古墳群の約2km東側に所在する棚倉孫神社では有黒斑で静止痕のないヨコハケを持つ円筒埴輪が市の立会調査で出土しており、周辺に5期の古墳の存在が想定できる。

興戸古墳群では1・2号墳の内容が判明している。興戸2号墳は大量の腕輪形石製品が出土した円墳として古くから著名である。他の古墳出土品との混同も考慮する必要はあるが、石製品のセットは前期後葉のものと考えて大過ない。円筒埴輪は方形の透穴を有し、外面調整はヨコハケが施される。遺物の詳細を十分に確認できていないが、外反する口縁部や突堤間隔よりも高い底部高であるなど前期的様相が認められることから、天理山3号墳に並行する埴輪編年II期新相、広瀬編年4～5期の古墳と考えられる。興戸1号墳は、興戸2号墳と比べると時期を決定する資料が乏しいが、2号墳と近接する位置関係、墳丘形態が前期的な形状の前方後円墳であること、さらに前方後円墳ではあるが2号墳より墳丘規模が小さいことなどから、2号墳の直後に位置づける。

飯岡丘陵では、ゴロゴロ山古墳が当該期の古墳と考えられている。ゴロゴロ山古墳は発掘調査は行われていないが、60mの円墳であり、外表施設として葺石をもつ。「前方後円墳集成」（和田1992）では広瀬編年5期と6期の境界線上に位置づけられている。本報告書刊行段階でも、それ以上の追加資料が出ていないため、位置づけは「前方後円墳集成」に倣うこととする。

以上のように、広瀬編年4・5期は総合古墳群で造墓活動が顕著に活発になる時期である。

⑤6・7期（七期・八期）（中期中葉～後葉）

木津川左岸地域での大型古墳築造は、美濃山王塚古墳以降は認められなくなり、現在のところ、確実に6・7期に属する古墳は知られていない。近年京田辺市教育委員会による調査が行われた興戸塚ノ本古墳や飯岡の薬師山古墳、八幡市域すでに消滅した西二子塚、東二子塚古墳、小塚古墳はこの

時期に属する可能性もあるが、調査が行われておらず詳細は分からぬ。八幡市で調査された埋没古墳では、大芝古墳で周溝からⅣ期の円筒埴輪や土器が出土し、7期の古墳と考えられる。

⑥8期（九期）（後期前葉）

8期の古墳として、田辺奥ノ城1・2号墳とトヅカ古墳がある。田辺奥ノ城1号墳は1辺36mの中型の方墳だが、周溝、葺石、埴輪を備える。埴輪は円筒埴輪の他に家形、馬形、鶏形、甲冑形など各種の形象埴輪も出土しており、埴輪編年Ⅳ群である。トヅカ古墳は飯岡丘陵にある直径20mの円墳である。明治年間に私掘され、竪穴式石槨から倭鏡や玉類、馬具等豊富な副葬品が出土しており、TK 47並行期と考えられる。

（桐井）

【参考文献】

- 岩本 崇 2020 「三角縁神獸鏡と淀川左岸地域における首長墓の展開」『三角縁神獸鏡と古墳時代の社会』六一書房
 宇野隆志 2019 「八幡茶臼山古墳出土の埴輪について」『山城郷土資料館報』第26号、山城郷土資料館
 江谷 寛はか 1986 『八幡市誌』第1巻、八幡市
 大賀克彦 2002 「凡例 古墳時代の時期区分」「小羽山古墳群」清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V、清水町教育委員会
 大賀克彦 2013 「前期古墳の築造状況とその画期」「前期古墳から見た播磨」第13回播磨考古学研究集会の記録、第13回播磨考古学研究集会実行委員会
 岸本直文 1995 「三角縁神獸鏡の編年と前期古墳の新古」「展望考古学」考古学研究会40周年記念論文集、考古学研究会
 京都府教育委員会 1969 「八幡丘陵」「埋蔵文化財発掘調査概報（1969）」
 考古学研究会例会委員会編 2012 「前期古墳の変化と画期」「シンポジウム記録」8、考古学研究会
 阪口英毅編 2005 「紫金山古墳の研究－古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究－」京都大学大学院文学研究科
 烏田直彦 1919 「山城綴喜郡二子塚古墳」『考古学雑誌』第九卷第五號、日本考古学会
 鈴木一有 2014 「野中古墳の築造時期と陪塚論」「野中古墳と「倭の五王」の時代」、大阪大学大学院文学研究科
 中四国前方後円墳研究会編 2018 「前期古墳編年を再考する」、六一書房
 田辺昭三 1981 『須恵器大成』、角川書店
 寺澤 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」「矢部遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49集、奈良県立標原考古学研究所
 西村芳次郎 1928 『八幡史蹟名勝誌』、私家版
 原田昌浩 2015 「古墳時代中期の埴輪生産」『考古学研究』第61卷4号、考古学研究会
 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」「前方後円墳集成」中国・四国編、山川出版社
 廣瀬 覚・若杉智宏 2005 「符軍山古墳群I－考古学資料調査報告集1－」新修茨木市史史料集8
 廣瀬 覚 2015 「王権周縁部における埴輪の受容と展開」「古代王権の形成と埴輪生産」同成社
 中久保辰夫 2014 「古墳時代原始的官僚層形成に関するノート」「待兼山論叢」第48号史学篇、大阪大学文学会
 福永伸哉 1994 「彷彿三角縁神獸鏡の編年と製作背景」「考古学研究」第41卷第1号、考古学研究会
 福永伸哉 1996 「舶載三角縁神獸鏡の製作年代」「待兼山論叢」第30号史学編、大阪大学文学会
 森岡秀人・西村 歩 2006 「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として－」「古式土師器の年代学」、財团法人大阪府文化財センター
 和田晴吾 1987 「古墳時代の時期区分をめぐって」「考古学研究」第34卷代2号、考古学研究会
 和田晴吾 1992 「山城」「前方後円墳集成」近畿篇、山川出版社

（2）綴喜古墳群の群構造と他地域の首長墓との比較

①南山城地域

前節での分析を踏まえ、綴喜古墳群の群構造を概観する。綴喜古墳群は前期中葉に造営が開始され、前期後葉から中期前葉前半を造営活動のピークとする首長墓群で、各小地域で首長墓が同時多発的に造られる。これまで大住車塚、南塚古墳から興戸古墳群の間が地理的な空白であったが、令和3年度の試掘調査で、この空白地帯に天理山古墳群が存在することが明らかとなり、綴喜古墳群における首長墓群の地理的な一体性は、より確固たるものとなった。

この時期に綴喜古墳群を構成する首長墓では、八幡西車塚古墳が最大規模である。それに次ぐ規模の前方後円墳は、石不動古墳、東車塚古墳、天理山3号墳で、墳長は約80mから90mである。そして、前方後方墳の大住南塚古墳（墳長71m）、大住車塚古墳（墳長66m）がそれに次ぎ、方墳のヒル塚古墳（辺長52m）、直径32m円墳の興戸2号墳、墳丘長24m前方後円墳の興戸1号墳と続く。

墳丘形態と墳丘規模は概ね相関関係にあり、緩やかな階層性を示す。八幡市域に前方後円墳が多いことから、勢力としてはより優位にあったと考えられるが、飯岡車塚古墳と天理山3号墳も規模は匹敵している。また、円墳の興戸2号墳には多くの石製品が副葬されていたことが判明している。したがって、首長間の上下関係は必ずしも明確でなかった可能性が高い。

綴喜古墳群のピークは極めて短期間で終焉を迎える、中期前葉に美濃山王塚古墳、ゴロゴロ山古墳が造られた後は規模が大幅に縮小する。

なお、和田晴吾は、綴喜古墳群のように前期後半（本書表記の前期中葉後半から前期後葉後半）に限って古墳が多く造られることは全国的に見られる現象であると指摘している（和田1988）。綴喜古墳群の消長は、こうした動向を色濃く反映させていると考えられる。

綴喜古墳群を含む、南山城地域の首長墓の消長とその歴史的背景については、和田晴吾の分析がこれまで知られてきた（和田1988・1994）。以下に概観する。

和田は旧郡と地形的区分で南山城地域を分けた。相楽東部、相楽西部、綴喜西部、綴喜東部、久世である。第116図及び第117図は、ほぼその地域区分を踏襲している。

古墳時代前期に、山城盆地における古墳の嚆矢をなす椿井大塚山古墳が相楽東部に登場する。ただ、この地区は可耕地に乏しく前期中葉を最後に古墳の築造を終了する。前期後半（本書表記の前期中葉後半から前期後葉後半）になると、全国的に古墳は急増し、南山城地域でも各地区で盛んに造られるようになる。この時期に優勢なのは綴喜西部地区（本書の「綴喜古墳群」）で、他は久世地区である。墳丘規模は、同一地区内の古墳群間に大小の差があるだけでなく、地区間にも差異が認められ、大型前方後円墳は綴喜西部地区により多く分布する。また、綴喜西部の古墳は、八幡茶臼山、八幡西車塚、大住南塚、飯岡車塚古墳などに堅穴式石槨が採用されるのに対し、久世地区では、宇治一本松古墳が堅穴式石槨である以外は、すべてより簡略な粘土槨か木棺直葬、あるいはそのいずれかと想定される。副葬品の多寡もほぼ比例し、綴喜西部地区のほうが豊富である。この段階の古墳は、ある程度の優劣さや序列性を内包しつつも南山城全域を一元的に統制する強い規制は認められない。

中期に入ると、古墳の築造には大きな変化が認められる。久世地区では、前期の古墳はいずれも丘

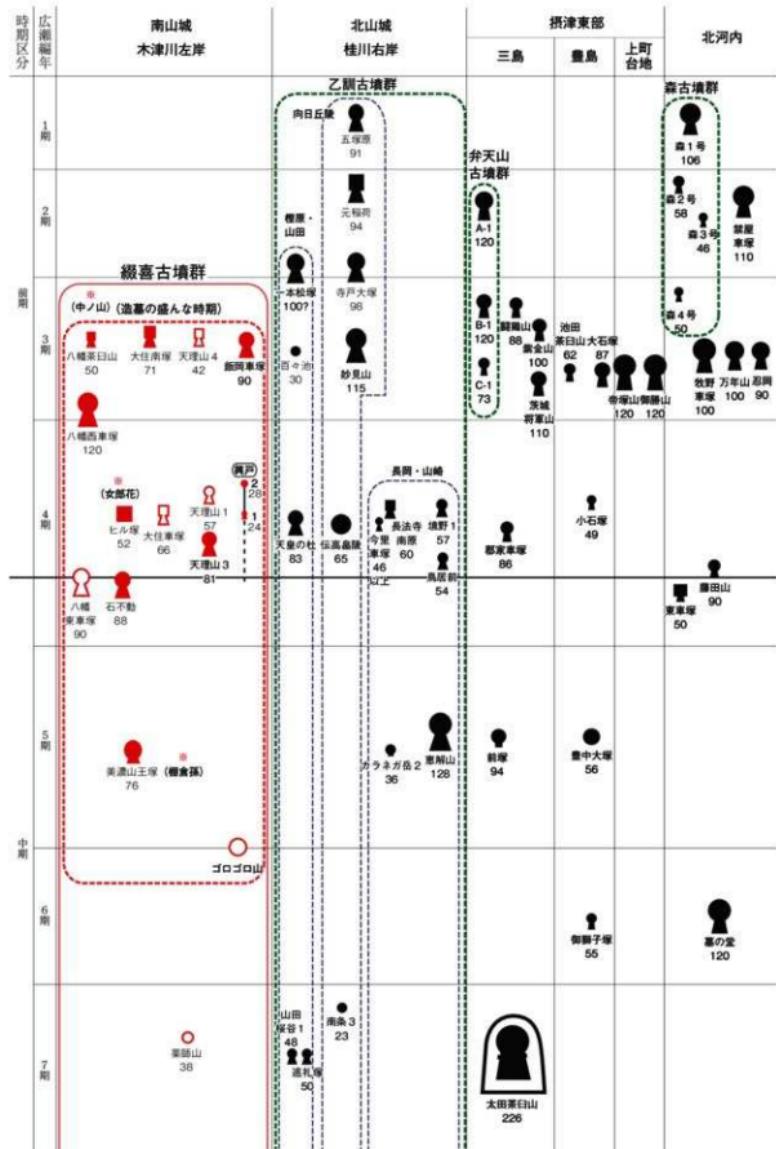
陵上に営まれているが、中期に入ると丘陵部では前方後方墳や前方後円墳は作られなくなり、変わって、その前面にあたる低位段丘上の平坦面では、久津川車塚や芭蕉塚古墳といった盾形周溝を持つ超大型、ないしは大型の前方後円墳を中核とする平川古墳群の形成が始まる。綴喜西部地区では前方後方墳や前方後円墳は築造されなくなり、中型の方墳や円墳が作り続けられる程度となる。中期に入ると古墳の築造に関しては強い規制が働き、南山城地域ではただ一群のみが他より傑出した規模と内容を誇る前方後円墳の築造を行うが、他の古墳群では古墳の築造を停止するか、継続したとしても前方後円墳を営むことはできず、中型の帆立貝形墳や方墳、円墳を築くことになり、逆にそれまで古墳の見られなかった地域に新たな古墳群の築造が始まるのである。

後期に入ると、久津川古墳群は衰退し、久世地区的各地の丘陵上で、後期の首長墓がそれぞれ前期の系譜を曳くかのように復活する。南山城地域の他の地区でも、中期の古墳群の多くは消滅し、丘陵上に比較小規模な首長墳かと考えられる例が二、三分布するに過ぎなくなる。後期のヤマト王権は各地の大首長を通じての地域支配から、より直接的なかたちの地域支配へと転じ、その過程で大首長の地域支配体制をし、かつ各首長の在地支配を弱体化するとともに、他方では新興の小首長や新しく台頭してきた有力な共同体員層を地方支配の末端に取り込んでいったものと考えられる。

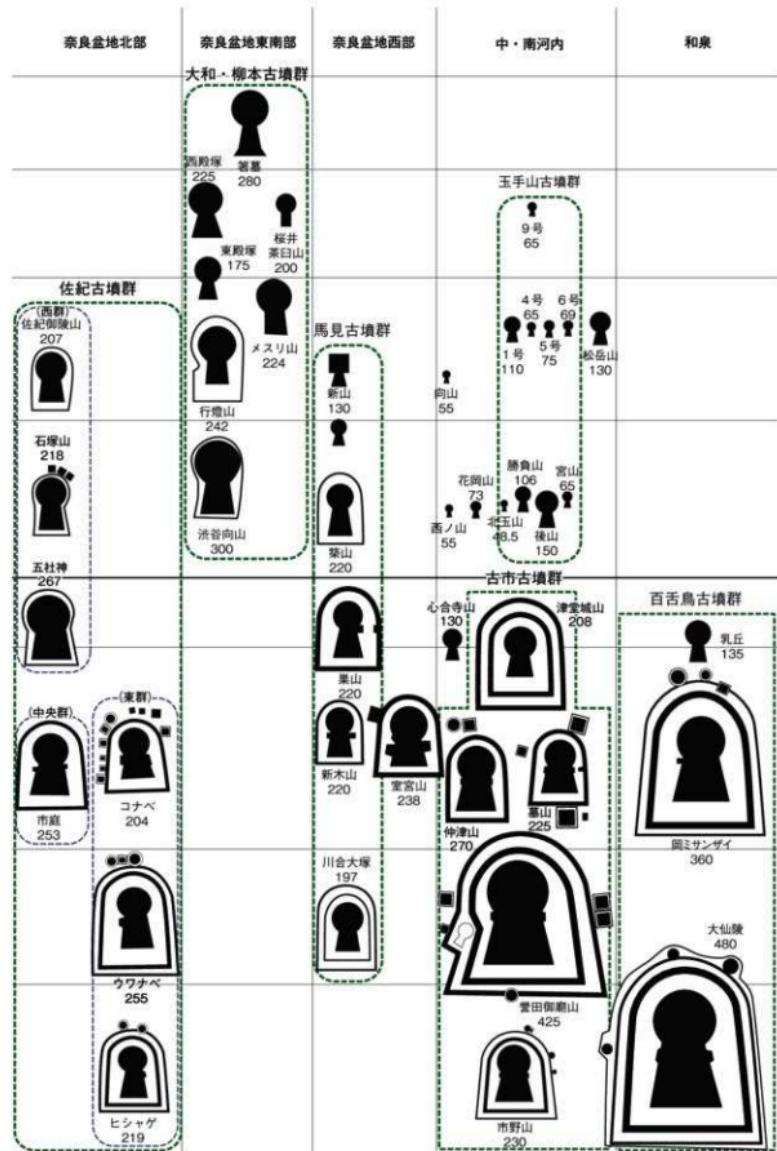
和田は、南山城地域の古墳について6つの画期を指摘しているが、綴喜古墳群に関連するものを抽出すると、前期中葉後半に前方後円（方）墳が急増する時期と綴喜古墳群の造営開始が同時であることが挙げられる。この画期と同時期に、大王墳は奈良盆地南東部から北部へと墓域を移すが、この段階には大王墳に匹敵するような大型前方後円墳が畿内周辺でも点々と造られ、大王権の相対的低下が推測されるという。

以上に概観した和田の分析内容は現在も有効である。和田の分析は南山城地域全体を視野に入れて叙述したものだが、ここで改めて近年の調査状況も踏まえて綴喜古墳群を中心とした視点から他地域と比較してみると、綴喜古墳群の形成以前に大型古墳が造られた相楽郡東部では椿井大塚山古墳をはじめとする古墳が一代一墳的に造営されるが、綴喜古墳群は広域にわたって首長墓が数多く造られるという特徴がある。また、綴喜古墳群は、地形と古墳の分布から、男山、美濃山、大住、田辺、飯岡といった小地域に細分することが可能であるが、同時期に複数の小地域で古墳が築造されており、古墳造営は特定の小地域に限定されない。すなわち、綴喜古墳群の領域全体を一元的に統治する首長は存在せず、各小地域を支配する首長相互は古墳の墳形と規模が示すような上下関係は存在しながらも、相対的な独自性を保持する地域構造であったと考えられる。南山城地域全体でも、綴喜古墳群の内部でも同じような構造が認められる。綴喜古墳群の構造は、古墳時代前期中葉から中期前葉の地域構造を具体的に示していると改めて評価できよう。

中期前葉から中期中葉にかけて本津川対岸で久津川古墳群が造営されるが、この段階は綴喜古墳群でめだった首長墓は存在しない。ただし、久津川古墳群が衰退する中期後葉から後期前葉の中規模古墳が数基見つかっており、興戸塚ノ本古墳、興戸奥ノ城1・2号墳、トヅカ古墳が造営される。特にトヅカ古墳では金銅装の馬具、伝世の舶載鏡が副葬され、規模に比して豊富な副葬品が出土している。この時期の綴喜古墳群では、首長墓造営が盛り返しているとも評価できる。久津川古墳群の造営が終



第 118 図 緒喜古墳群と近隣の古墳編年③



第 119 図 繰喜古墳群と近隣の古墳編年④

了し、南山城地域全体で顯著な大型古墳が築造されない、いわば「空白期間」であることもその理由の一つであろう。

南山城地域は地理的に完結した一つのまとまりであるが、同時に木津川を介して奈良盆地から瀬戸内沿岸、日本海沿岸、琵琶湖といった諸地域を結ぶ交通の要衝でもあった。実際に綴喜古墳群ではこうしたルートから搬入されたと看做される出土品が多く見られる。八幡茶臼山古墳の肥後産阿蘇溶結凝灰岩製舟形石棺、ヒル塚古墳の朝鮮半島製の可能性のある渦巻飾付鉄劍、美濃山王塚古墳の朝鮮半島製堅板革綴冑、八幡西車塚古墳と大住南塚古墳の堅穴式石槨で用いられた猪名川流域産の石英斑岩、さらに銅鏡では、八幡東車塚古墳、八幡西車塚古墳、石不動古墳、美濃山王塚古墳から中国鏡が多数出土している。このうち埋葬施設に伴う石棺や石材は、地域間の直接的な交流から入手したとも想定される。また、対岸の木津川右岸では城陽市下水主東遺跡で弥生時代後期から庄内式期の水路が検出され、東海系をはじめとする外來系土器が多数出土している。こうした観点からみると、南山城地域各地域の勢力は、木津川水運の主導権をめぐって競合する関係にあり、近畿地方中央部の巨大古墳の立地変化とも呼応しながら、時期ごとに首長墳の立地が移動したと考えられる。

綴喜古墳群の造営が完全に終了する時期に、南山城地域で最大の前方後円墳となるのは宇治の二子塚古墳である。二子塚古墳の造営には、南山城地域から乙訓地域を本拠地とした繼体天皇との関係が想定されてきた。また『日本書紀』によると、この時期には繼体天皇の宮である筒城宮が綴喜古墳群の領域内に置かれたとの伝承がある。この一帯は、以前よりも直接的な支配を繼体政権から受けたか、または宇治の二子塚古墳を造営した大首長の影響下に置かれたと想定される。

そしてその後、綴喜西部には首長墓は復活せず横穴墓が集中的に造営されるという新たな展開を迎えることとなる。

②北山城地域・攝津・北河内・中・南河内（第118図）

綴喜古墳群が造営された時期の北山城地域、攝津地域、北河内地域の首長墓群と比較する（第118図）。

この時期の北山城地域の代表的な首長墓群としては、乙訓古墳群が挙げられる。乙訓古墳群は、都出比呂志が概観したとおり（都出1988）、前期から後期にかけて、小地域間の競合状態であり、前期前葉から前期中葉まで、向日丘陵では基本的には一代一墳で古墳が造られる。ただし、前期後葉から中期前葉になると様相が変わり、向日丘陵で首長墓造営が停止し、それまで古墳を造らなかった、櫻原・山田グループ、長岡グループといった各小地域で、古墳が一斉に造られる状態となる。この現象は、同時期の綴喜古墳群とよく似ている。ただし、乙訓古墳群では中期前葉後半（広瀬編年5期）になると長岡グループの恵解山古墳が登場して他のグループでは首長墓の造営が中断することになる。綴喜古墳群ではこうした首長墓系列の一元化は達成されず、木津川右岸の久津川古墳群で達成されることとなる。

攝津地域では、いずれの地域も前期中葉（広瀬編年3期）に造営が活発化する。綴喜古墳群と似た様相である。ただしピークが過ぎるのは綴喜古墳群より若干早く、前期後葉から中期前葉前半（広瀬編年4期前・後半）には造営が低調になる地域が多い。この時期まで造営が活発な状態が続くのは、

摂津東部の三島地域だけである。とはいっても、全般に中期に入ると古墳造営が停滞するのは、各地で共通の現象であるとも言える。北河内地域にも同様の特徴が見受けられ、広瀬編年3期に牧野車塚古墳、万年山古墳、忍岡古墳と言った複数の首長墓が同時期に造営され、広瀬編年4期にも首長墓造営が継続するが、5期には造営が停止する。

南河内地域では玉手山古墳群が比較対象となる。同古墳群は最古段階の9号墳が前期前葉の広瀬編年2期に遡るが、前期中葉から前期後葉にかけて、首長墓が多数造営される。こうした傾向は綴喜古墳群、乙訓古墳群と似た様相である。ただし、玉手山古墳群の範囲は南北2.5km、東西1kmと狭く、古墳の分布範囲が旧郡の規模とはほぼ同一で複数の小地域に分かれる綴喜古墳群、乙訓古墳群とは完全に同列には扱えない。

なお、この時期の近畿地方の首長墓間の関係について埋葬施設の石材を検討し、綴喜古墳群にも言及した研究として、奈良拓弥の研究（奈良2010）が挙げられる。奈良は京都府南部、奈良県、大阪府、兵庫県東部の古墳の堅穴式石棺に用いられる石材を分析し、奈良盆地では二上山火山岩、京都府西南部の乙訓古墳群ではチャート類が優勢との傾向を明らかにした。その一方で、綴喜古墳群を構成する八幡西車塚古墳、大住南塚古墳は大阪府と兵庫県の県境付近を流れる猪名川流域で採取される石英斑岩が用いられる事を明らかにした。綴喜古墳群の一带では、堅穴式石棺を造るための石材が採取されないため、他地域からの搬入に頼る必要がある。石英斑岩は猪名川流域から淀川を遡ってもたらされたと考えられ、当時の地域間関係を如実に現す石材である。

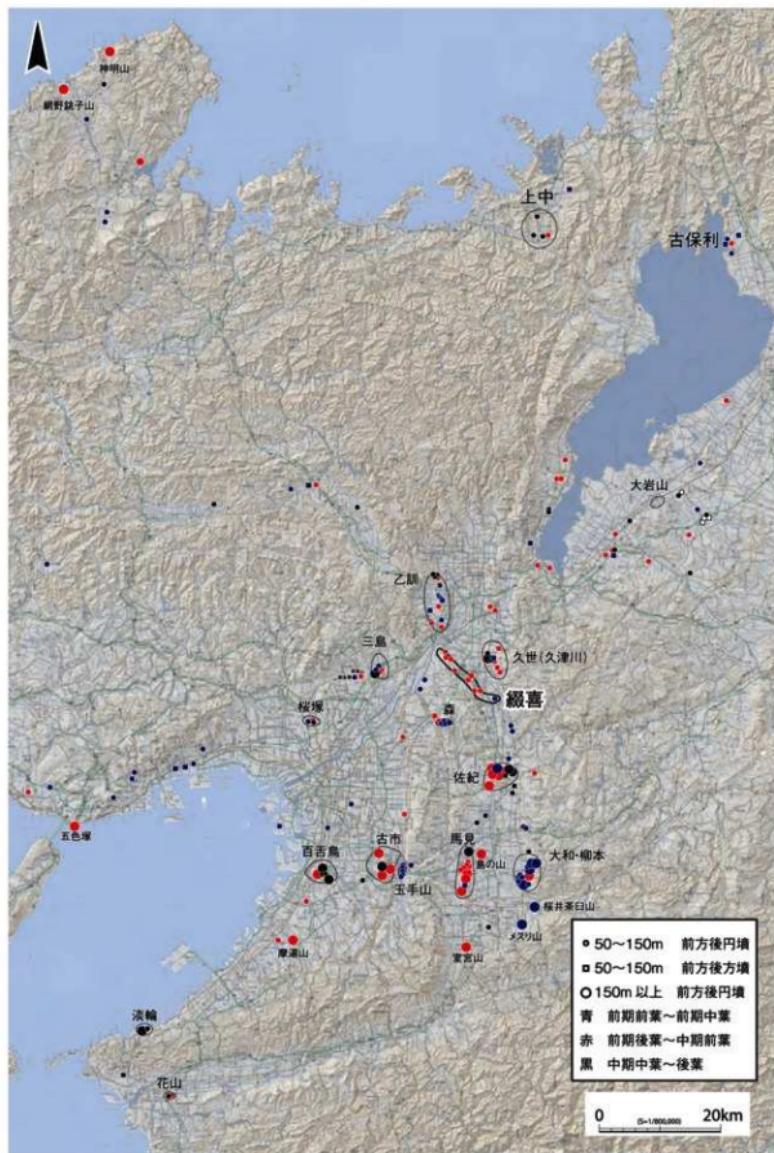
③近畿地方中央部との比較（第118図・第119図）

綴喜古墳群が造営された古墳時代前期中葉から中期前葉にかけて、巨大古墳が造られる奈良盆地では巨大古墳の立地が大きく変化する。古墳時代前期前葉前半から巨大古墳が造営された奈良盆地東南部の大和・柳本古墳群では、前期後葉まで巨大古墳の造営を続けるが、渋谷向山古墳を最後に造営が停止する。一方で、前期中葉または前期後葉前半の行燈山古墳と同時期に、奈良盆地北部の佐紀古墳群でも佐紀陵山古墳を嚆矢として巨大古墳の造営が開始される。佐紀古墳群の造営は、西群から中央群、東群と場所を変えながら中期後葉まで継続する。また、奈良盆地西南部の馬見古墳群でも佐紀古墳群と前後して首長墓の造営が開始され、200m級の古墳も築造されるようになる。さらに中期になると、河内及び和泉で古市古墳群、百舌鳥古墳群で巨大古墳の造営が開始される。

綴喜古墳群が南山城地域で優位に立つのが、巨大古墳群の立地変化の時期である。綴喜古墳群は佐紀古墳群から近い距離に立地するが、綴喜古墳群と佐紀古墳群西群は、造営のピークがいずれも広瀬編年4期である。これまで述べてきたように綴喜古墳群の造営は木津川水運との関係が深い。木津川を介した佐紀古墳群造営勢力との関係のもとで、綴喜古墳群を造営した集団は地域での主導権を握ったと考えられる。

④近畿地方全体での特徴（第120図）

都出比呂志は、古墳時代前期から中期の巨大古墳の立地の変化に呼応して、同時期の列島各地で首長墓の立地が変化することを指摘し、奈良盆地での政治的変動が影響を与えていたと述べた（都出1988）。



第120図 近畿地方の古墳時代前・中期首長墓分布（国土地理院地図及び国土地理院「陰影起伏図」を元に作図）

綴喜古墳群は、まさにこの時期に首長墓の造営を開始した古墳である。この時期には近畿地方各地で首長墓の造営が活発化し、墳丘長200m級の古墳が各地で造られた。丹後半島の網野銚子山古墳、神明山古墳、明石海峡の五色塚古墳、和泉の摩湯山古墳である。綴喜古墳群の古墳の規模はそれには及ばないが、造営活動は活発である。特に墳丘長50m以上の古墳に限定して他地域と比較すると、前期後葉から中期前葉の短期間に多数の首長墓が集中的に造営される特徴が見て取れる。

綴喜古墳群は古墳時代前期後葉から中期前葉に生じた列島規模の政治的変動を如実に示す首長墓群と評価することができるのである。

⑤対外交易・交流との関係

綴喜古墳群の造営は、より広い視野からも説明が可能である。綴喜古墳群の造営が開始された4世紀、東アジア世界は激動の時代を迎えていた。中国大陆では統一王朝の西晋が滅亡し、諸民族が流入して勢力を競う「五胡十六国時代」に突入した。多くの民族が激しく交錯する中で、人々は陸域・海域を広域に往来した（荒川2021）。そして、日本列島と朝鮮半島間の交易・交流も活発化する。日本列島と大陸の中間に位置する玄界灘の沖ノ島では、綴喜古墳群の築造と同時期に航海の安全を祈願する「岩上祭祀」がはじまつた（『宗像・沖ノ島と関連遺産群』世界遺産推進会議2011）。また、上述のとおり日本海沿岸部の丹後半島や瀬戸内海沿岸部の明石海峡の海浜部では、200m級の大型古墳が海からの視点を意識した立地で造られるようになる。

綴喜古墳群は、対外交易・交流の発着点であった大阪湾及び日本海沿岸部とヤマト政権中枢の奈良盆地を結ぶ交通の要衝である南山城盆地に位置する。こうした地域的な特性と東アジア世界の動向を背景に、綴喜古墳群の被葬者達は朝鮮半島製の武器、武具を入手し、その一部が古墳に副葬されたと考えられる。

（3）小結

綴喜古墳群に関する調査が最も充実したのは戦前期であるが、その後、現在に至るまで古墳時代の研究は様々な視点から充実、深化してきた。改めて今日的な視点から綴喜古墳群を検討し他地域と比較することによって、同古墳群の有する歴史的意義は、より明確なものとなると言える。

（古川）

【参考文献】

- 荒川正晴 2021 「中華世界の再編とユーラシア東部」『岩波講座世界歴史』第6巻 中華世界の再編とユーラシア東部 4~8世紀、岩波書店
- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第22号史学篇、大阪大学文学会
- 奈良拓弥 2010 「堅穴式石槨の構造と使用石材からみた地域間関係」『日本考古学』第29号 日本考古学協会
- 『宗像・沖ノ島と関連遺産群』世界遺産推進会議2011 『『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告』I
- 和田晴吾 1988 「南山城の古墳—その概要と現状—」『京都地域史研究』4、立命館大学人文科学研究所
- 和田晴吾 1994 「古墳築造の諸段階と政治的階層構成—五世紀代の首長制的体制に触れつつー」『古代王権と交流』5、名著出版

8 総括

本章では、本編の総括として前章までの検討を元に綴喜古墳群の有する特徴と本質的な価値を述べる。

（1）綴喜古墳群の特徴

①活発な造墓活動

綴喜古墳群では、古墳時代前期後半から中期初頭の短期間に前方後円墳、前方後方墳が集中的に造営される。造営地は一ヶ所に集中することなく、八幡市の石不動古墳を北限とし、南限は京田辺市の飯岡車塚古墳まで、南北約8kmの範囲に展開する。

綴喜古墳群で造墓活動が展開した時期には、列島の広範囲で首長墓が多く造営された。近畿地方では、丹後の網野銚子山古墳や神明山古墳、和泉中部の久米田古墳群や和泉黄金塚古墳、摂津の豊島地域や上町台地、播磨の明石川及び周辺や加古川流域の古墳等が挙げられる。綴喜古墳群を含むこれらの地域の特徴は、首長墓の造営期間が前期後半に集中し、中期まで継続するものが多いことである。前期後半には、奈良盆地東南部で巨大古墳の造営が終了し、巨大古墳の立地は奈良盆地北部の佐紀古墳群及び西部の馬見古墳群、大阪平野の古市・百舌鳥古墳群に移動する。列島各地での造墓活動の活発化の背景には、こうした近畿地方中央部での政治変動があるとこれまで考えられてきた。

綴喜古墳群の立地をみると、奈良盆地北部の佐紀古墳群に近く、特に佐紀古墳群西部の巨大古墳とは造営期間も一致する。したがって、綴喜古墳群は、佐紀古墳群の勢力との関係から成立した首長墓群と考えられる。

このように、綴喜古墳群は、奈良盆地及び大阪平野での巨大古墳の立地変化と同時に、列島各地で首長墓の造営が活発化した、古墳時代前期後半の動向を顕著に示す古墳群と位置づけられる。

②木津川水運との関係

綴喜古墳群が立地する南山城地域は、奈良盆地からみて北の玄関口にあたる。そして、南山城地域の中心を南北に流れる木津川は、水運経路として重要な役割を担った。南山城地域からは、木津川を週上して伊賀へ、淀川まで下って瀬戸内沿岸地域へ、または巨椋池に達して東海・北陸地域へ、というように、木津川を介して奈良盆地と列島各地を結ぶことが可能である。

なお、木津川は、奈良時代に平城京の外港である泉津が現在の木津川市木津に営まれるなど、古墳時代以降も主要な水運経路として重要な役割を担い続ける。

古墳時代前期の木津川と古墳との関係をみると、前期中葉までは、木津川右岸地域に城陽市・芝ヶ原古墳、木津川市・椿井大塚山古墳といった首長墓が展開し、集落遺跡でも、城陽市・下水主遺跡で木津川水運との関連を示す水路が検出されている。しかし、前期後半になって、対岸の左岸地域で綴喜古墳群の造営が開始されると、右岸地域の古墳造営は中・小型墳を中心となる。木津川両岸では、埋葬施設に円筒棺・埴輪棺が採用され小型鉄劍が副葬されるなどの共通点もあるが、首長墓群の消長は対照的である。両岸の勢力は、木津川水運をめぐって競合関係にあったと考えられる。また、この

力関係の変化の背景には、巨大古墳の立地変化も想定し得る。

木津川左岸地域では、いまのところ木津川水運と直接関連する遺構はみつかっていないが、綴喜古墳群を構成する首長墓の出土品をみると、当古墳群を営んだ首長は、前期後半に新たに巨大古墳群を造営した勢力の関与のもとで、木津川水運を介して各地と交流していたと考えられる。

綴喜古墳群には銅鏡が多く副葬されるが、魏晋代に製作された中国鏡の比率が高いのが特徴で、特に八幡丘陵の八幡西車塚古墳、石不動古墳、八幡東車塚古墳で画文帶神獸鏡が計4面確認され、四国の讃岐地域と並んで画文帶神獸鏡が卓越する。画文帶神獸鏡の分布は奈良盆地から山城盆地、瀬戸内沿岸部が多い。

美濃山王塚古墳出土の堅削板革縦冑は、同型式の最初期の出土事例である。朝鮮半島に類例が存在するが、同時期の日本列島では類例が存在しない。本資料は朝鮮半島からの舶載品と位置づけられる。

ヒル塚古墳出土の渦巻装飾付鉄劍は、日本列島で鉄製品の渦巻装飾が盛行する中期初頭よりも古い前期後葉に位置づけられる製品で、同種の製品の中では孤立的である。鉄製品における渦巻装飾の類例は朝鮮半島東南部に多く見られることから、朝鮮半島から入手あるいは朝鮮半島製品の影響を強く受けた日本列島で製作されたものと推定される。

また、八幡茶臼山古墳の船形石棺は、肥後南部の氷川下流域で産出する阿蘇溶結凝灰岩製で、同地域で製作された抉抜式の石棺である。木津川から瀬戸内海沿岸、そして九州に至る首長間の交流を示す資料である。

このように、綴喜古墳群は、木津川水運を活動の基盤として他地域と交流した勢力の墓域と考えられる。

③近隣の首長墓群との比較

綴喜古墳群に面して流れる木津川は下流で淀川に合流することから、綴喜古墳群は淀川流域の首長墓群の一つと位置づけられる。同流域の他の首長墓群と比較すると、綴喜古墳群の造墓開始は際立って遅い。木津川右岸、桂川右岸（乙訓古墳群）、淀川右岸（三島古墳群）では、前期初頭から前期中葉にかけて、城陽市芝ヶ原古墳・西山1号墳、向日市五塚原古墳・元稻荷古墳、高槻市弁天山A-1号墳といった前方後円（方）墳が存在する。一方、木津川左岸の綴喜古墳群では、前期前葉に遡る前方後円（方）墳は確認されておらず、本格的な造営の開始は前期中葉になってからである。

また、綴喜古墳群、乙訓古墳群、三島古墳群の同時期の首長墓を比較すると、墳丘規模はいずれも50～120m程度で近似する。大型古墳の埋葬施設に竪穴式石室が採用されることも共通している。また、若干時期は異なるが、規模が似る八幡西車塚古墳（4期・墳丘長120m）と向日市妙見山古墳（3期・墳丘長115m）の副葬品を比較すると、八幡西車塚古墳後円部からは、銅鏡5面、車輪石10点、石劍3点、鍼形石2点、石製合子1点、玉類、刀劍が出土している。一方、妙見山古墳後円部からは筒形銅器、小札革縦冑、銅鏡約100本、鐵鏡50本以上、玉類といった副葬品が出土している。両古墳は八幡西車塚古墳で石製品が主体を為すのに対し、妙見山古墳は武器、武具が主体で構成が異なるが、いずれも副葬品は同等に充実している。

以上から、綴喜古墳群の勢力は前期後半に台頭した、いわば「新興勢力」と位置づけられ、そして、

以前から存在していた近隣の首長勢力と比肩する存在となったと評価できる。

④埋葬施設の独自性と古墳群としてのまとまり

綴喜古墳群の墳丘規模や形状は他の地域と大きく変わることはないが、埋葬施設には独自の特徴が認められる。

まず、綴喜古墳群を構成する古墳埋葬施設の主軸は、東西を向くという特徴を共有する。近畿地方の古墳時代前期の首長墓は、埋葬施設主軸が南北を向くのが通例で、東西を向く古墳の数は少ない。東西方位の埋葬施設が首長墓に集中するのは、綴喜古墳群独自の特徴である。

また、八幡西車塚古墳、大住南塚古墳の竪穴式石槨壁体の石材は、瀬戸内沿岸の猪名川流域で採取される石英斑岩が用いられる。一方で、北方の桂川流域に位置する乙訓古墳群で用いられるチャートや、木津川対岸の右岸地域の古墳で用いられる二上山安山岩の使用は、綴喜古墳群では確認されていない。当時の地域間交流を示すものと考えられる。

このように、綴喜古墳群の埋葬施設には、近隣地域ではみられない独自の特徴がある。そして、この特徴が各首長墓に共通して認められることは、綴喜古墳群の首長墓が相互に無関係に築造されたのではなく、地域的な一体性を有して造営されたことを示している。

（2）綴喜古墳群の本質的な価値

前節で述べた特徴から導き出される綴喜古墳群の本質的な価値は、下記のとおりである。

①列島規模で生じた政治的な変動を反映

古墳時代前期後半に近畿地方中央部で生じた巨大古墳の立地変化と同時に、綴喜古墳群では造営活動が活発化し短期間で多数の首長墓が造営された。

巨大古墳の造営が示唆するヤマト政権中枢で生じた政治的な変動は、列島各地の古墳造営に影響を与えた。綴喜古墳群は、古墳時代前期後半（前期中葉後半～前期後葉後半）に生じた変化を如実に示す古墳群と位置づけられる。

②水上交通を介した交流・交易によって伸長した勢力の墓域

綴喜古墳群では、九州、瀬戸内沿岸部を経由し、木津川を週上して搬入されたものと考えられる、中国鏡や朝鮮半島製の鉄製武器・武具類、九州の肥後南部で製作された石棺が出土している。

木津川は、奈良盆地と列島各地を結ぶ重要な経路の一つである。綴喜古墳群は、新たに巨大古墳群を造営した勢力との関係のもとで、木津川水運に携わり伸長した勢力の墓域と考えられる。

綴喜古墳群が造営された時期は、当時の東アジア世界の情勢を反映し日本列島と朝鮮半島間の交易・交流が活発化した時期である。綴喜古墳群は、対外交易・交流の発着点であった大阪湾及び日本海沿岸部とヤマト政権中枢の奈良盆地を結ぶ交通の要衝である南山城盆地に位置する。こうした地域的な特性と、東アジア世界の動向を背景に、綴喜古墳群の被葬者達は朝鮮半島製の武器、武具を入手し、その一部が古墳に副葬されたと考えられる。

③地域的な一体性

綴喜古墳群を構成する首長墓の埋葬施設は主軸が東西方向となるものが多く、竪穴式石槨石材は猪

名川流域で産出される石英斑岩が用いられる。各首長墓が、地域的な一体性を有して築造されたことを如実に示している。

(3) まとめ

このように、綴喜古墳群は、古墳時代前期後半における政治的な変動と、水上交通網の整備を反映した古墳群で、さらに、地域的な一体性を有して造営された。歴史的に重要な価値を有するため、今後、一体的な保護を図る必要がある。

おわりに

本書で繰り返し述べたように、綴喜古墳群における遺物の出土は明治大正期の私掘や開墾による不時発見によるものが多く、散逸してしまった資料が多い。また、幸運にも保護された資料は大学や国立博物館等で保管されており、地元自治体に残っている資料は少ない。このような経緯から、考古学史を彩り歴史的にも重要な古墳群でありながらも不明な点が非常に多く、戦前から現在に至るまで継続的に調査成果が積み重ねられてきた木津川対岸の久津川古墳群や北山城の乙訓古墳群と比べると、綴喜古墳群がまとまって取り上げられる機会はこれまでほとんどなかった。

そうした状況で、令和3（2021）年に天理山古墳群で前期の前方後円墳2基、前方後方墳1基が見つかった試掘調査成果は、大きな驚きをもって迎えられた。天理山古墳群の調査成果を受けて急遽開始された本調査事業は、京都府、京田辺市、八幡市の熱意ある若手職員を中心に進められた。そして、急な依頼であったにも関わらず快く委員を引き受けくださった和田晴吾、杉原和雄、菱田哲郎委員の御指導と関係機関の御協力のもと、綴喜古墳群の実態と本質的な価値について一定の把握が可能となった。また、これまで存在がほとんど把握されていなかった未報告資料の検討と戦前の記録の照会により、綴喜古墳群に関して当初の想定以上に知見を深めることができた。

本調査事業は短期間に急ピッチで進められたが、本事業によって、法体制が未整備で情報収集が困難な中、綴喜古墳群を追求した先人達の足跡をたどることができた。その末裔である我々にとって非常に有意義な経験となった。

なお本書の刊行後、綴喜古墳群の保存・活用に向けて具体的な取り組みが進む予定である。京都府、京田辺市、八幡市の各自治体が今後も協力体制を継続し、関係機関とも協調しながら取り組んでいきたい。

（古川）

II 付 編

1 はじめに

綾喜古墳群を構成する主要な古墳のうち、特に八幡市域の大型古墳では、京都府史蹟勝地會が大正8（1919）年に発足する前の開墾や私掘、盜掘によって埋葬施設が発見され、出土品が採集されている。散逸したものもあるが、銅鏡や鉄製甲冑、玉類など当時の視点で重要とみなされた副葬品は、各地の大学や博物館に収蔵された。

出土の経緯は学術的な調査によるものではなかったが、京都大学の梅原末治による詳細な追跡調査で内容が把握され、その成果は『久津川古墳研究』や『京都府史蹟勝地調査報告』等で公表されている。ただし、これらの採集品の全貌が完全に把握されていたかは不明である。

京都工芸繊維大学美術工芸資料館には、八幡市八幡東車塚古墳及び中ノ山古墳出土資料がまとまつて所蔵されている（同館資料番号 AN1746・資料名「古墳時代遺品」）。大正4（1915）年6月3日に同大学が購入した資料で、このうち八幡東車塚古墳の出土品は、鉄製帶金式甲冑片及び鉄製品約160点（刀、鎌、劍、農工具類）、銅鏡1面、埴輪片2点、木棺片2点である。中ノ山古墳出土品は、車輪石2点、石鉗3点、紡錘車形石製品1点、管玉17点、朱1箱、鉄製品20点（鎌、槍先、劍、農工具類）である（第121図～第127図）。資料は7つの木箱に分けて保管され、「大正四年四月」と記入されている。100年以上の長期間にわたって京都工芸繊維大学で保管されてきたものであるが、当教育委員会および八幡市教育委員会はこれまで存在を把握しておらず、從来の綾喜古墳群の研究でも取り上げられることがなかった資料である。

本資料は両古墳の内容および帰属時期を決定する上で重要な価値を有すると判断されたため、所蔵機関の協力のもと、令和3（2021）年11月29日に当教育委員会と八幡市教育委員会が合同で資料調査を実施し、同12月14日には当教育委員会が一部資料の実測及び写真撮影委託を実施した。

資料の状態は、適切な温湿度管理のもので保管されているため、出土から100年以上が経過しているわりには良好な状態を保っている。ただし、鉄製品は錆の除去が行われていないため、器種が不明なものもある。本報告では資料の状況を鑑み、写真掲載及び概略の報告に留める。

また、これまでの綾喜古墳群の分布調査や立会調査の出土品で未報告となっていた資料が存在するため、本報告書の刊行を期にここで報告する。特に当教育委員会が採集した中ノ山古墳出土埴輪の報告によって、上記の京都工芸繊維大学所蔵の副葬品と、埴輪の両面から同古墳の内容を検討することが可能となるであろう。

ここで報告する新出資料の内容は、本編の個票にも反映させている。本報告が綾喜古墳群の理解の一助となれば幸いである。

（古川）

2 八幡東車塚古墳出土 副葬品・埴輪（京都工芸繊維大学所蔵）

八幡東車塚古墳は現在、後円部が国指定名勝松花堂及び書院庭園を構成する築山となっている。明治30（1897）年4月に国学者・井上伊三郎の邸宅用地となり造成され、前方部が削平された。その工事に伴い同年12月に銅鏡1面と劍1口が出土している。そして、明治35（1902）年に後円部での土取り作業中に粘土櫛、鏡、管玉、刀劍、甲冑などの遺物が出土したという（梅原1920・佐藤1932）。同資料の発見者の西村芳次郎は井上伊三郎の次男として生まれ、父子二代にわたって庭園の作庭作業を継続した（八幡市教育委員会2020）。本資料はその段階に出土したものと見られるが、発見年月は「大正四年四月」とされており、上記の明治35（1902）年出土品との関係は不明である。

八幡東車塚古墳で甲冑等が出土したことは梅原未治の紹介（梅原1920）で知られるが、梅原が同書で実際に紹介したのは、内行花文鏡、鼈竜鏡、六神像鏡、そして西村が當時未だ所持していた素環頭大刀3点と刀劍破片10数点、袋状鉄斧2点、有孔鉄鎌1点、不明鉄器1点で、それ以外の遺物は所在不明とされた。また、末永雅雄作成の「日本上代甲冑出土表」には、帝室博物館台帳を典拠として、衝角付冑と短甲が存在するとされる。ただし、発掘の年月は前方部資料の出土年月である明治30（1897）年12月とされる。

本資料の調査は調査対象資料の質及び量の豊富さに比して調査期間が限定されたため、本文では簡潔な概略を記述し、遺物一覧表に各資料の法量と現段階で推定される器種を記載することとする。図化できた資料は一部に留まるが、巻末の写真も参照されたい。

(古川)

(1) 塩輪（第121図）

埴輪片は2片が保管されている。1は丸みのある破片で、朝顔形埴輪の肩部とみられる。方形の突帯が認められる。2は底部片である。外面は、底部端付近は1次調整にタテハケ、2次調整に静止痕のないヨコハケである。いずれも黒斑は認められないが、断面に黒色部を残し、野焼き焼成のものである。以上のような特徴から、二期新相からⅢ期（川西1978、廣瀬2015）に属するものと考えられる。このことは、副葬品の編年観とも矛盾はない。八幡東車塚古墳では、大正5年の時点では後円部隅に埴輪列が露出していたようだが（梅原1920）、その詳細は知られていない。断片ながら八幡東車塚の埴輪の様相が明らかになった意義は大きい。

(桐井)

(2) 副葬品

八幡東車塚古墳後円部の埋葬施設から出土したと考えられる遺物である。鉄製品5箱分（AN1746-2、3、5、6、7）、銅鏡1面と木棺片（AN1746-1）である。

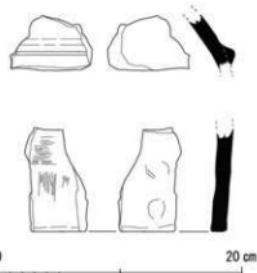
①鉄製武器・農工具類（第122図～第125図）

刀劍は、刀身幅が小さく厚みが薄い刃部の破片が多い。また、小さな茎部の破片も散見されることから、短刀・短剣が複数副葬されていたようである。これまで知られてきた資料は素環頭大刀を含む

大型刀剣であったため、短刀、短剣が含まれていることは新たな知見となる。大型鉄刀は刀身が数個に分かれているが、把部破片と考えられる資料が3点存在する。うち1点は素環頭大刀の環頭部である。これまで素環頭大刀は3点が知られているが、この資料の存在から、計4点が出土していたことが判明した。

鉄鎌はほぼ同形同大の柳葉形鉄鎌が数点出土している。3点が重なって固着した状態のものがあり、副葬時にまとめて納められたようである。

鉄製農工具は鉄斧、刀子等が出土している。本資料によって数量は増加したが、器種は少なく、八



第121図 八幡東車塚古墳出土 墓輪

第122図 八幡東車塚古墳出土 鉄鎌・
鉄刀 (AN1746-2)第123図 八幡東車塚古墳出土 鉄鎌・鉄刀・鉄劍
(AN1746-3)第124図 八幡東車塚古墳出土 鉄刀・鉄劍
(AN1746-5)第125図 八幡東車塚古墳出土 各種鐵製品
(AN1746-6)第126図 八幡東車塚古墳出土 帯金式甲冑
(AN1746-7)



第 127 図 八幡東車塚古墳出土 四獸形鏡 (S=1/1)

幡東車塚古墳の副葬品は武器、武具が主体であることには変わりがない。

②甲冑（第 126 図）

帶金式甲冑の破片である。複数の三角板と帶金等から、三角板革縫短甲と肩甲と推定される。また、冑の可能性のある破片も含まれる。完形の部品はないが、三角板は、角の角度から、正三角形に近い形狀でやや小型と推定される。阪口英毅の短甲編年（阪口 2019）によると古相の特徵と言える。八

幡東車塚古墳自体の古墳編年での位置づけからも、この資料は三角板革縕短甲としては初期に近い事例と考えられる。2は当初、短甲の押付板破片かと推測したが、断面形状の湾曲が強い。末永雅雄が参考にした帝室博物館台帳の記述内容を考慮すると、冑頂部の部品である伏板の可能性も想定しうる。

本資料は、梅原末治、末永雅雄が戦前に行った研究でその存在を指摘していた資料である。学史的にも高い価値を有するものと判断される。

③銅鏡（第 127 図）

倭鏡の四獸形鏡である。内区の6分の1強が破損している。文様部の大部分の色調は灰緑色で、鉢、乳、縁部は光沢のある暗緑色を呈する。鋳上がりはやや悪く、図の下部及び左下部は腐食が少し進行している。浮彫で表現される獸像の表現はやや不鮮明で、鋳造後の研磨は、鉢、獸及び重像の肉厚な箇所に施され、光沢がある。内区は4つの乳で区画され、獸像を一帯ずつ配置する。獸像は異形に表現され、体部が2箇所、乳状に突出する。したがって、4つの乳に4体の獸像に施される各2つの乳状突起を加えれば12個の乳が存在するようにも見える。面径は図の天地で13.65cm、鉢径2.6cmを測る。鉢孔は半円形で幅0.7cm、高さ0.55cmを測る。縁の断面形状は斜縁で、縁の高さは0.65cmを測る。内区から櫛齒文帯を介して半円形帶が造られる。半円形帶の余白には珠文が散らされる。外区は外向きの鋸齒文が施され、縁に至る。

本資料は中ノ山古墳出土品と同じ箱（AN1746-1）に収納され、このほか鏡に付着していた木棺片2点も保管されている。

（3）小結

本資料の内容については、一覧表（表1）および巻頭巻末の写真もご参照いただきたい。本資料についてでは、過去の調査に関するさらに詳しい経緯を検討し、他の機関が所蔵する八幡東車塚古墳出土品の内容も吟味した上で評価することが望ましく、今後の課題とする。本報告が向後の研究に資すれば幸いである。

（古川）

【参考文献】

梅原末治 1920 「山城国八幡町の東車塚古墳」『久津川古墳研究』

阪口英毅 2019 「古墳時代甲冑の技術と生産」同成社

佐藤虎雄 1932 「東車塚庭園」『京都府史跡名勝天然紀念物調査報告』第13冊

末永雅雄 1944 「日本上代の甲冑」創元社

八幡市教育委員会 2020 「名勝松花堂及び書院庭園保存活用計画書」

表1 京都工芸繩維大学所蔵 八幡東車塚古墳出土品 一覧表

AN1746-1「(ラベル) 京都府綾喜郡八幡町字志水東車塚及太古山発掘大正四年四月」(単位:cm(以下同))

番号	種類	型式	法量	備考
-	鋼鏡	四瓣形鏡	直径 13.4cm幅 2.6cm、孔:0.7(半円)	外区:斜縁
-	木片(上)		13.6 × 1.5	銅鏡付着資料注記「木片で鏡に付着せし」
-	木片(下)		16 × 4.15	同上

AN1746-2「(ラベル) 京都府綾喜郡八幡町字□□(二

文字欠損) 東車塚発掘大正四年四月」

番号	器種	現存長	幅	備考
1	鉄鏡	7.5	2.0	
2	鉄鏡	14.4	2.2	完形
3	鉄鏡	11.1	2.2	
4	鉄鏡	7.0	不明	
5	鉄鏡	6.5	1.8	
6	刀	不明	不明	柄部
7	刀	不明	不明	柄部
8	素環頭大刀	不明	不明	柄部

AN1746-3「(ラベル) 京都府綾喜郡八幡町字志水東車塚発掘大正四年四月」

番号	器種	現存長	幅	備考
1	劍か	13.8	3.8	
2	劍か	18.8	3.9	
3	劍か	4.8	2.4	
4	劍か	6.8	3.7	
5	不明	11.8	4.2	
6	劍か	9.7	3.8	
7	不明	9.8	2.8	
8	不明	7.8	2.2	
9	不明	5.2	4.6	
10	劍	4.5	1.6	
11	不明	7.4	2.3	
12	刀	10.6	2.7	
13	不明	6.2	1.8	
14	不明	9.4	2.4	
15	刀か	17	3.7	
16	劍または槍	5.7	1.7	
17	刀子	6.8	1.8	
18	刀	10.1	2.6	
19	刀または刀子	7.2	1.9	
20	不明	15.7	2.4	
21	劍	13.4	4	
22	不明	11.2	2.7	
23	劍	12.2	4	
24	石材	8.7	6.3	

AN1746-5「(ラベル) 京都府綾喜郡八幡町字志水太古山発掘大正四年四月」

番号	器種	現存長	幅	備考
1	刀	10.0	3.1	鉄刀身
2	劍	9.4	2.1	
3	刀	7.4	1.7	柄部・柄に木質付着
4	刀	4.8	2.4	鉄刀身・鞘木質付着
5	刀	5.8	2.2	
6	劍か	9.2	2.8	柄部

番号	器種	現存長	幅	備考
7	刀	6.9	鉄刀身幅 2.3 柄幅 1.6	柄部
8	劍か	6.1	2.0	鞘木質付着
9	劍か	6.8	1.9	
10	劍か	6.4	2.3	
11	劍か	4.1	1.7	
12	刀劍類	4.3	1.7	柄部
13	刀劍類	5.8	1.7	
14	鉄鏡	9.8	2.5	茎長 3.2cm
15	刀	6.4	2.4	鉄刀身
16	刀	5.9	2.0	
17	刀	5.0	2.3	鞘木質付着
18	刀劍類	3.8	1.9	柄部
19	劍	6.7	1.9	劍先
20	刀	4.3	1.9	鉄刀身・鞘木質付着
21	刀劍類	5.2	1.4	柄部・木質付着
22	鏡	2.8	2.4	茎長 2.4cm
23	刀	5.5	3.0	木質付着
24	刀劍類	3.4	19(下側体)・ 18(上側体)	柄部・2個体付着
25	不明	3.0	1.5	
26	刀	9.0	19(下側体) 18(上側体)	柄部・木質付着 柄長 5.6cm
27	刀	5.5	1.8	
28	刀	4.6	1.6	
29	劍	4.4	2.3	
30	鍔か	4.2	1.2	
31	刀劍類	4.9	1.7	柄部
32	鉄鏡か	9.4	2.0	茎長 5.0cm
33	鉄鏡	5.9	1.4	茎長 3.0cm
34	鉄鏡または農工具	6.1	1.2	茎長 0.7cm
35	鉄鏡か	5.6	1.6	
36	刀	4.5	2.2	
37	不明農工具	4.1	1.5	柄部
38	不明農工具	3.9	1.9	
39	刀子か	5.9	1.4	柄部
40	刀子	3.8	1.4	柄部
41	刀劍類	5.4	2.3	
42	不明農工具	4.2	1.3	
43	劍	6.5	2.8	
44	刀劍類	5.0	1.9	目釘孔がある可能性
45	鉄鏡か	5.4	3.2	
46A	鉄鏡か	6.0	1.8	
46B	鉄鏡か	5.4	2.5	
47	刀か	4.3	1.9	
48	刀劍類	4.2	1.8	柄部
49	刀劍類	4.5	1.8	
50	農工具か	4.0	1.8	

AN1746-6 「(ラベル) 京都府綴喜郡八幡町字志水太古発掘大正四年四月」

番号	器種	全長	幅	備考
1	鉄斧	6.4	3.6	
2	鉄斧	6.3	3.3	
3	板状斧か	6.2	3.1	
4	鉄斧か	5.5	2.5	
5	鉄鎌	6.4	2.2	
6	不明	6.2	1.9	
7	刀子	6.6	1.7	
8	刀子か	7.7	1.8	
9	鉄鎌	7.7	2	
10	鉄鎌	7.8	1.4	
11	不明	5.2	2.3	
12	刀子か	4.8	1.7	
13	刃先	6.7	2.3	
14	不明	5.2	2.2	
15	不明	5.1	2.2	
16	不明	4.8	2	
17	刀子か	5.1	1.7	
18	不明	5.2	1.7	
19	不明	5.1	1.7	
20	鉄鎌	(上) 9.0 (下) 5.8	(上) 1.8 (下) 1.6	
21	刃先	4.2	1.7	

番号	器種	全長	幅	備考
22	不明	3.6	1.7	
23	鉄鎌	6.3	1.4	
24	鉄ノミ	7.5	2.8	
25	不明	4.8	1.8	
26	刀子	14.9	2.4	
27	刀子か	4.7	2.3	
28	不明	4.7	1.8	
29	刀子か	6.7	2.1	
30	茎	4.0	1.7	
31	刃先	3.8	1.2	
32	刀子	5.3	1.6	
33	不明	4.0	1.7	
34	不明	4.8	0.8	
35	刀子	10.4	2.4	
36	不明	6.5	2.7	
37	不明	7.7	2.7	
38	不明	5.0	3.5	
39	鉄鎌	7.5	2.4	
40	不明	6.7	1.5	

AN1746-7 「(ラベル) 京都府綴喜郡八幡町字志水太古発掘大正四年四月鉄兜断片」

番号	器種	全長	最大幅	備考
1	肩甲	16.0	(上) 4.0、(中) 5.0、(下) 6.4	湾曲する帯金が三重に重なる
2	押付板または胄	12.0	9.5	湾曲が強く、器種の特定が困難
3	三角板	6.5	6.0	角の角度 60 度弱
4	帯金	6.1	3.4	
5	三角板	6.5	7.0	
6	帯金	4.7	4.1	
7	帯金	13.0	(上) 4.2、(下) 5.0	二枚重なる
8	三角板	9.3	8.4	角の角度 60 度弱
9	不明破片	3.9	2.9	
10	不明破片	5.7	6.6	
11	不明破片	7.3	5.4	
12	帯金	6.7	(上) 4.2、(下) 4.9	二枚重なる
13	帯金	17.0	5.9	
14	不明破片	6.3	4.5	
15	不明破片	8.8	4.3	
16	帯金	5.1	4.8	
17	不明破片	4.2	4.7	
18	不明破片	5.1	4.0	
19	不明破片	6.0	4.2	
20	不明破片	5.6	4.2	
21	不明破片	4.1	4.3	
22	不明破片	4.7	3.0	
23	帯金	13.2	4.2	
24	帯金	6.3	3.6	
25	帯金	5.2	4.6	
26	三角板または帯金端部	4.6	3.8	角の角度約 70 度
27	帯金	6.0	(上) 4.6、(下) 不明	二枚重なる
28	不明破片	3.4	3.6	
29	不明破片	5.4	3.1	
30	帯金	4.1	2.6	

3 中ノ山古墳の「再発見」

(1) はじめに

中ノ山古墳は、当教育委員会の調査体制が整った昭和30年代以前に消滅した古墳で、1920年代以前の記録しか存在しない。関連資料として、京都府立山城郷土資料館には「八幡中ノ山出土はにわ」と記されたコンテナが2箱分保管されている。さらに、調査を進めると、前述のように、国立大学法人京都工芸繊維大学にも、「太古山」と記された古墳の副用品が保管されていることも明らかとなった。

これらは、出土状況が明らかではない上、これまで写真や実測図等は知られていない遺物であるが、再整理の結果、後述するような状況証拠から、八幡市中ノ山周辺から出土した遺物であることがほぼ確実となった。京都工芸繊維大学資料は古墳時代前期の特徴を備えた遺物であり、継喜古墳群の成立過程を考える上で、資料価値は極めて高い。本論では中ノ山周辺の考古学的情報を整理するとともに、遺物の報告を行い、「中ノ山古墳」について若干の検討を行いたい。

(2) 中ノ山周辺における考古学的情報の整理

当地域の古墳については、江戸時代から街道沿いにあった塚として記載がある八幡西車塚古墳、八幡東車塚古墳をはじめ、平野部に作られた大型古墳が古くから知られている。他方、丘陵状には中小古墳も多く存在したようで、調査前に消滅した南山古墳群（八幡市史 1986）が知られているほか、近年の調査では御毛通古墳群などの埋没古墳も多く見つかっている。中ノ山古墳も、これらの小規模な古墳群の同じ脈絡で、「消滅により詳細不明」（大洞編 2010）とされてきた。

中ノ山古墳は、現在全く痕跡を残しておらず、遺跡地図に「中ノ山古墳」の記載はないが、わずかながら「中ノ山古墳」「太古山古墳」の記述が認められる文献も存在する。知りえた中で最も古い記録は、島田貞彦による1919年の「山城継喜郡二子塚古墳」である（島田 1919）。この中では、詳述はされていないものの、地図（第128図）の中に「中ノ山古墳」「太古山古墳」の記述が認められる。なお、梅原末治による初めての当地域における古墳の調査記録である「美濃山ノ古墳」（梅原 1920）



第128図 島田 1919 に示された古墳の分布

にも、周辺の古墳として同じ位置にドットが打たれているが、こちらには名称の記述はない。しかし、大正年間には、これらの古墳は認識されていたとみて間違いない。

唯一詳細な記録をたどることができるのは、昭和3年刊行の『八幡史蹟名勝誌』（西村 1928）である。八幡史蹟名勝誌は郷土史家である西村芳次郎による八幡周辺の史蹟旧跡の踏査の記録であり、大規模開発以前に消滅したとみられる遺跡の情報も多く含まれている。この中では太古山古墳と並び、中ノ山古墳の記載がある。その内容は以下の通

りである。

【『八幡史蹟名勝誌』（以下、「史名誌」）】

太古山古墳

一、場所 円福寺分道高野街道西山手ニアリ、

一、由来 山ノ中央ニ古墳アリシモ、維新ノ頃開拓ナシ、今ハ畠トナル、時々古瓦・土器ヲ発掘ナス事アリ、武千年前後ノ塚ナリ、

（中略）

中ノ山古墳跡

一、場所 太古山ノ北ノ岡ニアリ、

一、由来 大正初年開拓セシニ、中央ヨリ管玉・振石・紡績石・古鏡・古鏡・矢尻等ヲ発掘ス、京都高等工芸学校ニ保存ス、何レモ武千年前後ノ塚ナリ、

後述するように、京都工芸繊維大学に保管されている遺物には、「大正4年太古山古墳」と記されたメモが同封されているが、中ノ山古墳出土として記録されている副葬品類の内容とほぼ一致しており、このときの出土品の可能性が高いと考えられる。なお、京都大学文学部博物館にも、西村芳次郎氏が1923年に寄贈した「太古山古墳」出土の石鈴が収蔵されている（小野山編1968）、これも同様に中ノ山古墳の出土遺物である可能性もある。

また、1969年の「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要」では「八幡町八幡荘中ノ山」から円筒埴輪が出土したという記載が認められる（堤・高橋1969）。中ノ山遺跡ではこれまで本格的な発掘調査は行われておらず、この分布調査が唯一の調査である。以下には、その際の概報を引用しておこう。

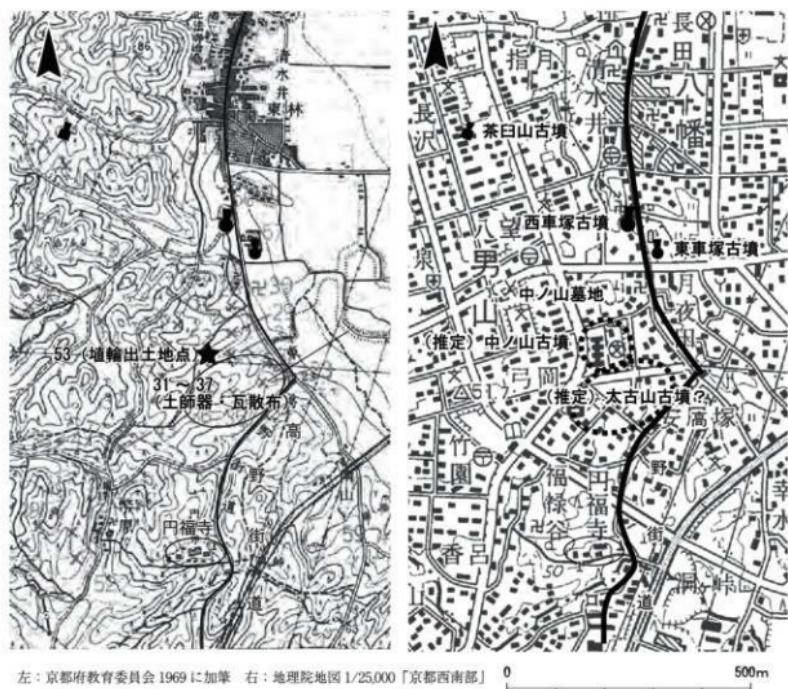
【『八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要』（以下、「概報」）】

〔円筒はにわ片出土地点（遺跡番号53）〕八幡町八幡荘中ノ山

西から東へ延びる丘陵稜線の北斜面で、崖状に削られた地点から円筒はにわ片、土師器器台が出土しており、古墳ではないかと推定して調査を行った。ところが、現地表下50～150cmの間は竹林の土入れによって盛られた土であり、この盛土の直下には地山が表れた。上記はにわ片の出土範囲は1.5m四方であり、原位置を保ったはにわ片は全然発見されなかった。地形もまったく古墳の形をしていないので、古墳ではないと判断したが、円筒はにわ片、土師器器台の出土した遺構の性格は不明である。あるいは、付近に古墳が築造されていたもので、最近の竹林土入れ作業で原形がわからなくなるまで破壊されたものであろうか。

山城郷土資料館に保管されていた円筒埴輪は、概報で示されている土師器器台と同じコンテナに保管されており、この時の調査で出土したものだろう。土師器器台は実際には畿内第V様式に属するもので、埴輪との年代的接点はない。これまで当資料は未報告の状態であったが、重要性に鑑み報告することとする（第130図）。

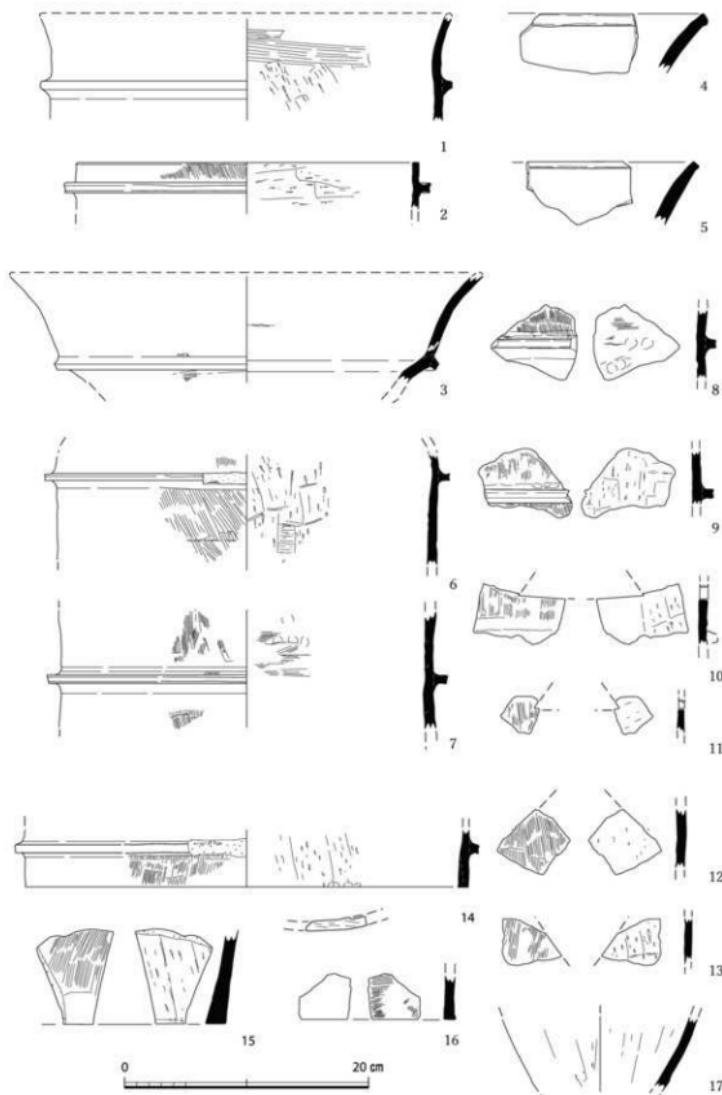
『史名誌』の記述によると、「太古山古墳」は高野街道の円福寺分道西山手にあったとする。これは



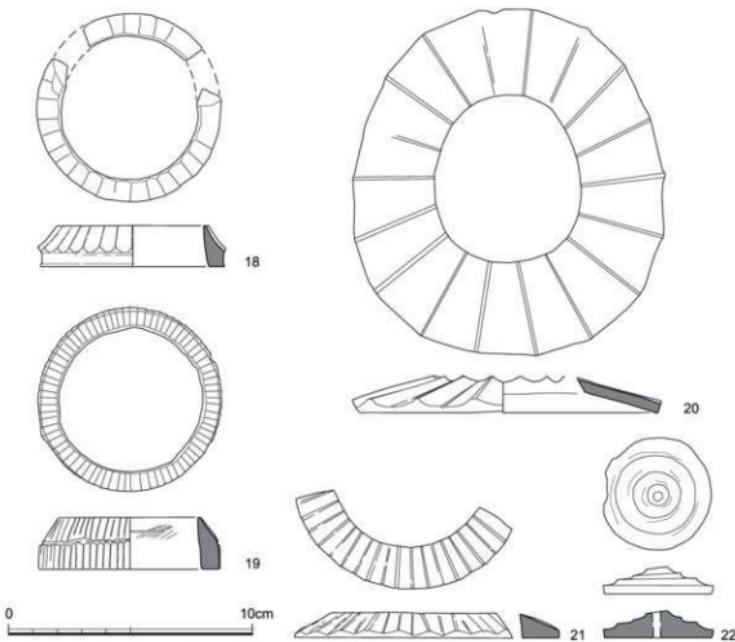
第 129 図 中ノ山遺跡と中ノ山古墳・太古山古墳の推定位置

高野街道が円福寺方面に向かって西に曲がる、いわゆる東高野街道のことを指すとみられる。「概報」では、この付近には遺跡番号 30 ~ 36 が付されており「土師器片採取」の記載があるが、古墳の可能性については触れられていない。中ノ山古墳は、さらにその「北ノ岡」にあったとされており、これは「概報」の遺跡番号 53 の位置とほぼ一致する(第129図)。また、先述の島田貞彦による報告に記された位置をみても、中ノ山、太古山に関してはほぼ矛盾はない。なお、「七ツ塚」についての記述はなく、詳細はわからない。

遺物が出土した大正初（1912）年と、分布調査が行われた1969年では50年以上の隔たりがあり、埴輪と副葬品が同じ古墳に伴う遺物であるかは厳密には不明だが、周辺に当該期の古墳も存在しないことから、これらは極めて近接した地点からの出土遺物と推測できよう。現在では市街地化が進んでおり、詳細な位置を絞り込むことは困難だが、上述のような状況証拠から、現在の中ノ山墓地から府立京都八幡高等学校がある丘陵上に、中ノ山古墳が存在した蓋然性は高い。大正年間に地元の郷土史家により知られていたのみで、昭和11年の『八幡史蹟』（中村はか 1936）や昭和13年の『八幡町誌』（中田 1938）、府の遺跡目録（京都府教育委員会 1961）にもこれらの古墳の記載はない。遺物の詳細も学



第130図 中ノ山遺跡（中ノ山古墳）出土埴輪実測図（S=1/4）（山城郷土資料館保管）



第131図 中ノ山古墳出土石製品実測図 (S=1/2) 京都工芸繊維大学所蔵

会には報告されていなかったため、1920年代の知見はこれまで検証のできない状況が続いていた。

(3) 調査の概要

先述のように、現状、中ノ山古墳に伴うとみられる遺物は埴輪と副葬品類が確認できる。

① 墓輪 (第130図)

埴輪は、山城郷土資料館に保管されていたコンテナ2箱分である。1、2は普通円筒埴輪の口縁部である。1は外反する口縁部で、端部は欠損する。内面はナナメ方向のハケメが認められる。体部は強いヘラケズリである。2は直立する口縁部で、口縁部高は1.6cmと短い。外面にはナナメ方向のハケメ、内面は口縁部直下まで強いヘラケズリが認められる。

3～6は朝顔形埴輪である。3は口縁部である。同一個体とみられる2破片があるが、接点ではなく、図上で復元している。口縁端部は欠く。4、5は口縁端部とみられる破片である。6は、朝顔形埴輪の肩部付近とみられる破片である。外面はナナメハケ、内面は横方向のハケを切るように、縦方向の強いケズリが認められる。突帯が一部剥離しているが、設定技法の痕跡は認められない。

7～13は体部片である。普通円筒埴輪か朝顔形埴輪かは明らかではない。7、8は内外面にハケメが認められる破片である。9は内面に強いヘラケズリが認められる破片である。10～13は、スカ



第132図 八幡東車塚古墳出土鏡、埴輪・中ノ山古墳
出土石製品、管玉、朱 (AN1746-1)



第133図 中ノ山古墳出土刀剣・鉄鎌
(AN1746-4)

シがある破片である。10、11は正位置の三角形、12、13は逆位置の三角形とみられる。突帯との位置関係がわかるのは10のみで、突带上端との距離は2.4cmである。

14～16は底部片である。14、15は底部高が約3cmと極端に低いものである。アールが弱く、梢円筒埴輪の可能性もあるが、詳細は不明。内面は端部直下まで縦方向のヘラケズリが認められる。ヘラケズリは、部分的には上から下方向に施されている部分もあり、倒立して底部が成形されたものとみられる。16は内面に横方向のハケメが認められる。

17は、内外面とも弱いヘラケズリが認められる。正確な傾きは分からぬが、壺形埴輪とみられる。

②副葬品類（第131図・第132図・第133図）

京都工芸繊維大学に保管されている副葬品とみられる遺物は、木箱2箱分である。「京都府綴喜郡八幡町字志水 太古山発掘 大正四年四月」とあるが、内容は鏡を欠く以外は先述の『史名誌』の中ノ山の記述と合致しているため、中ノ山古墳出土品と考えられる。

内容は、車輪石2点、石劍2点、紡錘車形石製品1点、管玉17点、鉄製鎌1点、鉄製刀子8破片、有袋鉄斧3破片、刀劍類7破片、鉄鎌3点で、他に器種が分からぬ鉄片が複数ある。鉄器類は接合関係の検討ができないのが、表2のように点数を整理できよう。固定されている銅線を外していないものもあるため不十分ではあるが、以下では観察所見を記しておく。

第131図・第132図の18・19は石劍である。18は肋条系の石劍で、頂部には1mmほどの面を持つ。一部欠損し、割付は不明。19は櫛式の石劍である。条線は56条で、陽刻される。頂部には1mmほどの平坦面を持ち、器高2.2cmとやや寸高である。内面には成形時のものと考えられるナナメ方向の細かい擦痕が認められる。いずれも内外面に朱が付着する。20は車輪石である。平面形状は倒卵形で、輪郭線はわずかに凹凸で古相の様相を残す。長辺15.1cm、短辺12.7cmを測る。匙面の頂部と谷部に沈線を持つ山谷式で、匙面は9分割と条数が少なく、ピッチも広めである。断面形状は長方形で、内孔側に約20°の角度で立ち上がる。21は小型の車輪石で、18と同様、山谷式である。破片で、全体の半分ほどを欠くが、平面形状は小さな円形となるとみられる。内外面には朱の付着が認められる。22は紡錘車形石製品である。直径4.5cm、高さ1.1cmを測る。中央の孔は径0.3cmで、中心部からわずかにずれた位置に穿孔される。段数は4段で、各段は匙面を持つ。

表2 中ノ山古墳副葬品内訳

石製品				鉄製農工具			鉄製武器類	
車輪石	石劍	劔鍾車形	管玉	鎌	斧	刀子	鉄鎌	ヤリ or 刀
2	2	1	17	1	2	7~8	3	5 (~7)

ほかに、石製品として緑色凝灰岩製の管玉が17点ある（第132図）。テグスを外しておらず、実測はしていない。長さ1.8~2.9cm、幅0.65~0.8cmである。

第133図は鉄器である。腐食が著しく、テグスを外しての観察および実測図の作成は断念した。

23は方形の鉄板で、端部に折り返しの痕跡を残す。鎌、もしくは方形鎌先であろう。28はほぼ完形の有袋鉄斧である。27は2破片となっているが、有袋鉄斧の袋部とみられる。24は農工具類とみられるが不明。39は長い茎部が確認でき、ヤス等の漁具であろうか。26、30は鉄鎌である。26は2個体が融着しており、定角式鉄鎌が1点含まれる。30は中心に菱形の孔を持つ大型の鉄鎌である。また、24の付近には鉄鎌の茎部とみられる破片が多数散乱しており、本来はこの3本以外の鉄鎌が存在したとみられる。29、31、33、35~38は剣あるいはヤリである。切先の数から、少なくとも5本存在したことは確実である。その他、刀子が7~8点確認できる。

(4) 中ノ山古墳「再発見」の意義

最後に、これらの遺物の編年的位置付けを、既往の研究を参考に考えてみたい。

埴輪は破片資料で、突帯間隔がわかるものはないが、器面の荒れが少ないとから、2次的に動かされたものではなく、近隣の古墳に伴う蓋然性が高い。外面にヨコ方向のハケメが認められず、内面に強いヘラケズリがほぼすべての破片で認められること、透孔が三角形であることなど、I群埴輪の型式学的特徴を備えている。また、底部高がわかるものはすべて約3cmと極めて低い位置突帯である。低位置突帯は、メスリ山古墳や茨木將軍山古墳など、前期中葉の古墳で散見され、梢円筒埴輪や圓型埴輪との関係が想定されている（廣瀬・若杉2005）。中ノ山古墳でも、14など底部径が大きい破片で認められることから、あるいは梢円筒埴輪が存在した可能性も考慮に入れておきたい。いずれにしても、埴輪編年ではI群新相に相当しよう。

また石製品は、車輪石が内孔が正円ではなく卵形を呈し、山谷式であること、肋条式の石劍が存在することなど一部に古い要素を残すが、車輪石の条数が少ない点や櫛式石劍の器高がやや伸長している点など後出の要素も備えた一群である。三浦氏の車輪石の編年ではII段階に比定することができ（三浦2005）、前期中葉（広瀬編年3期、中四国編年III期）に位置付けられよう。

木津川左岸地域では、八幡茶臼山古墳や飯岡車塚古墳が同様に広瀬編年3期に位置づけられているが、埴輪だけで比較するならば、内面ヘラケズリが徹底されている点や、低位置突帯や壺形埴輪など多様な器種が存在するなどを評価し、やや先出するものと捉えられよう。墳形や墳頂は不明ながら、地理的には八幡西車塚古墳・八幡東車塚古墳に近接して存在したと考えられる。当地域においては初期の古墳であり、綴喜古墳群の成立を考える上では極めて重要な古墳であるといえよう。

（桐井）

【参考文献】

- 梅原末治 1920 「美濃山ノ古墳」『京都府史跡勝地調査會報告』第二冊、京都府
 小野山節編 1968 「京都大学文学部考古学資料目録」第2部日本歴史時代、京都大学文学部
 烏田貞彦 1919 「山城綾喜郡二子塚古墳」『考古学雑誌』第九卷第五號、日本考古学会
 大洞真白編 2010 「歴史の環境」『王塚古墳範囲確認発掘調査（第1～3次）報告書』八幡市埋蔵文化財発掘調査
 報告書第54集、八幡市教育委員会
 京都府教育委員会 1961 「京都府遺跡目録」
 京都府教育委員会 1969 「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1969）』
 中田寛次編 1938 「八幡町誌」八幡町
 中村直勝ほか編 1936 「八幡史蹟」京滋探遊会
 西村芳次郎 1928 「八幡史蹟名勝誌」私家版
 廣瀬 覚 2015 「古代王権と埴輪生産」雄山閣
 廣瀬 覚・若杉智宏 2005 「埴輪からみた將軍山古墳の築造時期」『將軍山古墳I—考古学資料調査報告集1—』
 新修茨木市史資料集8、茨木市
 三浦俊明 2005 「車輪石生産の展開」『待兼山考古学論叢—都出比呂志先生退官記念—』大阪大学考古学研究室
 八幡町役場 1938 「八幡町誌」
 江谷 寛ほか 1986 「八幡市誌」第1巻 八幡市

※なお、遺物の評価について大阪大学埋蔵文化財調査室上田直弥氏に御教示を受けた。記して感謝申し上げる。

表3 京都工芸織維大学所蔵資料(AN1746) 遺物一覧表

AN1746-1 ラベル「京都府綾喜郡八幡町字志水東車塚及太古山発掘 大正四年四月」(単位:cm(以下同))

番号	種類	型式	法量	備考
-	管玉	緑色凝灰岩	2.35 × 0.7	軟
-	管玉	緑色凝灰岩	2.4 × 0.65	軟
-	管玉	緑色凝灰岩	2.45 × 0.75	硬
-	管玉	緑色凝灰岩	1.8 × 0.8	軟
-	管玉	緑色凝灰岩	2.35 × 0.7	軟
-	管玉	緑色凝灰岩	1.85 × 0.65	軟
-	管玉	緑色凝灰岩	2.55 × 0.65	硬
-	管玉	緑色凝灰岩	1.85 × 0.75	軟
-	管玉	緑色凝灰岩	不明 × 0.75	軟
-	管玉	緑色凝灰岩	2.65 × 0.7	硬
-	管玉	緑色凝灰岩	2.65 × 0.75	軟
-	管玉	緑色凝灰岩	2.8 × 0.7	硬
-	管玉	緑色凝灰岩	2.6 × 0.7	硬
-	管玉	緑色凝灰岩	2.9 × 0.7	硬
-	管玉	緑色凝灰岩	2.35 × 0.65	硬
-	管玉	緑色凝灰岩	2.45 × 0.65	硬
-	管玉	緑色凝灰岩	2.55 × 0.65	軟
18	石鏡	匙式・面式	外径7.5、内径5.25、高1.9	内外面に朱付着、頂部に0.5mmの平坦、内面に擦痕なし
19	石鏡	櫛櫛型式	外径7.5、内径5.9、高1.95	内外面に朱付着、頂部に0.5mmの平坦、内面に擦痕なし
20	車輪石	山谷式	外:長径14.3、短径12.9 内:長径6.9、短径5.95	外:朱付着
21	車輪石	山谷式?	高1.3	
22	鍤鋤車	緑色凝灰岩	径4.55	四段
			孔0.3	軟質
			高0.9	緑色凝灰岩

AN1746-4 ラベル「京都府綾喜郡八幡町字志水太古山発掘 大正四年四月」

番号	器種	現存長	幅	備考
23	鎌または歛先	7.2	4.2	
24	鉄鎌	6.9	3.5	大型・有茎
24	鉄鎌	5.8	3.7	
25	不明	-	-	
26	鉄鎌	7.2	1.6	定角形・茎欠損
27	有袋鉄斧	3.5	2.3	
28	有袋鉄斧	10.0	5.2	
29	槍または劍	12.4	3.4	有機質付着
30	鉄鎌	12.3	刃部3.35 孔25×0.9	大型・有孔
31	槍または劍	17.1	3.2	
32	刀子	10.9	刃部1.8 茎部1.4	精・目釘孔
33	刀劍類	3.9	2.2	

番号	器種	現存長	幅	備考
34	刀子	7.7	刃部2.0 茎部1.15	
35	槍身か	4.1	2.5	2個体付着
36	槍	4.5	2.5	
37	槍	4.2	3	
38	槍または劍	7.4	2.3	
39	鉄鎌か	11.0	2.4	4個体付着か
40	刀子	5.2	刃部1.1 茎部0.6	
41	刀子	5.5	1.75	
42	刀子	7.5	1.45	
43	刀子	4.6	1.4	刃部のみ
44	刀子	3.1	1.1	刃部のみ
		2.7	1	茎部のみ

4 八幡西車塚古墳出土埴輪の再整理と編年的位置づけ

(1) はじめに

八幡西車塚古墳では、これまで6次の調査が行われ、墳丘の測量図や出土遺物の一部などが明らかになっている（梅原1920ほか）。埋葬施設については大正年間に開発によって露出し、副葬品類のみが回収され、詳細な構造は不明である。副葬品類は一括して東京国立博物館に保管されているため、八幡西車塚古墳出土遺物として実測図が公表されていたのは、1～3次調査で出土した埴輪資料の一部のみであった。本論ではこれらの埴輪資料の再整理を行ふとともに、これまでの調査の成果を再検討し、八幡西車塚古墳の位置付けについて再考することとした。

(2) 出土埴輪の再検討（第134図・第135図）

再整理の対象としたのは、第1～3次調査および、表採された埴輪である。これまで部分的に報告されていたものもあるが（八幡市教育委員会1995、宇野2019）、本事業にあたり、未実測であった破片も含めてすべての破片の検討を行い、改めて実測を行った。

今回の調査によって八幡西車塚古墳では円筒埴輪、朝顔形埴輪、不明形象埴輪を確認することができた。普通円筒埴輪と朝顔形埴輪を胴部・底部では分けることができなかつたため、不明なものを円筒埴輪として記述する。

1～4は朝顔形埴輪の破片である。1・2は口縁部の破片である。1は口縁端部の小片であり、外内面と不明であるが、端部を指ナデし、内面端部がやや肥厚している。2は、外面調整にヨコハケ、内面にナデ調整、指オサエを施す。3・4は頭部である。3は外面に1次タテハケを施している。4は調整が不明であるが、突端部が広く、強くナデられ、断面形状M字形を呈している。5は頭部下の突帯と考えられる。突帯上部から頭部に向かって、径が小さくなっていく。突端部は狭く、突出度が高い。

6～12は、円筒埴輪の胴部の破片である。外面はタテハケを施すもの（7・10・11）と、丁寧な

2次調整の板ナデを施すもの（8・9）が確認できる。内面はハケ調整を行うものとタテ・ヨコ方向のケズリが半数以上で確認でき、タテハケを施した後にケズリを行っている資料（10）も確認できる。7・11では方形の透孔を穿っており、赤彩が確認できる。また、8・9・10では、突端設定技法として一辺約0.7cmの方形の刺突が施されている。

13～16は底部の破片である。13は底部高23.5cm、底部径39.7cmを測る。外面に1次タテハケで、内面にタテハケ、端部のみナデ調整が残る。突端部が広く、強くナデられ、断面形状M字形を呈す。14は底部径37.7cmを測り、外面に一次タテハケを行う。15・16の内面は、ともに内面端部に横方向のナデ調整が残り、ナデ上部までケズリを施す。器壁は最も薄い部分で0.7cmを測る。

17は器種不明であるが、内面をケズリ、方形の透孔が確認できる。18は不明形象埴輪である。内側には荒いハケが施され、上部が剥離している。

（3）墳丘と出土品についての既往の研究

埋葬施設 梅原末治の報告では、副葬品類は後円部の堅穴式石室から出土したとされる。梅原自身が実際に調査に携わったわけではないため、どこまで厳密に位置を反映しているかは不明だが、堅穴式石室は後円部の中心からやや南に寄った位置に図示されている。その大きさについては、地元住民の聞き取りによると、2.7m×0.6mで高さ0.9mほどであったという。山城地域の堅穴式石室の法量分布（上田2017）から見ると小型で、想定される木棺の長さも極めて短いものになる。

平成28年には後円部北寄りに現存する八角堂の修理に伴って調査が行われ、木棺直葬と考えられる埋葬施設が確認された（八幡市教育委員会2019）。

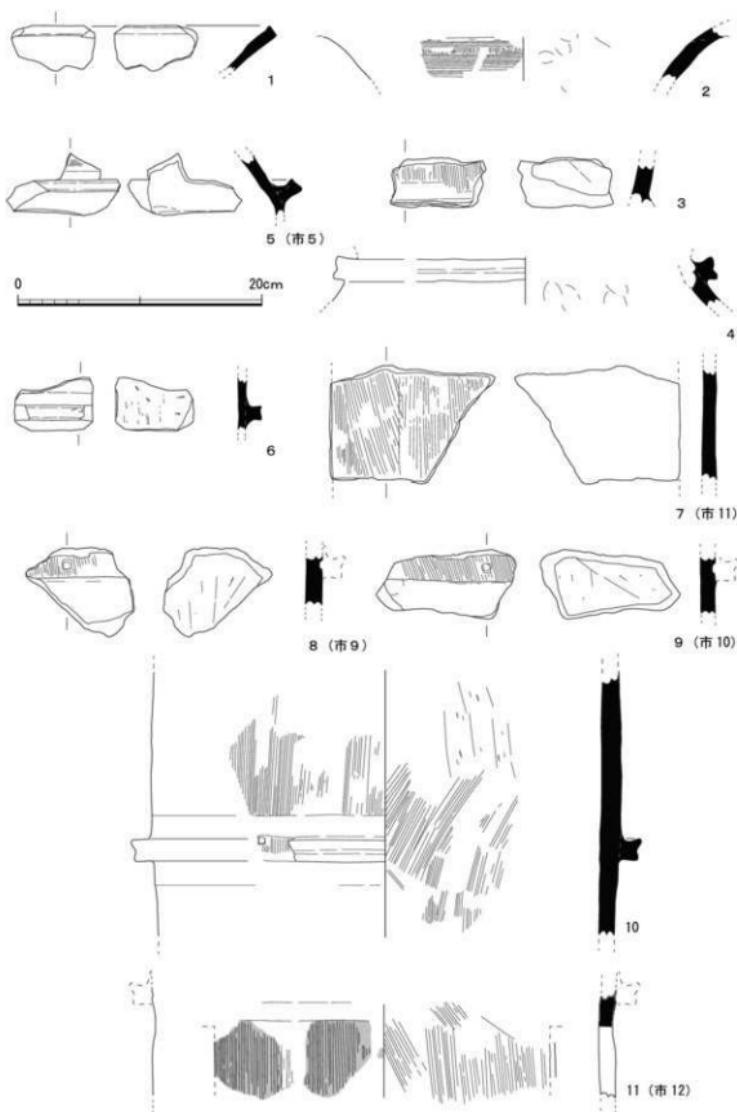
奥村清一郎は、上述の情報と墳丘測量図等の検討を行い、墳丘の復元図を提示している（奥村2020）。奥村の復元によると、副葬品が出土した堅穴式石室は墳頂中心から南に9m、2018年に確認された埋葬施設は北へ5mほどずれた位置にあることになる。石室の規模が中心埋葬とするには小型であることや、墳頂中央部に空間があることを考えると、ふたつの埋葬施設の間に未知の埋葬施設を想定することも許されよう。

本論では、梅原報告で知られていた堅穴式石室を「埋葬施設1」、平成28年度に確認された埋葬施設を「埋葬施設2」、墳丘中央部に想定される未知の埋葬施設を「埋葬施設x」として議論を進めたい。

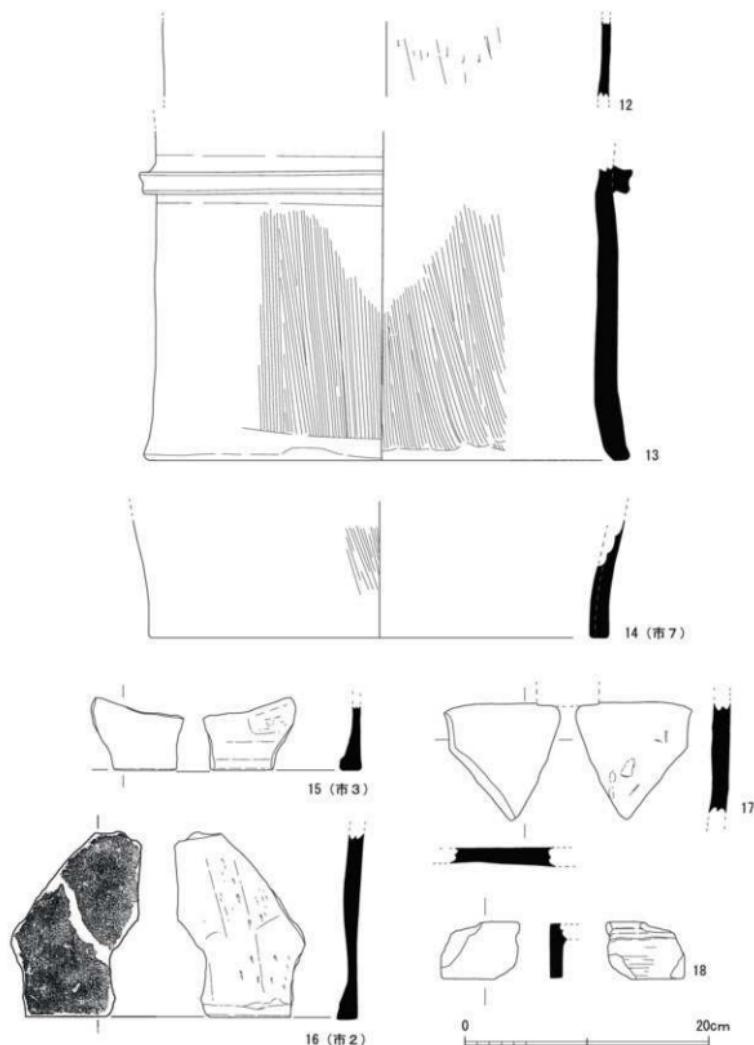
副葬品 八幡西車塚古墳の出土品としては、埋葬施設1から出土した副葬品類が知られている。その詳細は本書第5章を参照いただきたい。ここでは、これらの遺物の編年的位置づけを確認しておこう。

鏡は画文帯環状乳神獸鏡1面、舶載三角緣神獸鏡1面と倭製鏡が3面知られており、最も新しい倭製鏡は岩本氏の編年では前期新段階新相（岩本2019）、下垣氏の編年では中期初頭（下垣2018）とされている。

石製品は、鍬形石2点、車輪石10点、石劍3点、合子形石製品1点があり、東京国立博物館の所蔵となっている。また、これらとは別に個人蔵となっている車輪石1点あり、八幡西車塚古墳出土副葬品の中で唯一実測図が公表されている（京都府埋蔵文化財研究集会2000）。今回、実物を確認する



第134図 八幡西車塚古墳出土埴輪実測図1 (S=1/4)



第135図 八幡西車塚古墳出土埴輪実測図2 (S=1/4)

ことはできなかったが、改めて原図を基に再トレースを行った(第4図)。直径13.9 cmを測る車輪石で、11区画される。外斜面は広い匙面をもち、山部頂部には沈線が施されている。中央の円孔はほぼ正円である。底面は内孔側へ上がらずに水平となっており、三浦俊明の編年に従うと、最も新しい型式

に分類される（三浦 2005）。

玉類は、碧玉製勾玉 4 点、瑠璃製勾玉 3 点、硬玉製勾玉 1 点、滑石製勾玉 3 点、碧玉製管玉 122 点、水晶丸玉 1 点、ガラス小玉 71 点が知られて

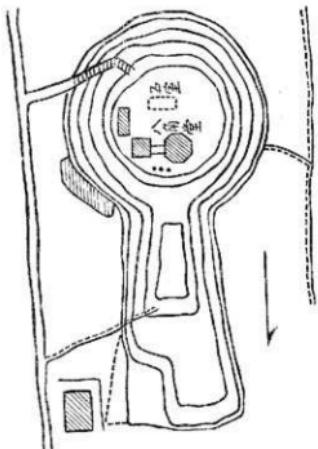
いる。米田克彦の研究によると、滑石製勾玉を含む組成は前期の中でも後葉後半以降に認められるセットである（米田 2018）。

これらの遺物を根拠として、和田晴吾は自身の編年の 5 期に位置づけており（和田 1987、以下和田編年）、その後もおおむねこの編年観が踏襲されている。当地域の古墳を再検討した岩本崇は、中四国前方後円墳研究会による編年（以下、中四国編年）で前 V 期と評価した（岩本 2020）。ただし、副葬品の組成としては VI 期的ではあるが、帶金式甲冑を含まないという、やや消極的な根拠から前 V 期と評価していることには注意が必要であろう。下垣仁志は、鏡の組成を重視し、八幡東車塚古墳に後出する前期末葉と評価している（下垣 2021）。下垣氏のいう前期末葉は和田編年 5 期、中四国編年 VI 期にはほぼ相当する時期であり、岩本氏よりも一段階後出する時期に位置付けている。

（4）八幡西車塚古墳の編年的位置付けの再検討

以上のように、若干の見解の差はあるものの、埋葬施設 1 から出土した遺物は前期後葉後半から中期前葉前半の様相を示していることは多くの研究者の見解が一致するところであろう。他方、今回の再整理で明らかとなった埴輪は、内面にケズリを持つこと、2 次調整のヨコハケが全く確認できないことなどから、I 群的な要素が多分に認められるものである。II 群の指標とされるスカシ穴の配置が分かれる資料は存在しなかったが、廣瀬覚の編年（廣瀬 2015）では、I 群新相に位置付けられよう。

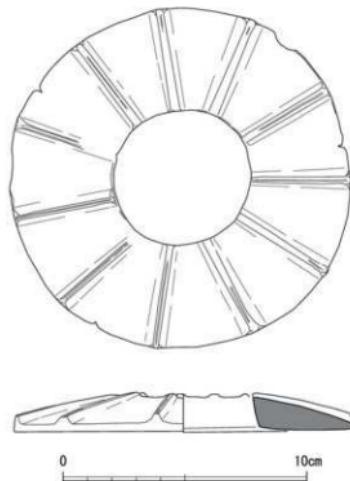
これまで、八幡西車塚古墳の埴輪は、断片的な資料から II 群の埴輪と評価されてきた（八幡市教育



左図 梅原 1919

右図 奥村 2020 に筆者加筆

第 136 図 八幡西車塚古墳の埴輪と埋葬施設



第137図 八幡西車塚古墳出土車輪石（個人蔵）
岩本 崇 2020「三角縁神獣鏡と淀川左岸地域における首長墓の展開」『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
上田直弥 2017「堅穴式石室にみる地域性とその意義」『考古学研究』第64巻第2号、考古学研究会
宇野隆志 2019「八幡茶臼山古墳出土の埴輪について」『山城郷土資料館報』第26号、山城郷土資料館
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』
下垣仁志 2021「男山古墳群の動向」『季刊考古学・別冊34 植井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト王権—』雄山閣
廣瀬 覚 2015「古代王権の形成と埴輪生産」雄山閣
三浦俊明 2005「車輪石生産の展開」「待兼山考古学論集一都出比呂志先生退官記念一」大阪大学考古学研究室
米田克彦 2018「玉類」「前期古墳編年を再考する」中四国前方後円墳研究会
和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号、考古学研究会
※第5章と重複する（八幡市教育委員会1995・2019）、（奥村2020）等の出典は46ページを参照。

委員会 1995、宇野 2019）。II群埴輪は中四国編年V・VI期に並行することから、副葬品の編年観ともおむね整合的であった。しかし、I群新相は中四国編年III～IV期に並行する様相とされており、埴輪と副葬品の年代観にズレが生じることとなった。

男山丘陵東麓の古墳は、副葬品の編年によると、「中ノ山古墳→茶臼山古墳→八幡西車塚古墳（埋葬施設1）→ヒル塚古墳→石不動古墳・八幡東車塚古墳」という順序で築造されたと考えられる。このことを重視するならば、内面ケズリ技法が前期末の八幡西車塚古墳でも採用された、すなわちII群埴輪が普及している時期に、当地域ではI群埴輪が継続して製作されていた、と考えることはできる。実際、当地域においては中ノ山古墳、茶臼山古墳、飯岡車塚古墳、大住南塚古墳など内面にケズリを残す埴輪が多く存在しており、前期の埴輪製作にかかり、内面ケズリ技法が多用された地域である。後続するヒル塚古墳や石不動古墳では内面ケズリ技法は認められないことから、I群新相の埴輪とII群古相に年代的な接点を想定する、というのが第1案である。

他方、先述のように、埴輪部に未知の埋葬施設xの存在を想定するならば、埋葬施設1に先行する埴輪が存在することも、合理的に説明することができる。すなわち、埋葬施設1の副葬品類と、埴輪の年代観は必ずしも一致しないと考え、内面ケズリ技法を持つ八幡西車塚古墳の埴輪はI群新相に位置付けるというのが第2案である。この場合、従来よりも一段階早く、当地域に100mを越える大型前方後円墳が築造されたということになる。いずれにしても、これまでの見解に再考を迫る資料であるといえよう。本論では、事実関係の整理を行うにとどまったが、今後の研究に期待したい。

（桐井・北山）

【参考文献】

- 岩本 崇 2020「三角縁神獣鏡と淀川左岸地域における首長墓の展開」『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
上田直弥 2017「堅穴式石室にみる地域性とその意義」『考古学研究』第64巻第2号、考古学研究会
宇野隆志 2019「八幡茶臼山古墳出土の埴輪について」『山城郷土資料館報』第26号、山城郷土資料館
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』
下垣仁志 2021「男山古墳群の動向」『季刊考古学・別冊34 植井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト王権—』雄山閣
廣瀬 覚 2015「古代王権の形成と埴輪生産」雄山閣
三浦俊明 2005「車輪石生産の展開」「待兼山考古学論集一都出比呂志先生退官記念一」大阪大学考古学研究室
米田克彦 2018「玉類」「前期古墳編年を再考する」中四国前方後円墳研究会
和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号、考古学研究会
※第5章と重複する（八幡市教育委員会1995・2019）、（奥村2020）等の出典は46ページを参照。

5 石不動古墳隣接地出土埴輪

(1) はじめに

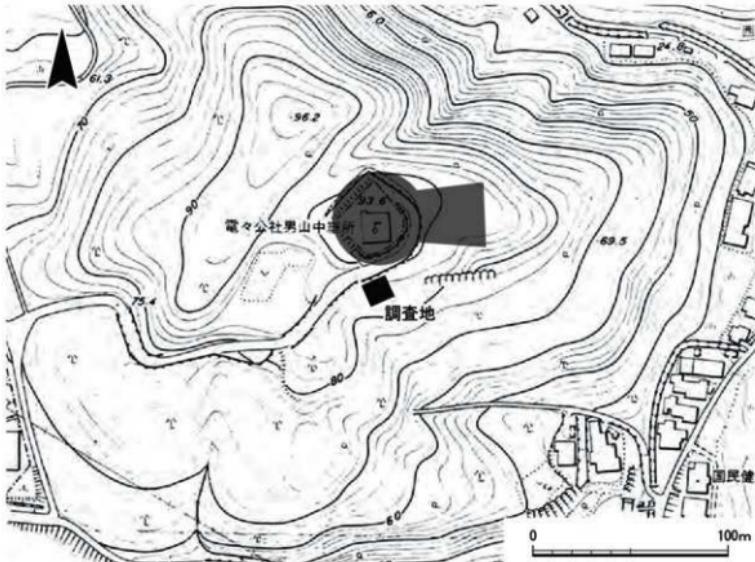
石不動古墳では、昭和 56（1981）年に古墳の南西で八幡市教育委員会による小規模な調査が行われ、墳丘裾とみられる地点から、円筒埴輪片約 40 片が出土した。これらの埴輪は原位置を保ったものではないが、石不動古墳の位置けを考える上では重要な資料である。

一部は実測図が公表されているが（宇野 2019）、今回、八幡市教育委員会に保管されている埴輪資料コンテナ 1 箱分を改めて検討を行い、図化を行った。

(2) 資料の概要

今回、図化したのは第 2 図に示した 14 点である。いずれも小片であり、全形や突帯間隔が分かるものはない。明確に朝顔形埴輪や楕円筒埴輪、形象埴輪と分かる破片は存在しない。また、13・14 は宇野 2019 第 6 図で提示されたものと同一個体である。出土位置は、保管されていたビニール袋の記載によると、10～12 は 1 tr マウンド上部、2 は 1 tr 出土とある。その他の資料は表探資料である。

1 は普通円筒埴輪の口縁部である。単純口縁で、端部はナデによって丸くおさめる。口縁部高は約 4 cm である。胎土には大粒の石英・長石のほか、チャートとみられる堆積岩類を含む。2 は内面にナデによる強い屈曲を残すものである。普通円筒埴輪の口縁部か朝顔形埴輪の口縁部とみられるが詳細



第 138 図 石不動古墳隣接地・1981 年の調査位置

は不明である。薄手であり、いずれにしても口縁部付近の部位であろう。

3～13は体部片である。3は上部にかけて器壁が薄くなってしまっており、口縁部付近の破片であろうか。胎土には大粒の石英・長石類を多量に含む。5は突帯の一部が剥離しているが、設定技法は認められない。内面は平滑で、本来はヘラケズリで仕上げられていた可能性もある。6～12は突帯を含む小片である。突帯形状は、方形、台形、三角形などバリエーションが多い。7は内面がやや湾曲する破片で、普通円筒埴輪ではない可能性もある。小径の石英・長石類をわずかに含み、焼成はやや甘い。

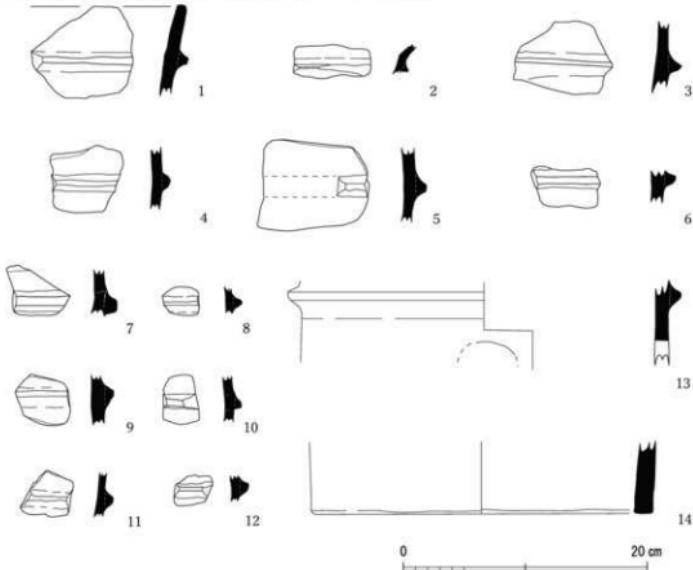
13は円形とみられるスカシが認められる。14は底部片である。端面には接合痕を顕著に残す。いずれも、石英・長石を多量に含む。

(3) 小結

以上、石不動古墳出土資料を概観した。すべてが小片で、ハケメ等の調整を残すものではなく、不明な点が多いが、黒斑を持つものがあること、スカシが円形であることなどから、一応Ⅱ期～Ⅲ期の埴輪と考えておきたい。このことは、従前考えられてきた石不動古墳の編年觀に変更を迫るものではなく、整合的である。出土品の状況が明らかとなっていない石不動古墳の様相を考えるうえでは重要な資料であるといえよう。

(桐井)

※第5章と重複する（宇野 2019）の出典は140ページを参照。



第139図 石不動古墳出土埴輪 (S=1/4)

6 興戸2号墳周辺表採埴輪

(1) はじめに

興戸古墳群は京田辺市興戸に位置し、9基の古墳によって構成されている。1955年に梅原末治氏らによって測量・表採遺物資料が紹介され、その後、田辺町・京田辺市による調査が実施されている。

2号墳は直径約28mの円墳で、墳頂では普通円筒埴輪と家形埴輪が確認された（梅原1955）。

本報告資料は平成7年に栗田謨氏より興戸古墳表採資料として府立山城郷土資料館に寄贈されたものである。埴輪以外に石製品等が寄贈され、既に報告がなされている（田辺町教育委員会1982）。現在、興戸古墳という名称は存在しないが、梅原末治氏の調査時やそれ以降京都府教育委員会でも現在の2号墳のことを興戸古墳または寿命寺古墳として報告しており、本資料も興戸2号墳資料の可能性がある。そこで山城郷土資料館に保管されている埴輪資料を図化し、検討を行った。

(2) 資料の概要

埴輪類は計5点寄贈されており、図化できたのは第140図に示した4点である。いずれも破片であり、全形の分かれる資料はない。1は家形埴輪の入母屋造の上屋根部である。破風表現がなされ、一部赤彩が残る。押縁表現として、粘土が貼り付けられており、縦横方向の線刻によって網代表現がなされている。2は家形埴輪の壁体部である。角柱表現として粘土を貼り付けており、柱部分以外には方形の透孔が穿たれている。外面は角柱部に縦方向のハケ調整を、その他に横方向のハケ調整を施している。上部には、先端がやや屈曲した屋根がつく。3は家形埴輪の壁体部から基部にかけての資料である。台形空窓の裾廻り突帯をもち、窓・入口表現として方形の透孔が確認できる。外面は縦方向の沈線と縦方向のハケ調整を施している。内面にナデ調整とユビオサエが認められる。基部には半円の抉りをもつ。4は円筒埴輪の胴部である。透孔が円形であり、外面には静止痕が確認でき、B種ヨコハケである。内面はナデ調整、ユビオサエが確認できる。突帯は突出度が低く、M字形を呈する。

(3) 小結

以上、興戸2号墳表採資料を概観した。既報告の普通円筒埴輪は縦列に方形の透孔を穿ち、外面にタテハケが施されている。口縁高が低いものとして復元されている。既報告を実見できなかつたため、詳細な比較・検討は困難であるが、方形透孔と縦列配置、タテハケ等から川西編年Ⅱ期に該当する資料と想定される。今回、紹介した資料では外面に静止痕跡の残るB種ヨコハケが確認され、円形の透孔をもつものであり、既報告資料とは各属性が異なるものとなり、川西編年Ⅲ期以降に該当し、時期的な隔たりがある。一方で、家形埴輪の破片をみると、1・2で非常に類似した資料が京都大学文学部考古学資料目録（京都大学文学部1968）で確認でき、同一個体の可能性が高い。本資料は各表採資料の表採時期や場所等が不明な資料である。特に円筒埴輪については、確實に興戸2号墳に帰属する資料なのか、今後、周辺の調査成果をもって、再度検討したい。

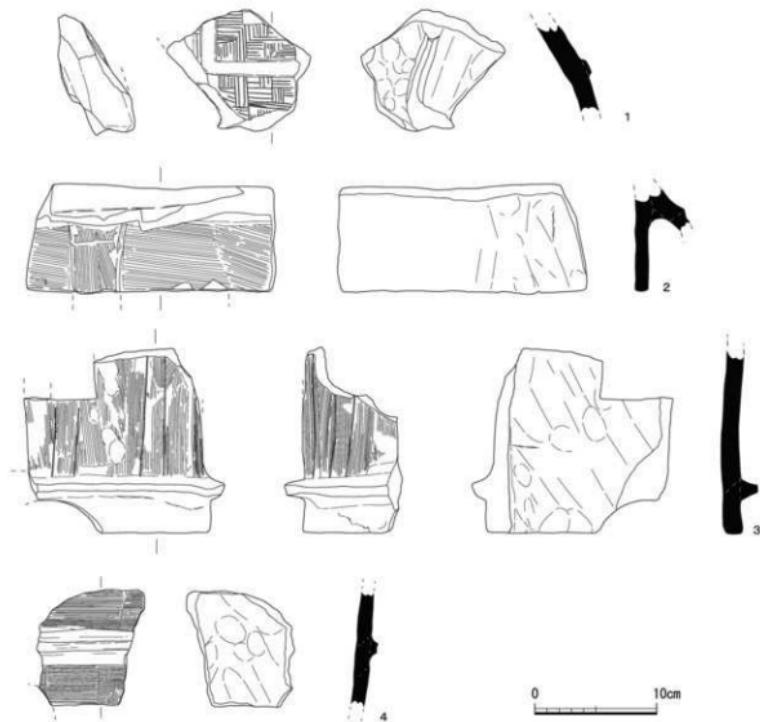
（北山）

【参考文献】

梅原末治 1955 「第三 田邊町興戸の古墳」『京都府文化財調査報告』21

京都大学文学部 1968 『京都大学文学部考古学資料目録』2

田辺町教育委員会 1982 「8. 興戸古墳群」『田辺町遺跡分布調査概報(田辺町埋蔵文化財調査報告)』第3集



第140図 興戸2号墳周辺表採埴輪実測図 (S=1/4)

7 棚倉孫神社遺跡出土円筒埴輪

(1) はじめに

京田辺市田辺棚倉に位置する棚倉孫神社遺跡は、延喜式内社である棚倉孫神社を北限に南北約220m、東西約170mに広がる古墳時代から中世の散布地である。西側から続く田辺丘陵の東端にあたり、東側には天井川として知られる天津神川が北流し、木津川へ合流する。平成16(2004)年に京田辺市教育委員会が実施した立会調査で遺跡の中央付近から埴輪が出土した(第141図)。なお現在はほぼ宅地化しているが、出土地付近の一角には現在も古墳状隆起が認められる。



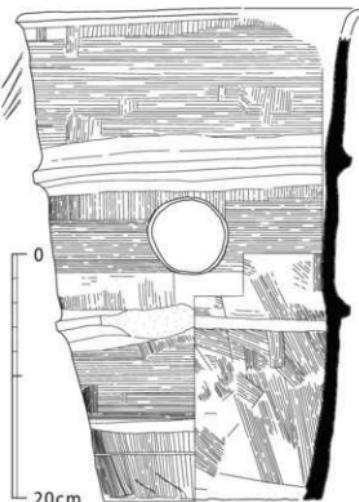
第141図 墓輪出土位置 (S=1/10,000)

(2) 遺物の詳細 (第142図)

円筒埴輪は2条3段に復元でき、2段目に円形透孔をもち、器高は40.0cmを測る。底部高14.4cm、2段目11.4cm、口縁部高12.6cmと2段目がやや狭い。内外面ともにハケ調整を施し、外面にはタテハケの後、静止痕のない2次調整ヨコハケがみられる。突帯形状は台形を呈し、1条目突帯は2条目突帯と比較して端面がやや狭い。最上段には右から左下に向けて線刻が4本入り、器壁の一部には黒斑が認められる。出土埴輪は埴輪棺または単体で古墳に樹立していた円筒埴輪である可能性がある。

本遺跡出土埴輪は円形透孔、2次調整の静止痕のないヨコハケ、黒斑によってⅡ期新相に位置付けられる。なお周辺では天理山3号墳(前方後円墳81m)でⅡ期新相でも古い段階の円筒埴輪が出土しているほか、薪高木1号墳(円墳直径20m)では古墳時代中期初頭の円筒埴輪や朝顔形埴輪、甲冑形埴輪が出土している。

以上のことから、棚倉孫神社遺跡内に埴輪を樹立する古墳が存在することは明らかであり、天理山古墳群に後続する古墳の存在が窺える。



第142図 棚倉孫神社遺跡出土埴輪 (S=1/4)

(上野)

8 隅田口遺跡表採円筒棺

（1）はじめに

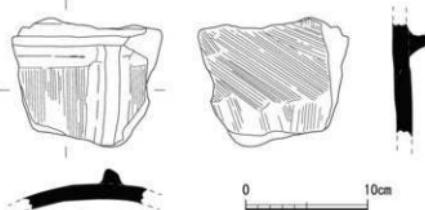
「八幡市丘陵地所在遺跡発掘調査概要」では「八幡町八幡莊隅田口」から円筒埴輪片の出土が記載され、丘陵線部に古墳の存在が想定されている（京都府教育委員会 1969）。本報告資料が入った袋には、S 43. 1・14 八幡隅田口⑩東南 10 m 表採と注記され、昭和 44（1969）年に報告された資料と考えられる。そこで府立山城郷土資料館に保管されている資料を図化し、検討を行った。



第 143 図 表採地点位置図
(S=1/50,000)

（2）資料報告

本資料は 1 点のみである。全形の分かる資料ではないが、円筒埴身の体部から口縁部にかけての破片である。円筒形を呈し、横方向の突帯貼り付け後、突帯の間に直交するように縦方向に突帯を貼り付けており、格子状突帯となる。縦方向の突帯が途切れるため最上段の突帯となろう。突帯形態は端部が狭く、断面形状は長方形を呈する。外面調整はタテハケを施す。内面調整は、タテハケを施し、上部はナメハケが確認できる。



第 144 図 円筒棺 (S=1/40)

既報告では、円筒埴輪片として報告されていたが、格子状突帯等の特徴から円筒棺となる。円筒棺の類例として八幡市ヒル塚古墳や城陽市西山古墳出土資料等が挙げられる（北山 2021）。南山城においてはⅡ期新相よりⅢ期に円筒棺が出土する点からこれらの時期に該当すると考えられる。

（北山）

【参考文献】

- 京都府教育委員会 1969 「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』(1969)
北山大熙 2021 「山城地域における円筒棺」『京都府埋蔵文化財論集 第 8 集』公益財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版第1 八幡東車塚古墳・中ノ山古墳出土品（京都工芸繊維大学蔵）



(1) 八幡東車塚古墳出土 鉄鐵・大刀 (AN1746-2)



(2) 八幡東車塚古墳出土 剣・刀子ほか (AN1746-3)

図版第2 八幡東車塚古墳・中ノ山古墳出土品（京都工芸織維大学蔵）



（1）八幡東車塚古墳出土 刀・剣・鉄器 (AN1746-5)



（2）八幡東車塚古墳出土 鉄製農工具等 (AN1746-6)

図版第3 八幡東車塚古墳・中ノ山古墳出土品（京都工芸繊維大学蔵）



(1) 八幡東車塚古墳出土 帯金式甲冑 (AN1746-7)



(2) 八幡東車塚古墳出土 四獸形鏡 (AN1746-1)

図版第4 八幡東車塚古墳・中ノ山古墳出土品（京都工芸織維大学蔵）



(1) 中ノ山古墳出土 鉄鏃・農工具類・ヤリ等 (AN17464)



(2) 中ノ山古墳出土 石製品・管玉 (AN1746-1)

報告書抄録

著 者 名	福善古墳群調査報告書						
副 著 者 名							
卷 次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	古川 匠・桐井理揮・北山大熙・吉田芽依・上野あさひ						
編集機関	京都府教育委員会						
所 在 地	〒602-8570 京都市上京区下立充通新町西入戸ノ内町 075-414-5903						
発行年月日	西暦 2022年3月31日						
所 収 道 路 名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
京都府八幡市・京田辺市内の首長墓等30基	やわた市 八幡市	262102	6はか	-	-	-	木津川左岸首長墓群調査専門家会議
	やわた市 京田辺市	262111	5はか	-	-	2021/10/6 ～2022/2/15	
所 収 道 路 名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
京都府八幡市・京田辺市内の首長墓等30基	古墳	古墳時代	段築、葺石、埋葬施設、周溝など	銅鏡、腕輪形石製品、刀剣類、鐵鏃、ヤリ、甲冑、農工具類、玉類、埴輪など			
要 約	本津川左岸（八幡市、京田辺市にまたがる綾瀬都西部）の首長墓群の歴史的位置付けをめぐる検討会で、同地域に所在する30基の古墳について、京都府、八幡市、京田辺市による調査成果および戦前の京都府史跡勝跡調査會や当時の研究者の調査研究成果を集成した。また、未報告資料の所在を確認し、国化作業・写真撮影を実施した。上記の調査を通じて、古墳群として一體的に有する本質的価値を検討し、歴史的位置付けを行った。						

報告書抄録（英文）

Title	Report of Tsuzuki tombs					
Writer	Takumi Furukawa, Riki Kirii, Daiki Kitayama, Mei Yoshida, Asahi Ueno					
Copyright	Kyoto Prefectural Board of Education 〒 602-8570 Yabumouchicho Shinmachi-nishiiru Shimodachiuri-tori Kamigyo-ward Kyoto-city Japan					
The date of issue	31.Mar.2022					
Site	Location	North latitude	East latitude	Excavated term	Excavated area (m ²)	Origin of excavation
30 tombs in Yawata city and Kyotanabe city	Yawata city and Kyotanabe city	-	-	2021.10.06 ～ 2023.02.15	-	-
Site	Sort (class)	Period	Features	Artificial description		
30 tombs in Yawata city and Kyotanabe city	Kofun	Kofun	coffin, ditch, burial mound	bronze mirrors, iron tools, arrow heads, swords, spears, blades, armor, helmet, beads, and haniwas		

REPORT OF TSUZUKI TOMBS

COPYRIGHT ©Kyoto Prefectural Board of Education, 2022

Kyoto Prefectural Board of Education

Shinmachi Shimodachiuri Kamigyo-ward Kyoto 602-8570, Japan
edited by Cultural Properties Division Department of Guidance

Kyoto Prefectural Department of Education

Published by Kyoto Prefectural Board of Education

No Parts of this publication may be reproduced or by any means Without prior
permission of copyright owner

綴喜古墳群調査報告書

発行 令和4年3月31日

編集 京都府教育庁指導部

文化財保護課

発行 京都府教育委員会

〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入戸ノ内町

印刷 株式会社ダイ

〒604-8241 京都市中京区三条通新町西入ル釜座町22

ストークビル三条烏丸4F